九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
—21—

朝倉郡杷木町所在杷木宮原遺跡・中町裏遺跡の調査

1991

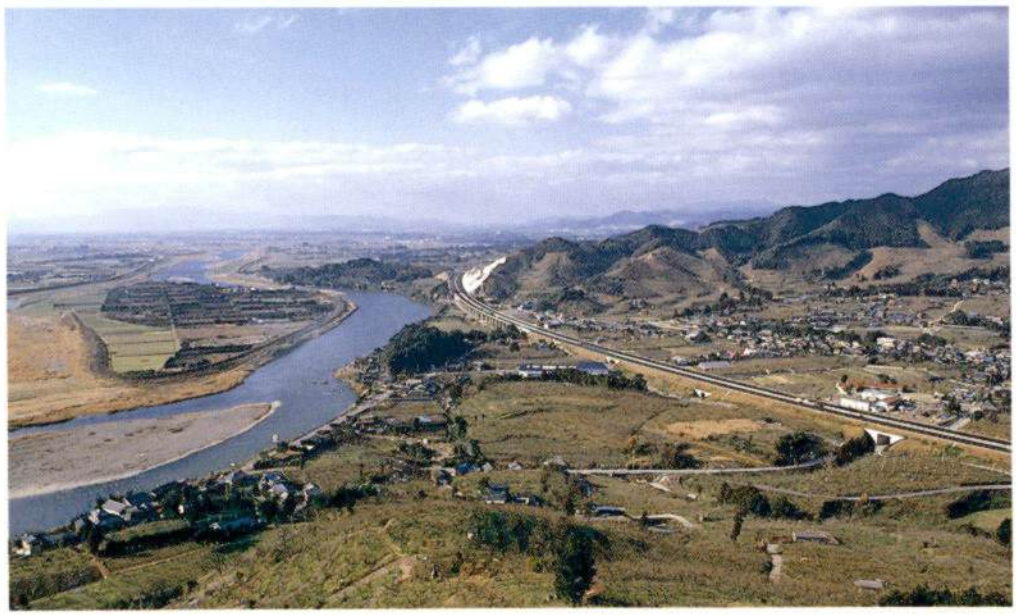
福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係

埋蔵文化財調査報告

—21—

朝倉郡杷木町所在杷木宮原遺跡・中町裏遺跡の調査



開通後の九州横断自動車道

序

福岡県教育委員会は，日本道路公団の委託を受けて，九州横断自動車道建設敷地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和54年度以降実施してまいりました。発掘調査は，平成２年９月の外之隈遺跡の二次調査をもちまして完了しており，今後は，調査報告書を順次刊行してゆく予定であります。

本報告書は，昭和61年度に調査を実施した朝倉郡杷木町所在の杷木宮原遺跡および中町裏遺跡についての調査結果を「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第21集としてとりまとめたものであります。本報告書が，文化財愛護思想の普及ならびに学術研究の一助となれば幸いに存じます。

なお，発掘調査にあたり多大なるご協力を頂いた地元の方々をはじめとして，関係各位に深く感謝いたします。

平成３年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　　御手洗　康

例　言

1．本書は，昭和61年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて発掘調査を実施した杷木宮原遺跡及び中町裏遺跡の報告であり，九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第21冊目にあたる。

2．本書の執筆分担は，次のとおりである。

Ⅰ……佐々木隆彦・高橋章・小田和利
Ⅱ……小田和利
Ⅲ　杷木宮原遺跡……小田和利
　　中町裏遺跡……高橋章・日高正幸
Ⅳ 1……小田和利
　　2……高橋　章
　　3……日高正幸

3．遺構の実測は，杷木宮原遺跡を佐々木・小田・高田一弘・渡辺輝子があたり，中町裏遺跡は高橋・日高・田中康信・中村光恵・矢野静子・高瀬セッ子による。

4．杷木宮原遺跡の遺物整理・復原作業は，福岡県教育庁指導第二部文化課甘木発掘調査事務所において行い，中町裏遺跡は九州歴史資料館において行い，その指導には岩瀬正信整理指導員があたった。鉄器の保存処理には，同館参事補佐横田義章氏の協力を得た。

5．遺物の実測は，杷木宮原遺跡を渡辺輝子・高瀬照美・小田があたり，中町裏遺跡は，平田春美・原富子・若松三枝子・鬼木つや子・佐藤みゆき・平ノ内幸治・水ノ江和同・高橋・日高・小田による。

6．図面作成・製図作業は，豊福弥生・江上佳子（旧姓鶴田）・塩足里美・関久江・木下修・高橋・日高・小田による。

7．本書掲載の写真は，遺構を各調査担当者が，遺物は九州歴史資料館石丸洋・林崎新二氏の撮影による。

8．挿図で使用する方位は，すべて座標北である。

9．遺跡分布図は，昭和62年国土地理院発行の「甘木」5万分の1・昭和63年同院発行の「吉井」5万分の1を縮小して使用した。

10．本書の編集は，杷木宮原遺跡を小田が，中町裏遺跡を高橋・日高があたり，小田がとりまとめた。

本 文 目 次

Ⅰ 調査組織と調査経過 …… 1

Ⅱ 遺跡の位置と環境 …… 7

Ⅲ 各遺跡の調査 …… 13

杷木宮原遺跡

1．調査の概要 …… 13
2．遺構と出土遺物 …… 14
(1) 竪穴式住居跡 …… 14
(2) 掘立柱建物跡 …… 38
(3) 甕棺墓 …… 44
(4) 木棺墓 …… 64
(5) 土壙墓 …… 69
(6) 土　壙 …… 70
(7) 溝状遺構 …… 83
(8) 谷状遺構 …… 85
(9) その他の遺構・遺物 …… 91
3．小　結 …… 94

中町裏遺跡

1．調査の概要 …… 97
2．遺構と出土遺物 …… 98
A地区 (1) 竪穴式住居跡 …… 98
(2) 土壙跡 …… 102
B地区 (1) 谷 …… 103
(2) 土壙跡 …… 121
C地区 (1) 甕棺墓 …… 126
(2) 古　墳 …… 138
(3) 竪穴状遺構 …… 141
(4) 石組溝 …… 142
D・E地区 …… 149
3．小　結 …… 152

Ⅳ 各　　論 …… 153
1．弥生時代の墓地群について …… 153
2．中町裏1号墳と宝満宮古墳群について …… 159
3．志波の支流谷について …… 161

図 版 目 次

巻頭図版　　開通した九州横断自動車道

杷木宮原遺跡　　本文対照頁

図 版 1 (1) 杷木宮原遺跡・中町裏遺跡遠景（南東から）……1
(2) 杷木宮原遺跡上層遺構全景（南東から）……13
図 版 2 (1) 上段遺構全景（上空から）……13
(2) 1号住居跡（南西から）……14
図 版 3 (1) 2～4号住居跡（南から）……16
(2) 7号住居跡，3・5号建物跡（南西から）……27
図 版 4 (1) 6号住居跡（南西から）……24
(2) 8号住居跡（南から）……28
(3) 8号住居跡カマド（南から）……28
図 版 5 (1) 9・10号住居跡（北東から）……30
(2) 9号住居跡カマド（南から）……30
(3) 9号住居跡カマド支脚（南から）……31
図 版 6 (1) 1号建物跡（南東から）……38
(2) 2号建物跡（南東から）……38
図 版 7 (1) 1号甕棺墓（南西から）……44
(2) 2号甕棺墓（東から）……46
(3) 3号甕棺墓，1号土壙（北東から）……46
図 版 8 (1) 4～6号甕棺墓（北西から）……48
(2) 6号甕棺墓（南西から）……49
図 版 9 (1) 7・8号甕棺墓，1号木棺墓（南西から）……50
(2) 9号甕棺墓（南西から）……53
(3) 10号甕棺墓（南西から）……53
図 版 10 (1) 12号甕棺墓（南西から）……54
(2) 11号甕棺墓（南西から）……54
(3) 13号甕棺墓（南西から）……56
図 版 11 (1) 15号甕棺墓（南西から）……56

図　版　11　(2)　16号甕棺墓（南西から）……58
(3)　17号甕棺墓（北東から）……62
図　版　12　(1)　1号木棺墓（南西から）……64
(2)　2号木棺墓，4号土壙（南西から）……64
図　版　13　(1)　3号木棺墓（南西から）……66
(2)　4号木棺墓（南西から）……66
図　版　14　(1)　5号木棺墓，18号甕棺墓（南西から）……66
(2)　6号木棺墓（南西から）……68
図　版　15　(1)　1号土壙墓（南西から）……69
(2)　2号土壙墓（南西から）……70
図　版　16　(1)　4号土壙（南西から）……72
(2)　5号土壙（南西から）……72
(3)　7号土壙（北から）……74
図　版　17　(1)　谷状遺構（南から）……85
(2)　杷木中学校の現場見学風景……1
図　版　18　(1)　1号住居跡出土土器……14
(2)　2号住居跡出土土器……16
図　版　19　(1)　4号住居跡出土土器……20
(2)　5号住居跡出土土器①……22
図　版　20　(1)　5号住居跡出土土器②……22
(2)　6号住居跡出土土器……25
(3)　7号住居跡出土土器……27
(4)　8号住居跡出土土器……29
(5)　9号住居跡出土土器①……31
図　版　21　(1)　9号住居跡出土土器②……32
(2)　10号住居跡出土土器……34
(3)　11号住居跡出土土器……35
(4)　住居跡出土土製品……16
(5)　住居跡出土石器……16
図　版　22　(1)　住居跡・土壙・谷，その他出土石器①……82
(2)　住居跡・土壙・谷，その他出土石器②……88
図　版　23　(1)　住居跡・谷，その他出土石器……88
(2)　住居跡・溝・谷出土石器……88

図　版　24　(1)　1号甕棺……44
(2)　2号甕棺……46
(3)　3号甕棺……46
図　版　25　(1)　4号甕棺……48
(2)　5号甕棺……48
(3)　6号甕棺……49
図　版　26　(1)　7号甕棺……50
(2)　8号甕棺……50
(3)　9号甕棺……53
図　版　27　(1)　10号甕棺……53
(2)　11号甕棺……54
(3)　12号甕棺……54
図　版　28　(1)　13号甕棺……56
(2)　14号甕棺……56
(3)　15号甕棺……58
(4)　16号甕棺……59
(5)　17号甕棺……62
図　版　29　(1)　18号甕棺……63
(2)　5号土壙出土土器……74
(3)　7号土壙出土土器①……74
図　版　30　(1)　7号土壙出土土器②……75
(2)　2号溝出土土器……83
図　版　31　(1)　7号土壙出土土器③……78
(2)　土壙，その他出土石器・土製品……82
図　版　32　(1)　谷状遺構出土土器……87
(2)　pit 出土土器……93
(3)　谷・土壙出土石器・土製品他……88
(4)　谷・トレンチ出土石器……88
(5)　pit 出土鉄釘……93
図　版　33　(1)　上段斜面出土土瓶……91
(2)　採集石器・銅銭……93
(3)　土壙・谷，その他出土鉄器……93
(4)　採集経筒……93

中町裏遺跡

図　版　34　　中町裏遺跡全景（西から）……97
図　版　35　(1)　A地区全景（東から）……98
　　(2)　1号土壙跡（北から）……102
図　版　36　(1)　1・2号住居跡（西から）……98
　　(2)　3号住居跡（南から）……101
図　版　37　　B地区全景（北上空から）……103
図　版　38　(1)　自然木出土状態（南から）……105
　　(2)　谷中央部土層（南から）……105
図　版　39　(1)　谷部検出状況（南から）……105
　　(2)　谷部検出状況（西から）……105
図　版　40　(1)　B地区1・2号土壙跡（西から）……121
　　(2)　石斧出土状態（南から）……121
　　(3)　壺出土状態（南から）……121
図　版　41　(1)　C地区全景（北から）……126
　　(2)　石組溝（北から）……142
図　版　42　　C地区墓地群全景（北から）……126
図　版　43　(1)　1号甕棺墓（東から）……126
　　(2)　2号甕棺墓（西から）……128
図　版　44　(1)　3号甕棺墓（東から）……128
　　(2)　3号甕棺墓（西から）……128
図　版　45　(1)　4号甕棺墓（西から）……130
　　(2)　4号甕棺墓（西から）……130
図　版　46　(1)　5・6号甕棺墓（東から）……135
　　(2)　7号甕棺墓（東から）……136
図　版　47　(1)　1号墳（西から）……138
　　(2)　鉄鏃出土状態（西から）……138
　　(3)　須恵器壺出土状態（西から）……138
図　版　48　(1)　D・E地区全景（西から）……149
　　(2)　Aトレンチ全景（東から）……149
図　版　49　(1)　Bトレンチ全景（東から）……149
　　(2)　土　層（南から）……149
図　版　50　(1)　E地区全景（北から）……149

図　版　50　(2)　E地区検出状況（北から）……149
図　版　51　(1)　A地区1号土壙跡出土石器・土器……102
(2)　B地区出土石器・石製品……106
図　版　52　(1)　B地区出土縄文土器第1群……108
(2)　B地区出土縄文土器第2群……108
図　版　53　(1)　B地区出土縄文土器第3群……109
(2)　B地区出土石材……106
図　版　54　B地区下層出土土器①……111
図　版　55　B地区下層出土土器②……111
図　版　56　B地区腐植土出土土器①……114
図　版　57　(1)　B地区腐植土出土土器②……116
(2)　B地区腐植土出土土器③……116
図　版　58　(1)　B地区出土円盤状土器片……118
(2)　B地区出土土器・土製品……118
(3)　B地区P-1出土土器……119
図　版　59　(1)　1・2号土壙跡出土石器・石製品……121
(2)　1・2号土壙跡出土陶磁器……123
図　版　60　(1)　1・2号土壙跡出土土器①……122
(2)　1・2号土壙跡出土土器②……122
図　版　61　(1)　2号甕棺……128
(2)　3号甕棺……129
(3)　4号甕棺墓調査状況……130
図　版　62　(1)　4号甕棺……131
(2)　5号甕棺……135
図　版　63　(1)　6号甕棺……135
(2)　7号甕棺……136
図　版　64　(1)　1号墳出土鉄器・玉・石製品……140
(2)　1号墳出土鉄鏃……140
(3)　1号墳出土土器……139
図　版　65　(1)　C地区出土縄文土器……126
(2)　1号竪穴出土土器……142
(3)　石組溝出土陶磁器……144
図　版　66　石組溝出土土器・鉄器・石製品……149

図　版　67　(1)　E地区出土土器……151
(2)　調査区域内出土瓦・フイゴ羽口・坩堝……124
図　版　68　(1)　志波宝満宮叢（北から）……159
(2)　宝満宮古墳群仮2号石棺（西から）……159
図　版　69　(1)　宝満宮古墳群仮3号石棺（西から）……159
(2)　宝満宮古墳群仮4号石棺（北から）……159

挿　図　目　次

杷木宮原遺跡

第 1 図　九州横断自動車道路線図……6
第 2 図　杷木宮原遺跡・中町裏遺跡周辺遺跡分布図……折込
第 3 図　杷木宮原遺跡・中町裏遺跡周辺地形図（1/2,000）……12
第 4 図　1号住居跡実測図（1/60）……折込
第 5 図　1号住居跡出土土器実測図（1/4）……15
第 6 図　2号住居跡実測図（1/60）……折込
第 7 図　2号住居跡出土土器実測図（1/4）……17
第 8 図　3号住居跡実測図（1/60）……18
第 9 図　3号住居跡出土土器実測図（1/4）……19
第 10 図　4号住居跡実測図（1/60）……20
第 11 図　4号住居跡出土土器実測図（1/4）……21
第 12 図　5号住居跡実測図（1/60）……23
第 13 図　5号住居跡出土土器実測図（1/4）……24
第 14 図　6号住居跡実測図（1/60）……25
第 15 図　6号住居跡出土土器実測図（1/4）……25
第 16 図　7号住居跡，5号建物跡実測図（1/60）……26
第 17 図　7号住居跡出土土器実測図（1/4）……27
第 18 図　8号住居跡実測図（1/60）……28
第 19 図　8号住居跡カマド実測図（1/30）……29
第 20 図　8号住居跡出土土器実測図（1/3）……29
第 21 図　9号住居跡実測図（1/60）……30

第 22 図　9号住居跡カマド実測図（1/30）……31
第 23 図　9号住居跡出土土器実測図（1/3）……32
第 24 図　10号住居跡実測図（1/60）……33
第 25 図　10号住居跡出土土器実測図（1/3）……34
第 26 図　11号住居跡実測図（1/60）……35
第 27 図　11号住居跡出土土器実測図（1/3）……35
第 28 図　住居跡出土石器・土製品実測図（1/2）……36
第 29 図　住居跡・建物跡出土石器実測図（1/3）……37
第 30 図　1号建物跡実測図（1/80）……39
第 31 図　2号建物跡実測図（1/80）……40
第 32 図　3号建物跡実測図（1/80）……41
第 33 図　1・3号建物跡出土土器実測図（1/4）……42
第 34 図　4号建物跡実測図（1/80）……43
第 35 図　1～3号甕棺墓実測図（1/20）……45
第 36 図　2～4号甕棺実測図（1/6）……47
第 37 図　4～6号甕棺墓実測図（1/20）……折込
第 38 図　1・6号甕棺実測図（1/8）……折込
第 39 図　7・8号甕棺墓，1号木棺墓実測図（1/20）……折込
第 40 図　5・7・8号甕棺実測図（1/6）……51
第 41 図　9～11・13号甕棺墓実測図（1/20）……52
第 42 図　9・10・14号甕棺実測図（1/8）……折込
第 43 図　12号甕棺実測図（1/8）……55
第 44 図　11・13・15号甕棺実測図（1/6）……57
第 45 図　14号甕棺墓実測図（1/30）……58
第 46 図　12・15・16号甕棺墓実測図（1/20）……59
第 47 図　17・18号甕棺墓実測図（1/20）……60
第 48 図　16・18号甕棺実測図（1/6）……61
第 49 図　17号甕棺実測図（1/8）……62
第 50 図　17号甕棺墓出土石器実測図（1/2）……62
第 51 図　2・3号木棺墓実測図（1/30）……65
第 52 図　木棺墓出土石器実測図（1/2）……66
第 53 図　4・5号木棺墓実測図（1/30）……折込
第 54 図　6・7号木棺墓実測図（1/30）……67

第 55 図　1・2号土壙墓実測図（1/30）……69
第 56 図　1・2・4・5号土壙実測図（1/30）……71
第 57 図　3号土壙出土土器実測図（1/4）……72
第 58 図　5号土壙出土土器実測図（1/4）……72
第 59 図　3・6・8号土壙実測図（1/40）……73
第 60 図　7号土壙実測図（1/80）……75
第 61 図　7号土壙出土土器実測図①（1/4）……76
第 62 図　7号土壙出土土器実測図②（1/4）……77
第 63 図　7号土壙出土土器実測図③（1/4）……79
第 64 図　7号土壙出土土器実測図④（1/4）……80
第 65 図　土壙出土石器・鉄器・土製品実測図（1/2）……81
第 66 図　8・9号土壙出土土器実測図（1/4）……82
第 67 図　1～3号溝出土土器実測図（1/4）……83
第 68 図　1・2号溝実測図（1/60）……84
第 69 図　谷状遺構土層断面図（1/80）……85
第 70 図　谷状遺構出土土器実測図①（1/4）……86
第 71 図　谷状遺構出土土器実測図②（1/3）……88
第 72 図　谷状遺構出土石器実測図（1/3）……89
第 73 図　谷状遺構出土石器・鉄器・土製品実測図（1/2）……90
第 74 図　pit・その他遺構の出土土器実測図（1/4）……91
第 75 図　採集石器・鉄器・青銅器実測図（1/2）……92
第 76 図　pit 出土鉄釘実測図（1/2）……93

中町裏遺跡

第 77 図　A地区遺構配置図（1/300）……99
第 78 図　1・2号住居跡実測図（1/80）……100
第 79 図　3号住居跡実測図（1/80）……101
第 80 図　1号土壙跡実測図（1/30）……102
第 81 図　1号土壙跡出土石器実測図（1/3）……102
第 82 図　1号土壙跡出土土器実測図（1/4）……102
第 83 図　B地区遺構配置図（1/300）……103
第 84 図　B地区谷部土層断面実測図（1/60）……104
第 85 図　B地区出土石器実測図（1/2）……106

第 86 図　B地区出土石器・石製品実測図①（1/3）……107
第 87 図　B地区出土石器・石製品実測図②（1/2）……108
第 88 図　B地区出土縄文土器第1群拓影図（1/3）……109
第 89 図　B地区出土縄文土器第2群拓影図（1/3）……110
第 90 図　B地区出土縄文土器第3群拓影図・土偶実測図（1/3）……111
第 91 図　B地区下層出土土器実測図①（1/4）……112
第 92 図　B地区下層出土土器実測図②（1/4）……113
第 93 図　B地区腐植土出土土器実測図①（1/4）……115
第 94 図　B地区腐植土出土土器実測図②（1/4）……117
第 95 図　B地区出土円盤状土器片実測図（1/3）……119
第 96 図　B地区出土土製品実測図（1/2）……119
第 97 図　B地区出土土器実測図（1/3）……119
第 98 図　P-1土器出土状態実測図（1/30）……120
第 99 図　P-1出土土器実測図（1/4）……120
第100図　1・2号土壙跡実測図（1/60）……120
第101図　1・2号土壙跡出土石器・石製品実測図（1/3）……122
第102図　1・2号土壙跡出土土器実測図①（1/4）……123
第103図　1・2号土壙跡出土土器実測図②（1/3）……124
第104図　1・2号土壙跡出土陶磁器実測図（1/3）……124
第105図　C地区遺構配置図（1/200）……125
第106図　C地区出土縄文土器拓影図（1/3）……126
第107図　1・2号甕棺墓実測図（1/30）……127
第108図　1号甕棺実測図（1/8）……128
第109図　2号甕棺実測図（1/8）……129
第110図　3号甕棺墓実測図（1/30）……130
第111図　3・4号甕棺実測図（1/12）……131
第112図　4号甕棺墓実測図（1/30）……132
第113図　5～7号甕棺墓実測図（1/30）……133
第114図　5・6号甕棺実測図（1/12）……134
第115図　7号甕棺実測図（1/12）……136
第116図　1号墳実測図（1/30）……137
第117図　1号墳出土土器実測図（1/3）……138
第118図　1号墳出土鉄器実測図（1/2）……139

第 119 図　1 号墳出土ガラス玉実測図（1/1）……140
第 120 図　1 号墳出土砥石実測図（1/2）……141
第 121 図　1・2 号竪穴実測図（1/40）……141
第 122 図　1 号竪穴出土土器実測図（1/3）……142
第 123 図　石組溝実測図（1/80）……143
第 124 図　石組溝出土土器実測図①（1/4）……144
第 125 図　石組溝出土土器実測図②（1/3）……145
第 126 図　石組溝出土陶磁器実測図（1/3）……147
第 127 図　石組溝出土鉄器実測図（1/2）……147
第 128 図　D・E 地区遺構配置図（1/400）……148
第 129 図　石組溝出土石製品実測図（1/3）……149
第 130 図　D 地区土層断面実測図（1/80）……150
第 131 図　E 地区出土土器実測図①（1/4）……151
第 132 図　E 地区出土土器実測図②（1/3）……151
第 133 図　甕棺編年図（成人棺 1/20・小児棺 1/16）……折込
第 134 図　木棺墓分類図（1/80）……156
第 135 図　弥生墳墓群配置図（1/400）……157
第 136 図　志波千代島出土の須恵器把手付碗（1/3）……162

付　　図

付図　1　杷木宮原遺跡遺構配置図（1/200）
付図　2　中町裏遺跡遺構配置図（1/300）

表　目　次

表　1　遺構番号新旧対照表……13
表　2　甕棺墓一覧表……63

表　3　木棺墓一覧表……68
表　4　土壙墓一覧表……68
表　5　円盤状土器片計測表……119
表　6　ガラス玉計測表……140
表　7　石組溝計測表……142
表　8　木棺墓地名表……158

Ⅰ　調査組織と調査経過

九州横断自動車道建設工事のSTA236＋60～STA239＋50の区間は，発掘調査予定の第39地点に相当し，杷木宮原遺跡（第39－Ａ地点），中町裏遺跡（第39－Ｂ・Ｃ地点）がこれにあたる。試掘調査は昭和61年３月1日～10日に実施され，弥生時代の甕棺墓・土壙墓等の墓をはじめ溝状遺構を確認した。また，第39－Ｂ・Ｃ地点とした場所は，台地と台地の間に谷部が2箇所存在し，遺物の出土をみたことから本調査を行うこととした。

杷木宮原遺跡の調査経過

杷木宮原遺跡の調査は，昭和61年４月22日より開始し，同年７月９日までの約2.5ヶ月間を費やした。調査面積は，3,400㎡であった。既に，国道386号線と交差する区間は，高架工事が進められていたが，工事行程に支障をきたすことなく，調査は円滑に進んだ。しかし，調査開始当初は調査地への進入路が狭く，しかも国道と接することと相まって，重機の搬入・搬出，調査事務所の設置に困難を極めた。

調査区は，柿畑により上中下の３段に削平されていた。また，当該地の土層は砂質土からなり，遺構検出時にはプランの把握が難しく，かなりの時間を費やした。しかも，上段は遺構が蝟集した状況を呈した。検出した遺構は，弥生時代中期初頭の竪穴式住居跡（円形・楕円形），古墳時代の竪穴式住居跡（長方形），奈良時代？と推測される２×６間の大型の掘立柱建物跡等の集落跡の他に，弥生時代中期前半～中期中葉の甕棺墓・木棺墓・土壙墓等がある。

当初の調査範囲は，39－Ａ地点と同Ｂ地点が接する谷部も調査対象としていたが，既存の生活道路が存在するため調査対象から除外した。また，調査区の南西側は，家屋建設による著しい削平を受けていたため未調査とした。調査も終盤にさしかかった時点で雨季に入り，降雨による国道・水路への土砂流出，強風によるトイレの倒壊などの不慮の出来事があったものの，39－Ｂ地点の作業員の動員・援助もあって杷木宮原遺跡の調査が無事終焉を迎えたことは，ひとえに作業員・調査補助員の献身的な努力の賜と感謝する次第であります。

以下，調査経過の概略を記す。　　（佐々木）

４月22日　本日より調査開始。テント・調査事務所の設置。

４月30日　住居跡・甕棺墓の発掘着手及び写真撮影。

５月１日　検出遺構の平板測量，中段の遺構検出。

５月７日　上段包含層の確認。

５月15日　降雨による流失土砂の除去作業。

調査組織と調査経過

5月16日　南側墓地群の遺構検出及び1/10・1/20遺構実測。

5月27日　上層遺構の全体写真撮影（高所作業車による）。

5月31日　墓地群の写真撮影。

6月10日　墓地群の実測（1/10・1/20）。

6月11日　上段住居跡・墓地群の実測。掘立柱建物跡の検出作業。

6月27日　調査区の清掃及び気球写真撮影。

6月30日　実測図の再確認，及び一部埋め戻し。

7月9日　機材を撤収し，調査を完了する。

中町裏遺跡の調査経過

第39－B・C地点とした中町裏遺跡は，昭和61年4月22日から調査を開始し，9月27日までの約6ヶ月間を費やした。調査面積は，約11,000㎡である。

本跡は谷部を挟んだ東と西台地（第39－B地点）とこれより更に東側の谷部と台地（第39－C地点）からなる。調査の便宜上，B地点を西側台地からA～C地区に区分し，C地点の谷部をD地区，台地部をE地区とした。発掘調査は，B地点のA・C地区を先行することとし，谷部（B地区）と第39－C地点は，雨季の経過を待ってから着手することとした。

A・C地区の調査成果は，住居跡・甕棺墓・古墳等の墓地群を主体とし，中世期の石組溝や土壙等が検出された。発掘区域には柿畑があり，その柿の根の除去に苦慮し，肥料穴や新期溝などによる撹乱が著しかった。従って，C地区において検出した墓地群は残存状態が悪く，A地区検出の住居跡も柱穴のみの状態であった。日に日に暑さを増す中，6月13日に中町裏遺跡A・C地区の調査を終了した。

中町裏遺跡の調査再開は，8月4日からである。B地区の谷部調査に先駆け，C地点（D・E地区）の表土除去作業を8月下旬から行った。台地上には柿の根株が多く，顕著な遺構の発見はなかった。また，谷部（D地区）にトレンチを2本入れ，土層の堆積状況を観察した。土層は泥質で溜りの様相が窺われ，遺物の出土も無いことから全面的に調査を行うことを中止した。

このC地点とB地区谷部の調査は，並行して実施した。谷の中央に蛇行しながら流れる細い水路を西側壁よりに移動し，湧水を遮断する処置を図った。また，出土遺物の実測と土層観察を考慮し，谷面に一辺4mの方眼を設定し，土層観察用の畦を東西方向に3本残した。調査は水と泥と砂との格闘であるにもまして，谷底はまさに蒸風呂状態であった。作業員の額には大粒の汗が流れ，まさに真夏盛りの時期であった。

時は9月9･10日の両日である。九州北部に集中豪雨があり，谷は一変してプールと化した。他の調査地点も豪雨による被害があり，その復旧作業に若干の時間を費やした。4月下旬に着手した中町裏遺跡の調査も終盤となり，9月18日には写真撮影･実測図作成等すべて終了した。

2回に分けての調査に笑顔で快く答えてくれた作業員・関係者各位に感謝する次第であります。

調査概略は，下記のとおりである。　（高橋）

4月22日　テント設営，調査開始。
4月26日　甕棺墓群の発掘及び遺構実測。
5月7日　古墳及び石組溝の調査。
5月20日　西台地（A地区）の遺構検出。
5月29日　文化財安全パトロール。
6月13日　A・C地区の調査を終了する。
8月4日　39－B・C地点調査再開。
8月19日　B地区谷部の調査に着手。
9月9日　北部九州に集中豪雨。
9月27日　調査を終了する。

なお，杷木宮原遺跡・中町裏遺跡における昭和61年度の調査関係者は，次のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局　長	今村　浩三（前任）	杉田　美昭
次　長	菱刈　庄二	
総務部長	安元　富次	
管理課長	森　宏之	
管理課長代理	佐伯　豊	

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所　長	乗松　紀三（前任）	風間　徹
副所長（事務）	西田　功	
副所長（技術）	中村　義治	
庶務課長	徳永　登	
用地課長	岩下　剛　（前任）	松尾　伸男
工務課長	後藤　二郎彦	
小郡工事区工事長	友田　義則	
甘木工事区工事長	猪狩　宗雄	
朝倉工事区工事長	小手川良和（前任）	上野　満
杷木工事区工事長	山中　茂　（前任）	小沢　公共

調査組織と調査経過

福岡県教育委員会

総　　括

教育長	友野　隆
教育次長	竹井　宏
指導第二部長	渕上　雄幸
文化課長	窪田　康徳
文化課長補佐	平　　聖峰
文化課長技術補佐	宮小路賀宏（現九州歴史資料館学芸二課長）
文化課参事補佐	栗原　和彦（現九州歴史資料館調査課長）
文化課参事補佐	柳田　康雄

庶　　務

文化課庶務係長	平　　聖峰（兼任）
文化課事務主査	長谷川伸弘
文化課主任主事	川村　喜一郎

調　　査

文化課調査班総括	柳田　康雄（兼任）
同　技術主査	井上　裕弘（現参事補佐兼総括補佐）
同　技術主査	髙橋　章　（39-B調査担当　現文化係）
同　主任技師	佐々木隆彦（39-A調査担当　現南筑後教育事務所）
同　主任技師	中間　研志（現福岡教育事務所）
同　主任技師	小池　史哲（現福岡教育事務所）
同　主任技師	伊崎　俊秋（現京築教育事務所）
同　技　　師	小田　和利（39-A調査担当　現主任技師）
同　文化財専門員	木村　幾多郎（現大分市立歴史資料館長）
同　臨時職員	日高　正幸（39-B調査担当　現文化財専門員）
同　調査補助員	高田　一弘
	武田　光正（現遠賀町教育委員会）
	佐土原逸男（現浮羽町教育委員会）
	平嶋　文博（現佐賀県多久市教育委員会）
	向田　雅彦（現筑紫野市教育委員会）
	田中　康信（現瀬高町教育委員会）
文化課杷木発掘調査事務所	山下　瑞恵

＜実測補助＞　高瀬セツ子　本石セツ子　中村光恵　後藤カミヨ　矢野静子　渡辺輝子

＜杷木宮原遺跡発掘作業員＞

熊谷範和　鳥居貞美　梶原俊幸　伊藤夏子　塚本トシ枝　安高マキ子　山下けさ江
梶原アヤ子　塚本ヤエ子　井手和江　井手照子　井手美貴枝　丸山啓子　津村カヅエ
藤吉彰子　池田喜美子　石井律子　高倉美知子　和田誠子

＜中町裏遺跡発掘作業員＞

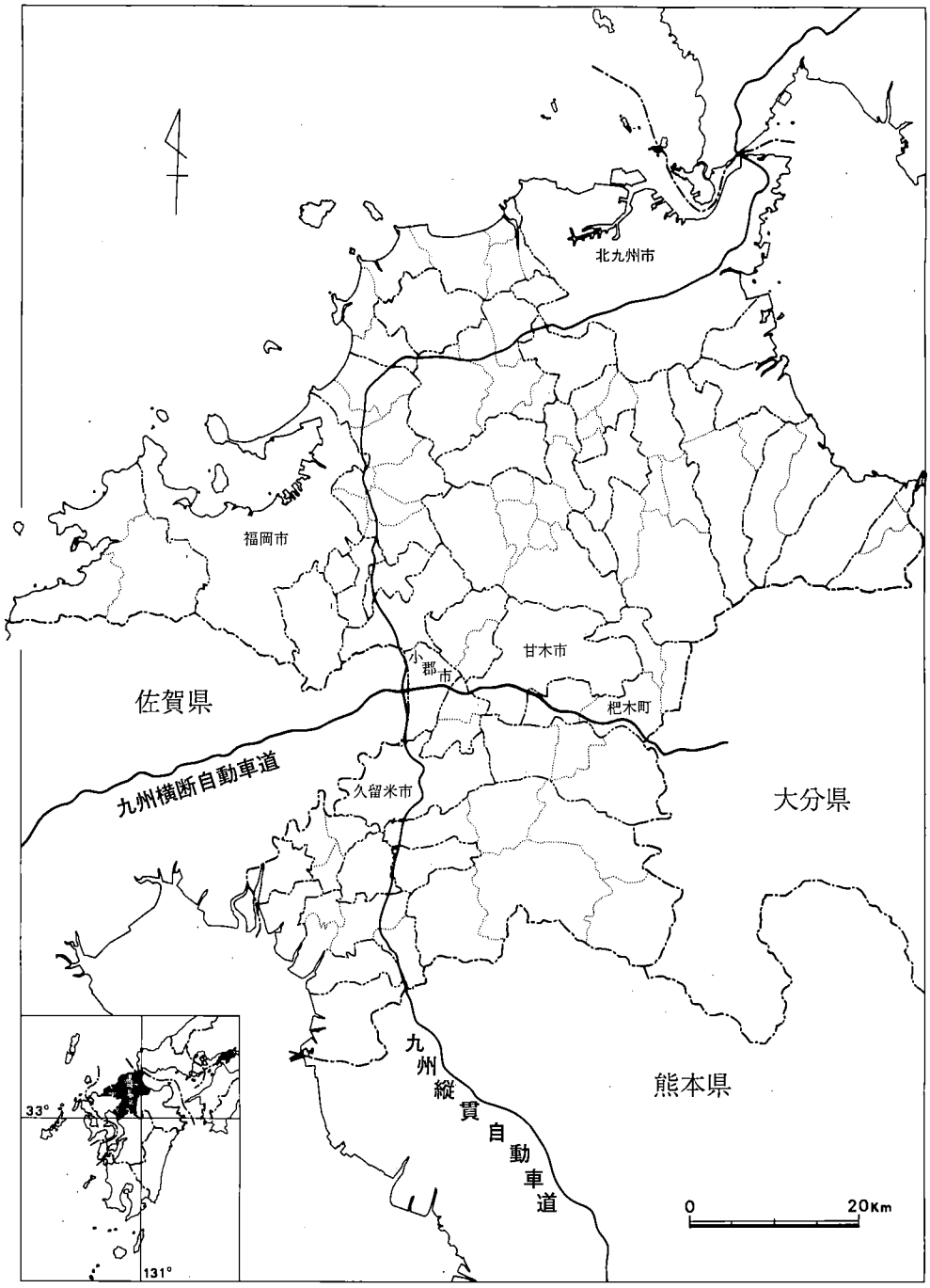
井上敬祐　村上茂美　井手正美　井手役人　安部亀喜　中村義雄　日吉スミ子
日吉キヨノ　日吉ツヤ子　原田ヨネ　伊藤桃枝　小川貞子　藤本公子　阿部恵美子
林ツユカ　奈須道子　熊谷ヨリ子　黒木芳子　山口由美子　財津キョカ　瀬戸シズエ
礫村スズ子　日野須美枝

出土遺物の復原整理作業は，福岡県教育庁文化課甘木発掘調査事務所及び九州歴史資料館において岩瀬正信整理指導員の下に中塩屋リツ子・西奇子・小島佐枝子・石井紀美子・尾花道子・藤井カオル・田中待子・坂口好子・辻光子・白水まさえ・植山洋子さんが行った。出土鉄器の保存処理は，九州歴史資料館参事補佐横田義章氏による。

遺物の写真撮影・焼付けは，同館石丸洋・林崎新二・内本浩子氏の手を煩わせた。遺物実測・製図作業は，渡辺輝子・高瀬照美・平田春美・原富子・若松三枝子・鬼木つや子・佐藤みゆき・豊福弥生・江上佳子（旧姓鶴田）・塩足里美・関久江氏の多大なる協力があった。

本報告書作成に当たり，宇美町立歴史民俗資料館平ノ内幸治，浮羽町教育委員会寺嶋克史・佐土原逸男氏，九州歴史資料館橋口達也氏，福岡教育事務所中間研志・小池史哲氏，北九州教育事務所馬田弘稔氏，京築教育事務所伊崎俊秋氏，福岡県文化課柳田康雄・井上裕弘・木下修・水ノ江和同の諸氏には有益な御指導・御教示を得た。末筆ながら，記して感謝致します。

（小田）



第 1 図　九州横断自動車道路線図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

遺跡の位置

杷木宮原遺跡は，福岡県朝倉郡杷木町大字志波字宮原5037-1・5040・5042番地他に所在し，中町裏遺跡は，杷木町大字志波字宮原4993-1～3，同字中町裏4971～4973，同字上町裏4954-1・4956-1番地他に所在する。

杷木町は，日本有数の穀倉地帯である両筑平野の南東部に位置し，人口約10,000人・面積44.5㎢の農林業を主体とする町である。町域の東縁は宝珠山村・大分県日田市と接し，西縁は朝倉町，北縁は甘木市に接する。また，町域の南端は筑紫二郎の異名をとる筑後川に限られ，浮羽郡浮羽町・吉井町と対峙する。ために，平野部は僅かで，町域の大半は山地が占める（第２図参照)。丘陵斜面は至る所柿の段々畑として開墾され，丘陵頂部までに及ぶ。平地部には葡萄棚が連なっている。また，町内の原鶴・林田には温泉が湧出し，夏場には鵜飼見物の屋形船が筑後川に浮かび，夏の風物詩となっており，多くの観光客で賑わっている。

杷木宮原遺跡及び中町裏遺跡は，安山岩類よりなる広蔵山（標高695ｍ）より派生した麻底良山（標高245ｍ）と高山（標高190ｍ）に挟まれた標高42ｍの台地の先端部に立地し，平地部との比高差は14ｍである。また，当台地の突端部には，筑後川へ突き出る形で志波宝満宮が鎮座している。

当町において横断道が平地部を通過するのは，志波地区と林田地区だけであり，後は山間部を抜け日田市に通じる。杷木町においては，山間部の調査が主流を占めるが，これまで不明瞭であった同町の遺跡が衆目の下に晒される事になった。以下，杷木町における横断道関係の調査成果を中心に周辺の遺跡を少し眺めてみることにしよう。

歴史的環境

旧石器時代の遺跡については，これまで詳しく判っていなかったが，朝倉町菱野の原の東遺跡は，旧石器～奈良時代に及ぶ大複合遺跡であり，4層の旧石器文化層が調査され，ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー等の好資料を提供した（註１)。金場遺跡も旧石器～奈良時代に至る大複合遺跡であり，細石器の文化層が調査された（註２)。大刀洗町春園遺跡では，ナイフ形石器・細石刃が（註３)，山の神遺跡ではナイフ形石器・三稜尖頭器が（註４)，上の宿遺跡ではナイフ形石器等の出土をみた（註５)。

杷木町においては，横断道が山間部を走るため，各調査地点で縄文時代の良好な遺構・遺物を検出した。縄文時代早期においては，押型文土器・塞ノ神式土器の包含層を検出した大谷遺跡（註６）・笹隈遺跡（註７）・天園遺跡（註８）・夕月遺跡（註９）があり，志波桑ノ本遺跡で

は，縄文時代早～晩期の遺物が出土した（註10）。縄文時代中・後期の遺跡については，調査例が少なく，楠田遺跡（註11）で後期の土壙が調査された程度であるが，晩期においては急激に遺跡数を増す。縄文晩期の住居跡は，大谷遺跡・笹隈遺跡 ・クリナラ遺跡（註12）・上池田遺跡（註13）・畑田遺跡・楠田遺跡・二十谷遺跡（註14）等で検出された。白木谷川右岸の標高62～66mの丘陵上に位置する畑田遺跡では，縄文晩期～弥生前期にかけての住居跡84軒，支石墓4基，石棺墓2基，土壙等が調査され（註15），北部九州地域よりかなり奥まった当地において稲作受容期の遺構が調査されたことは，非常に有意義である。

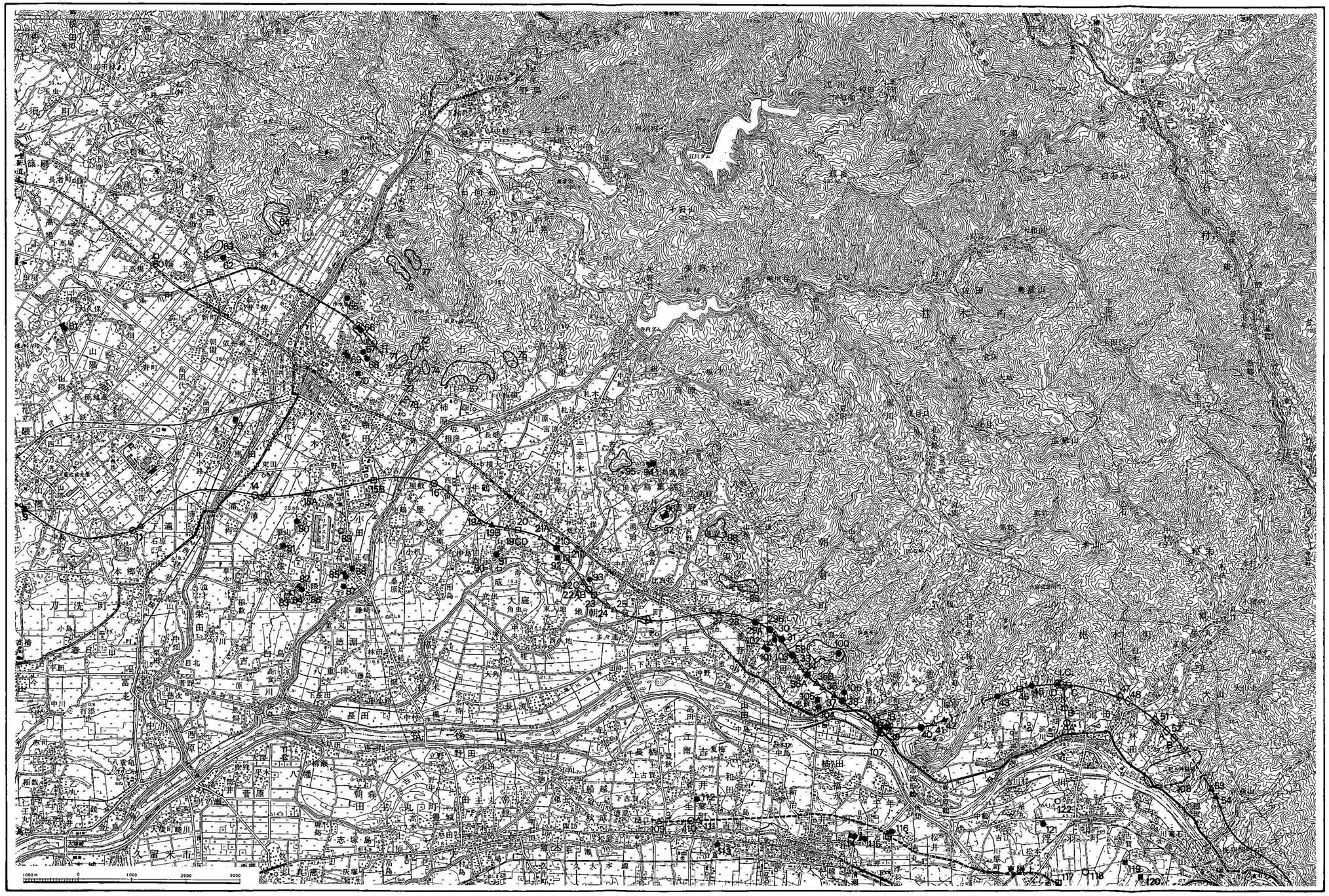
また，笹隈遺跡では，38軒の住居跡が調査され，偏平打製石斧・石錘・十字形石器等が出土した。上池田遺跡では，縄文晩期終末～弥生前期の住居跡6軒の他に袋状土壙4基，円形土壙等が調査された。楠田遺跡では方形住居跡8軒，土壙墓11基，土壙20基，石組遺構3基等が検出され，豊富な土器群とともに偏平打製石斧・磨製石斧・打製石鏃等の石器が出土した。以上の様に，杷木町においては縄文期の良好な遺構・遺物が調査され，筑後川中流域における縄文時代の様相が，かなり明らかになった。

また，前述した原の東遺跡では，縄文早期の石組炉跡33基，集石遺構9基，縄文晩期の土壙等を調査しており，多量の押型文土器とともに打製石斧・石鏃・有孔石器・すり石等の石器類が出土しており，旧石器～縄文期の指標となる遺跡として注目される。縄文早期の石組炉跡は，金場遺跡（2基）・上ノ宿遺跡（3基）でも調査されており，また金場遺跡では前期の土壙30基も検出された。平野部では，小隈松山遺跡で早期の集石遺構が検出され（註16），柿原野田遺跡からは竪穴状遺構より曽畑式土器・轟式土器が出土した（註17）。また，縄文期の所産と推測される落し穴状遺構は近年調査例を増し，立野遺跡・下原遺跡・塔ノ上遺跡・中道遺跡・西法寺遺跡・柿原遺跡・上ノ宿遺跡・小覚原遺跡・二十谷遺跡等で検出されている（註18）。

山間部の調査という制約上，弥生時代の遺跡はあまり調査されておらず，平地部に展開するものと考えられる。

今回報告の，杷木宮原遺跡・中町裏遺跡の他には，高地性集落として近年衆目を集めた西ノ迫遺跡がある。同遺跡は標高131mの丘陵頂部に位置し，弥生後期後半の4軒の住居跡とそれを囲む環濠（幅1.3～1.4m，深さ1.0～1.5m）からなる（註19）。環濠は陸橋部を有し，その内側には門柱を立てた穴がある。西ノ迫遺跡は，『後漢書』にある「桓霊の間（A.D.147～188）倭国大いに乱れ」る時期ー倭国大乱ーにあたり，当時の狼煙場は発見されていないものの，外敵の進入を見張り，狼煙で合図を送る見張り場的な性格を有する遺跡と考えられる。同時期の遺跡に杷木インターの進入路として調査を行った前田遺跡があり，住居跡4軒・土壙・溝等が検出され（註20），両者は密接に関連するものと推測される。

平野部に目を転じると，「一ツ木ー小田」台地と「三奈木ー十文字ー中島田」台地には，弥生～古墳時代の遺跡が密集する。「一ツ木ー小田」台地に位置する弥生中期の集落としては，



第 2 図　杷木宮原遺跡・中町裏遺跡周辺遺跡分布図

9	春園遺跡	65	持丸古墳群
11	立野遺跡	66	菩提寺古寺古墳群
	宮原遺跡	67	古寺墳墓群
14	上上浦遺跡	68	池の上墳墓群
15A	西原遺跡	69	鬼の枕古墳
15B	下原遺跡	70	宗原遺跡
16	高原遺跡	71	大岩西部古墳群
19A	塔ノ上遺跡	72	大岩迫谷古墳群
19B	大還端遺跡	73	大岩南部古墳群
19CD	石成久保遺跡	74	大岩東部古墳群
20	中道遺跡	75	洗田古墳群
21A	西法寺遺跡	76	下渕名子古墳群
21C	大庭久保遺跡	77	下渕宮の前古墳群
21D	上の原遺跡	78	柿原野田遺跡
22AB	治部ノ上遺跡	79	上川原遺跡
22C	狐塚南遺跡	80	大願寺遺跡
23	座禅寺遺跡	81	栗山遺跡
24	才田遺跡	82	神蔵古墳
25	東才田遺跡	83	小隈宝満遺跡
27	長島遺跡	84	小隈出口遺跡
28	中妙見遺跡	85	小田茶臼塚遺跡
29A	原の東遺跡	86	小隈松山遺跡
29B	妙見墳墓群	87	小田小塚古墳
30	鎌塚遺跡	88	小田正信遺跡
31	山の神遺跡	89	小田集落遺跡
33	長田遺跡	90	金川中島田遺跡
34	金場遺跡	91	石成古墳
35A	上ノ宿遺跡	92	乙王丸遺跡
35B	恵蘇山遺跡	93	狐塚遺跡
36	稗畑遺跡	94	烏集院1号墳
37	大迫遺跡	95	古熊古墳群
38	外之隈遺跡	96	宮地獄古墳
39A	**杷木宮原遺跡**	97	宮地獄古墳群
39B	**中町裏遺跡**	98	長安寺古墳群
40	志波桑ノ本遺跡	99	須川古墳群
41	志波岡本遺跡	100	山田長田古墳群
42	江栗遺跡	101	剣塚古墳
43	大谷遺跡	102	鎌塚遺跡
45	笹隈遺跡	103	鎌塚古墳
46	夕月・天園遺跡	104	恵蘇八幡古墳群
47	上池田遺跡	105	恵蘇山古墳群
48	畑田遺跡	106	本陣古墳
51	楠田遺跡	107	志波宝満宮古墳
52A	小覚原遺跡	108	杷木神籠石
52B	二十谷遺跡	109	鷹取五反田遺跡
53	陣内遺跡	110	堺町遺跡
54	上野原遺跡	111	大碇遺跡
57	柿原古墳群	112	生葉1号墳
58	山田古墳群	113	富永古墳
杷木 IC		114	月岡古墳
A	鞍掛遺跡	115	日岡古墳
B	前田遺跡	116	塚堂古墳
C	西ノ迫遺跡	117	日永遺跡
D	クリナラ遺跡	118	沖出遺跡
60	栗田遺跡	119	沖出岩野遺跡
61	小隈古墳	120	杉山段々遺跡
62	仙道古墳	121	田島南遺跡
63	阿弥陀峯古墳群	122	北淀遺跡
64	隈江古墳群		

凡　例

	集　落	墓　地
縄文時代	◇	■
弥生時代	□	●, ●
古墳時代	○	▲
奈良・平安時代	△	

大願寺遺跡（註21）・下原遺跡（註22）・小田集落遺跡（註23）があり，栗山遺跡は中期の甕棺墓を主体とする墓地群であり，前漢鏡・鉄戈・鉄剣・貝釧等の出土をみた（註24）。また，突端部の中寒水屋敷遺跡からは，中国式銅剣が出土しており注目される（註25）。

弥生後期～終末期の集落には，小田道遺跡（註26）・小田集落遺跡・西原遺跡（註27）がある。弥生後期の墓制は，甕棺墓に代わり石棺墓・土壙墓が主体となる。大願寺遺跡では土壙墓群，宗原遺跡では石棺墓・石蓋土壙墓（註28），西原遺跡C地区では鉄鉇を副葬した木棺墓，石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓からなる墓地群である（註29）。

「三奈木－十文字－中島田」台地には，中道遺跡・大庭久保遺跡・上の原遺跡等の主要遺跡があり，中道遺跡では中期～終末期の焼失家屋や中期の甕棺墓が調査された（註30）。大庭久保遺跡では，甕棺墓・木棺墓・土壙墓・石棺墓からなる墓地群が調査され，木棺墓からは小型仿製鏡の出土をみた（註31）。上の原遺跡は弥生時代と奈良時代の大集落で，弥生時代の遺構には住居跡・方形竪穴・貯蔵穴・土壙・甕棺墓群等があり（註32），大庭久保遺跡と対をなし，当地の拠点集落として捉えられる。

その他に，中期初頭～前半の墓地群として柿原遺跡（註33）・原の東遺跡・上ノ宿遺跡があり，長島遺跡では終末期の石棺墓群より小型仿製鏡・管玉・ガラス玉が出土した（註34）。筑後川以南に目を向けると，弥生後期～奈良時代の集落の他に，銅戈・銅矛の埋納遺構が発見された日永遺跡（註35），弥生～奈良時代の大集落跡が調査された鷹取五反田遺跡（註36），住居跡・貯蔵穴・環濠が調査された大碇遺跡（註37），小口部に石を立てた木棺墓や甕棺墓・石棺墓等で構成される墓地群が調査された浮羽町岩野遺跡（註38）等，続々と弥生期の遺跡が発見されている。

古墳時代においては，志波桑ノ本遺跡で円墳8基が調査され，墳丘は削平されていたが，周溝から直弧文を線刻した埴輪片が出土した。また，志波宝満宮境内には石棺系竪穴式石室を内部主体とする二体埋葬の古墳があり（註39），中町裏遺跡と一連のものと推測される。また，外之隈遺跡Ⅰ区の台状墓からは，画文帯神獣鏡・勾玉が，Ⅱ区の石棺墓を主体とする台状墓からは，重圏連弧文鏡・飛禽文鏡，鉄刀子が出土しており（註40），古墳時代初頭の特定集団墓と位置付けられよう。また，外之隈遺跡上方の本陣古墳（註41）と恵蘇八幡宮古墳（註42）は埴輪を有する重要な古墳で，恵蘇宿から志波にかけての一帯は，今後とも注意を要する。

当地の前方後円墳には，「一ツ木－小田」台地に占地する神蔵古墳・小田茶臼塚古墳，丸山公園内に位置する巨石横穴式石室の鬼の枕古墳（註43），「三奈木－十文字－中島田」台地の丘陵頂部に烏集院1号墳・宮地獄古墳，筑後川北岸丘陵に剣塚古墳が占地し，対岸の吉井町若宮には月岡古墳・日岡古墳・塚堂古墳の前方後円墳が対峙する。いずれも両筑平野東部地域に覇をなした首長層の墳墓と考えられる。また，立野方形周溝墓からは，筒形銅器・重圏文鏡が出土し（註44），大願寺方形周溝墓からは三角縁神獣鏡が出土したとされる。鬼の枕古墳の北方丘

陵には，陶質土器・鉄器等を大量に副葬した古寺・池の上墳墓群があり（註45），当地の古墳時代墓制を考える上で大変貴重である。後期古墳は両筑平野東縁丘陵に築造され，柿原古墳群を筆頭に大岩古墳群（註46）・持丸古墳群（註47）・山田古墳群（註48）・金場古墳群・宮地獄古墳群等の群集墳を形成する。また，盾持人物形埴輪の出土をみた三輪町仙道古墳（註49），線刻壁画で知られる朝倉町狐塚古墳（註50）も見逃せない。

奈良時代の集落は，平野部において調査され，立野遺跡・宮原遺跡（註51）・小隈松山遺跡・高原遺跡（註52）・塔ノ上遺跡（註53）・中道遺跡・西法寺遺跡（註54）・大庭久保遺跡・上の原遺跡・長島遺跡・鎌塚遺跡（註55）・鞍掛遺跡（註56）等があり，特に宮原遺跡・上の原遺跡・長島遺跡は大規模で，当時の母村的集落といえよう。また，100基もの火葬墓が群集する大迫火葬墓群は（註57），同時期の墓制を考える上で大変貴重な発見となった。

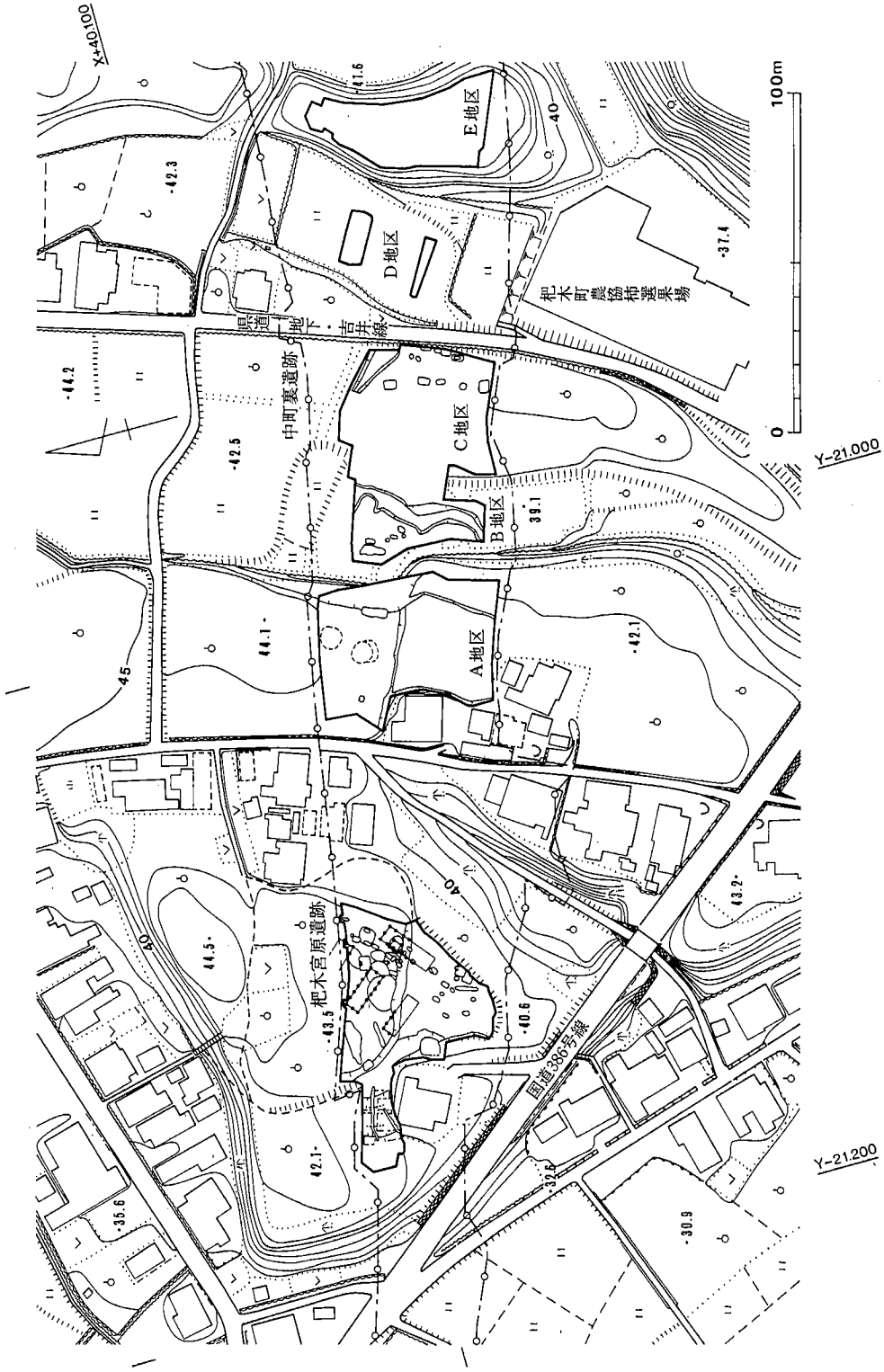
平安・鎌倉時代の集落には，西法寺遺跡・才田遺跡があり，才田遺跡の土壙からは舶載陶磁器類が出土した（註58）。

また，当地は斉明七（661）年に斉明天皇が行宮として築造した朝倉橘広庭宮があり（註59），朝倉町山田・同須川・杷木町志波等が候補地に挙げられており，杷木神籠石の存在と相まって古代より要衝の地であったと言えよう。

註1　福岡県教育委員会が昭和62・63年度に発掘調査を実施。現在，整理中である。
註2　福岡県教育委員会が昭和63年度に発掘調査を実施。
註3　福岡県教育委員会が昭和59年度に発掘調査を実施。現在，整理中である。
註4　福岡県教育委員会が昭和62年度に発掘調査を実施。平成3年度の報告予定である。
註5　福岡県教育委員会が昭和63年度に発掘調査を実施。本年度の報告予定である。
註6　福岡県教育委員会が昭和62年度に発掘調査を実施。
註7　福岡県教育委員会が昭和62年度に発掘調査を実施。
註8　福岡県教育委員会が昭和62年度に発掘調査を実施。
註9　福岡県教育委員会が昭和62・63年度に発掘調査を実施。
註10　福岡県教育委員会が昭和61年度に発掘調査を実施。
註11　福岡県教育委員会が昭和61年度に発掘調査を実施。
註12　福岡県教育委員会が昭和62年度に発掘調査を実施。
註13　福岡県教育委員会が昭和61年度に発掘調査を実施。
註14　福岡県教育委員会が昭和62年度に発掘調査を実施。
註15　福岡県教育委員会が昭和61年度に発掘調査を実施。
註16　甘木市教育委員会　1987　小隈出口遺跡・小隈松山遺跡（甘木市文化財調査報告第18集）
註17　甘木市教育委員会　1976　柿原野田遺跡
註18　落し穴は，立野遺跡C地区（9基），下原遺跡（20基），塔ノ上遺跡（7基），中道遺跡（10数基），西法寺遺跡（5基），柿原遺跡（7基），上ノ宿遺跡（2基），小覚原遺跡（9基），二十谷遺跡（52基ー土壙含む）等で検出されている。
註19　福岡県教育委員会が昭和62年度に発掘調査を実施。
　　福岡県教育委員会　1987　文化講演会　倭国大乱ー西ノ迫高地性集落の謎
註20　福岡県教育委員会が昭和62年度に発掘調査を実施。

註21　甘木市史編さん委員会　1982　甘木市史上巻
註22　福岡県教育委員会　1983　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－2－
註23　甘木市教育委員会　1974　小田集落遺跡（甘木市文化財調査報告第2集）
註24　註21文献所収。甘木市教育委員会　1982　栗山遺跡（甘木市文化財調査報告第12集）
註25　福岡県立朝倉高等学校史学部　1969　埋もれていた朝倉文化　及び註21文献所収。
註26　甘木市教育委員会　1981　小田道遺跡（甘木市文化財調査報告第8集）
註27　福岡県教育委員会　1982　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－1－
註28　註21・25文献所収。
註29　註27に同じ。
註30　福岡県教育委員会が昭和60年度に発掘調査を実施。
註31　福岡県教育委員会が昭和60年度に発掘調査を実施。
註32　福岡県教育委員会　1990　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－18－
註33　福岡県教育委員会　1987　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－12－
註34　福岡県教育委員会が昭和62年度に発掘調査を実施。
註35　浮羽町　1988　浮羽町誌上巻
註36　福岡県教育委員会が平成2年度に発掘調査を実施。
註37　福岡県教育委員会が平成2年度に発掘調査を実施。
註38　浮羽町教育委員会　1990　岩野遺跡（浮羽町文化財調査報告書第5集）
註39　福岡県　1932　史蹟名勝天然紀念物調査報告書第七輯（史蹟の部）
註40　福岡県教育委員会が昭和62・63年度に発掘調査を実施。
註41　京築教育事務所伊崎俊秋氏が円筒埴輪片を採集。遺物発見届提出済み。
註42　朝倉町大字山田字恵蘇宿の恵蘇八幡宮境内に所在する古墳で，町の史跡として指定されている。
註43　甘木市教育委員会　1987　鬼の枕古墳（甘木市文化財調査報告第19集）
註44　福岡県教育委員会　1984　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－5－
註45　甘木市教育委員会　1979　池の上墳墓群（甘木市文化財調査報告第5集）
　　甘木市教育委員会　1982　古寺墳墓群（甘木市文化財調査報告第14集）
　　甘木市教育委員会　1983　古寺墳墓群Ⅱ（甘木市文化財調査報告第15集）
註46　註21・25文献所収。
註47　甘木市教育委員会　1974　持丸古墳群（甘木市文化財調査報告第1集）
註48　福岡県教育委員会が昭和60年度に発掘調査を実施。平成３年度の報告予定である。
註49　猪熊兼勝　1979　日本の原始美術⑥　埴輪　講談社
註50　註21・25文献所収。
註51　福岡県教育委員会　1983　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－2－
　　福岡県教育委員会　1984　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－5－
　　福岡県教育委員会　1986　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－8－
　　福岡県教育委員会　1988　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－14－
註52　福岡県教育委員会が昭和58年度に発掘調査を実施。
註53　福岡県教育委員会　1987　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－9－
註54　福岡県教育委員会が昭和60年度に発掘調査を実施。
註55　福岡県教育委員会が昭和62年度に発掘調査を実施。平成３年度の報告予定である。
註56　福岡県教育委員会が昭和61年度に発掘調査を実施。
註57　福岡県教育委員会が昭和63年度に発掘調査を実施。
註58　福岡県教育委員会が昭和60年度に発掘調査を実施。
註59　『日本書紀』に「斉明天皇七年五月乙未朔癸卯，天皇，朝倉橘広庭宮に遷りて居ます」とある。

遺跡の位置と環境



第 3 図　杷木宮原遺跡・中町裏遺跡周辺地形図（1/2,000）

Ⅲ　各遺跡の調査

杷木宮原遺跡

1．調　査　の　概　要

杷木町の志波地区は富有柿の産地として特に名高く，丘陵斜面は至るところ柿畑として階段状に削平されている。当遺跡の立地する丘陵も例外ではなく，調査区は柿畑により３段に削平されている。以下，便宜上，上・中・下段として説明を加えたい。

当遺跡は，昭和60年度の試掘調査の結果により，甕棺墓・土壙墓からなる弥生墓地群と予測して発掘調査に着手した。遺構検出作業の結果，上段においては1基の成人棺と4基の小児棺からなる甕棺墓群・方形住居跡・溝状遺構を確認したが（図版1-2），方形住居跡と溝状遺構間の16ｍは空白地帯であり，弥生土器を包含するものの遺構のプランが判然としなかったため住居跡の西側にＴ字形にトレンチを設定し掘り下げた。その結果，弥生時代の円形住居跡２軒，古墳後期の住居跡を切る建物跡を検出したが，当初より建物跡としての認識はなく，方形土壙としていたものは柱の掘方であると判明した。また，土壙墓としていた遺構は，両小口部に石を立てた柿原遺跡群タイプの木棺墓（註１）と同様な形態を呈する。

上段は遺構が密集するが，中段は削平が著しく，方形住居跡・甕棺墓・土壙墓・土壙・溝状遺構を検出したにすぎない。また，甕棺墓は壙底に接する部分を残す程度で，遺存状態はかなり悪く，他にも存在したものと思われる。下段においては，方形住居跡・土壙・溝・谷状遺構を確認したが，住居跡はかなり削平されており，焼土（カマド）の存在から住居跡と認識した次第である。谷状遺構は，幅12ｍ・深さ2ｍと大規模で，土捨て場の制約上トレンチ調査に留め，また危険防止のため土層調査後に埋め戻した。

なお，住居跡・木棺墓・土壙墓・土壙は，調査時に付した番号と整理段階での番号が異なるため新旧番号対照表を以下に掲げる。

表１　遺構番号新旧対照表

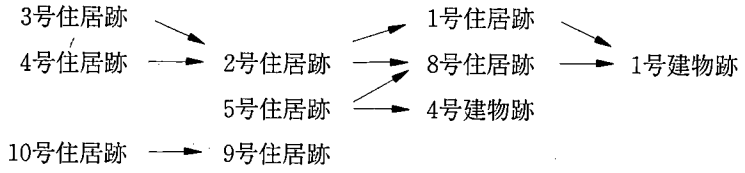
旧番号		新番号	旧番号		新番号	旧番号		新番号
１号住居跡	→	８号住居跡	１号土壙墓	→	１号木棺墓	１号土　壙	→	欠　番
２号住居跡	→	９号住居跡	２号土壙墓	→	２号木棺墓	２号土　壙	→	欠　番
３号住居跡	→	10号住居跡	３号土壙墓	→	７号木棺墓	３号土　壙	→	欠　番
４号住居跡	→	２号住居跡	４号土壙墓	→	２号土壙墓	４号土　壙	→	１号土　壙
５号住居跡	→	１号住居跡	５号土壙墓	→	５号土　壙	５号土　壙	→	欠　番
６号住居跡	↗		６号土壙墓	→	１号土壙墓	６号土　壙	→	欠　番
７号住居跡	→	４号住居跡	７号土壙墓	→	３号木棺墓	７号土　壙	→	欠　番
８号住居跡	→	５号住居跡	８号土壙墓	→	４号木棺墓	８号土　壙	→	欠　番
９号住居跡	→	11号住居跡	９号土壙墓	→	５号木棺墓	９号土　壙	→	欠　番
10号住居跡	→	６号住居跡	10号土壙墓	→	６号木棺墓	10号土　壙	→	６号土　壙
11号住居跡	→	７号住居跡				11号土　壙	→	７号土　壙
12号住居跡	→	３号住居跡				12号土　壙	→	４号土　壙
						13号土　壙	→	欠　番
						14号土　壙	→	欠　番
						15号土　壙	→	８号土　壙
						住7下層土壙	→	２号土　壙
						住12西土壙	→	３号土　壙
						１号大　溝	→	９号土　壙

2．遺構と出土遺物

当遺跡は，削平が著しかったが，検出した遺構は，最終的に弥生時代中期の住居跡７軒・甕棺墓18基・木棺墓７基・土壙墓２基・土壙７基・谷状遺構，古墳時代後期の住居跡４軒，時期不明の建物跡４棟・土壙２基・溝４条である。甕棺墓・木棺墓は円形住居跡を切っており，弥生集落→弥生墓地→古墳集落→建物群への変遷が辿れる。

(1) 竪穴式住居跡

上段で8軒，中段で2軒，下段で1軒の計11軒確認した。上段においても数cm程度の壁高しか留めない住居跡が存するので，中・下段においては深めに掘った3軒の住居跡だけが辛うじて検出されたにすぎない。住居跡どうしの切合いは，下記のとおりである(矢印は古→新を表す)。



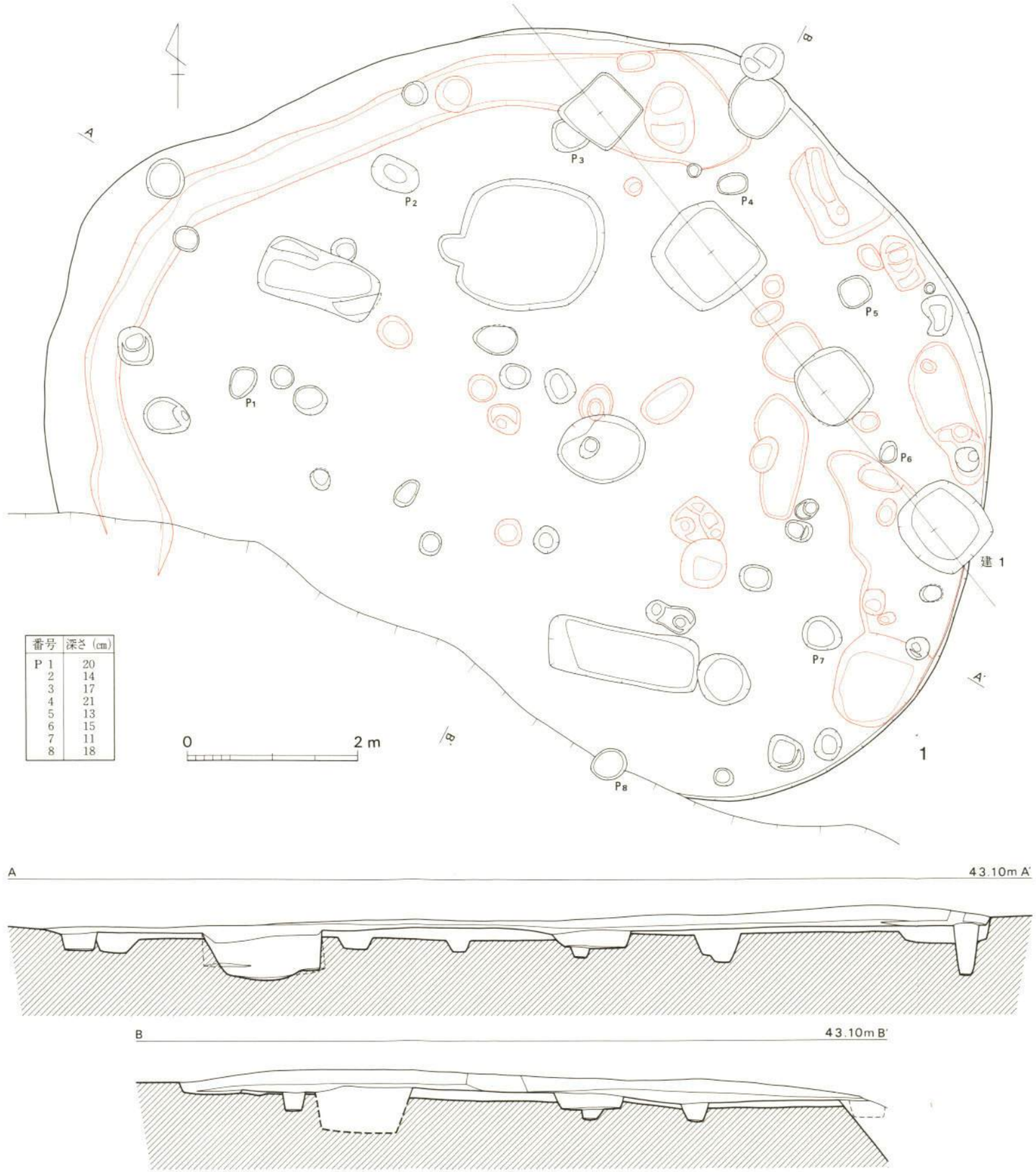
１号住居跡（図版2-2，第４図）

上段中央に位置し，２号住居跡を切り，１号建物跡に切られる。また，南西壁は柿畑による削平を受ける。平面形は，東西長11.2ｍを測る長円形を呈しよう。深さは東壁側で0.18ｍ，西壁は完全に削平されているためＰ３以西は推定による。また，調査当初は，平面形が歪であることから2軒重複しているものと考えたが，貼床を剝してみると西壁側に下部周溝が円弧状に存することから１軒の住居として取り扱った。

Ｐ１～８が主柱穴で，本来10本柱の住居跡であったと思われる。床面の中央に長軸1.03ｍ，短軸0.82ｍの円形ピットがあるが，周壁は加熱を受けておらず，焼土・炭も認められず，炉址ではない。遺物は埋土中より，土器・石鏃・石包丁・砥石・管状土錘が出土した。

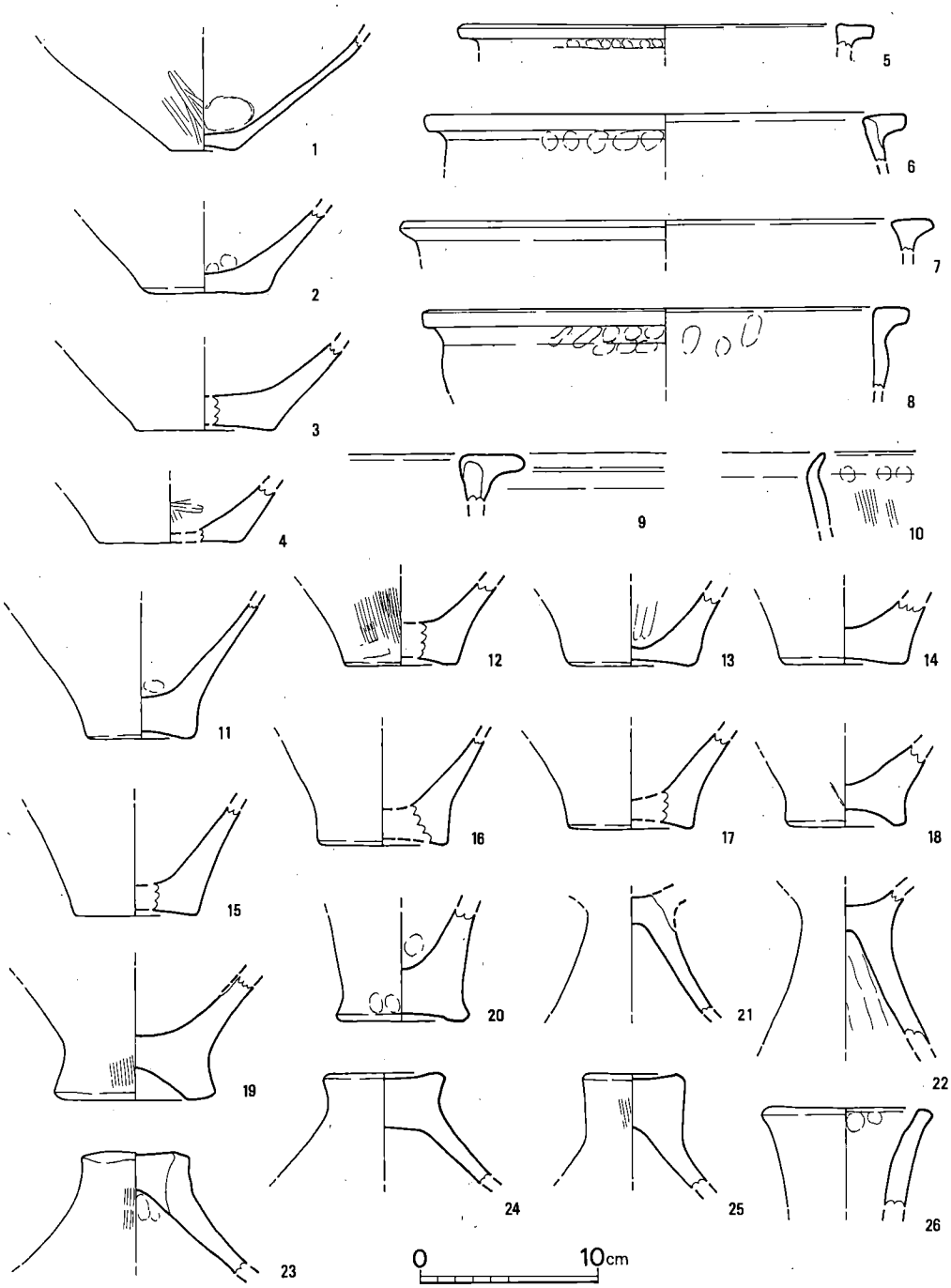
出土遺物（図版18-1・21-5・22-2・23-1・2，第5・28・29図）

土　器（1～26）　1は壺の胴下半部から底部にかけての破片で，底径3.8cmを測る。調整は外面ヘラミガキ，内面ナデによる。また，内面下位には補修時の粘土帯がみられる。胎土に2mm大の長石・石英・角閃石・赤褐色粒を含む。焼成は良好で，黄灰色を呈する。2～4は壺の底部破片で，底径は2が7.5cm，3は7.8cm，4は8.0cmを測る。2・4は平底であるが，3は若干の上底を呈する。4の内面はヘラミガキ調整による。胎土はともに長石・石英・角閃石・赤褐色粒を含む。



番号	深さ (cm)
P 1	20
2	14
3	17
4	21
5	13
6	15
7	11
8	18

第 4 図　1号住居跡実測図 (1/60)



第 5 図　1号住居跡出土土器実測図（1/4）

5～9は甕の口縁部破片である。5・6・8・9の口縁部は逆L字状を呈し，肥厚する。頸部外面はユビオサエ→ナデによる。9の口唇部は，5・6に比し外方に突出する。7の口縁部は内方にも突出するT字状を呈する。いずれも胎土に長石・石英・角閃石を含む。口径は5が23.6cm，6は27.4cm，7は30.4cm，8は27.6cmに復原した。10の口縁部は「く」字状に短く外反し，口唇部は丸く納める。外面ハケ目，内面ナデによる。甕もしくは鉢になるか。

11～20は甕の底部破片である。11～17・20は若干の上底で，18・19は高台状の上底を呈する。器面の摩滅が著しいが，12は外面ハケ目（7～8条／cm），内面ナデ調整による。13の内面はヘラ状工具によるナデが施される。底径は11が6.4cm，19は9.0cmである。20の底部はあまり開かず胴部に移行する器形で，底径は7.6cm。いずれも長石・石英・雲母を胎土に含む。

21・22は高坏の脚部破片であり，裾部は開く。器面の摩滅が著しく，調整は不明。23～25は蓋の撮部破片で，撮径は23が6.2cm，24は6.8cm，25は5.9cmを測る。いずれも甕の底部に比して肉厚である。26は器台の破片で，口径は9.6cmに復原した。

石　器（第28図1・2・8・9，第29図5・6・8）　1・2は石鏃で，1は姫島産の黒曜石製であり，2はサヌカイト製である。1は長さ2.3cm，重さ0.9ｇ。8は凝灰岩製の石包丁片である。9は砂岩製の砥石で，風化が著しい。5・6は安山岩製のすり石で，5は長径9.4cm，短径8.1cm，重さ380ｇで，側縁は研磨される。6は半欠品。8は砥石で，表裏の3面を砥面として使用。

土製品（第28図11）　長さ4.2cm，径1.8cm，重さ8.5ｇの管状土錘である。中央部は膨らみ，径0.6cmの穴が貫通する。

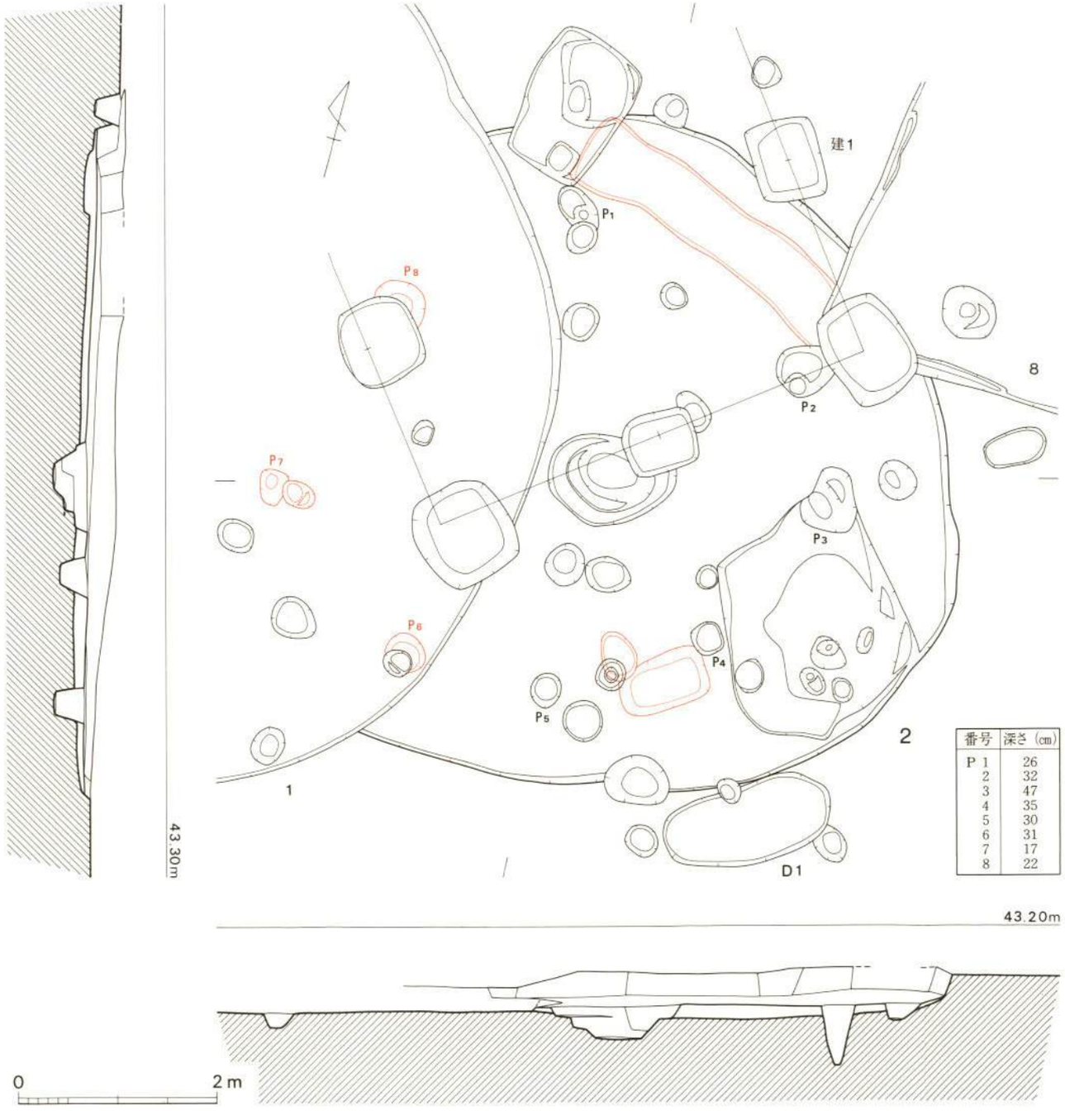
当住居跡の時期は，5～8の肥厚する逆L字状口縁部を有する甕から，弥生時代中期初頭に比定されよう。

2号住居跡（図版3-1，第6図）

1号住居跡に西壁の大半を切られて位置する。当住居跡もかなり削平されているものの平面形は円形を呈し，規模は南北長6.84ｍ，壁高は北側で0.24ｍを測る。P1～8が主柱穴で，深さは22～47cmである。床面中央には，長さ1.3ｍ，幅0.96ｍ，深さ0.34ｍの穴があるが，加熱を受けておらず炉址ではない。床面は南側に緩傾斜しており，14cm程の貼床がみられた。また，東壁側には深さ0.4ｍ程の掘込みがある。埋土中より土器・石匙，黒曜石の剝片が出土した。

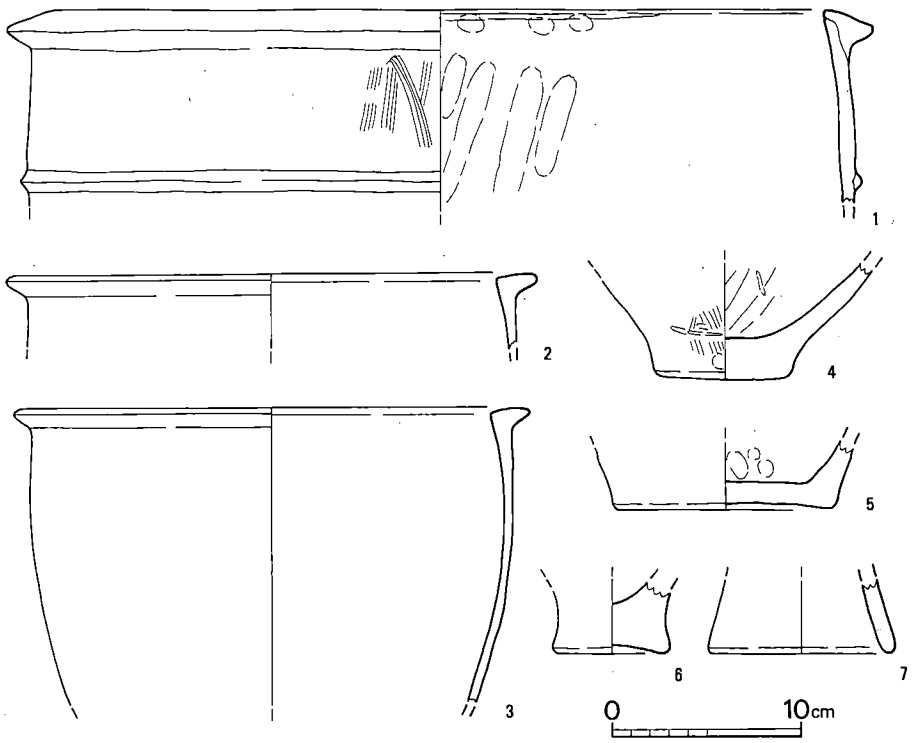
出土遺物（図版18-2・21-5，第7・28図）

土　器（1～7）　1は甕で，断面三角形の亀ノ甲タイプの口縁部を有する。口縁部のやや下位に三角凸帯を巡らす。外面調整はタテハケ目（8条／cm）で，内面には指頭圧痕がみられる。胎土に長石・石英を多く含む。復原口径は46.2cmで，甕棺になる可能性が高い。2・3は逆L字状口縁の甕で，口縁部平坦面は若干内傾する。口縁部はやや肥厚するが，口唇部は丸く納める。摩滅が著しく調整は不明。胎土に長石・石英・角閃石を含む。口径は2が28.4cm，3は27.6cm。



番号	深さ（cm）
P 1	26
2	32
3	47
4	35
5	30
6	31
7	17
8	22

第 6 図　2号住居跡実測図（1/60）



第 7 図　2号住居跡出土器実測図（1/4）

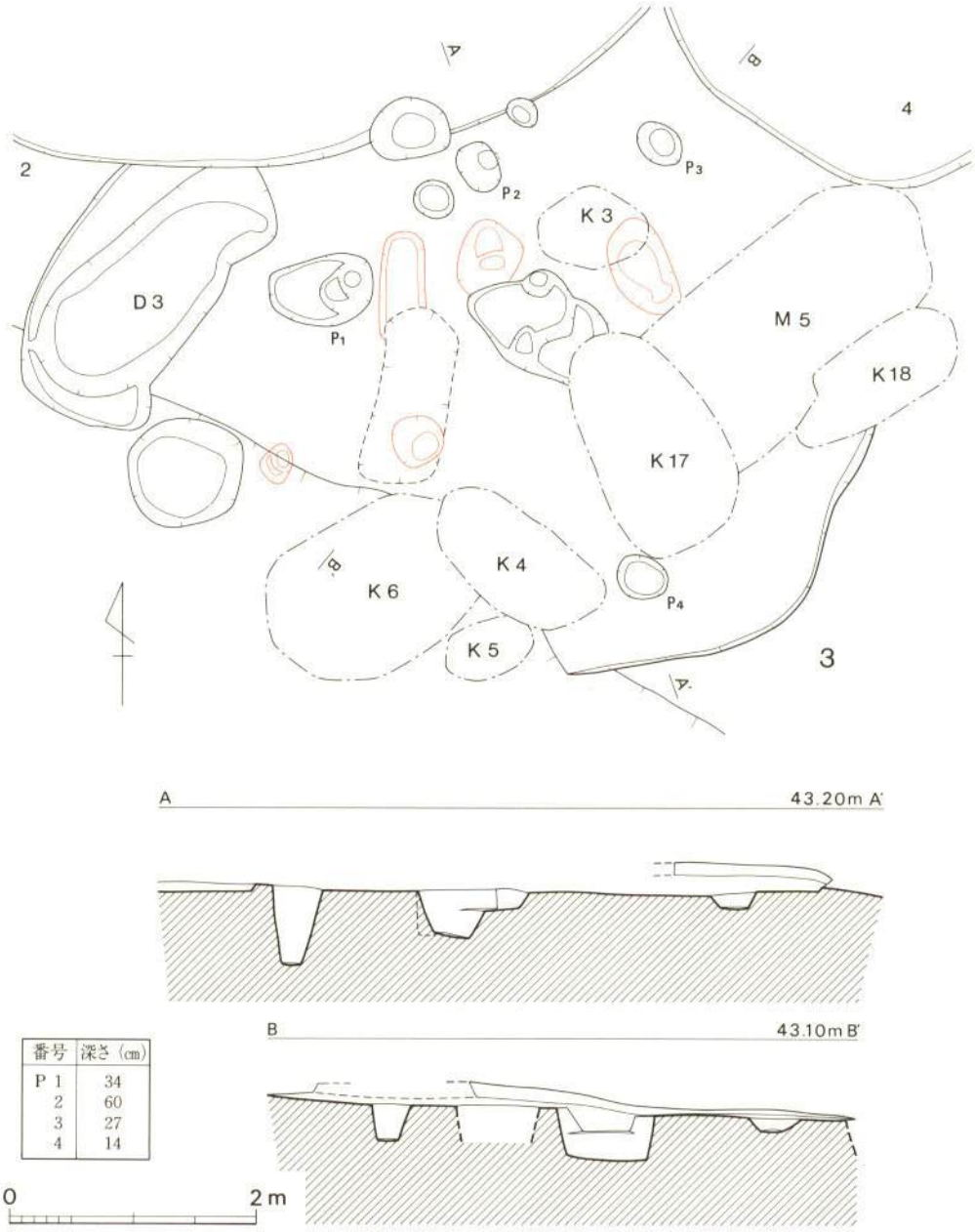
4～6は底部破片である。4は内外面ともにヘラミガキを施していることから壺底部になろう。底径7.4cmの平底である。5は復原底径12.0cmで，胴部への開きは悪い。6は上底の底部で，内面には炭化物が遺存している。復原底径は6.3cmを測る。いずれも胎土に長石・石英・雲母・赤褐色粒を含む。7は支脚片で，脚径10.0cmに復原した。色調は茶褐色を呈する。

石　器（第28図3）　3は横型の石匙で，刃部幅3.2cm，重さ2.2ｇ。サヌカイト製である。

当住居跡は，弥生中期初頭の１号住居跡に切られるものの，両者は時期的に大差ないものと思われる。

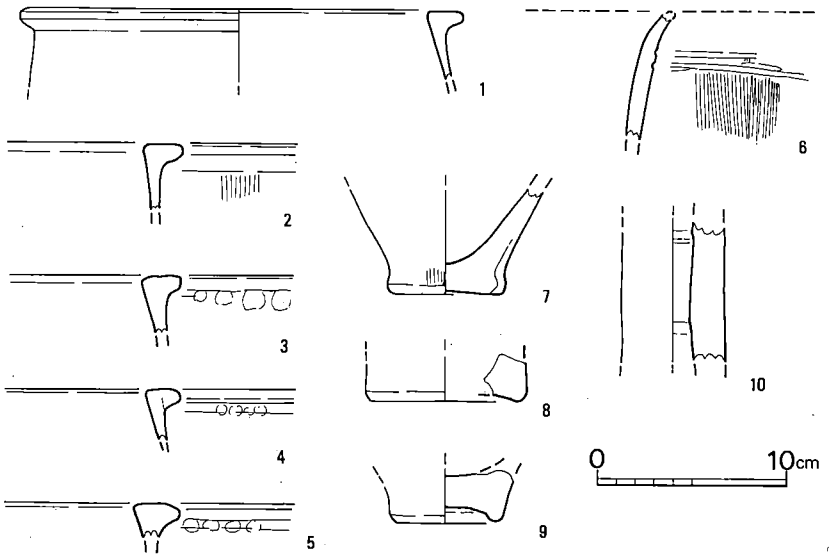
3号住居跡（図版3-1，第８図）

４号住居跡のすぐ南側で検出した住居跡で，２号住居跡，3～6・17・18号甕棺墓，5号木棺墓に切られ，遺存状態は極めて悪い。また，4号住居跡と近接することから両者間は，切合い関係にあると思われるが，両者の切合い関係はつかめなかった。また，出土土器からみても両者に時期的な差はなく，前後関係は不詳。Ｐ1～4を一応主柱穴としたが，炉址・規模ともに判然としない。土器の他に，黒曜石・サヌカイトの剝片が出土している。



番号	深さ（cm）
P 1	34
2	60
3	27
4	14

第 8 図　3号住居跡実測図（1/60）



第 9 図　3号住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物（図版21-5・22-1，第9・28・29図）

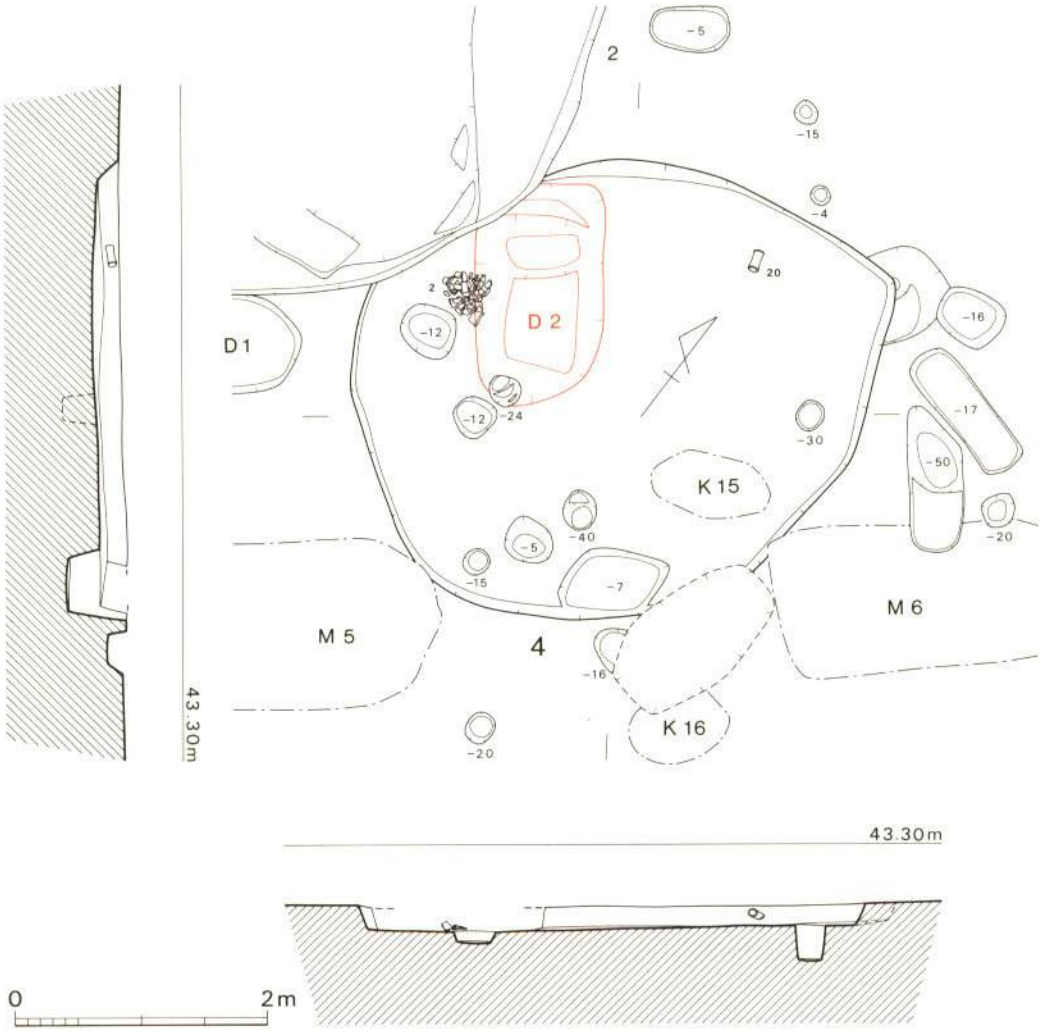
土　器（1～10）　1～5は甕の口縁部小片で，肥厚する逆L字状を呈する。いずれも口唇部は外方への突出度が弱く，外面調整はユビオサエ→ヨコナデによる。1の口径は23.6cmに復原した。胎土は，長石・石英・赤色粒を含む。6の口縁部は僅かに外反するのみで，口縁部のやや下位にヘラ描き沈線を2条施文する。口縁部はヨコナデ，沈線より下位はハケ目調整（7～9条／cm）による。7～9は底部破片で，7はほぼ平底，8・9は上底を呈する。7の外面はハケ目調整で，外底面には黒斑がみられる。10は筒状の土器で，高坏の脚柱部になろう。径は5.5cmである。

石　器（第28図5・7，第29図1）　5は柱状片刃石斧の基部小片で，石材は頁岩か。7は幅4.5cmの偏平な石器で，上下砥ぎ出しているが刃部と言える程ではなく，石包丁の未製品か。1は玄武岩製の磨製石斧で，長さ10.1cm，幅3.9cm，重さ145ｇ。中央の断面は楕円形を呈し，刃部の一部を欠損する。また，器面には線条の擦過がみられる。ともに埋土中の出土である。

当住居跡の時期は，弥生中期初頭の２号住居跡に切られること，口縁部が外反する甕（６）から前期末～中期初頭であろう。

４号住居跡（図版3-1，第10図）

２号住居跡に西壁を切られて位置する。また，住居跡埋没後，床面の東壁よりに15号甕棺墓が埋葬される。東西長3.5ｍ，南北長3.8ｍの不整円形を呈し，深さは北壁側で0.18ｍである。竪穴内部には７個のピットがあるが，柱穴ではない。また，貼床を施しておらず，竪穴部の規

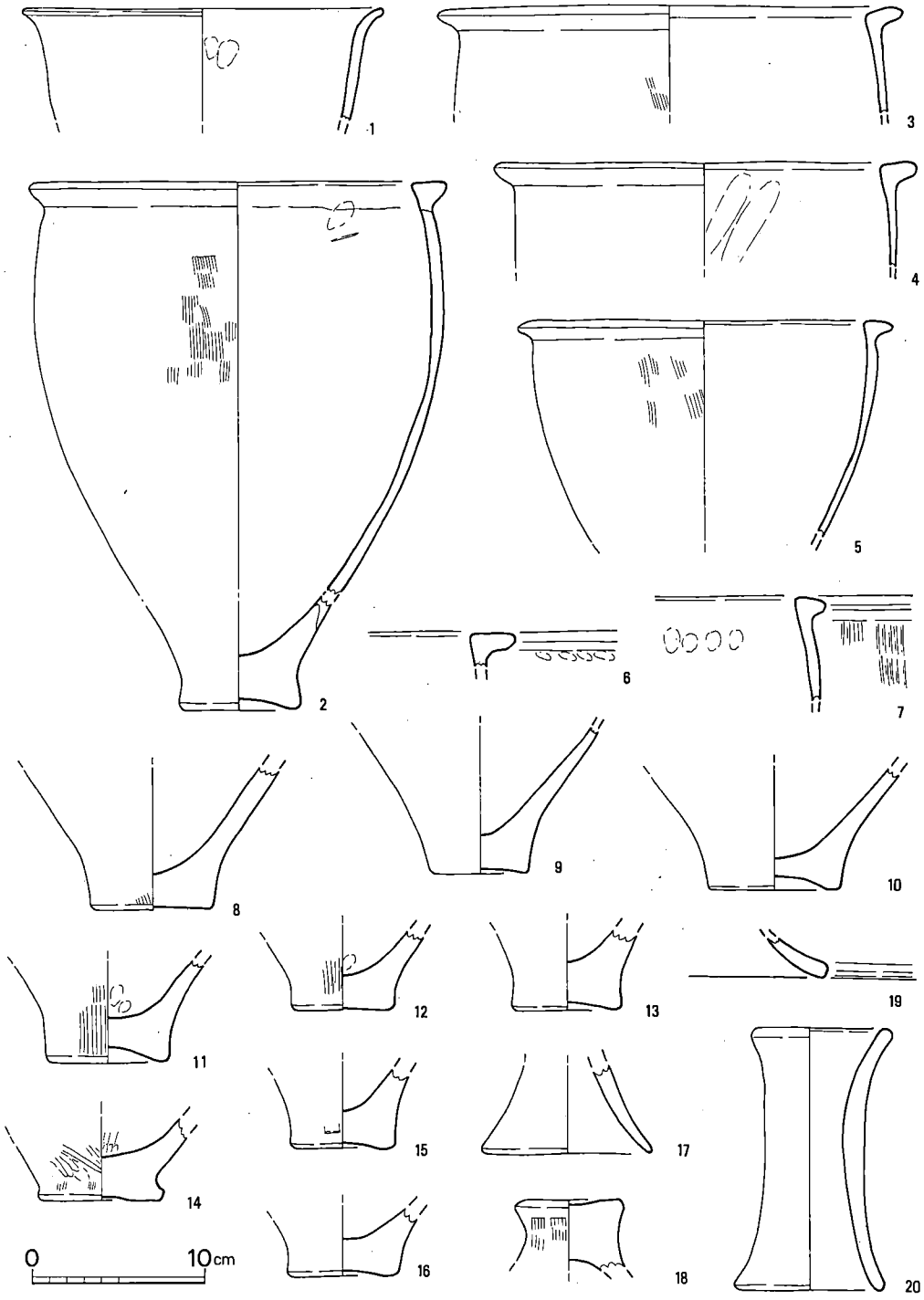


第 10 図　4号住居跡実測図（1/60）

模も小さいことから住居跡ではなく土壙とした方が妥当かと思われる。規模に反して土器の出土量は多く，甕（第11図2）は床面に密着して出土した。また，2号土壙は甕の取り上げ後に検出した。他に，石錘，黒曜石・サヌカイトの剥片が出土した。

出土遺物（図版19-1・21-5，第11・28図）

土　器（1～20）　1の口縁部は緩やかに外反し，口唇部は丸く納める。復原口径は21.1cmで，甕になろう。調整は摩滅により不明。2は床面出土の甕である。器高31.5cm，口径24.4cm，頸部径22.8cm，胴部最大径24.0cm，底径7.2cmを測る。口縁部は逆L字形というより逆三角形状



第 11 図　4号住居跡出土土器実測図（1/4）

を呈する。頸部が口縁部との接合部にあたり，口縁部を単に乗せて内外面から強くナデつけた接合手法をみせる。胴部は口径と等しく膨らみ，上底の底部に移行する。底部は2.5cmと厚手である。胎土に2～3mm大の長石・石英・角閃石・雲母を多く含む。焼成は良好で，内外面とも淡赤褐色を呈する。3～7は甕の口縁部破片で，3・4・6の口縁部は肥厚する逆L字状を呈し，5・7は亀ノ甲タイプ状の口縁を呈する。復原口径は，3が27.2cm，4は24.6cm，5は22.0cmである。また，5の頸部外面には，煤の付着がみられる。7は胎土に黒曜石粒を含んでいる。意識的に混入させたのであろうか。

8～16は底部破片で，8・9・12・14は平底，10・11は上底，13・15・16は内窪みの底部である。10はやや開き気味である。底径は8が7.4cm，10は7.6cm，16は6.6cmである。調整は11・12がハケ目，14は内外面ともヘラミガキによる。いずれも胎土に長石・石英・雲母を含む。17は高坏の脚部で，端部は丸い。18・19は蓋である。18は撮部で，撮部径は6.4cmを測る。19の口唇部にはヘラ先による浅目の沈線を施している。20は器台で，器高20.3cm，口径8.2cm，底径8.8cmを測る。両端部とも丸い。胎土に2～4mm大の長石・石英・角閃石・雲母・赤色粒を多く含む。焼成は良好で，灰褐色を呈する。

石　器（第28図4・6）　4は黒曜石製の石錐で，先端部を欠く。残存長4.0cm，幅2.0cmである。6は柱状片刃石斧の先端部半欠品であり，全体に研磨痕がみられる。頁岩製。

逆L字状口縁の甕（3～6）から当住居跡の時期は，中期初頭に置けよう。

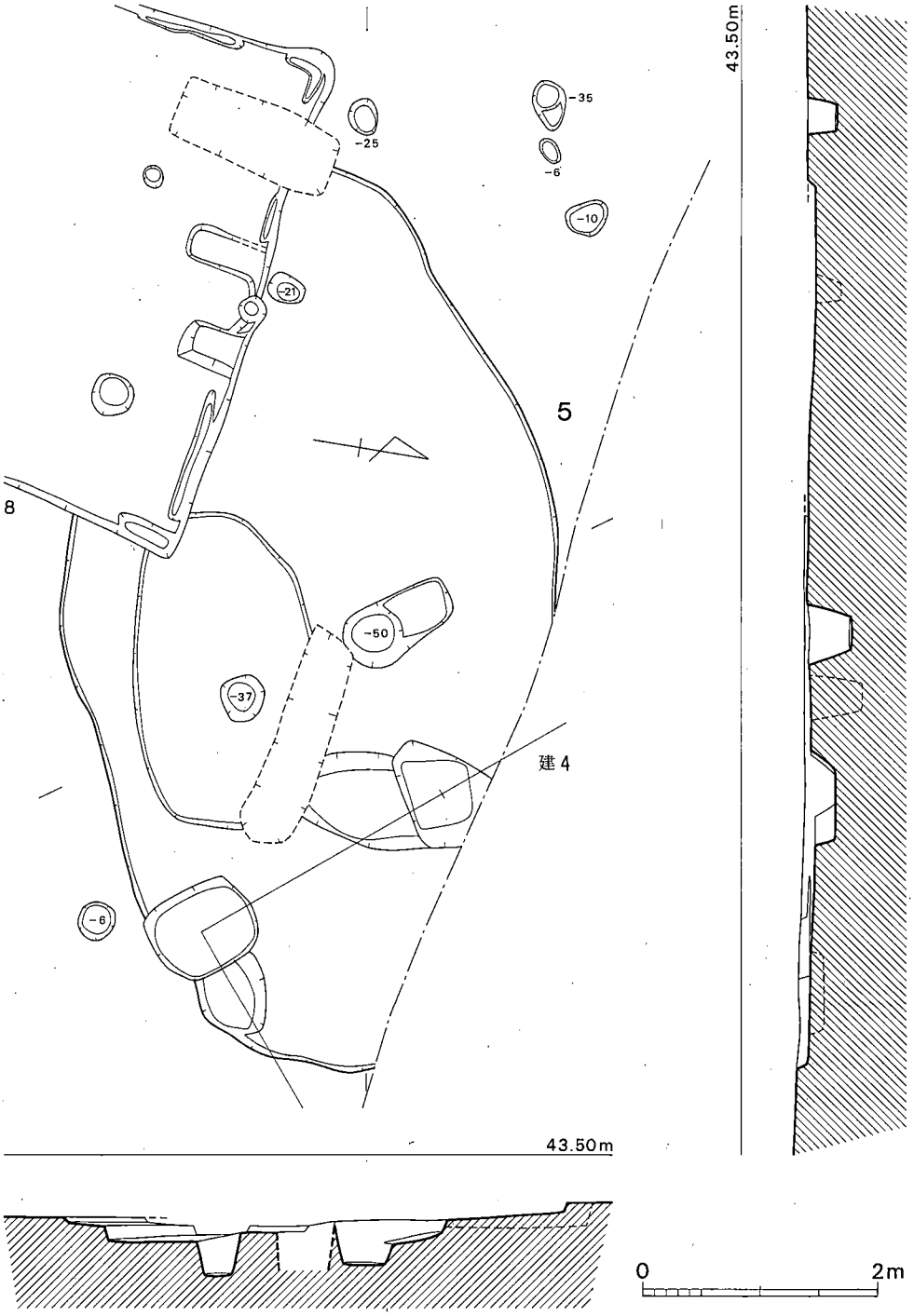
5号住居跡（図版2-1，第12図）

4号住居跡の3m北側に位置し，8号住居跡・4号建物跡に切られ，北側は調査区外に伸展する。現状で，長軸7.7m，短軸4.3m，深さは北壁側で8cmを留めるに過ぎない。床面中央に深さ0.5m程のピットが2個あり，その間隔は0.8mである。炉址はなく，主柱穴も判然としない。埋土中より土器・黒曜石の剝片が出土した。

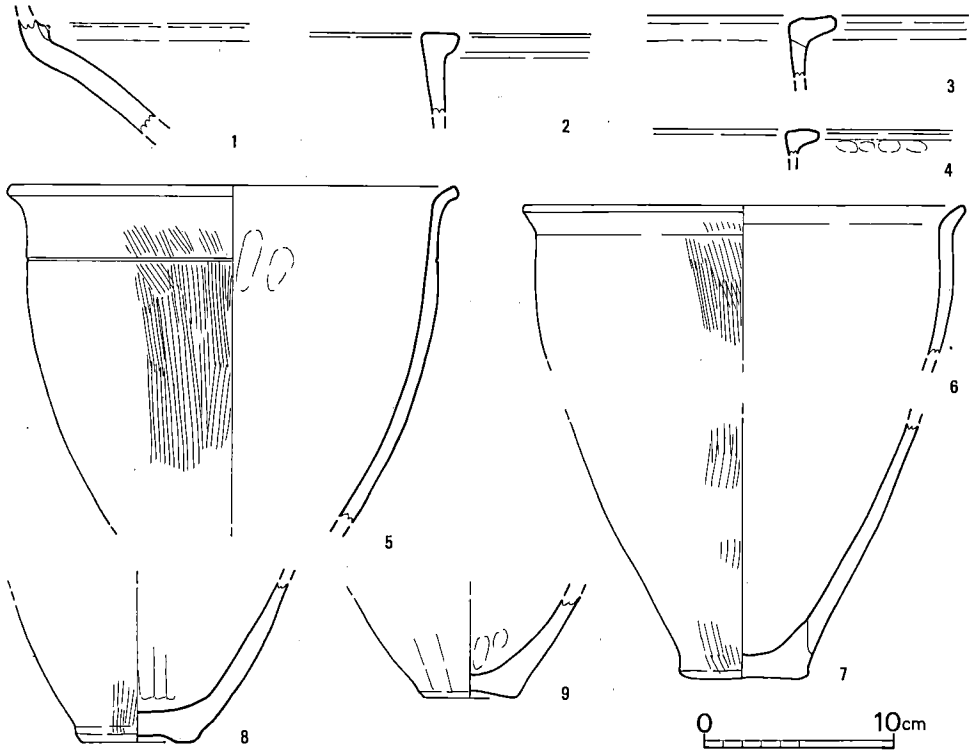
出土遺物（図版19-2・20-1・23-1，第13図）

土　器（1～9）　1は壺の頸部から肩部にかけての破片で，頸部には断面三角凸帯を貼付する。2～4は逆L字状口縁の甕で，2の突出度は弱い。3は口縁部平坦面中央がユビナデされ窪む。4は頸部外面にユビオサエ痕がみられる。5・6は如意形口縁の甕で，復原口径は5が21.0cm，6は23.4cmを測る。5は頸部のやや下位に細目のヘラ沈線を1条巡らす。ともに口唇部にキザミ目は施していない。調整は外面ハケ目（6～7条／cm）で，内面はナデによる。色調は，5が暗茶褐色，6はこげ茶色を呈し，外面には煤が付着している。

7～9は甕の底部破片で，5・6とは別個体である。7は平底で，8・9は内窪みの底部である。外面調整は，7・8がハケ目，9は板状工具によるナデで，7のハケ目は1cmに4条と粗い。内面はナデで，8の内底面は工具ナデによる。また，8は下膨れである。底径は7が6.85cm，8は6.6cm，



第 12 図　5号住居跡実測図 (1/60)



第 13 図　5号住居跡出土土器実測図（1/4）

9は5.2cmを測る。胎土に長石・石英・雲母・黒曜石を含む。中町裏遺跡出土の弥生土器・甕棺の胎土にも黒曜石粒が認められる。

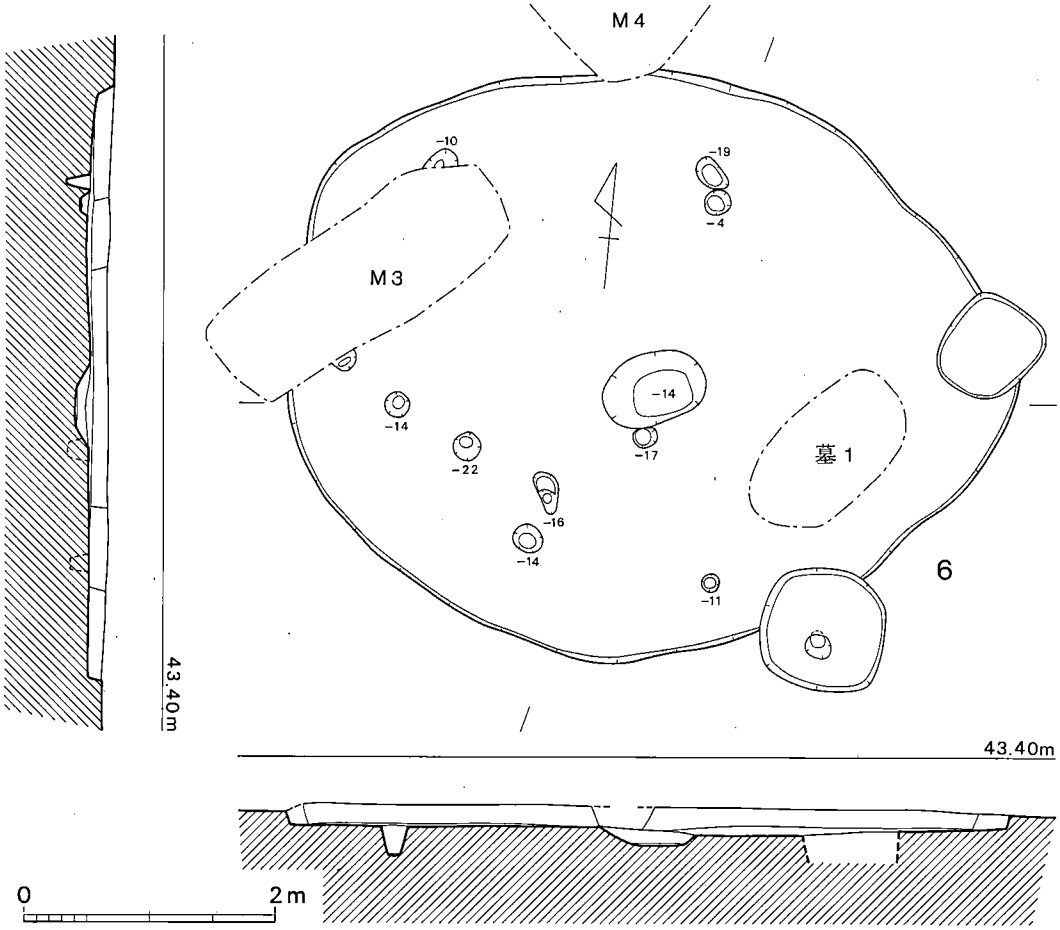
当住居跡の時期は，如意形口縁を呈する甕（5・6）と逆L字状口縁を呈する甕（2～4）から弥生前期末～中期初頭と考えられる。

6号住居跡（図版4-1，第14図）

4号住居跡の2.3m東側に位置し，3・4号木棺墓，1号土壙墓に切られる。東西長5.8m，南北長4.72mを測る不整円形を呈し，深さは北壁側で0.16mと浅い。床面中央に長さ0.84m，幅0.55mの長円形の穴があるが，周壁は加熱を受けておらず炉址ではない。また，床面には径14～24cm，深さ10～20cmのピットが10個存するが，その配列からして柱穴とは考え難い。遺物は土器片，黒曜石・サヌカイトの剝片が出土したにすぎない。

出土遺物（図版20-2，第15図）

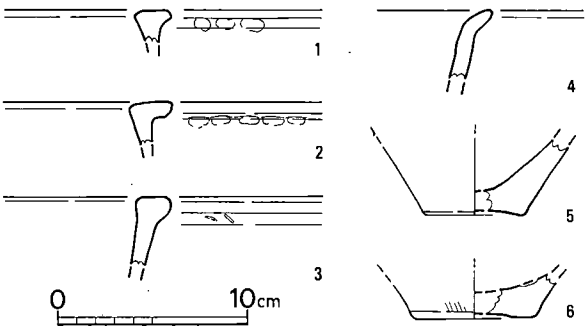
土　器（1～6）　1～4は甕の口縁部破片で，1～3は逆L状口縁を呈し，4の口縁部は短く外



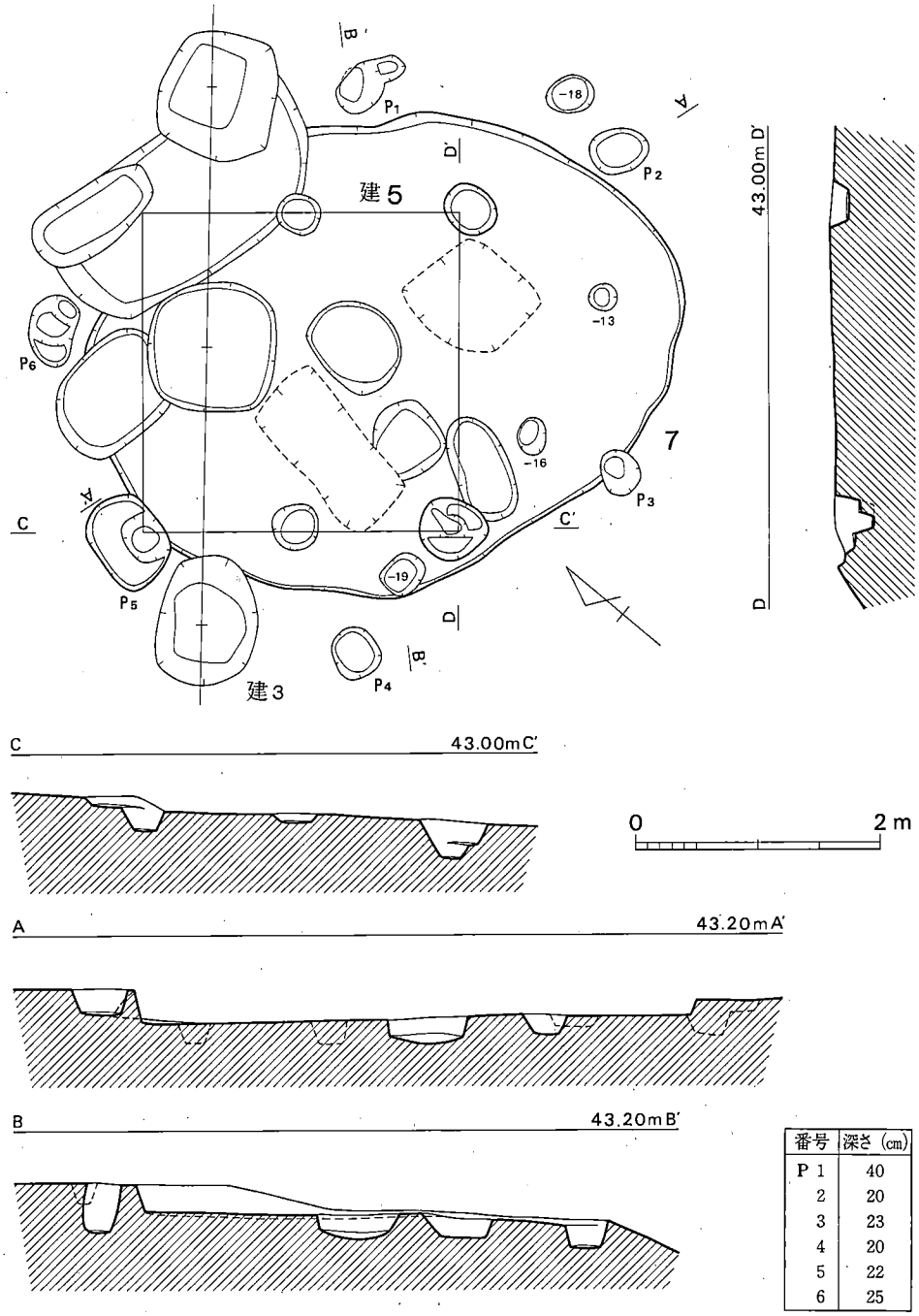
第 14 図　6号住居跡実測図（1/60）

反する。1・3の突出度は弱く，3は傾きからして鉢になるか。胎土に長石・石英・雲母を多く含む。5・6は内窪みの底部破片である。底径は5が5.6cm，6は6.4cmを測る。色調は5・6とも灰褐色を呈する。

当住居跡の時期は，弥生中期初頭であろう。



第 15 図　6号住居跡出土土器実測図（1/4）



番号	深さ (cm)
P 1	40
2	20
3	23
4	20
5	22
6	25

第 16 図　7 号住居跡，5 号建物跡実測図 (1/60)

7号住居跡（図版3-2，第16図）

3号住居跡の0.5m東側に位置し，3・5号建物跡に切られる。東西長4.65m，南北長3.72mを測る楕円形を呈し，深さは東壁側で0.23mを測る。床面はほぼ水平で，中央に長軸0.82m，短軸0.65m，深さ0.22mの穴があるが，周壁は加熱を受けておらず炉址とは考え難い。

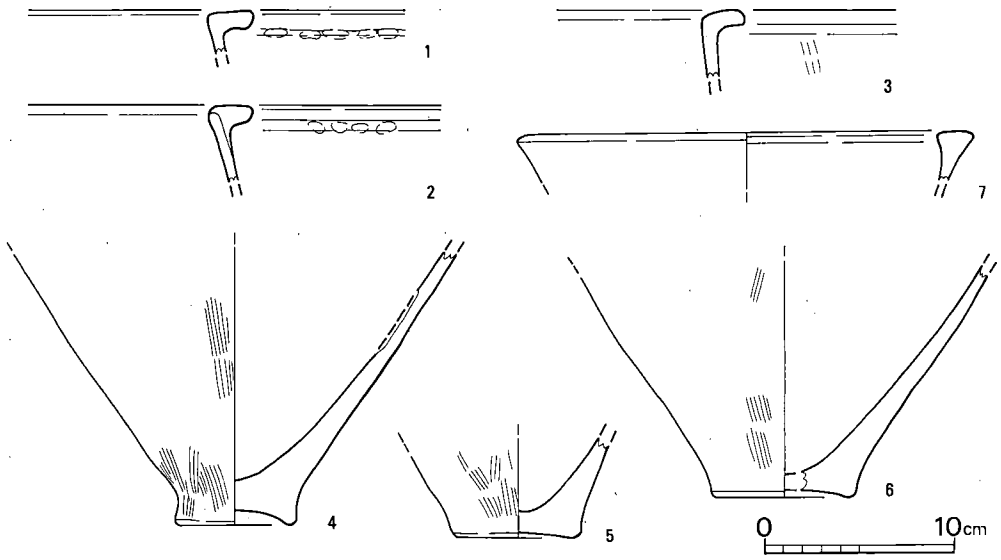
また，竪穴部内には柱穴はなく，竪穴部外のP1～6は壁に沿って六角形に配され，深さもP1（40cm）を除き20～25cmと同程度であり，これを主柱穴と考えたい。本来，7号住居跡は7～8m程の規模を有していたと推定される。同様に，4・6号住居跡も竪穴部外に柱穴を有していた可能性がある。埋土中より土器と土玉が出土した。

出土遺物（図版20-3・21-4，第17・28図）

土　器（1～7）　1～4は肥厚する逆L字状口縁を有する甕で，3・6号住居跡出土品よりも突出度が大きい。1・2の頸部外面には，ユビオサエ痕がみられる。いずれも胎土に長石・石英・雲母を多く含む。4～6は底部破片で，4・6は上底，5は若干の上底である。器面調整は外面ハケ目，内面ナデによる。底径は4が6.5cm，5は6.7cm，6は7.6cmを測る。7は口縁部破片で，逆三角形状に肥厚する。内湾気味であり，高坏状の器形を呈するか。

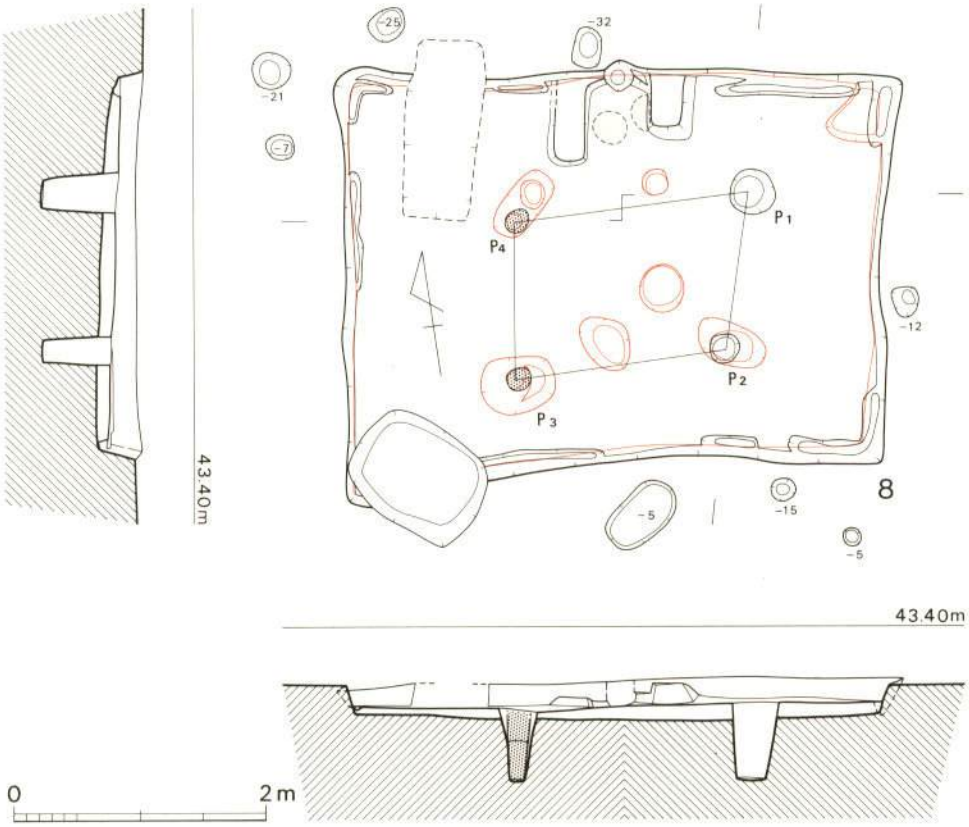
土製品（第28図12・13）　12・13は床面出土の無孔土玉である。12は径2.4cm・重さ7.1g，13は径2.7cm・重さ13.0gである。胎土に石英・雲母を含み，暗褐色を呈する。

当住居跡の時期は，弥生中期初頭であろう。



第 17 図　7号住居跡出土土器実測図（1/4）

8号住居跡（図版4-2，第18図）



第 18 図　8号住居跡実測図（1/60）

4号住居跡の0.8m北側に位置し，2・5号住居跡を切り，1号建物跡に切られる。東西長4.36m，南北長3.13mの横位長方形を呈し，深さは南壁側で0.26mを測る小規模な住居跡である。P1～4が主柱穴で，P1－2間1.25m，P2－3間1.7m，P3－4間1.25m，P1－4間1.9mで，各柱穴を結んだ線は不整長方形を呈する。柱穴の深さは0.55～0.62mと深く，成人の片腕程の長さである。床面はほぼ水平で，12cm程貼床していた。壁小溝は一周せず，コーナー部分に存する。遺物は，土師器の他に土玉・黒曜石の剝片が出土した。主軸はN10°Eを示す。

カマド（図版4-3，第19図）

作り付け型のカマドで，北壁中央に付設する。天井部は崩落し，左右の袖部を留めるのみ。右袖は長さ51cm，基底部幅36cm，残高11cm，左袖は長さ69cm，基底部幅30cm，残高6cmを測る。袖部は暗茶褐色砂質土・暗黄褐色砂質土を盛っている。支脚は抜かれたものか，存在しない。火床面はかなり焼けていたが，壁体はそれ程でもなかった。カマド奥壁にあるピットは，煙道

ではなく，後世のものである。カマド内からは土師器片が出土したにすぎない。

出土遺物（図版20-4・21-4，第20・28図）

土　器（1～4）　1～4は土師器である。1は甕の口縁～肩部破片で，復原口径は19.5cm。頸部はよく締まり，口唇部は丸く納める。外面は摩滅により調整不明であるが，内面はヘラケズリによる。胎土に2mm大の長石・石英を多く含み，器面はザラつく。

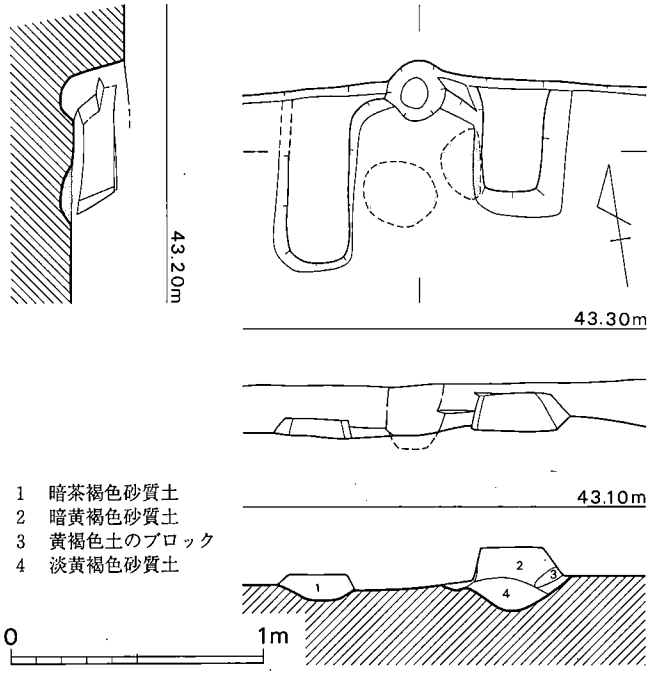
2は小型甕の口縁部破片で，口径は15.7cmに復原した。口縁部は短く外反する。3は甕の底部で，丸底である。外面ハケ目，内面ヘラケズリ調整による。また，外面には煤が付着する。

4は高坏で，口縁部を欠く。残高3.1cm，脚径は8cm程になろう。脚部外面は縦方向のヘラケズリで，内面は螺旋状にケズリを施す。

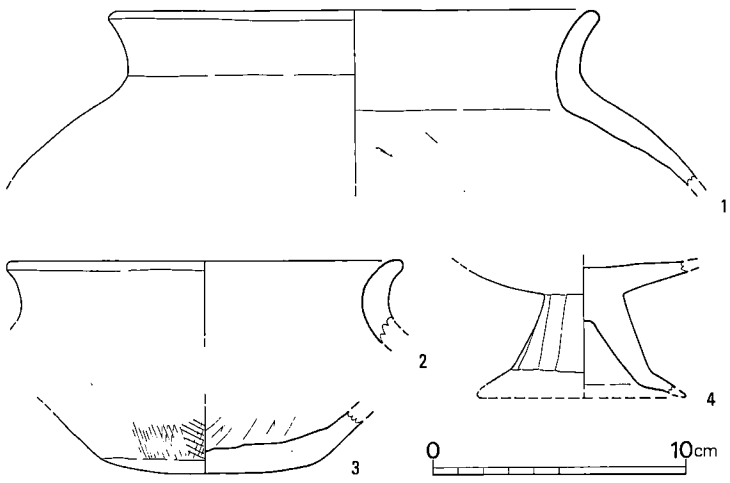
土製品（第28図14）

貼床出土の土玉で，径1.05cm，重さ0.6g。1mmの孔を空けている。

当住居跡の時期は，出土土器から6世紀後半と考えられる。



第 19 図　8号住居跡カマド実測図（1/30）



第 20 図　8号住居跡出土土器実測図（1/3）

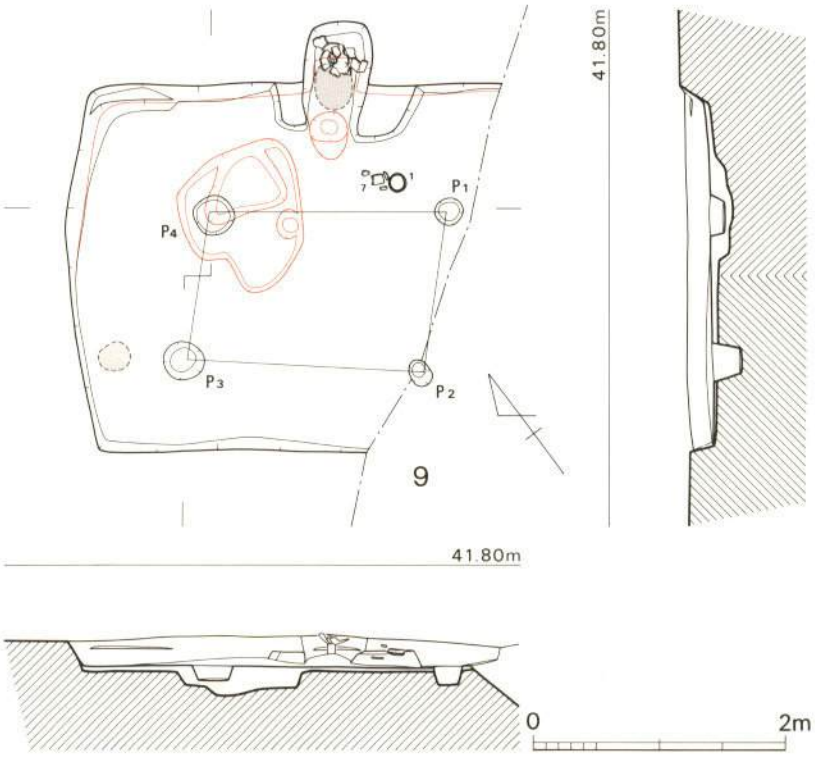
9号住居跡（図版5-1，第21図）

1号住居跡の18m南側に位置し，10号住居跡を切っている。短軸は2.93mで，長軸は後世のカットを受けているが，カマドが住居の中央に存したと仮定すると4m程になり，8号住居跡とほぼ同規模の横位長方形を呈する。深さは北東壁側で0.22mを測り，小規模な住居跡である。

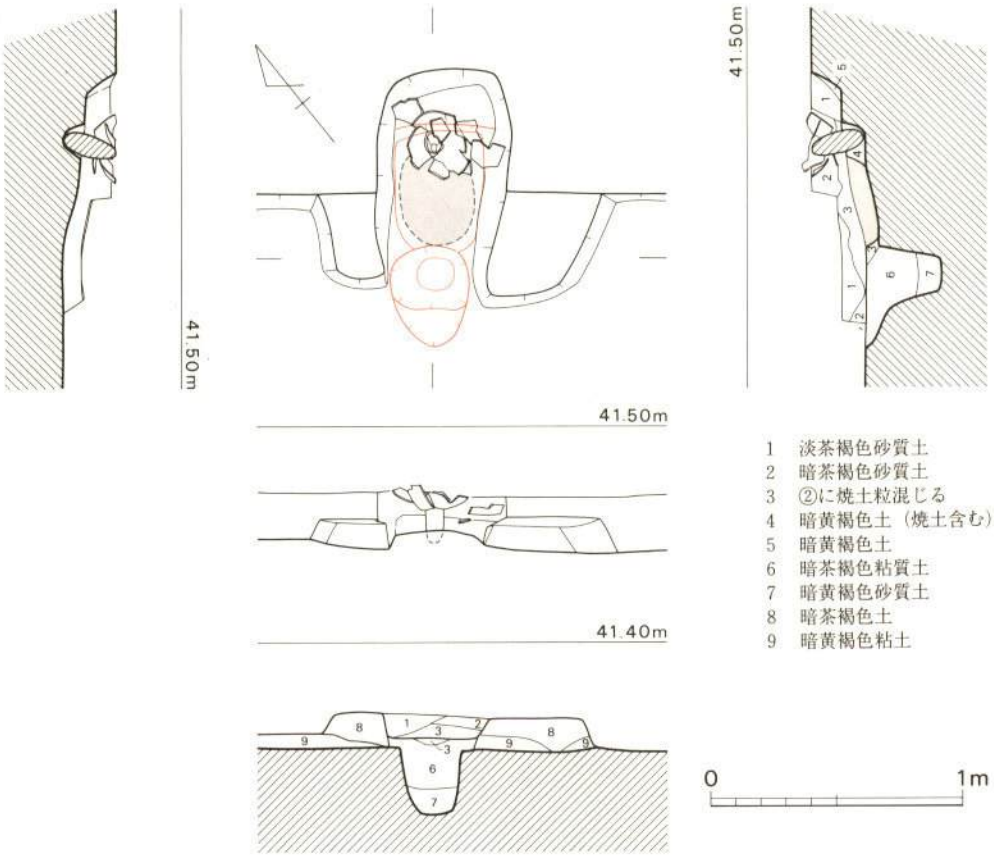
P1～4が主柱穴で，P1－2間1.28m，P2－3間1.85m，P3－4間1.2m，P1－4間1.88mで，各柱穴を結んだ線は平行四辺形を呈する。柱穴の深さは0.12～0.24mと浅い。床面はほぼ水平で，3～6cm程貼床しており，柱穴は貼床後に掘込んでいる。P3北側には焼土が存する。また，P4の貼床下部には土壙状の浅い掘込みがある。壁小溝は確認できなかった。カマド内及びカマド前面より須恵器・土師器・土玉が出土した。カマド主軸はN38°Eを示す。

カマド（図版5-2・3，第22図）

住居壁を長さ49cm，幅53cmに掘込み，その前面に袖部を付けた突出型のカマドで，北東壁に付設する。天井部は崩落し，左右の袖部を留めるのみ。煙道は削平により存在しない。右袖は長さ46cm，基底部幅54cm，残高13cmで，左袖は長さ38cm，基底部幅32cm，残高10cmを測る。



第 21 図　9号住居跡実測図（1/60）

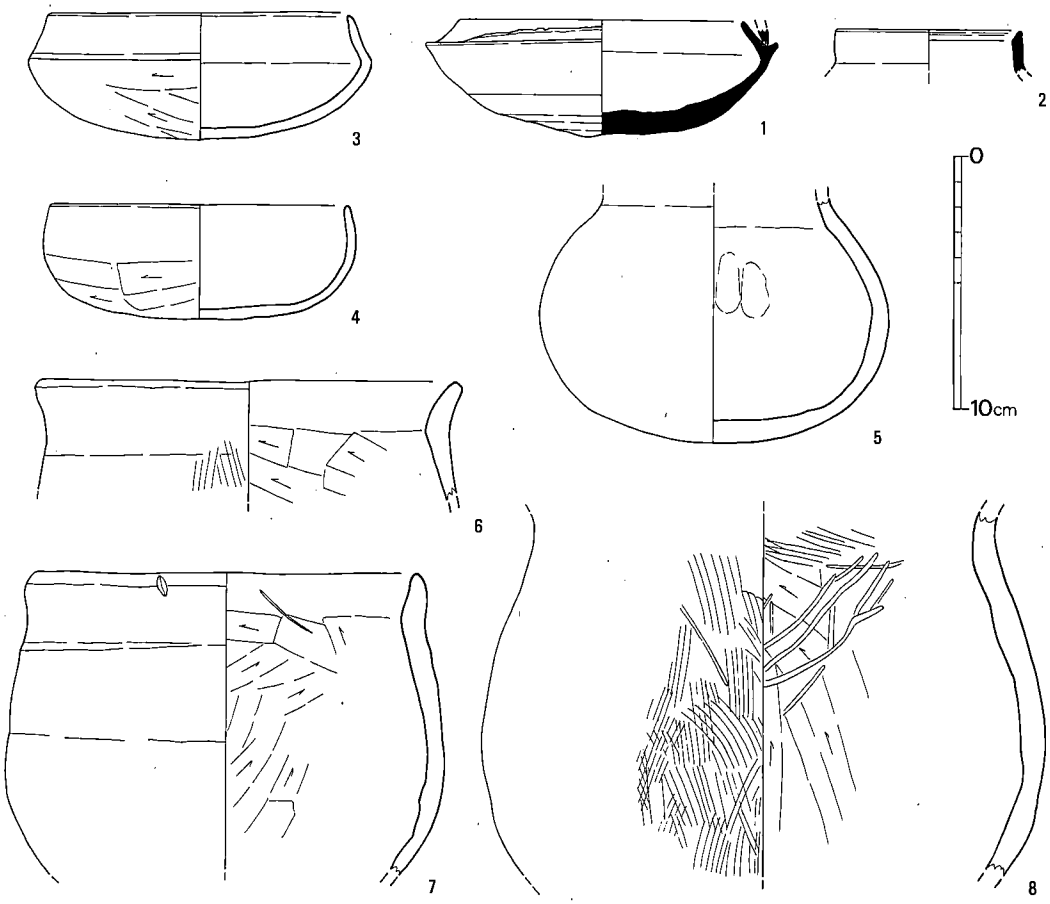


第 22 図　9号住居跡カマド実測図（1/30）

袖部は暗茶褐色土を盛っている。支脚は長さ21cm，径8cmの川原石を奥壁よりに立てており，使用時の状態で甕が出土した。焚口幅は33cmで，火床面は30×40cmの範囲で焼けていたが，壁体はそれ程でもなかった。また，焚口・火床はカマドを掘った後一旦埋め戻しており，支脚もその際に立て，黄色粘土で固定していた。カマド右袖前面からは須恵器・土師器の他に土玉が出土しており，カマド祭祀に伴うものであろう。

出土遺物（図版20-5，21-1・4，22-2，第23・28図）

土　器（1～8）　1・2は須恵器，3～8は土師器である。1は完形の坏身で，器高4.7cm，口径11.2cm，受部径14.1cm，立上がり高0.9cmを測る。立上がりは斜めに傾き，焼成時に重ね焼きした蓋の一部が付着している。受部は回転ナデ，外底部は回転ヘラケズリ，内底部は不整方向のナデによる。胎土は砂粒を含むものの精良である。焼成は堅緻で，色調は暗青灰色を呈する。カマド右袖前面の出土である。2は口縁部小片で，口唇部内側には小さな段がつく。短頸壺に



第 23 図　9号住居跡出土土器実測図（1/3）

なろう。口径は7.5cmに復原した。

3は土師器の坏で，器高5.0cm，口径12.2cmを測る。口縁部は斜めに屈曲し，口唇部は丸く納める。調整は口縁部ヨコナデ，内面ナデ，底部外面は手持ちヘラケズリによる。胎土に石英・雲母・赤褐色粒を含むものの精良である。焼成は良好で，黄褐色を呈する。カマド右袖前面の出土である。4は器高4.5cm，口径11.0cmで，器高に対し深目であるので椀とした。口縁部は若干内湾し，丸底の底部に移行する。口縁部はヨコナデ，内面はナデで，底部外面は手持ちヘラケズリによる。5は壺で，頸部より上位を欠く。胴部は球状に膨らみ，底部は丸い。調整は内外面ともナデによる。また，頸部内面にはユビオサエ痕がみられる。胎土に長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で，橙褐色を呈する。埋土中より出土した。

6～8は小型の甕である。6は口縁部片で，復原口径は17.0cmを測る。口縁部はやや外反する。

調整は口縁部ヨコナデ，外面ハケ目，内面はヘラケズリによる。また，外面には煤が付着する。7の頸部は締りが悪く，口縁部は短く立つ。胴下半部は下膨れで，底部を欠く。外面はナデ調整で，内面はヘラケズリによる。また，内面下半部には炭化物が遺存する。全体として雑なつくりである。埋土中より出土した。8はカマド内出土で，口縁部と底部を欠く。外面は粗いハケ目（4～6条／cm），内面は粗いヘラケズリとヘラ先によるナデで，頸部内面にはヨコハケを施す。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で，色調は暗褐色を呈する。

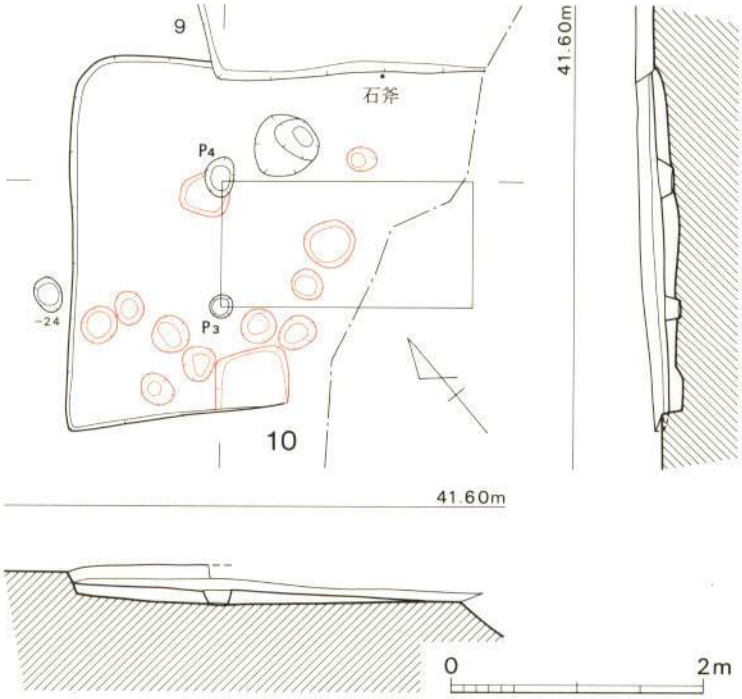
石　器（第28図10）　10は砥石の破片で，3面面取りしているが，使用しているのは2面である。下側は丸く，研磨している。石材は粘板岩である。

土製品（第28図15）　15はカマド前面の土器群とともに出土した土玉で，径1.4cm，重さ2.6ｇである。中央に1mm程の孔を空ける。胎土に石英・雲母を含んでいる。

須恵器坏身（1）の立ちあがりは，かなり内傾していることから，6世紀末であろう。

10号住居跡（図版5-1，第24図）

９号住居跡に北東壁を切られて位置する。短軸は2.92ｍで，南東壁は後世のカットを受けているが，９号住居跡同様，小規模の横位長方形を呈しよう。深さは北東壁側で0.12ｍと遺存状

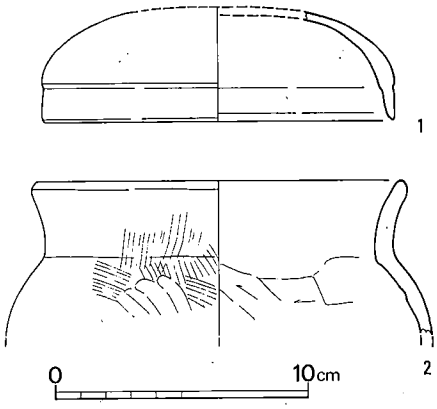


第 24 図　10号住居跡実測図（1/60）

態は悪い。柱穴は４本柱と考えられるが，Ｐ1・2は無く，Ｐ3－4間は1.06ｍ，深さは10cm前後と浅い。床面は南東側に緩傾斜する。2～12cm程貼床しており，柱穴は貼床後に掘込んでいる。また，貼床下部よりピットを検出した。カマドは北東壁に付設していたものであろうか，存在しない。或は，９号住居跡床面にみられた焼土が，当住居跡のカマドであった可能性が高い。遺物は埋土中より土師器，石器が出土した。

出土遺物（図版21-2・22-1，第25・29図）

土　器（1・2）　1は土師器の口縁部から天井部にかけての破片であるが，口縁部内外に段を有し，直線的に立上がることから坏蓋とした。復原口径は14.0cmを測り，残高は4.3cmを測る。天井部はドーム状を呈する。胎土に1mm大の石英・雲母を含むものの精良である。焼成はやや軟質で，くすんだ灰色を呈する。



第 25 図　10号住居跡出土土器実測図（1/3）

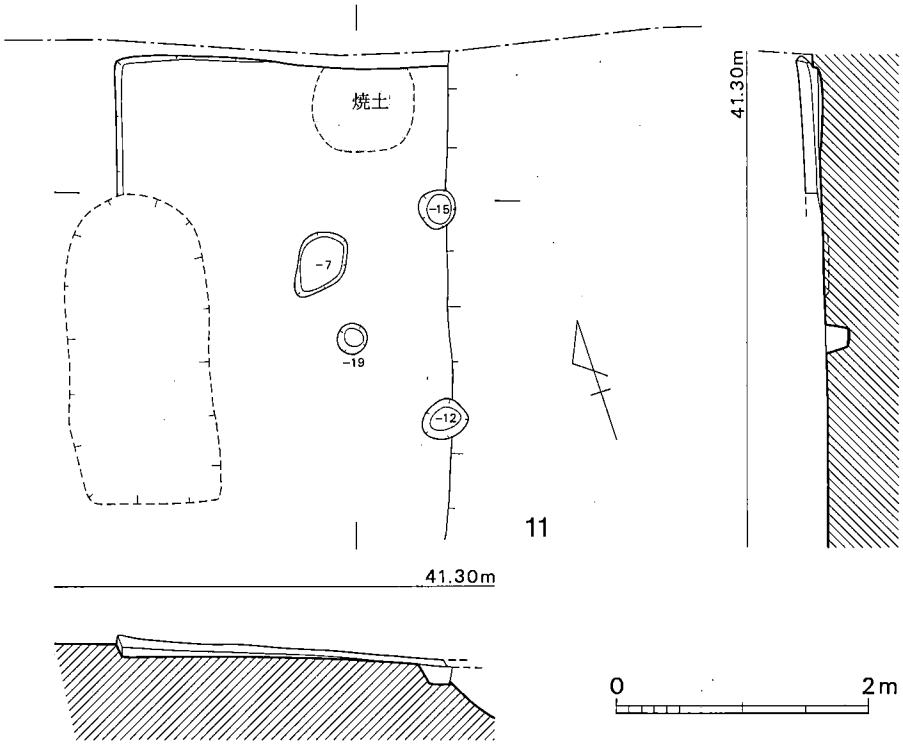
2は土師器の甕で，復原口径は14.8cmである。口縁部は外反気味に立上がり，よく締まった頸部から胴部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ，外面ハケ目（5～6条／cm）→ヘラナデで，内面はヘラケズリによる。胎土に長石・石英・雲母・角閃石を含む。焼成は良好で，暗茶褐色を呈する。

石　器（第29図2）　2は９号住居跡南西壁付近で出土した磨製石斧で，長さ10.7cm，刃部幅6.9cm，厚さ3.2cm，重さ430ｇである。刃部は使用による刃こぼれがみられる。混入したものであろう。

当住居跡は，８号住居跡（６世紀後半）・９号住居跡と同規模で，６世紀末の９号住居跡に切られていることから６世紀中～後半頃であろう。

11号住居跡（図版17-1，第26図）

谷状遺構の西側肩部で検出した住居跡で，焼土の存在により住居跡と認識した次第である。柿畑により削平され，北側コーナー部を留めるに過ぎない。谷状遺構の埋土下位からは，弥生中期初頭～前半の土器が出土しており，谷状遺構埋没後に構築されたものである。方形ないしは長方形を呈すると考えられるが，規模については不明。また，竪穴部内には4個のピットが存するが，柱穴とは考え難い。床面は東側に緩傾斜している。遺物は土師器坏が出土したのみである。



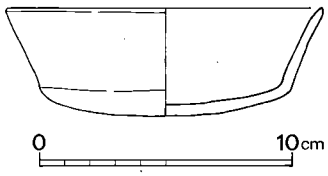
第 26 図　11号住居跡実測図（1/60）

カマド（第26図）

北壁側で検出したが，袖部は完全に削平され，65×80cmの範囲で焼土を確認したのみ。煙道部は調査区外に伸展するものであろう。遺物の出土もなかった。

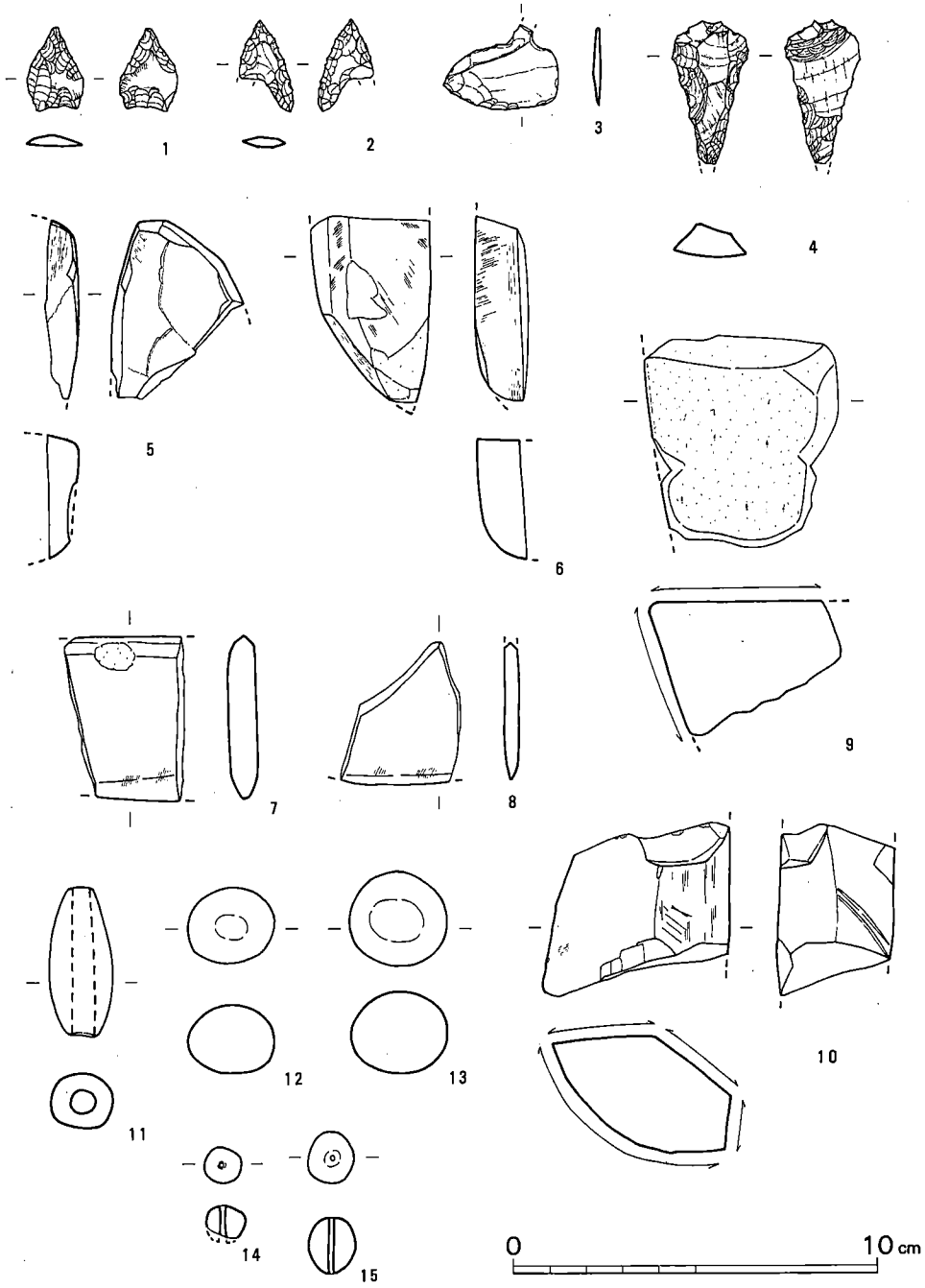
出土遺物（図版21-3，第27図）

土師器の坏で，器高4.3cm，口径12.6cmを測る。口縁部は丸みを帯びた底部より屈曲して立上がる。口縁部はヨコナデで，外底部は摩滅気味であるがヘラケズリ調整。胎土に2mm大の長石・石英を含むものの概して良好で，色調は黄橙色を呈する。

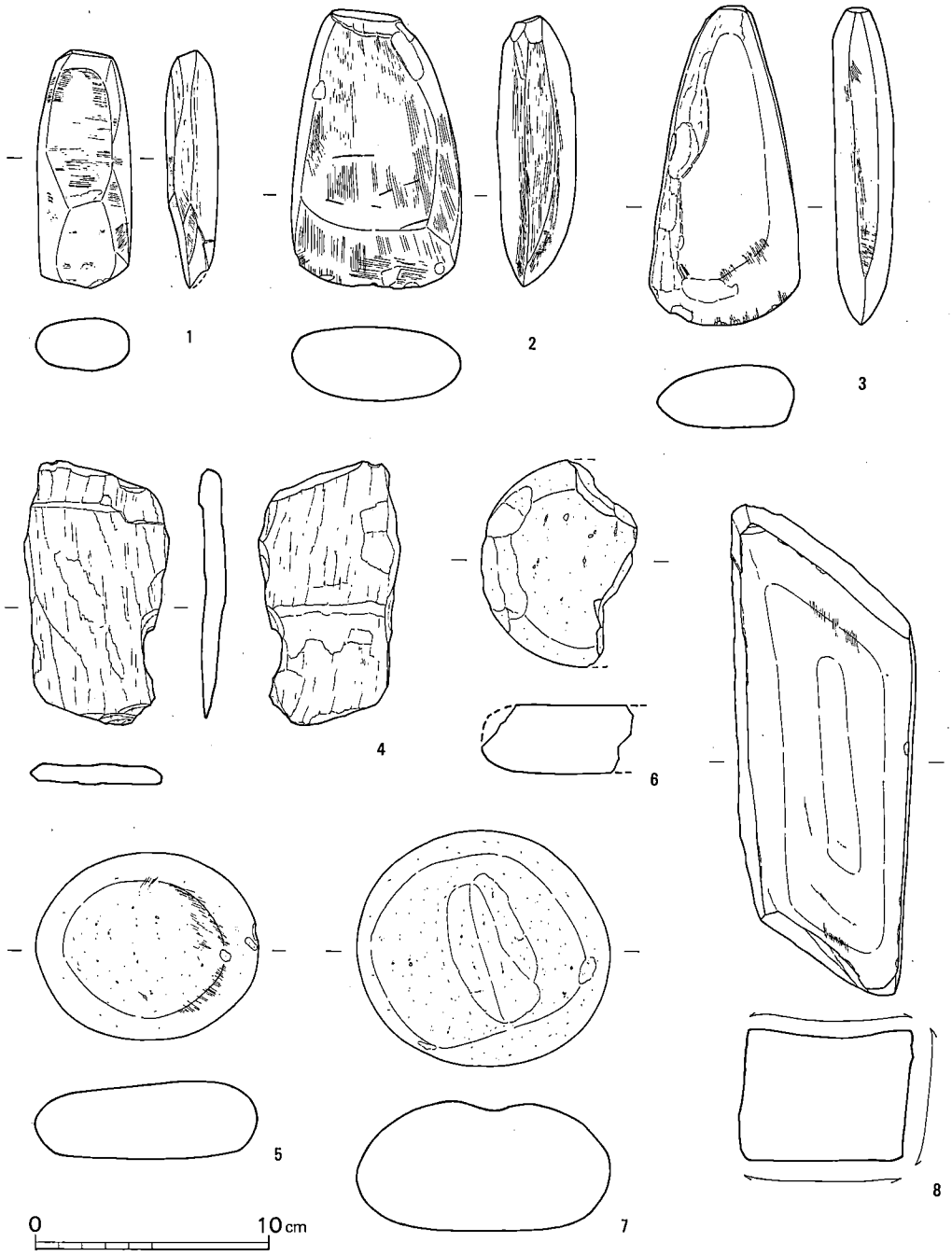


第 27 図　11号住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物は坏1点のみで，これと言った決め手はないが，７世期中～後半代か。



第 28 図　住居跡出土石器・土製品実測図（1/2）



第 29 図　住居跡・建物跡出土石器実測図（1/3）

(2) 掘立柱建物跡

上・中段において5棟検出した。1号建物跡のみ全容を知ることができたが，他の建物に関しては一部推定復原による。いずれも時期不詳であるが，1号建物跡は6世紀後半の8号住居跡を切っていることからそれ以降の築造である。また，1号建物跡と軸を等しく配列される2～4号建物跡は，それと同時並存する可能性が高い。

1号建物跡（図版2-1・6-1，第30図）

上段の中央に位置し，1・2・8号住居跡を切っている。梁行2間（4.57m）×桁行6間（13m）の大規模な建物跡で，梁行の柱間は2.2～2.37m，桁行の柱間は1.9～2.50mと変則的である。柱穴の掘方は隅丸方形で，一辺は0.64～1.14mを測る。また，桁行掘方の間隔は，1.1～1.4mで，北東桁行と南西桁行は対応しており，上部構造は柱の移動によって調整したものと考えられる。柱痕は径16～22cmで，掘方に比して小さめである。

上面がかなり削平されているため正確な深さを測り得ないが，柱痕は北西から南東方向に深くなっており，これは旧地形が同方向に傾斜していたことを示す。桁行方位はN40°Wを示し，丘陵に対し直交するのではなく，やや西に振っている。出土遺物には，弥生土器・土師器・石器があるが，当建物跡の時期を示すものではない。

出土遺物（図版22-1，第29・33図）

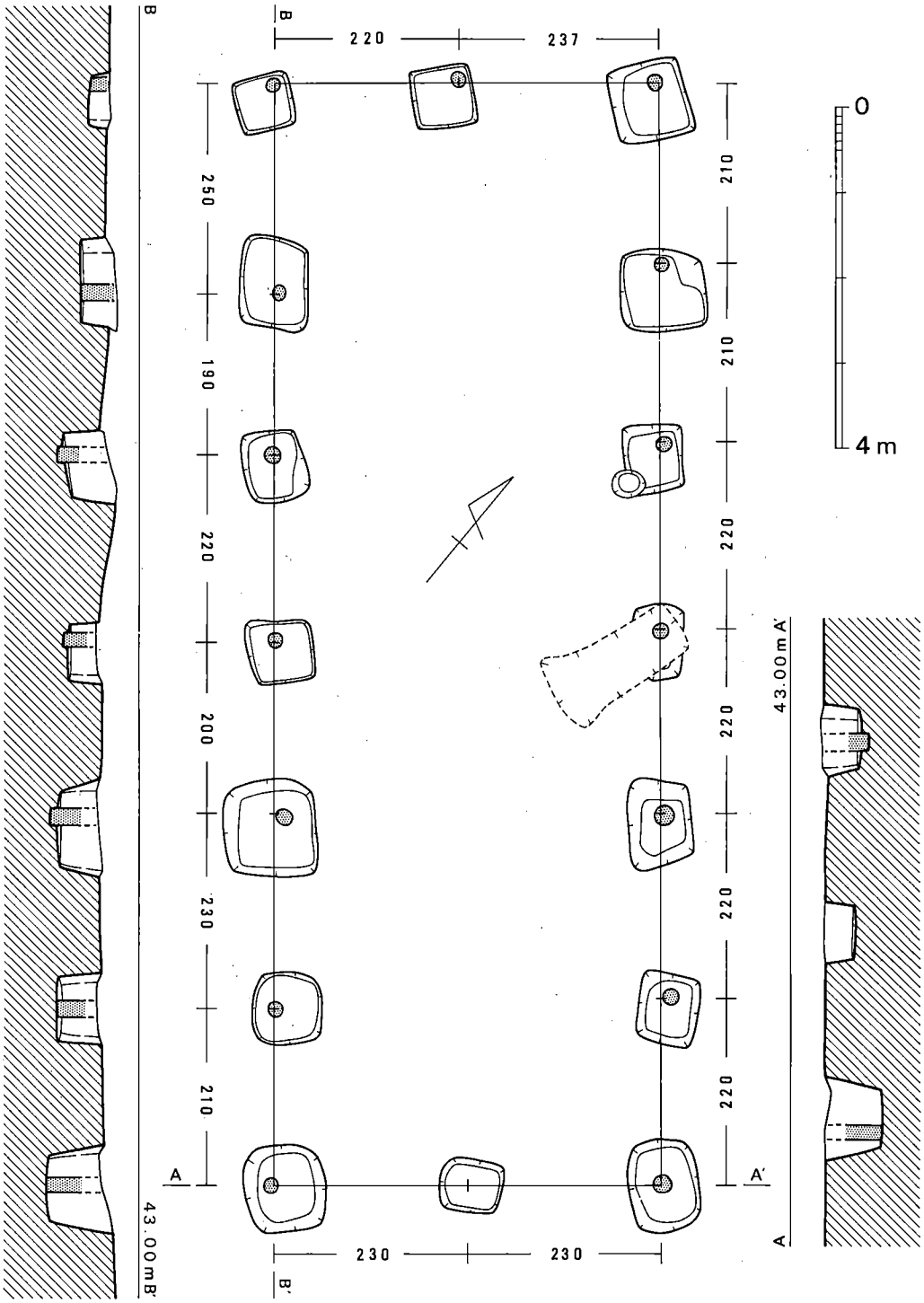
土　器（1～5）　1～4は弥生土器で，5は土師器である。1・2は逆L字状口縁の甕で，口唇部は肥厚する。外面にはユビオサエ痕がみられる。胎土はともに長石・石英・雲母を含む。2は1号住居跡を切る掘方から出土した。3は甕の口縁部小片で，口縁部は大きく屈曲する。2号住居跡を切る掘方の出土である。4は甕の底部破片で，平底である。摩滅顕著で，調整は不明。5は取手部破片で，甑もしくは取手付き甕になろう。胴部への接合はソケット式による。

石　器（第29図4）　4は打製石斧で，長さ11.2cm，幅6.1cm，厚さ0.9cmで，重さは110gを量る。刃部のみ尖らせており，雲母片岩製である。1号住居跡を切る掘方から出土した。

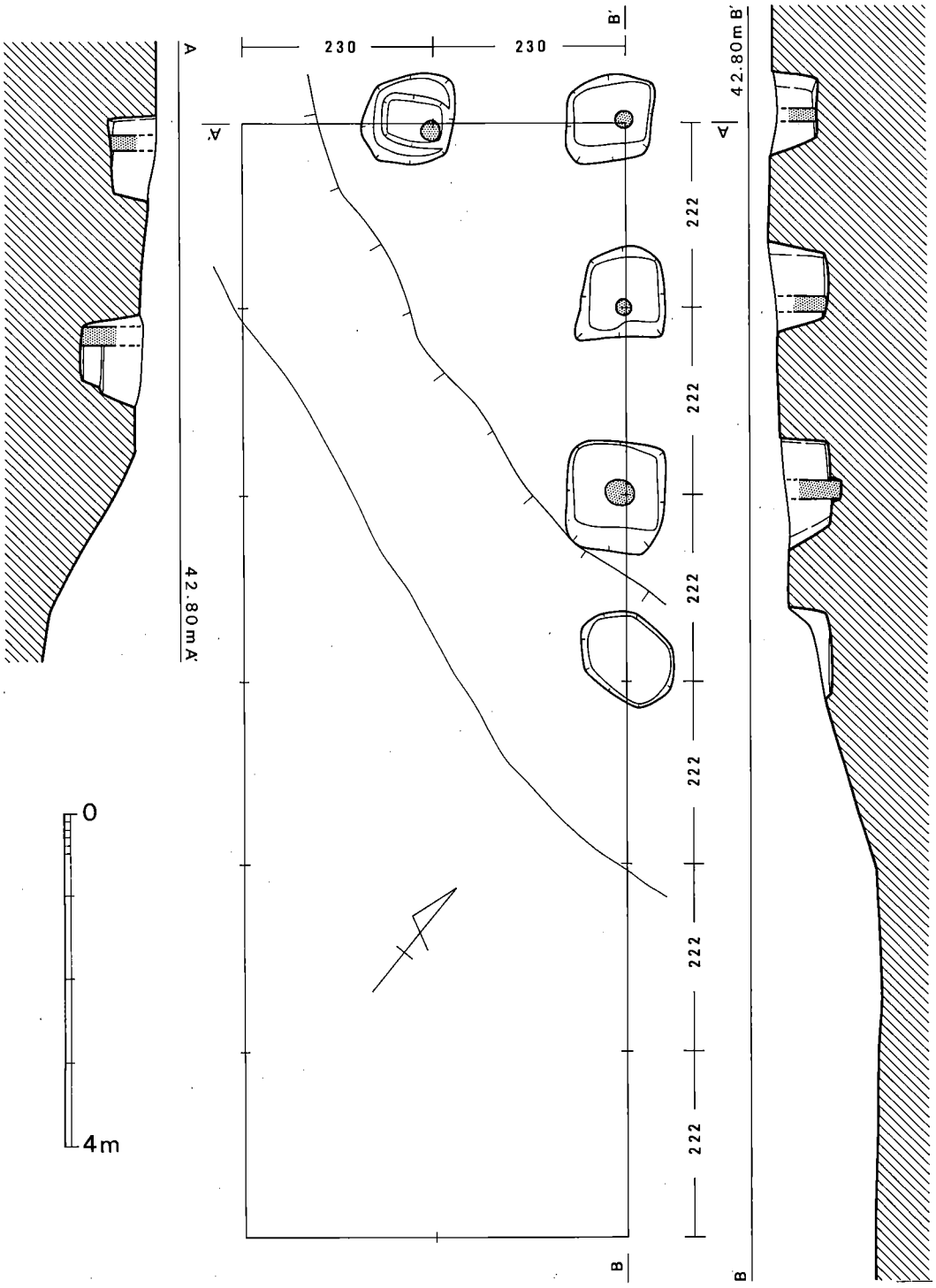
2号建物跡（図版2-1・6-2，第31図）

1号建物跡の南西側8.7mに位置し，同建物跡に平行して配置される。建物跡の南側は段カットにより存在せず，5個の掘方を留めるのみ。桁行の柱間は2.22m間隔で，1号建物跡をもとに梁行2間×桁行6間の建物跡として復原した。柱穴の掘方は隅丸方形を呈し，一辺1.01～1.32mで，1号建物跡のそれよりやや大きめである。柱痕は径18～24cmで，1号と大差ない。

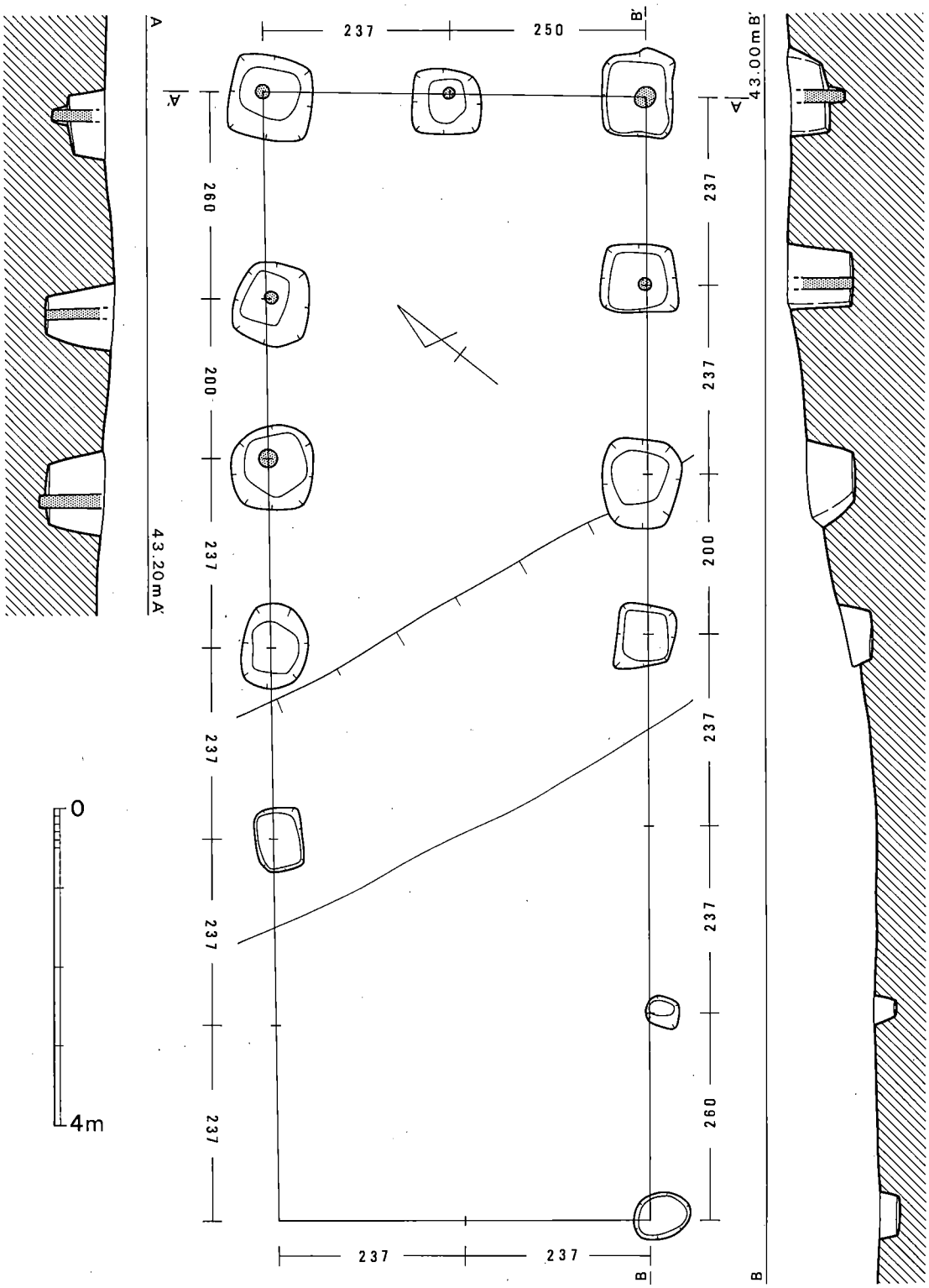
また，柱痕は北西から南東方向に深くなっている。桁行方位はN39°Wを示す。掘方内からは弥生土器片・土師器片が出土したが，当建物跡の時期を示すものではなく，時期不詳。



第 30 図　1号建物跡実測図（1/80）



第 31 図　2号建物跡実測図（1/80）



第 32 図　3号建物跡実測図（1/80）

出土遺物（図版23-2，第29図）

石　器（7）　7は安山岩製のすり石で，中央部に浅い溝を有する。側縁は若干研磨している。径10.8cm，厚さ5.5cmで，重さは800ｇを量る。

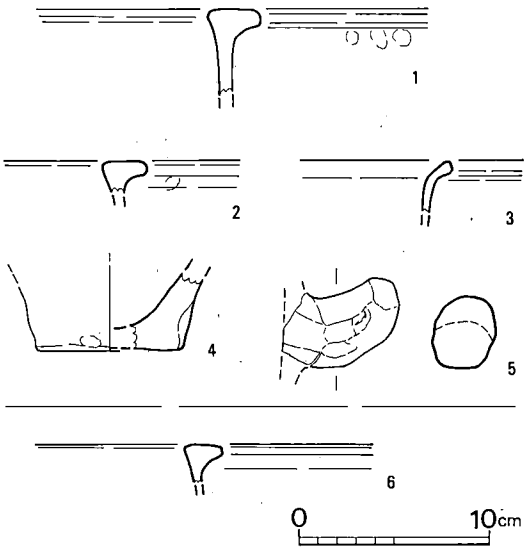
3号建物跡（図版2-1・3-2，第32図）

1号建物跡の南東側8.7ｍに位置し，1・2号建物跡とは直角方向にある。建物跡の南西側は段カットによるが，掘方の基底部を留めている。北東梁行2間（4.87ｍ）×南西桁行6間（14.1ｍ）の大規模な建物跡で，梁行の柱間は2.37～2.5ｍ，桁行の柱間は2.0～2.6ｍと変則的である。柱穴の掘方は隅丸方形で，一辺は0.8～1.1ｍを測る。柱痕は径14～22cmで，掘方に比して小規模である。柱痕は北東から南西方向に深くなっており，旧地形に合わせて建物を建てた結果と考えられる。

桁行方位はN52°Ｅを示し，丘陵に対し平行するのではなく，やや南に振っている。掘方内からは弥生土器が出土したが，当建物跡に伴うものではない。

出土遺物（第33図）

土　器（6）　6は逆Ｌ字状口縁の甕で，口唇部はやや肥厚する。口縁部はヨコナデ調整。胎土に長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で，茶色を呈する。

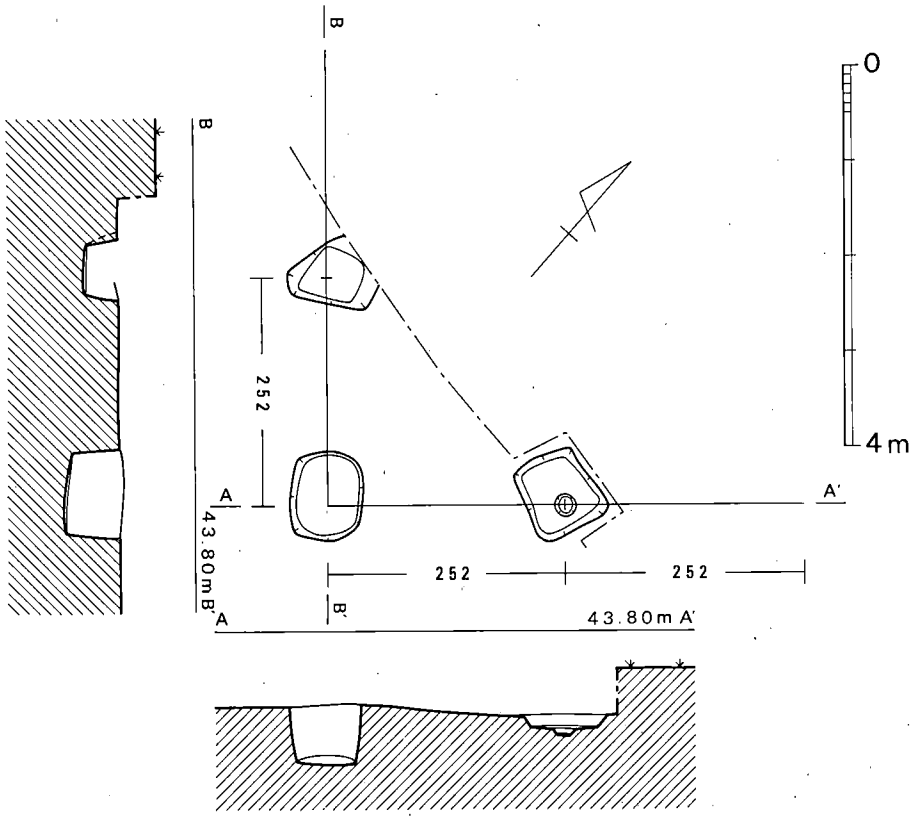


第 33 図　1・3号建物跡出土土器実測図（1/4）

4号建物跡（第34図）

1号建物跡の北東側7.7ｍに位置し，同建物跡に平行して配置される。南西コーナー部分のみ確認したが，大半は調査区外の柿畑に伸展すると考えられる。遺構配置図は，1号建物跡をもとに梁行2間×桁行6間の建物跡として推定復原した。梁行・桁行の柱間は2.52ｍを測る。

柱穴の掘方は隅丸方形を呈し，一辺0.8ｍである。当初から，建物跡との認識がなかったため柱痕は確認し得ていない。弥生時代の5号住居跡を切っているが，1～3号建物跡と規則的に配置されることから，それら一群の建物跡と同時期に存在したものと推察される。



第 34 図　4号建物跡実測図（1/80）

5号建物跡（図版3-2，第16図）

7号住居跡を切って位置する。また，3号建物跡と重複関係にあるが，前後関係は不明。梁行1間（2.6m）×桁行2間（2.6m）の正方形の建物跡である。柱穴は径0.4m程の円形で，上部が削平されているため0.3mと浅い。また，西側柱穴の掘方が不整形を呈するのは，柱を抜き去ったためであろうか。桁行方位はN49°Eを示し，3号建物跡とは大差ない。出土遺物は無く，時期不詳。

(3) 甕　棺　墓

上・中段において北東－南西方向に列状をなして配される甕棺墓群で，18基確認した。木棺墓（７基）・土壙墓（２基）とで墓地群（計27基）を形成する。柿畑による削平を受け，遺存状態は悪く，中段においては特に著しい。墓どうしの切合い関係は，下記のとおりである。（矢印は古→新を表す）

6号甕棺墓 → 5号甕棺墓 → 4号甕棺墓
1号木棺墓 → 7号甕棺墓 → 8号甕棺墓
5号木棺墓 → 17号甕棺墓
5号木棺墓 → 18号甕棺墓

１号甕棺墓（図版7-1，第35図）

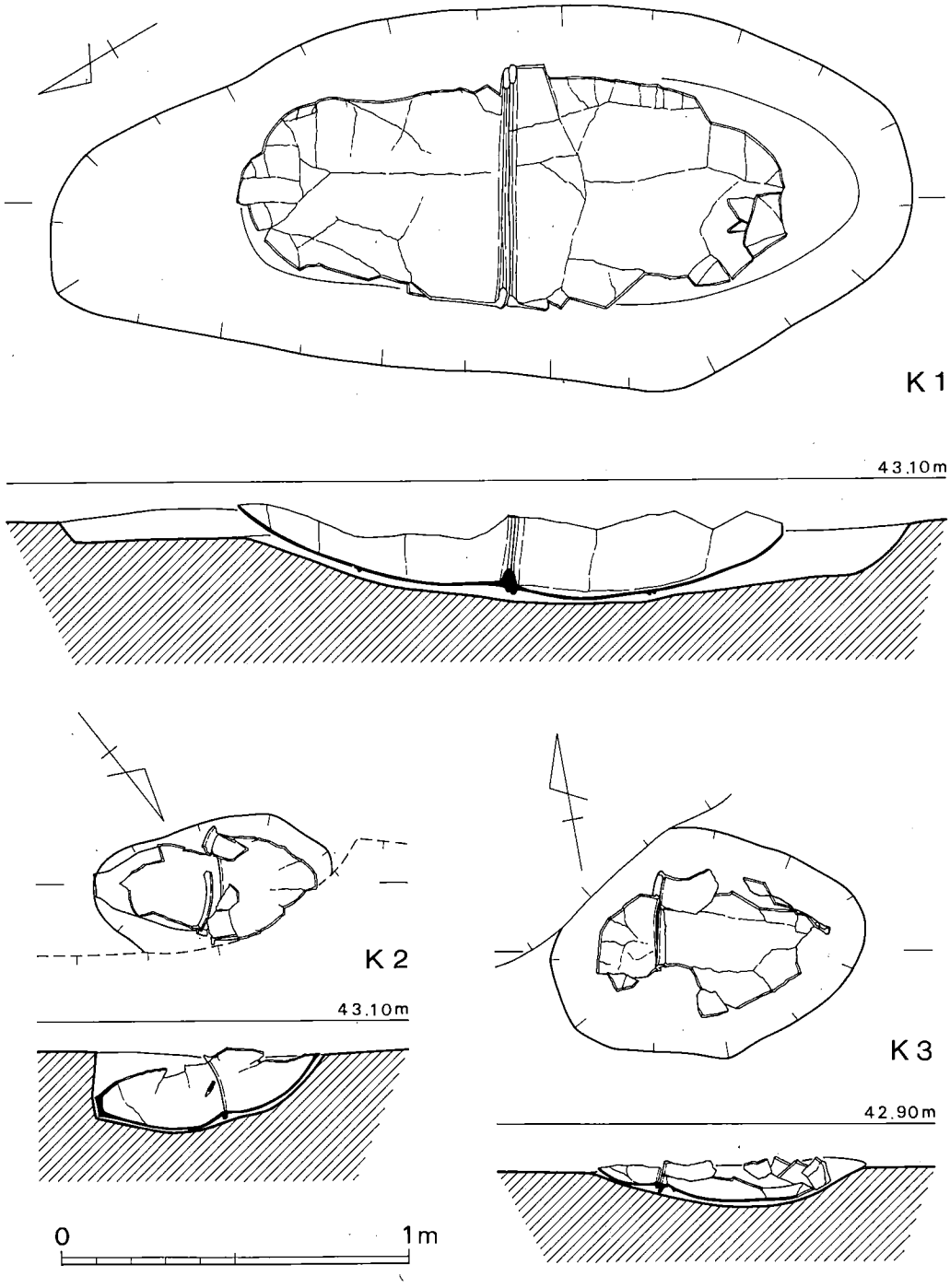
調査区の北東端部で検出した接口式の成人用甕棺墓である。墓壙は長軸245cm，短軸109cmで，検出面からの深さは21cmにすぎない。大半が削平され，上・下甕の区別が付け難いが，墓壙がやや広目で立上がりの急な南側が上甕になろう。甕棺はほぼ水平に埋置され，主軸方位はN 30°Eを示す。甕棺内からの遺物・人骨の出土はなく，穿孔もみられない。

上　甕（図版24-1，第38図）　1／3程度の破片であるが，全体を復原することは可能で，口径68.4cm，頸部径66.4cmで，底部を欠くため器高は85cm程になろう。口縁部は内側に大きく突出するＴ字形口縁を呈し，口縁部平坦面は水平である。胴部上位に張りをみせ，締りの悪い底部に移行する。胴部中位に断面三角形の凸帯を2条貼付し，見かけM字状凸帯としている。

調整は口縁部ヨコナデ，胴部は摩滅により不明であるが，ハケ目→ナデ消しであろう。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成はやや軟質で，色調は内面こげ茶色，外面暗褐色を呈する。

下　甕（図版24-1，第38図）　上甕同様，全体の1/3程の破片であり，口径65.2cm，頸部径63.6cmで，残高は70.7cmを測る。口縁部は内側に大きく突出するＴ字形口縁を呈し，口縁部平坦面は若干外傾する。胴部上位には上甕程の張りはなく，緩やかに底部に移行する。胴部中位に断面三角凸帯を1条貼付しており，その間は強くヨコナデされる。

調整は口縁部ヨコナデ，胴部は摩滅により不明であるが，工具ナデであろう。また，口縁部内面には指頭圧痕がみられる。胎土に2～4mm大の長石・石英を多く含む。焼成はやや軟質で，色調は内面暗褐色，外面茶褐色を呈する。甕棺の時期については，後章で述べたい。



第 35 図　1～3号甕棺墓実測図（1/20）

2号甕棺墓（図版7-2，第35図）

6号住居跡の2m北側に位置し，4号木棺墓と近接するが，墓壙どうしは切合っていない。また，北側は柿畑の肥料穴に切られる。接口式の小児用甕棺墓で，上甕は半分程削平を受け，下甕も口縁部の一部を欠く。墓壙は現状で長軸68cm，短軸38cm，深さ23cmを測る。甕棺は斜めに埋置され，傾斜角度は＋15°，主軸方位はN53°Wを示す。甕棺内からの遺物・人骨の出土はなく，穿孔も施していない。

上　甕（図版24-2，第36図）　逆L字状口縁部を有する小型甕で，底部を欠失する。残高30.4cm，復原口径30.5cm，復原頸部径27.7cmを測る。口縁部は若干肥厚し，口縁部平坦面は僅かに内傾する。胴部はあまり張らず，底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ，外面ハケ目，内面ナデであり，胴部内面にはユビオサエ痕がみられる。胎土に2mm大の長石・石英・雲母・角閃石・赤褐色粒を多く含む。焼成はやや軟質で，内外面とも灰黄色を呈する。また，胴下半部には黒斑がみられる。

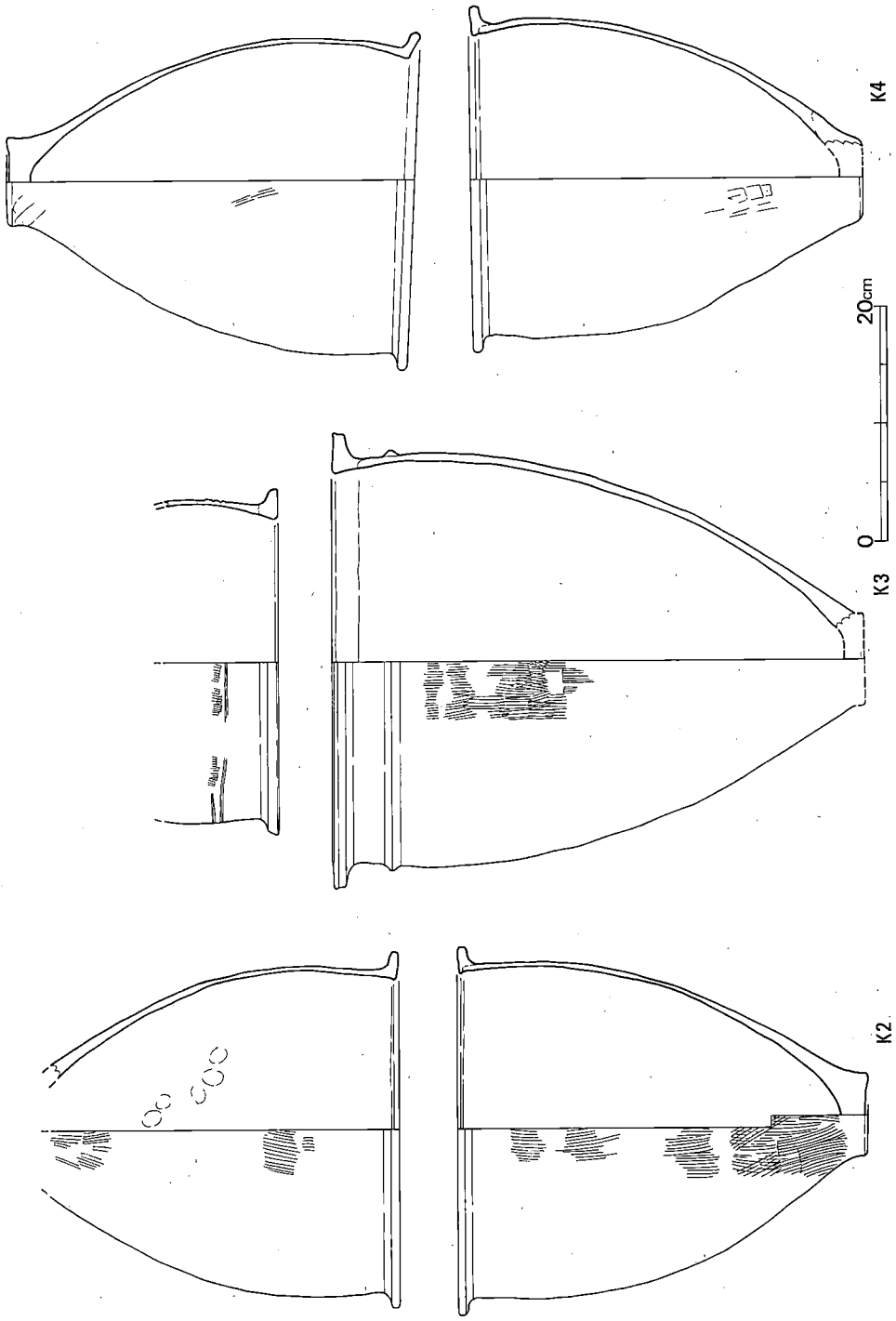
下　甕（図版24-2，第36図）　逆L字状口縁部を有する小型甕で，器高35.3cm，復原口径31.2cm，復原頸部径28.4cm，底径7.0cmを測る。口縁部は若干肥厚し，口縁部平坦面は僅かに内傾する。胴部はあまり張らず，締りの悪い底部に移行する。底部は内窪みで，2cmと厚い。調整は口縁部ヨコナデ，外面ハケ目（5条／cm），内面ナデによる。胎土に2mm大の長石・石英・雲母・角閃石を多く含む。焼成は良好で，内外面とも灰褐色を呈する。また，胴下半部～底部にかけて黒斑がみられる。

3号甕棺墓（図版7-3，第35図）

3号住居跡廃絶後に掘込まれた挿入式の小児用甕棺墓で，1号土壙に切られる。遺存状態は極めて悪く，下甕は1／4程度，上甕は口縁～胴部上位の一部を残す程度である。墓壙は現状で，長軸89cm，短軸65cmで，深さは13cmとかなり削平を受ける。主軸方位はN80°Wを示す。甕棺内からの遺物・人骨の出土はなく，穿孔も施していない。

上　甕（図版24-3，第36図）　口縁部～胴部上位にかけての破片で，口縁部は逆L字状を呈する。復原口径は29.5cm，復原頸部径は26.8cmを測る。口縁部は肥厚し，口縁部平坦面はほぼ水平である。また，凸帯はすでに剝落しているが，凸帯を密着させるための作業線2条を頸部のやや下位に引いている。調整は口縁部ヨコナデ，外面ハケ目，内面はナデによる。胎土に長石・石英・雲母・角閃石を多く含む。焼成はやや軟質で，内外面とも黄橙色を呈する。

下　甕（図版24-3，第36図）　逆L字状口縁部を有する中型甕で，底部を欠失する。残高38.0cm，復原口径38.8cm，復原頸部径35.0cmを測る。口縁部は肥厚し，口縁部平坦面は僅かに外傾する。また，口唇部は若干窪む。胴部はあまり張らず，緩やかに底部へ移行する。頸部のやや下位に断面三角凸帯を1条貼付している。口縁部ヨコナデ，外面ハケ目（5～6条／cm），内



第 36 図　2～4号甕棺実測図（1/6）

面ナデ調整による。胎土に2～4mm大の長石・石英・雲母・角閃石・赤褐色粒を多く含む。また，黒曜石粒も混入させている。焼成はやや軟質で，内面暗灰褐色，外面暗褐色を呈し，胴下半部には黒斑がみられる。

4号甕棺墓（図版8-1，第37図）

3号住居跡廃絶後に埋葬された接口式の小児用甕棺墓で，5・6号甕棺墓を切っている。当遺跡においては比較的残りの良い方で，墓壙は長軸142cm，短軸79cmの楕円形を呈し，深さ47cmを測る。甕棺は斜めに埋置され，傾斜角度は－10°，主軸方位はN41°Wを示す。甕棺内からの遺物・人骨の出土はなく，穿孔も施していない。また，下甕底部は当初より欠いている。

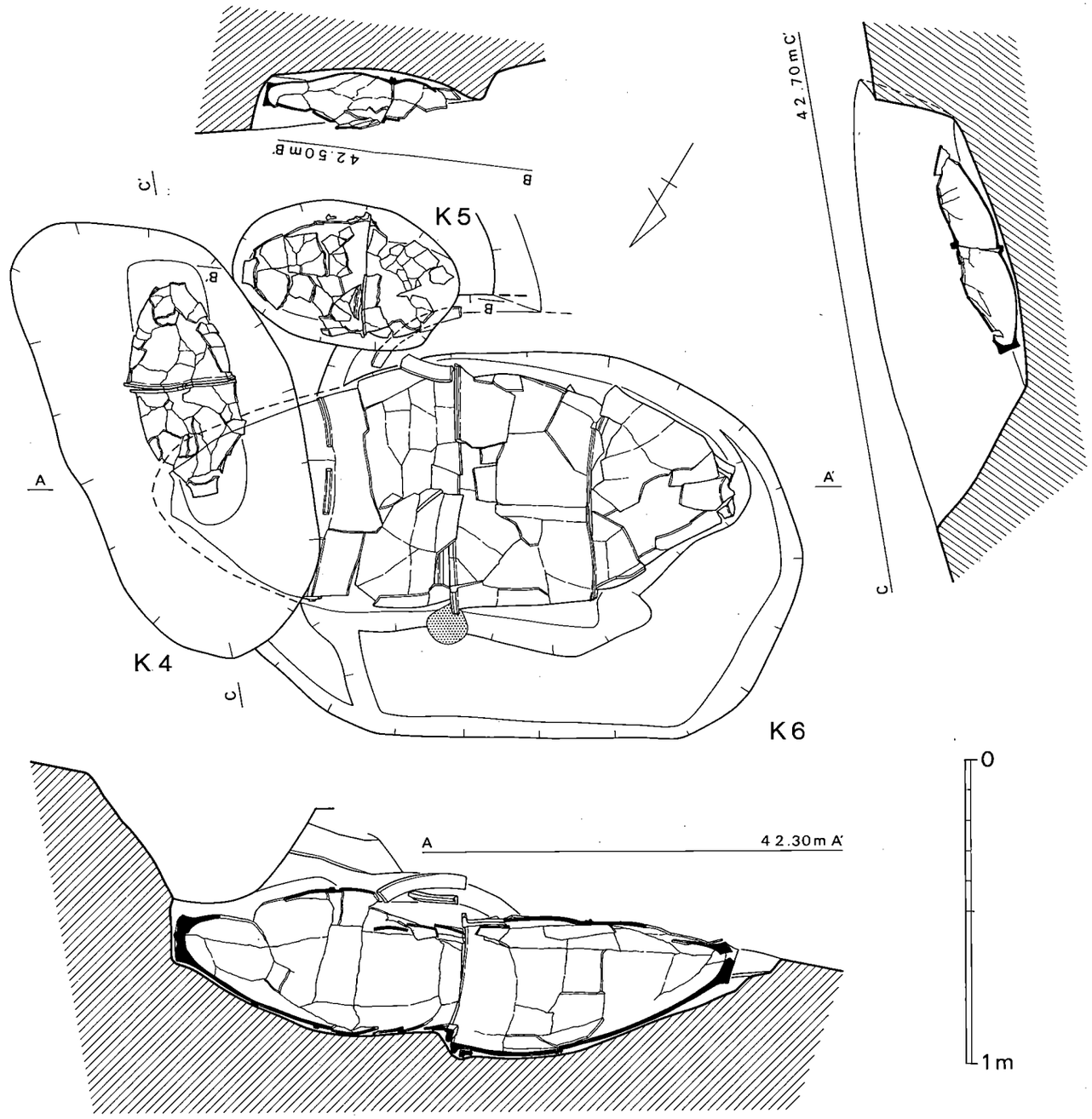
上　甕（図版25-1，第36図）　実測図に示した口縁部は「く」字形を呈するが，これは土圧で歪んだためで，本来下甕同様逆L字形を呈するものである。残高35.9cm，口径27.2～29.1cm，頸部径24.8～26.3cmを測る小型長胴の甕である。口唇部は丸く，緩やかに弧を描いて平底の底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ，内外面ナデであり，底部外面にはユビオサエ痕がみられる。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母・角閃石・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で，内面淡橙灰色，外面淡橙色を呈する。また，胴下半部には黒斑がみられる。

下　甕（図版25-1，第36図）　逆L字状口縁部を有する小型甕で，器高33.8cm，口径29.3cm，頸部径26.6cm，底径6.8cmを測る。口縁部平坦面は僅かに内傾し，口縁部内面を強くユビナデしているため内方にも突出している感がある。胴部はあまり張らず，締りの悪い底部に移行する。底部は当初より欠損しており，墓壙内からも検出していない。器面調整は，口縁部ヨコナデ，外面は工具による擦過状のナデで，内面のナデは外面より丁寧に施す。胎土に長石・石英・雲母・角閃石を多く含む。焼成は軟質で，内外面とも暗乳灰色を呈する。また，胴部には黒斑がみられる。

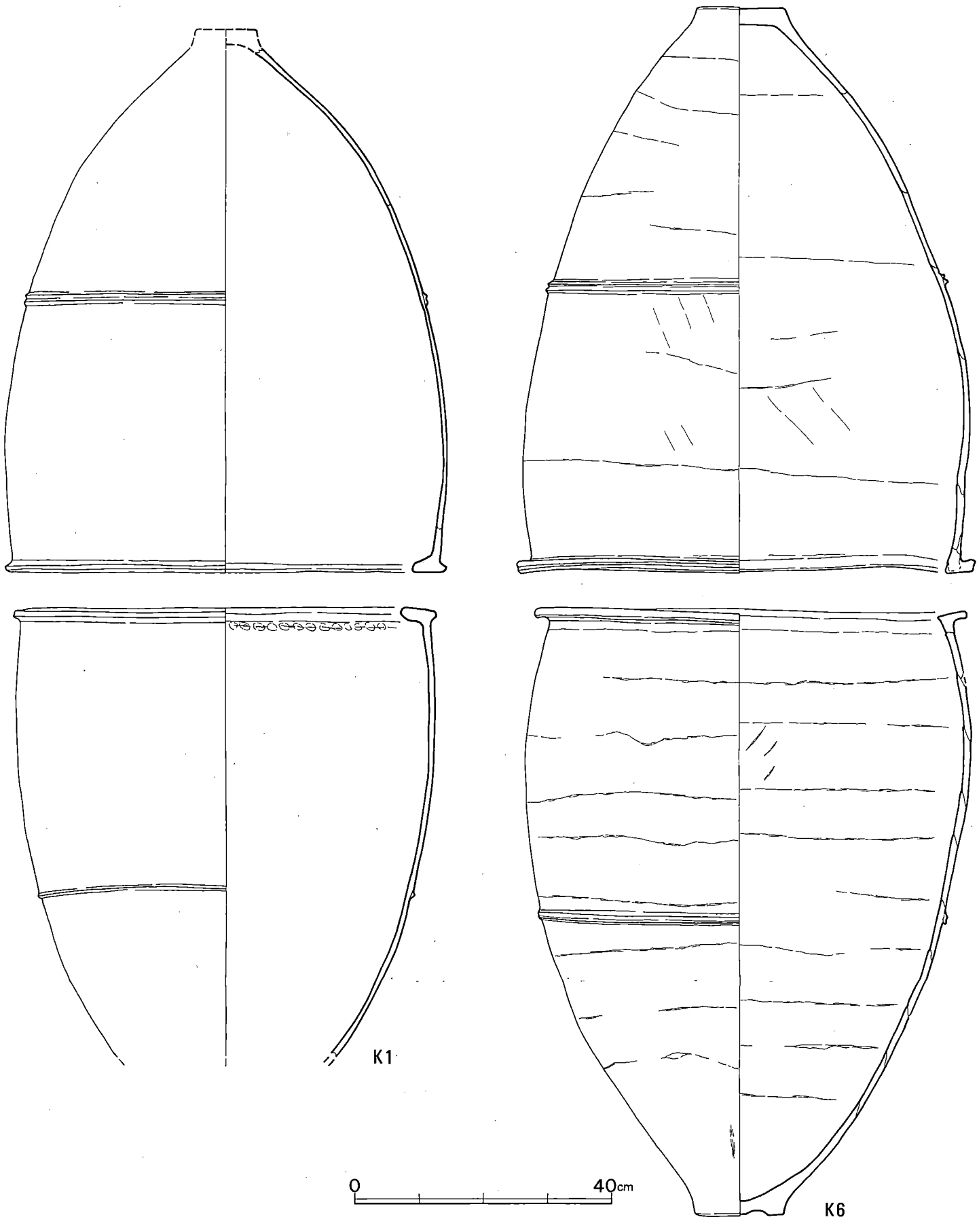
5号甕棺墓（図版8-1，第37図）

上段斜面で検出した接口式の小児用甕棺墓で，6号甕棺墓を切っている。斜面側が上甕で，底部を削平される。墓壙は現状で長軸74cm，短軸48cmの楕円形を呈し，深さは25cmを測る。甕棺はほぼ水平に埋置され，主軸方位はN65°Eを示す。甕棺内からの出土遺物は皆無で，穿孔もみられない。

上　甕（図版25-2，第40図）　口縁部が逆L字形を呈する小型の甕で，胴下半部以下を欠く。残高24.0cm，口径27.6cm，頸部径25.9cmを測る。口縁部平坦面は水平で，直立気味の頸部から膨らむ胴部へ移行する。口縁部ヨコナデ，外面ハケ目，内面ナデ調整による。胎土に長石・石英・雲母・角閃石・赤褐色粒を多く含む。焼成はやや軟質で，内面暗黄灰色，外面暗茶褐色を呈する。外面には煤が遺存しており，日常容器の転用品である。



第 37 図　4～6号甕棺墓実測図（1/20）



第 38 図　1・6号甕棺実測図（1/8）

下　甕（図版25-2，第40図）　逆L字状口縁部を有する小型甕で，器高39.5cm，復原口径32.1cm，復原頸部径29.3cm，底径7.6cmを測る。口縁部は肥厚し，口縁部平坦面は僅かに内傾する。また，口縁部内面を若干つまみ出す。頸部のやや下位に断面三角凸帯を貼付しており，凸帯の剝離した箇所を観察すると，３号甕棺上甕同様，凸帯貼付時の作業線を付していた。胴部はあまり張りをみせず，緩やかに平底の底部へ移行する。器面調整は，口縁部ヨコナデ，外面は摩滅が著しいがハケ目が観察できる。内面はナデ調整による。胎土に3～5mm大の長石・石英・雲母・角閃石を含む。焼成は軟質で，内面淡褐色，外面淡橙灰色を呈する。

６号甕棺墓（図版8-1・2，第37図）

３号住居跡廃絶後に埋葬された接口式の成人用甕棺墓で，４・5号甕棺墓に切られる。当遺跡においては比較的残りの良い方で，墓壙は現状で長軸164cm，短軸128cmの楕円形を呈し，深さ53cmを測る。甕棺はほぼ水平に埋置され，傾斜角度は－5°，主軸方位はN59°Eを示す。甕棺内からの遺物・人骨の出土は無く，穿孔も施していない。口縁部に目張り粘土がみられた。また，５号甕棺墓の上甕下部より当甕棺の口縁部が出土した。

上　甕（図版25-3，第38図）　器高89.4cm，口径65～77cm，頸部径66.6cm，底径13.8cmを測る大型の埋葬用甕であり，凸帯より上位は土圧により楕円形に歪む。口縁部は逆L字状を呈し，口唇部にはヘラ先による浅目の沈線が巡る。胴部はやや張りをみせ，平底の底部に移行する。胴部中位に断面三角凸帯を2条貼付する。また，器面には8～12cm間隔で粘土帯の接合がみられ，内面側を低く，外面側を高く接合している。調整は口縁部ヨコナデ，内外面工具ナデである。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で，内面紫灰色，外面黄褐色を呈する。また，胴部には黒斑がみられる。

下　甕（図版25-3，第38図）　器高95.5cm，口径67.2cm，頸部径62.7cm，底径13.4cmを測り，上甕より若干器高が高い。口縁部は逆L字状を呈し，口縁部平坦面はやや内傾する。胴部はあまり張りをみせず，大きめの上底の底部に移行する。胴部中位には断面台形状の凸帯を貼付している。

また，器面には7～10cm幅の粘土帯の接合が水平にみられ，上甕とは逆に内面側を高く，外面側を低く接合しており，輪積み技法によるものと考えられる。また，底部付近には縦方向の粘土の隆起がみられ，粘土帯の接合部になろう。調整は口縁部ヨコナデ，内外面工具ナデである。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で，

下甕粘土接合状況

内面灰褐色，外面黄灰色を呈する。また，胴部中位から底部にかけて黒斑がみられる。

7号甕棺墓（図版9-1，第39図）

4号甕棺墓の2ｍ東側に位置し，8号甕棺墓・3号建物跡に切られ大破する。接口式の小児用甕棺墓で，何れが上甕か下甕か区別付け難いが，当墓地においては南→北方向に埋葬していることから，北側を下甕，南側を上甕とした。甕棺は遺存状態が極めて悪く，上甕は口縁部小片，下甕は口縁～胴部上位1／2を残す程度である。主軸方位はN43°Eを示す。甕棺内からの出土遺物は無く，穿孔も施していない。また，目張り粘土はみられない。

上　甕（図版26-1，第40図）　口縁部～胴部上位にかけての破片で，口縁部は逆L字状に肥厚し，口唇部は細い。復原口径は35.7cm，復原頸部径は32.2cmを測る。口縁部平坦面はかなり内傾する。胴部は張りをみせず，底部に移行するようである。調整は口縁部ヨコナデ，頸部直下外面は横方向のハケ目，それ以下は縦方向のハケ目，内面はナデによる。胎土に長石・石英・雲母・角閃石・黒曜石を多く含む。焼成は良好で，内面暗黄褐色，外面灰褐色を呈する。

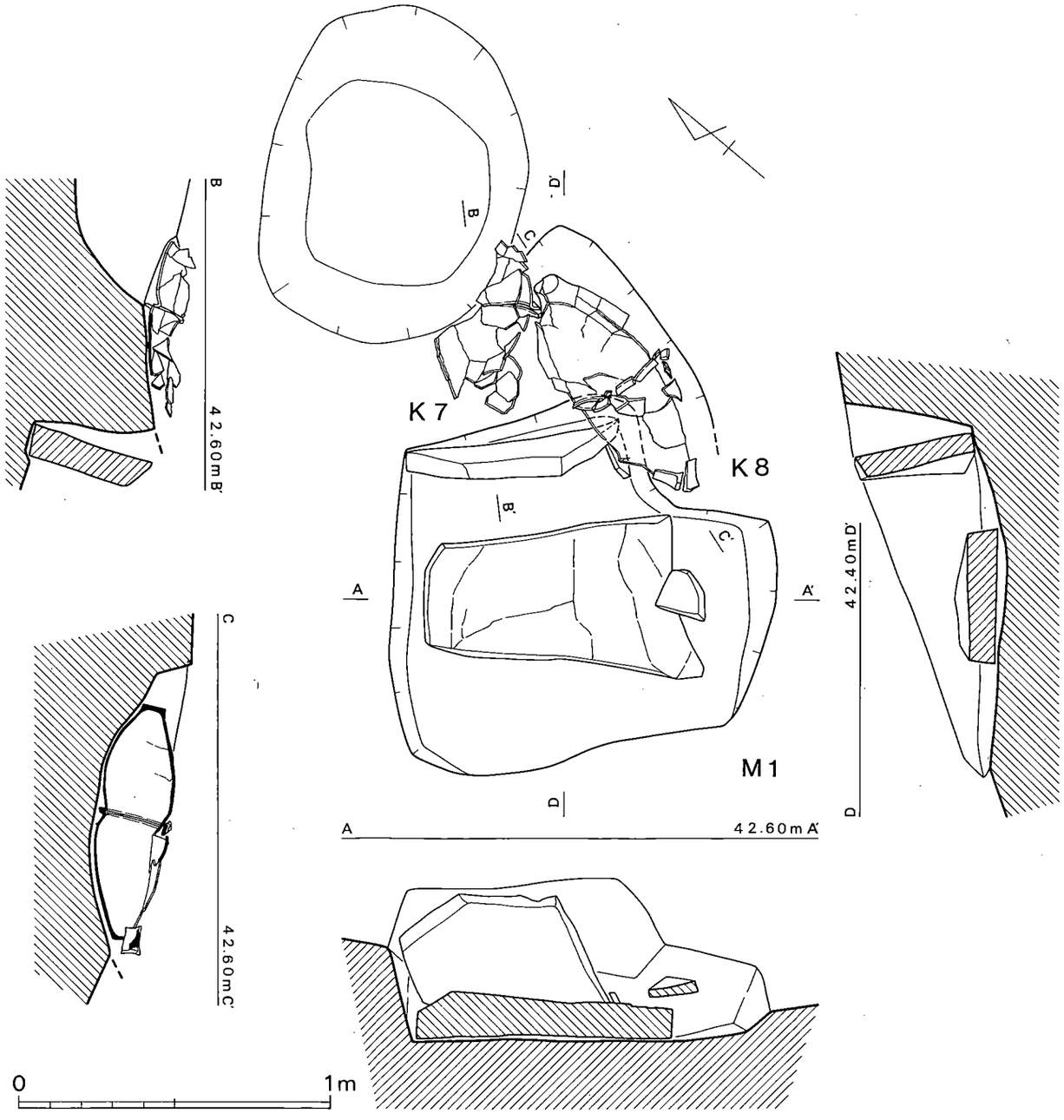
下　甕（図版26-1，第40図）　口縁部は頸部を折り曲げた「く」字形を呈し，口唇部で若干肥厚さす。復原口径37.3cm，復原頸部径33.3cmを測る。胴部は張りをみせず，底部に移行しよう。口縁部ヨコナデ，外面ハケ目（7～9条／cm），内面ナデ調整による。胎土に長石・石英・雲母・角閃石を多く含む。焼成はやや良好で，内面暗黄灰色，外面暗橙灰色を呈する。

8号甕棺墓（図版9-1，第39図）

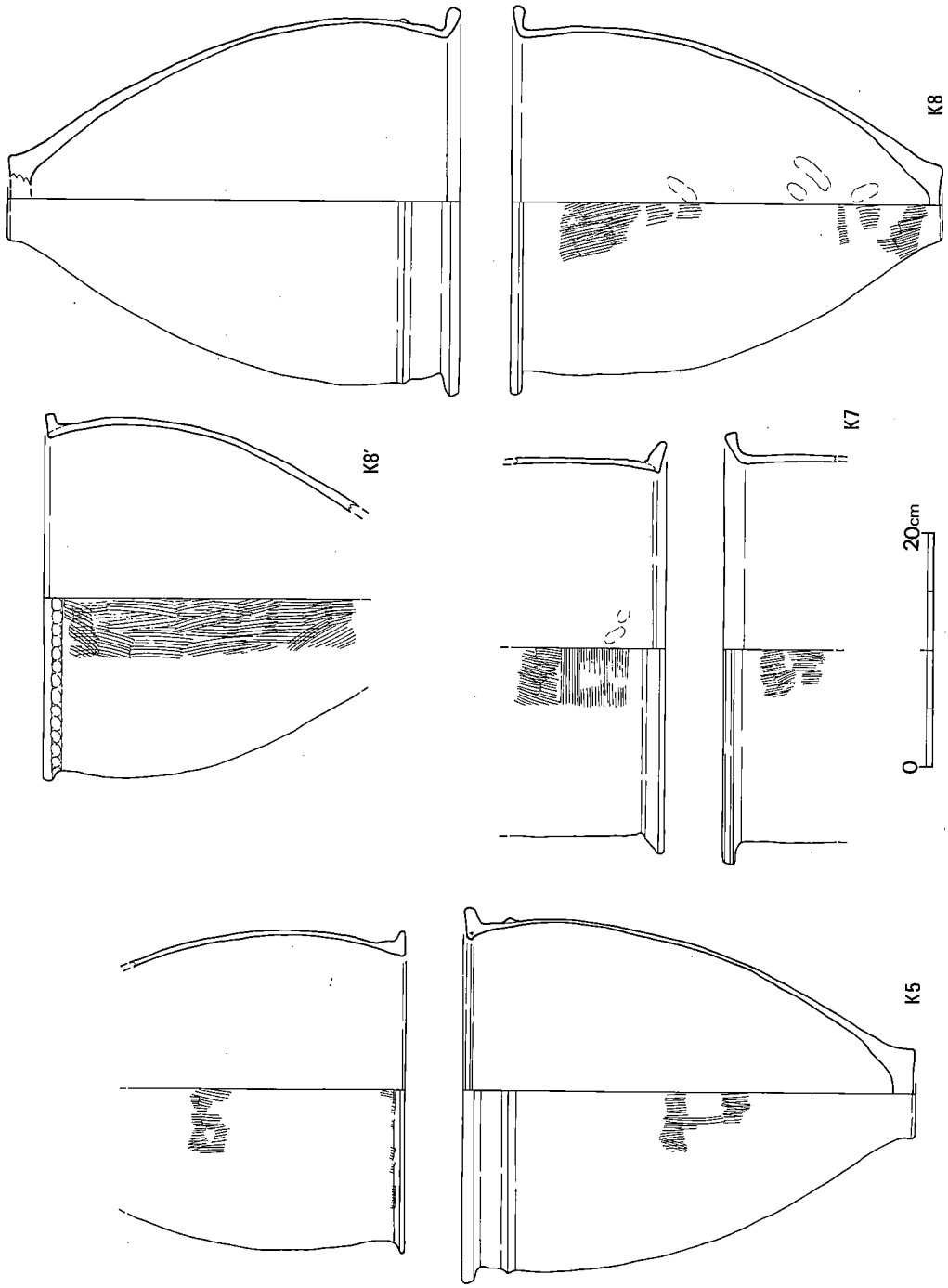
7号甕棺墓のすぐ東側に位置し，7号甕棺墓・1号木棺墓を切る。接口式の小児用甕棺墓で，割れてはいるもののほぼ現状を留める。7号甕棺墓同様北側を下甕，南側を上甕とした。甕棺は斜めに埋置され，傾斜角度は＋8°，主軸方位はN16°Eを示す。甕棺内からの出土遺物は皆無で，穿孔もみられない。

上　甕（図版26-2，第40図）　器高は39.3cmを測り，口径（33.2cm）・頸部径（29.4cm）・底径（7.2cm）は復原値による。口縁部は頸部を「く」字形に折り曲げ，端部を若干肥厚させたもので，頸部のやや下位に断面三角凸帯を貼付する。胴部は若干張りをみせ，平底の底部に移行する。口縁部ヨコナデ，外面は摩滅しているがハケ目で，内面はナデ調整による。胎土に長石・石英・雲母・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で，内面暗橙色，外面暗橙灰色を呈する。

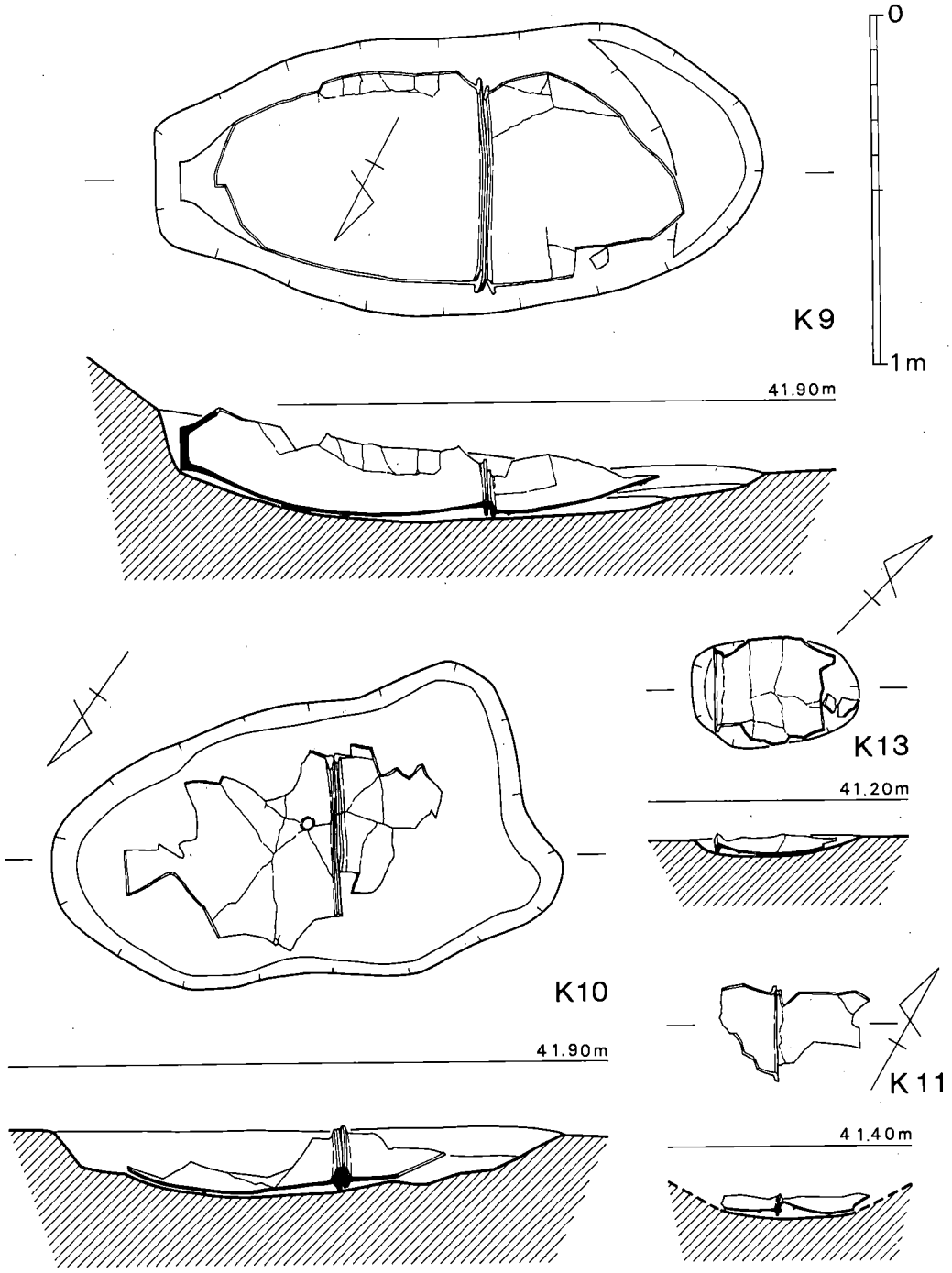
下　甕（図版26-2，第40図）　器高36.7cm，復原口径33.5cm，復原頸部径29.3cm，底径6.4cmを測る。口縁部は頸部を水平近く折り曲げ，端部を若干肥厚させたもの。胴部はやや下膨れで，内窪みの薄い底部（厚さ1.7cm）に移行する。器面調整は，口縁部ヨコナデ，外面ハケ目（6～7条／cm），内面はユビオサエ状のナデ調整による。胎土に長石・石英・雲母・角閃石を含む。焼成は良好で，内面暗橙色，外面暗橙灰色を呈する。



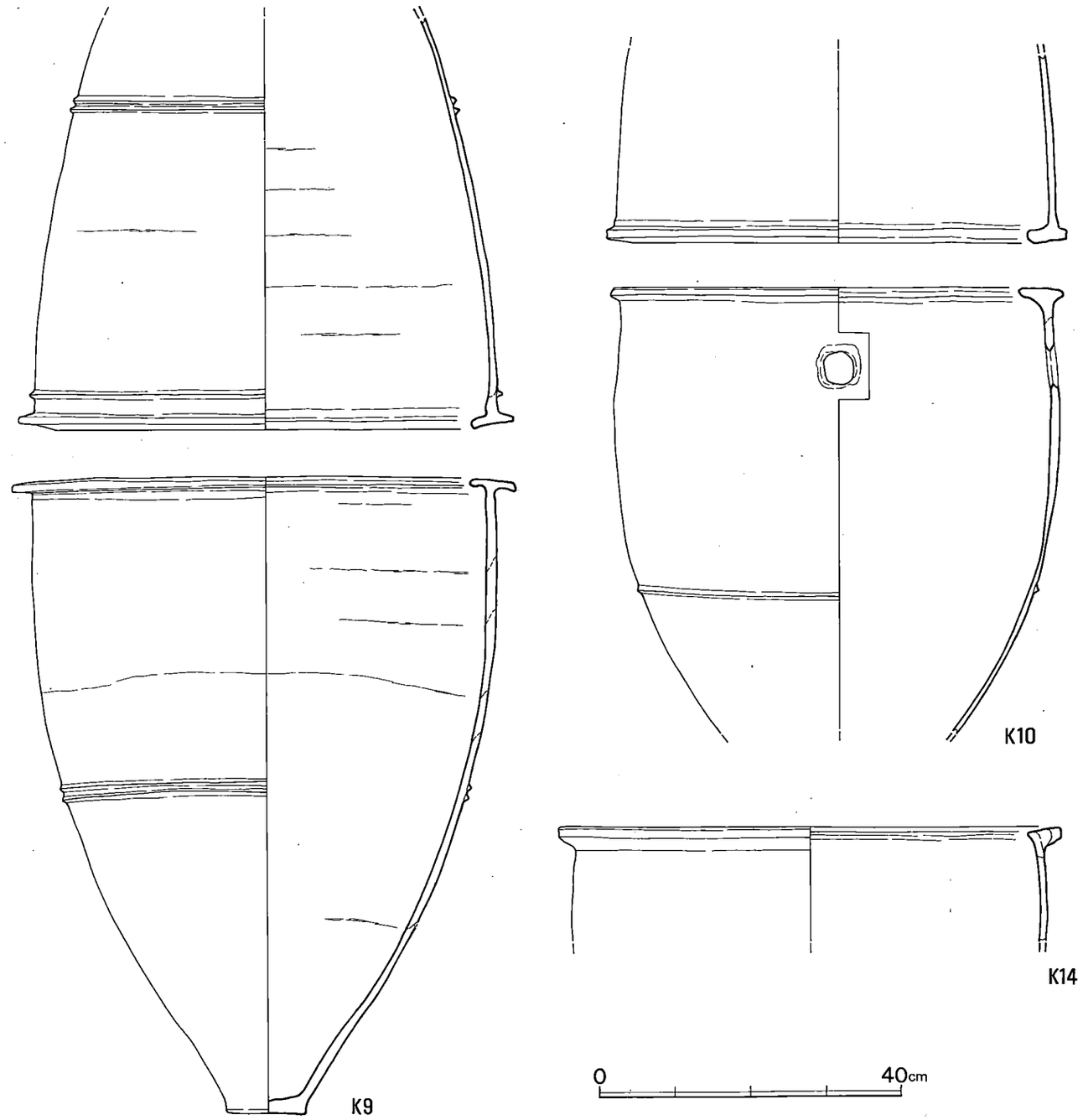
第 39 図　7・8号甕棺墓，1号木棺墓実測図（1/20）



第40図　5・7・8号甕棺実測図（1/6）



第 41 図　9～11・13号甕棺墓実測図（1/20）



第 42 図　9・10・14号甕棺実測図（1/8）

K-8'（図版26-2，第40図）　当初，８号甕棺墓上甕として取り上げた甕棺で，整理段階で上甕が２基存在することに気付いた。どういう出土状態にあったのか記憶が定かでなく，下甕とは時期的に整合せず，もう１基別の甕棺墓が存在した可能性が高い。

残高26.9cm，復原口径31.6cm，復原頸部径29.8cmを測る小型の甕である。口縁部は逆Ｌ字状を呈し，口縁部平坦面はやや内傾する。胴部はかなり張って底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ，頸部外面ユビオサエ，外面ハケ目（5条／cm），内面ナデによる。胎土に長石・石英・雲母・角閃石を含む。焼成は良好で，内外面とも暗橙灰色を呈する。

9号甕棺墓（図版9-2，第41図）

上・中段の斜面部にあたるため大きく削平を受ける。接口式の成人用甕棺墓である。墓壙は現状で長軸175cm，短軸80cmの楕円形状を呈する。検出面からの深さは21cmであるが，下甕は底部を辛うじて留める。甕棺はほぼ水平に埋置され，主軸方位はN63°Eを示す。甕棺内からの遺物・人骨の出土は無く，穿孔もみられない。

上　甕（図版26-3，第42図）　口縁～胴部上位1／3程の破片で，残高55.4cm，復原口径65.2cm，復原頸部径61.0cmを測る。口縁部は内外側に突出するＴ字形口縁を呈し，口縁部平坦面は外傾する。胴部は張らずに底部に移行する。頸部下に1条と胴下半部に2条の断面三角凸帯を貼付する。調整は口縁部ヨコナデ，内外面工具ナデで，頸部内面は強いユビナデにより丸く窪む。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母・黒曜石を多く含む。焼成はやや軟質で，内面灰褐色，外面淡黄褐色を呈する。また，凸帯周辺には黒斑がみられる。

下　甕（図版26-3，第42図）　器高86.2cm，復原口径66.4cm，復原頸部径60.4cm，底径10.6cmを測る。口縁部は内外側に突出するＴ字形口縁を呈し，口縁部平坦面は若干外傾する。胴部には張りは無く，平底の底部に移行する。胴部中位に断面三角凸帯を2条貼付しており，その間は強くヨコナデされる。調整は口縁部ヨコナデ，胴部内外面工具ナデで，頸部内外面は強いユビナデにより窪む。胎土に2～4mm大の長石・石英・黒曜石を多く含む。焼成は良好で，内面灰褐色，外面灰緑色を呈する。また，外底部には黒斑がみられる。

10号甕棺墓（図版9-3，第41図）

中段北端で検出した接口式の成人用甕棺墓で，９号甕棺墓の2.5ｍ西側に位置する。削平が著しく上甕・下甕ともに大破する。墓壙は不整形を呈し，原形をまったく留めない。穿孔がみられる北側の甕を下甕とした。甕棺はほぼ水平に埋置され，主軸方位はN37°Wを示す。甕棺内からの遺物の出土は無い。

上　甕（図版27-1，第42図）　口縁～胴部上位小片で，残高は25.5cm，口径は61.0cmに復原した。口縁部は内側に大きく突出するＴ字形口縁を呈し，口縁部内側は肥厚する。また，口縁

部平坦面はやや外傾する。胴部に張りは無く，緩やかに底部に移行するようである。調整は口縁部ヨコナデ，胴部は内外面とも工具ナデである。胎土に2～4mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で，色調は内面褐色，外面茶褐色を呈する。

下　甕（図版27-1，第42図）　口縁～胴下半部破片であり，残高60.2cm，復原口径60.0cm，復原頸部径57.2cmを測る。口縁部は内側に大きく突出するT字形口縁を呈し，口縁部平坦面は水平である。胴部にはさほど張りはなく，緩やかに底部に移行する。胴下半部に断面三角凸帯を貼付しており，その間は強くヨコナデされる。また，頸部のやや下位に4×5cm大の円孔がみられ，内→外方向に穿孔している。調整は口縁部ヨコナデ，胴部内外面工具ナデによる。胎土に2～4mm大の長石・石英・雲母・赤褐色粒を多く含む。焼成はやや軟質で，色調は内面暗褐色，外面茶褐色を呈する。

11号甕棺墓（図版10-2，第41図）

中段中央に位置する接口式の小児用甕棺墓で，削平により大破する。北側を下甕，南側を上甕とした。甕棺は水平に埋置され，主軸方位はN30°Wを示す。甕棺内からの出土遺物は皆無で，穿孔もみられない。

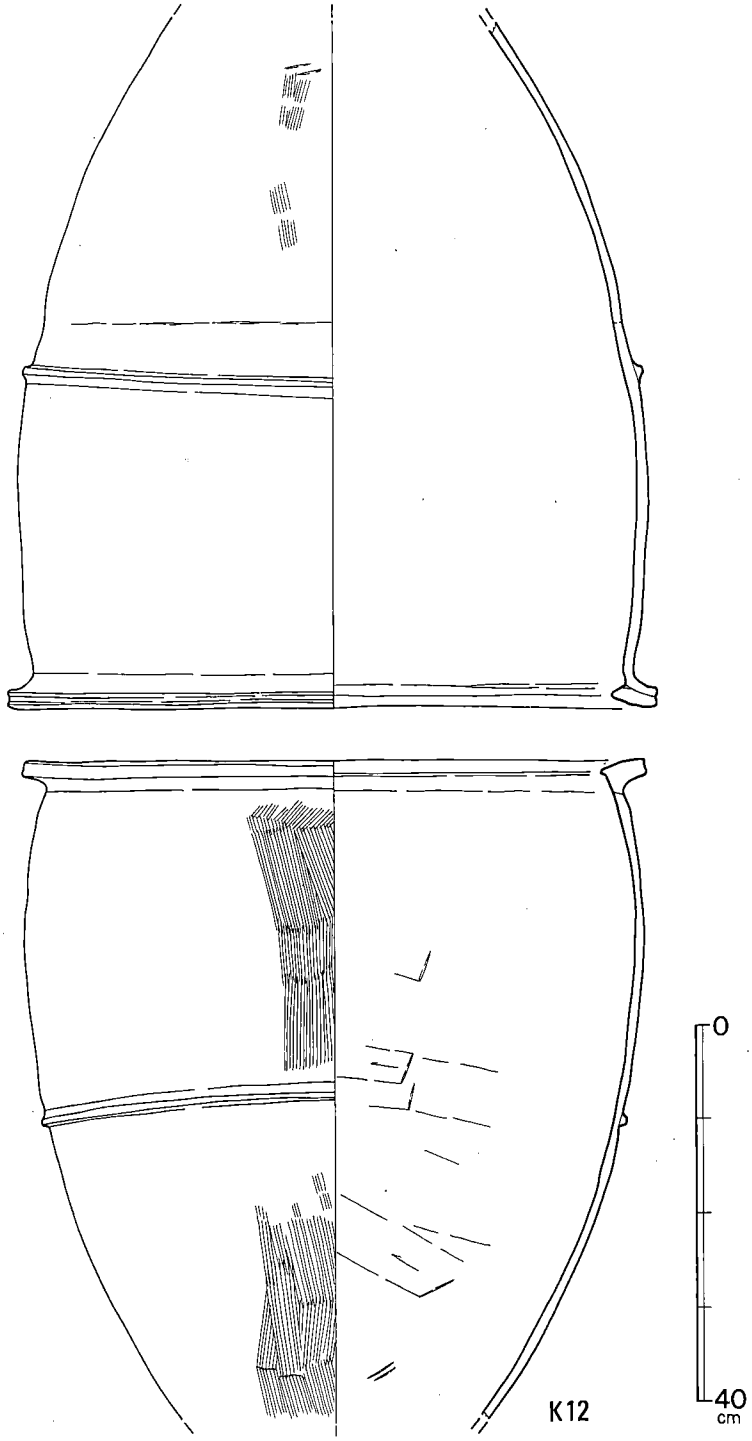
上　甕（図版27-2，第44図）　器高19.2cm，復原口径31.6cm，復原頸部径29.2cmを測る小型の甕である。口縁部はやや肥厚する逆L字状を呈し，口縁部平坦面は内傾する。頸部のやや下位に断面三角凸帯を貼付している。口縁部ヨコナデ，外面ハケ目（6条／cm），内面ナデ調整による。胎土に長石・石英を含む。焼成は良好で，内面暗茶灰色，外面暗橙灰色を呈する。

下　甕（図版27-2，第44図）　器高33.1cm，復原口径32.6cm，復原頸部径30.0cmで，底部を欠く。口縁部は逆L字状を呈し，口縁部平坦面は「く」字状に内傾する。頸部のやや下位に断面三角凸帯を貼付している。胴部はやや張りをみせ，底部に移行する。器面調整は，口縁部ヨコナデ，外面ハケ目，内面ナデによる。胎土に長石・石英・雲母・角閃石を含む。焼成は良好で，内面暗茶灰色，外面暗橙灰色を呈する。

12号甕棺墓（図版10-1，第46図）

中段南側に位置する接口式の成人用甕棺墓である。削平により墓壙はまったく留めず，甕棺は半分程残存するが，何れが上甕か下甕か判断付け難いが，他の例から南側を下甕，北側を上甕としておく。甕棺はほぼ水平に埋置され，主軸方位はN69°Wを示す。甕棺内からの遺物・人骨の出土はなく，穿孔もみられない。

上　甕（図版27-3，第43図）　口縁～胴下半部破片で，残高73.0cm，口径68.2cm，頸部径63.0cmを測る。口径・頸部径は復原値である。口縁部は逆L字形で，粘土帯を貼付し肥厚させている。口縁部平坦面は内傾する。胴部はあまり張りをみせずに底部に移行し，胴部中位に断



第 43 図　12号甕棺実測図（1/8）

面三角凸帯を貼付する。調整は口縁部ヨコナデ，外面ハケ目→ナデ消し，内面工具ナデである。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で，内面暗灰褐色，外面灰褐色を呈する。また，外面には黒斑がみられる。

下　甕（図版27-3，第43図）　上甕同様，口縁～胴下半部破片で，残高70.8cm，復原口径65.6cm，復原頸部径61.2cmを測る。口縁部は逆L字状を呈し，口縁部平坦面は内傾する。また，口縁部内面は小さくつまみ出している。胴部には張りがみられ，緩やかなカーブを描いて底部に移行する。胴部中位に断面三角凸帯を貼付しており，その間は強くヨコナデされる。調整は口縁部ヨコナデ，外面ハケ目，内面工具ナデである。胎土に2～4mm大の長石・石英・雲母を含む。焼成は良好で，内面灰褐色，外面淡黄褐色を呈する。

13号甕棺墓（図版10-3，第41図）

中段南側で検出した小児用甕棺墓で，下甕（？）の一部しか留めておらず，木蓋の単棺であったものか詳細は不明。甕棺は水平に埋置され，主軸方位はN45°Eを示す。甕棺内からの出土遺物は皆無で，穿孔もみられない。

甕　棺（図版28-1，第44図）　残高30.6cm，復原口径40.0cm，復原頸部径36.0cmを測る中型の甕である。口縁部は逆L字状を呈し，口縁部平坦面は内傾する。頸部のやや下位に断面三角凸帯を貼付している。口縁部ヨコナデ，外面ハケ目，内面ナデ調整による。また，内面には粘土帯の接合部が3箇所観察できる。胎土に長石・石英・雲母・角閃石を含む。焼成は良好で，内面暗乳灰色，外面暗橙灰色を呈する。

14号甕棺墓（第45図）

11号甕棺墓の2m北西側に位置する。甕棺は形状をまったく留めていなかったが，

① 埋土中より大甕の破片が出土している。

② 他の甕棺墓と軸を等しくする。

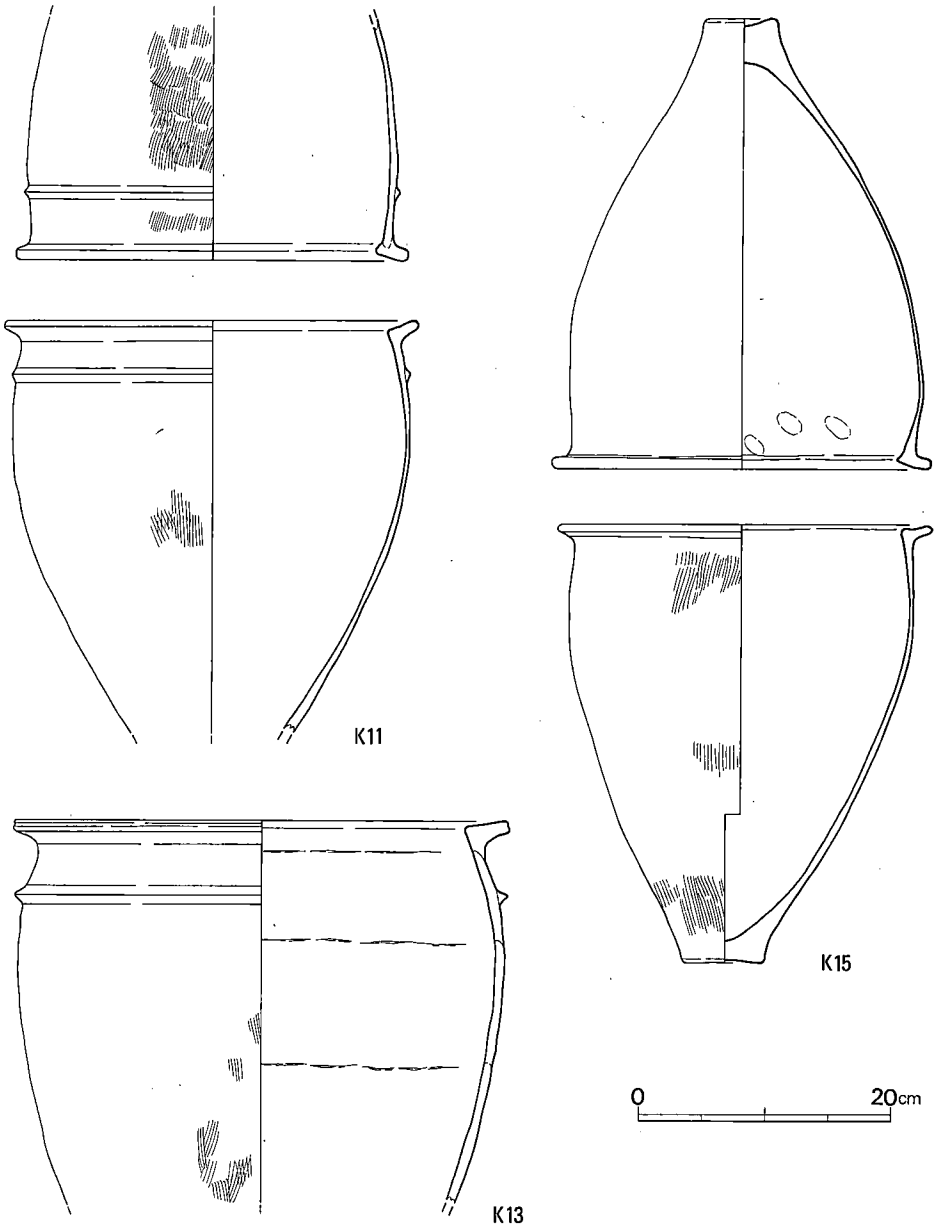
以上ことから，甕棺の抜き跡と判断した。墓壙は長軸199cm，短軸96cmを測る楕円形を呈し，深さは34cmを測る。主軸方位は，N45°Eを示す。

甕　棺（図版28-2，第42図）　口縁～胴部上位の破片で，復原口径67.2cm，復原頸部径62.6cmを測る。口縁部はやや肥厚する逆L字形を呈し，口縁部平坦面は内傾する。また，口縁部内面は小さくつまみ出している。調整は口縁部ヨコナデ，内外面は工具ナデである。胎土に2～4mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で，内面淡褐色，外面暗灰色を呈する。

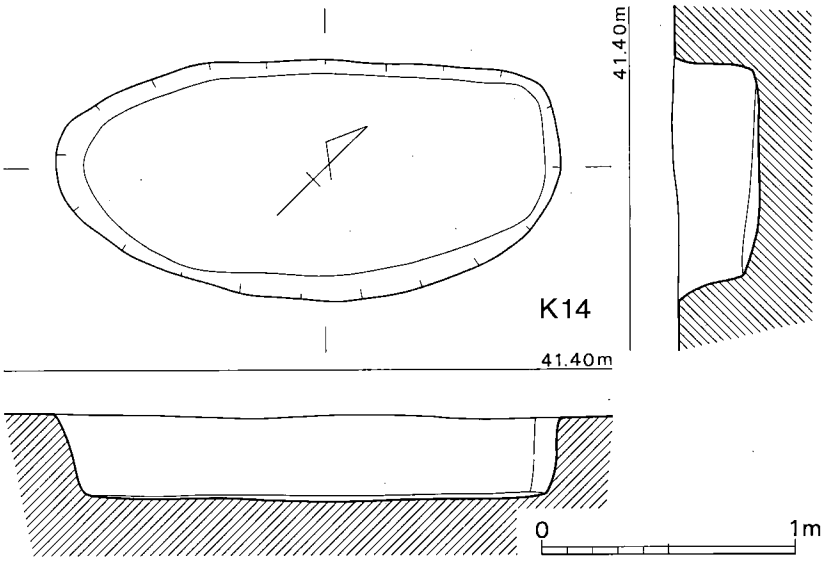
15号甕棺墓（図版11-1，第46図）

4号住居跡廃絶後に埋葬された接口式の小児用甕棺墓である。割れてはいるものの当遺跡に

おいては比較的残りの良い方で，墓壙は長軸95cm，短軸50cmの楕円形を呈し，深さは20cmを測る。甕棺は斜めに埋置され，傾斜角度は＋4°，主軸方位はN63°Eを示す。口縁部の目張り粘



第 44 図　11・13・15号甕棺実測図（1/6）



第 45 図　14号甕棺墓実測図（1/30）

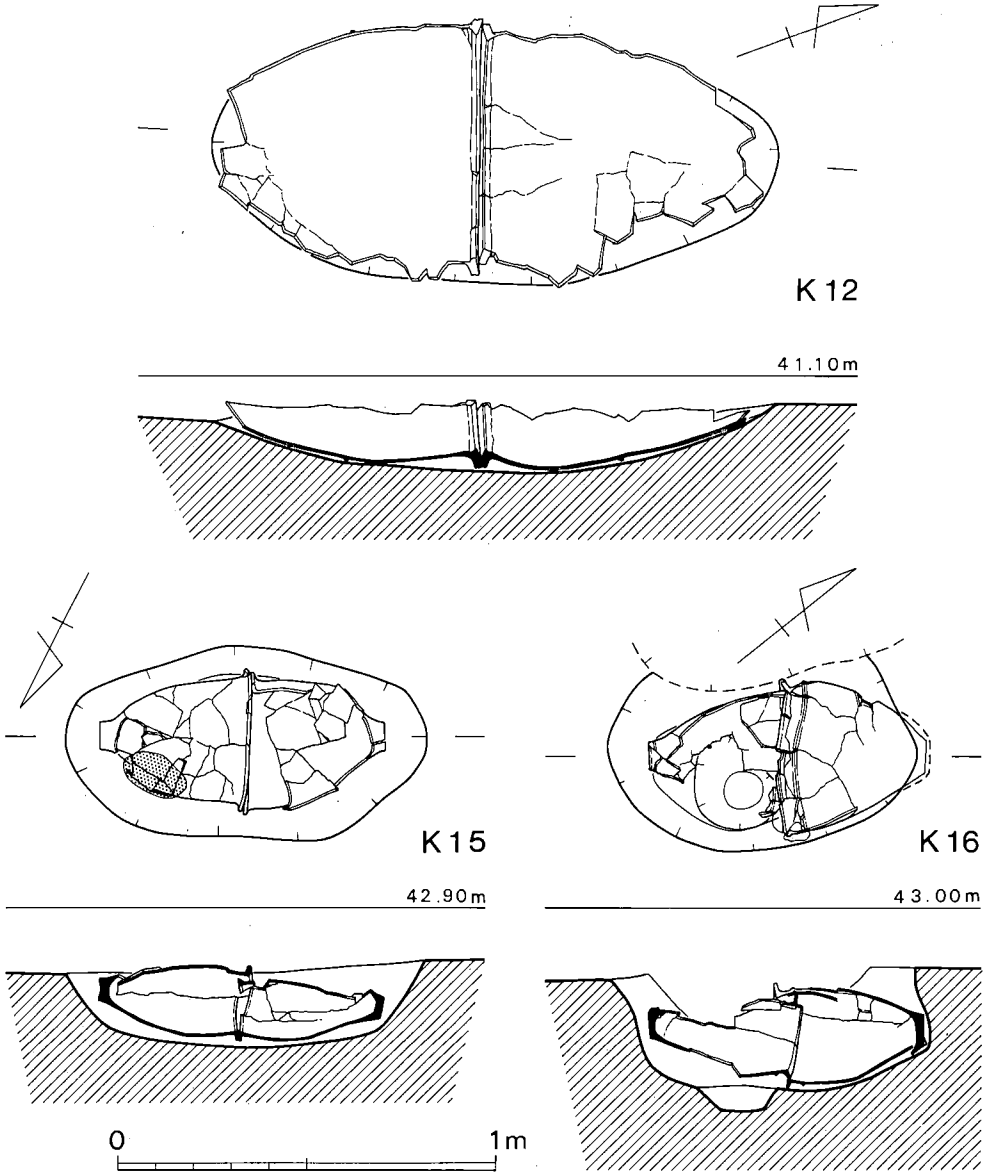
土は，みられない。甕棺内からの出土遺物は無く，穿孔も施していない。

上　甕（図版28-3，第44図）　口径30.5cm，頸部径27.7cm，底径6.0cmを測る小型の甕で，器高は36.0cm程になろう。口縁部は肥厚する逆L字状を呈し，口縁部平坦面は内傾する。口唇部は丸く，口縁部内面は小さくつまみ出している。胴部上位に張りがみられ，緩やかに上底の底部に移行する。底部は3cmと厚い。調整は口縁部ヨコナデ，内面ナデであるが，外面は摩滅により調整不明。胎土に長石・石英・雲母・角閃石・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で，内面暗黄灰色，外面暗黄橙色を呈する。また，胴下半部には黒斑がみられる。

下　甕（図版28-3，第44図）　逆L字状口縁を有する小型甕で，口径30.3cm，頸部径29.1cm，底径6.7cmを測る。器高は35cm程になろう。口縁部平坦面は僅かに内傾し，上面を強くナデている。胴部上位に張りがあり，上底気味の底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ，外面ハケ目，内面ナデによる。胎土に長石・石英・雲母・角閃石を含む。焼成はやや良好で，内面暗灰色，外面暗橙灰色を呈する。また，胴部には黒斑がみられる。外面には煤が付着しており，日常容器の転用品である。

16号甕棺墓（図版11-2，第46図）

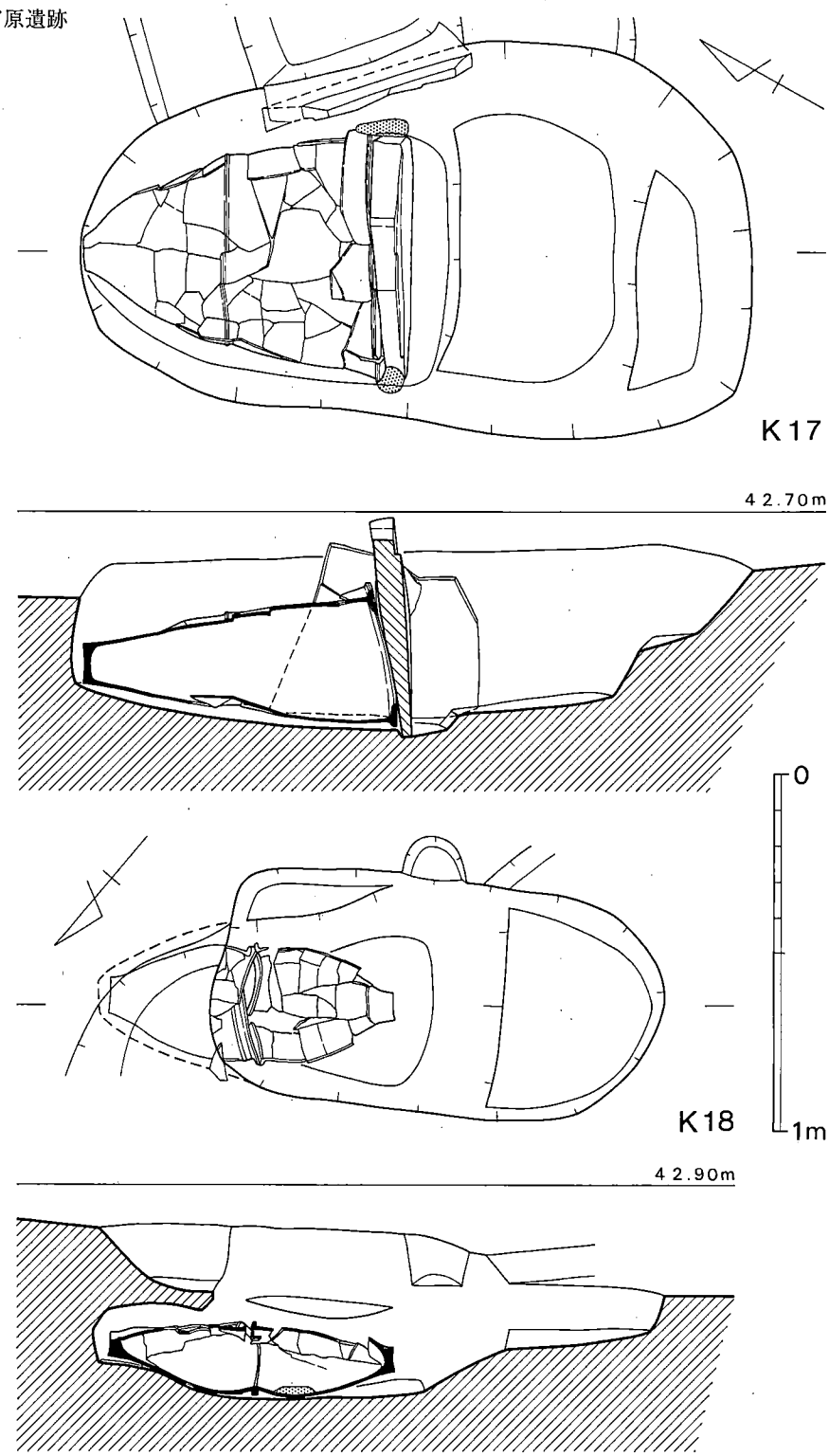
15号甕棺墓の1.5m南東側で検出した挿入式の小児用甕棺墓であり，西側は柿の肥料穴に切られる。また，上甕はピットに破壊される。墓壙は長軸82cm，短軸54cmの楕円形を呈し，深さは32cmを測る。甕棺は斜めに埋置され，傾斜角度は＋2°，主軸方位はN39°Eを示す。目張り



第 46 図 12・15・16号甕棺墓実測図（1/20）

粘土は，施していない。甕棺内からの出土遺物は無く，穿孔も施していない。

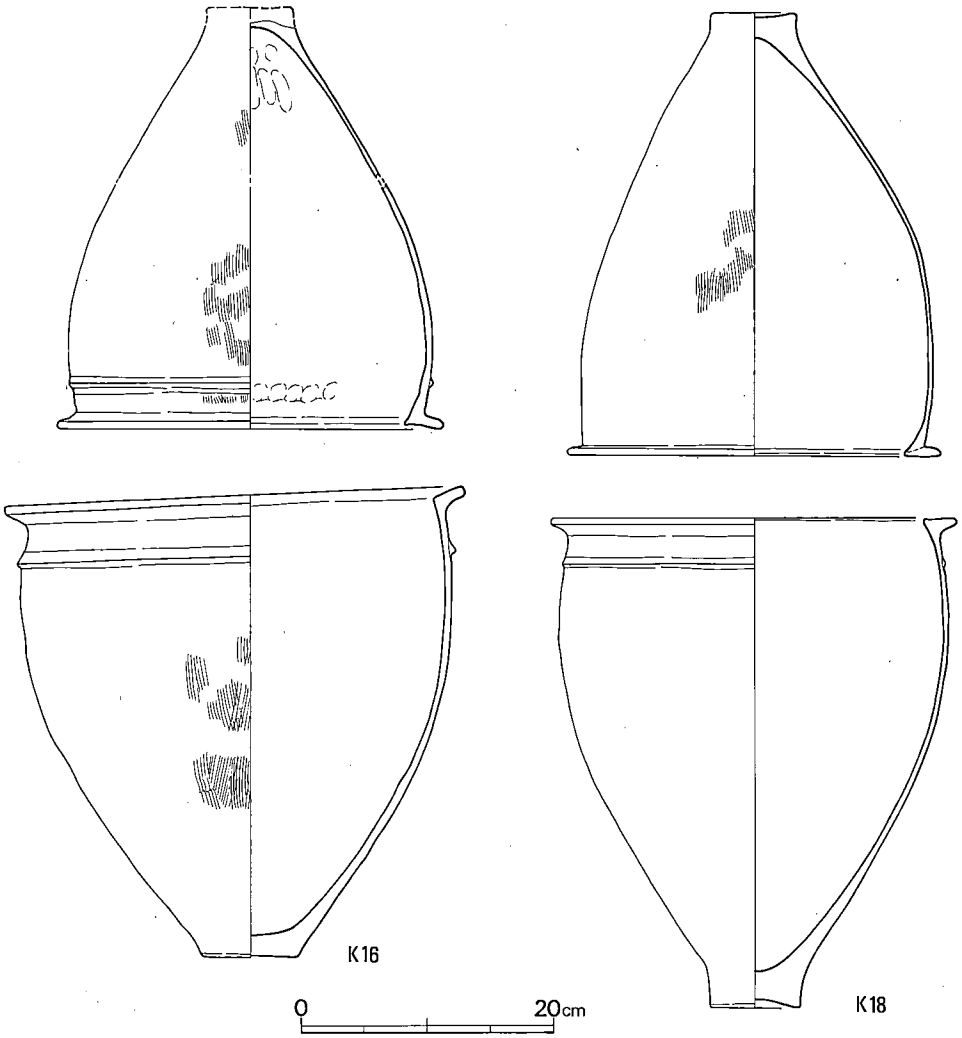
上　甕（図版28-4，第48図）　器高33.8cm，復原口径30.8cm，復原頸部径27.8cm，底径6.8cmを測る小型の甕である。口縁部は逆L字状を呈し，口縁部平坦面は内傾する。口唇部は丸く納める。胴部上位に張りがみられ，緩やかに平底の底部に移行する。頸部のやや下位に断



第 47 図 17・18号甕棺墓実測図 (1/20)

面三角凸帯を貼付している。調整は口縁部ヨコナデ，外面ハケ目，内面ナデによる。胎土に長石・石英・雲母を含む。焼成は良好で，内面暗橙褐色，外面暗茶褐色を呈する。また，口縁部外面には煤が多く遺存しており，日常容器の転用品である。

下　甕（図版28-4，第48図）　逆Ｌ字状口縁を呈する鉢形の器形で，器高37.9cm，口径36.4cm，頸部径33.0cm，底径7.7cmを測る。頸部のやや下位に断面三角凸帯を貼付している。胴部上位に張りがあり，平底の底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ，外面ハケ目，内面ナデによる。胎土に長石・石英を含む。焼成はやや良好で，内面暗橙灰色，外面暗黄褐色を呈する。

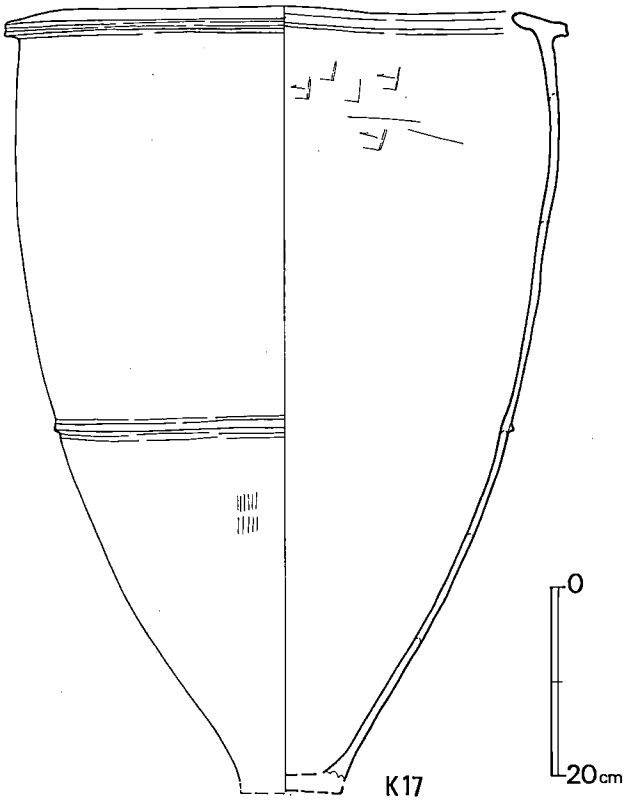


第 48 図　16・18号甕棺実測図（1/6）

17号甕棺墓（図版11-3，第47図）

3号住居跡廃絶後に埋葬された甕棺墓で，5号木棺墓を切っている。4号甕棺墓と軸を等しく配される石蓋の成人用甕棺墓である。墓壙は長軸188cm，短軸110cmを測る楕円形を呈し，深さは48cmである。甕棺は土圧により若干潰れてはいるものの，当遺跡においては残りの良い方である。

墓壙は二段に掘られ，南側には幅18cmのステップを有する。甕棺を水平に置き，幅68cm，高さ61cmの安山岩で蓋をし，灰青色の粘土で目張りをしている。また，東側の立石は5号木棺墓の小口石で，当甕棺墓の墓壙を掘った際に出てきたのを甕の押えとして利用している。主軸方位は，N29°Wを示す。甕棺の下より石鏃が出土した。

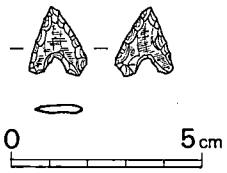


第 49 図　17号甕棺実測図（1/8）

甕　棺（図版28-5，第49図）　器高84.0cm，口径59.2cm，頸部径56.2cmを測り，底部は脆弱なため復原し得ていないが，径は11cm程になろう。口縁部は内外に突出するT字形口縁を呈し，口縁部平坦面は外傾する。胴部には張りはなく，平底の底部に移行する。胴部中位に断面三角凸帯を貼付している。調整は口縁部ヨコナデ，外面ハケ目→ナデ消しで，内面工具ナデによる。胎土に2～3mm大の長石・石英を多く含む。焼成は良好で，内面緑灰色，外面緑褐色を呈する。また，胴部外面には黒斑がみられる。

出土遺物（図版31-2，第50図）

石　器　黒曜石製の石鏃で，長さ1.8cm，幅1.5cm，重さ0.7gを量る。



第 50 図　17号甕棺墓出土石器実測図（1/2）

18号甕棺墓（図版14-1，第47図）

3号住居跡廃絶後に埋葬された接口式の小児用甕棺墓で，5号木棺墓を切る。甕棺は割れてはいるものの比較的残りの良い方で，墓壙は長軸122cm，短軸66cmの楕円形を呈し，西側に幅41cmのテラスを有する。検出面からの深さは45cmである。甕棺は若干斜めに埋置され，傾斜角度は－4°，主軸方位はN50°Eを示す。口縁部の目張り粘土はみられない。また，甕棺内からの出土遺物は無く，穿孔も施していない。

上　甕（図版29-1，第48図）　口径29.7cm，頸部径27.3cm，底径6.8cmを測る小型の甕で，器高は36.0cm程になろう。口縁部は内側に突出する逆L字状を呈し，口縁部平坦面は水平である。胴部上位に張りがみられ，上底の底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ，外面ハケ目，内面ナデによる。胎土に長石・石英・雲母・角閃石・赤褐色粒・黒曜石を多く含む。焼成は良好で，内面淡橙灰色，外面暗橙灰色を呈する。また，内外面には煤が遺存しており，日常容器の転用品である。

下　甕（図版29-1，第48図）　復原口径31.7cm，復原頸部径29.3cm，底径7.2cmを測る小型の甕で，器高は40cm程になろう。口縁部は逆L字状を呈し，口縁部平坦面は僅かに内傾し，上面を強くナデている。胴部上位に張りがあり，上底の底部に移行する。頸部のやや下位に断面三角凸帯を貼付する。調整は口縁部ヨコナデ，外面は摩滅により不明，内面はナデによる。胎土に長石・石英・雲母を含む。焼成はやや良好で，内面暗橙灰色，外面暗黄灰色を呈する。

表2　甕棺墓一覧表

番号	類別	形式	墓壙（cm）			主軸方位	埋置角度	時期	備考
			長軸	短軸	深さ				
1	成人棺	接口式	245	109	21	N30° E		中期前半	
2	小児棺	〃	68	38	23	N53° W	＋15°	〃	
3	〃	挿入式	89	65	13	N80° W		〃	1号土壙に切られる
4	〃	接口式	142	79	47	N41° W	－10°	〃	5・6号甕棺墓を切る
5	〃	〃	74	48	25	N65° E		〃	6号甕棺墓を切る
6	成人棺	〃	164	128	53	N59° E	－5°	中期初頭	
7	小児棺	〃				N43° E		中期末	1号木棺墓を切る
8	〃	〃				N16° E	＋8°	〃	7号甕棺墓を切る
9	成人棺	〃	175	80	21	N63° E		中期中葉	
10	〃	〃				N37° W		中期前半	下甕に穿孔あり
11	小児棺	〃				N30° W		〃	
12	成人棺	〃				N69° W		中期初頭	
13	小児棺					N45° E		中期前半	
14	成人棺		199	96	34	N45° E		中期初頭	甕棺墓の抜き跡
15	小児棺	接口式	95	50	20	N63° E	＋4°	中期前半	
16	〃	挿入式	82	54	32	N39° E	＋2°	〃	5号木棺墓を切る
17	成人棺	石蓋式	188	110	48	N29° W		〃	
18	小児棺	接口式	122	66	45	N50° E	－4°	中期前半	5号木棺墓を切る

※墓壙は，現状での数値による。

(4) 木　棺　墓

上・中段において甕棺墓と軸を等しくして配列され，総数7基確認した。木棺墓には，

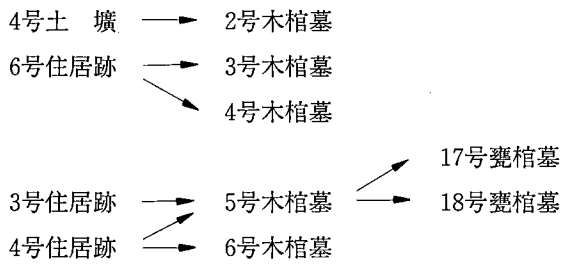
Ⅰ類　両側の小口に石を立てるもの（3～6号木棺墓）

Ⅱ類　片側の小口のみに石を立てるもの（1？・2号木棺墓）

Ⅲ類　小口に石を立てないもの（7号木棺墓）

の3タイプがある。

何れも副葬品・土器を伴っておらず，時期は明瞭にし難いが，弥生中期前半の甕棺墓に切られているので，大略弥生中期初頭～前半であろう。他の遺構との切合い関係は，下記のとおり（矢印は古→新を表す）。

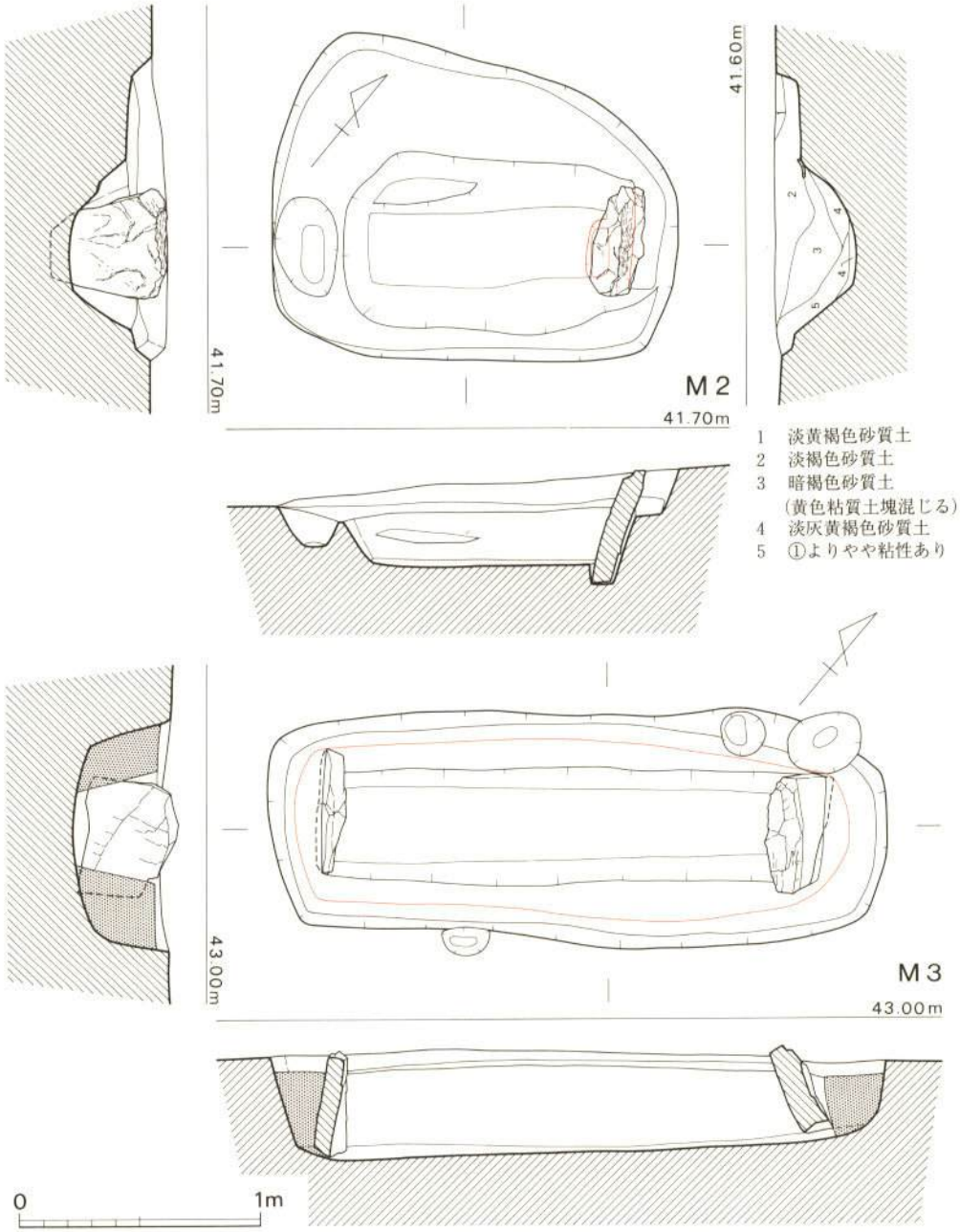


1号木棺墓（図版9-1・12-1，第39図）

上段斜面側に位置し，7・8号甕棺墓に切られる。墓壙は不整形を呈し，北東側に幅70cm，高さ39cmの石を立てている。また，屍床面には長さ80cm，幅52cm，厚さ10cmの石を敷いている。小口石側で幅76cm，高さ42cmを測る。南西側は削平により，詳細は不明。また，遺物の出土も無かった。石材は雲母片岩である。

2号木棺墓（図版12-2，第51図）

中段の北東側に位置し，4号土壙を切る。北東側小口に石を立てたⅡ類の木棺墓である。墓壙は長軸168cm，短軸134cmを測る不整方形を呈し，二段に掘っている。屍床はほぼ水平で，長軸93cm，短軸31cmで，石を立てている北東側が頭位になるか。小口石は上端幅45cm，下端幅22cmの逆台形状で，高さは50cmを測り，屍床を8cm掘り下げ，斜めに立てている。石材は雲母片岩を使用していた。南西側の穴は撹乱により，当木棺墓とは無関係である。また，埋土は自然堆積を示し，木棺痕跡は確認できなかった。或は，小口部に立石を有する土壙墓になるか。主軸方位はN50°Eを示す。弥生土器片が出土しているが，図示不可能。



第 51 図 2・3号木棺墓実測図 (1/30)

3号木棺墓（図版13-1，第51図）

上段に位置し，6号住居跡を切っている。両小口部に石を立てたⅠ類の木棺墓である。墓壙は隅丸長方形を呈し，長軸256cm，短軸98cm，深さ43cmを測る。石を立てた内側と外側では，埋土の色調が異なり，内側は黒く濁っていた。墓壙を掘り，小口石を立てて側板を押え，裏込め土を入れたものと考えられる。屍床は南西側に傾斜しており，長軸197cm，短軸31cmを測る。北東側が頭位になるか。小口石は屍床を掘込まず立てただけで，幅は北東側46cm，南西側51cm，高さは北東側38cm，南西側44cmを測る。石材は北東側が雲母片岩で，南西側は安山岩であった。主軸方位は，N50°Eを示す。弥生土器片が出土しているが，図示できなかった。

4号木棺墓（図版13-2，第53図）

3号木棺墓の1m北東側に位置し，6号住居跡を切っている。両小口部に石を立てたⅠ類の木棺墓である。墓壙は隅丸長方形を呈し，長軸238cm，短軸151cm，深さ44cmを測る。屍床はほぼ水平で，長軸179cm，短軸43cmを測る。太めで高い小口石を立てている北東側が頭位になるか。小口石は屍床を若干掘込んで立てており，幅は北東側71cm，南西側79cm，高さは北東側55cm，南西側43cmを測る。石材は北東側が雲母片岩で，南西側は安山岩であった。主軸方位は，N37°Eを示す。木棺裏込め土内より土器片が出土しているが，図示不可能。

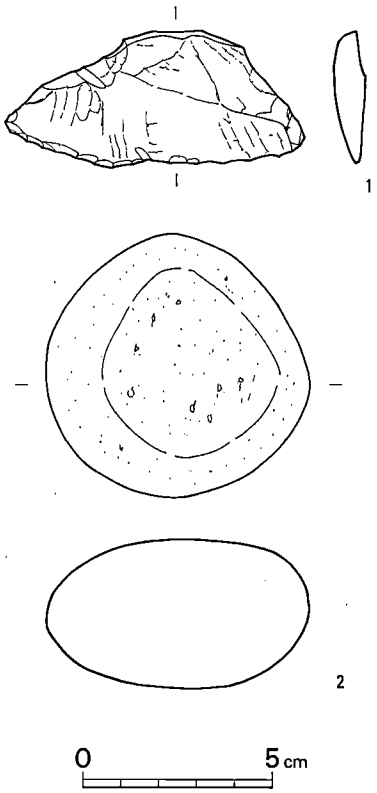
出土遺物（図版23-2，第52図）

石　器（2）　2は裏込め土出土のすり石で，径7.0cm，厚さ3.9cmで，重さ140gを量る。爪で傷が付かない程堅いが，軽い感じのする石材である。

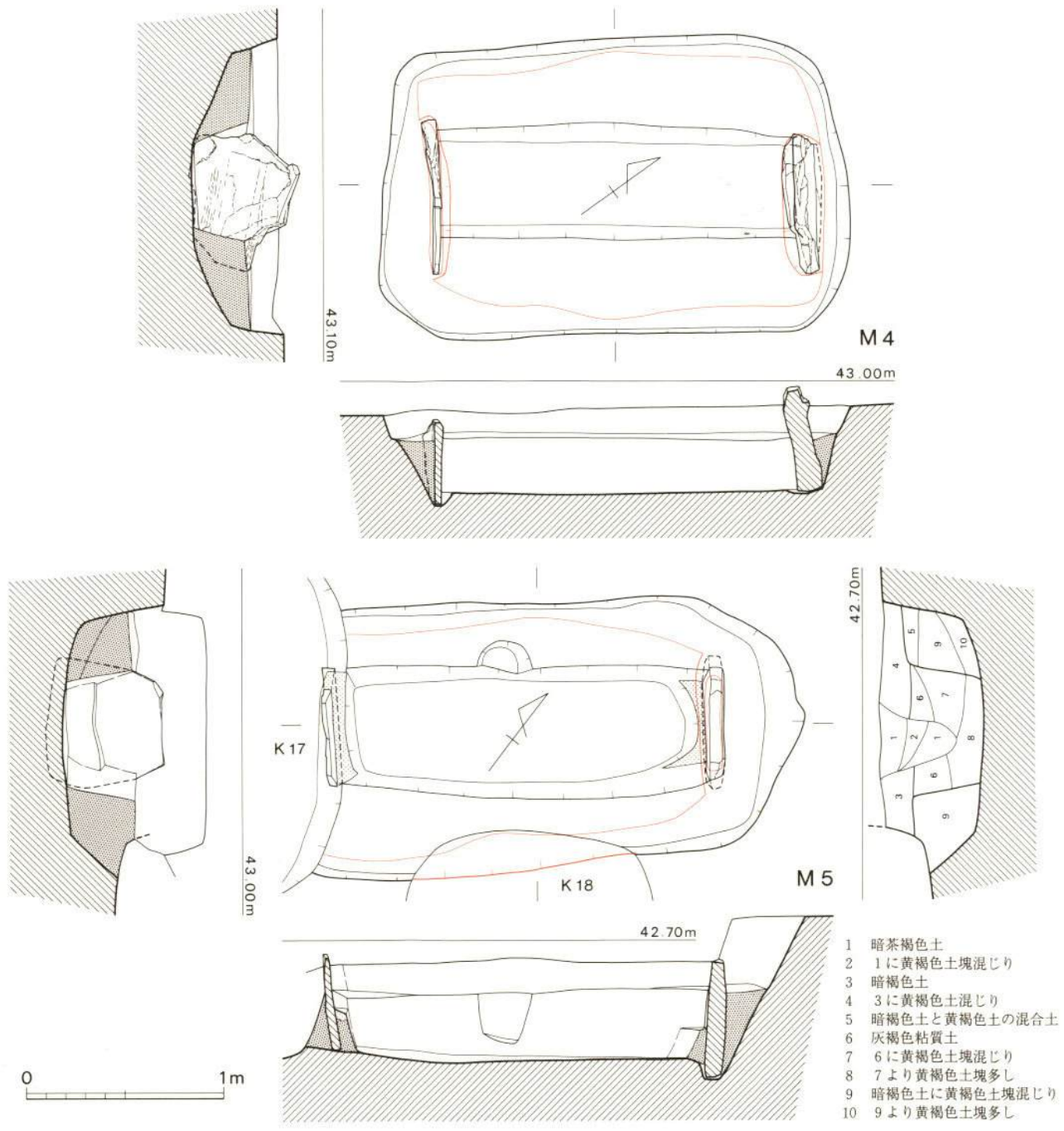
5号木棺墓（図版14-1，第53図）

6号木棺墓の2.6m南西側に位置するⅠ類の木棺墓である。3・4号住居跡を切り，17・18号甕棺墓に切られる。墓壙は隅丸長方形を呈し，長軸257＋αcm，短軸140cm，深さ71cmを測る。屍床はほぼ水平で，長軸167cm，短軸52cmを測る。太めで高い小口石を立てている北東側が頭位になるか。北東側小口石は屍床を12cm掘込んで立てており，幅69cm，高さ60cm，南西側は幅61cm，高さ49cmで，青灰色粘土で押さえていた。

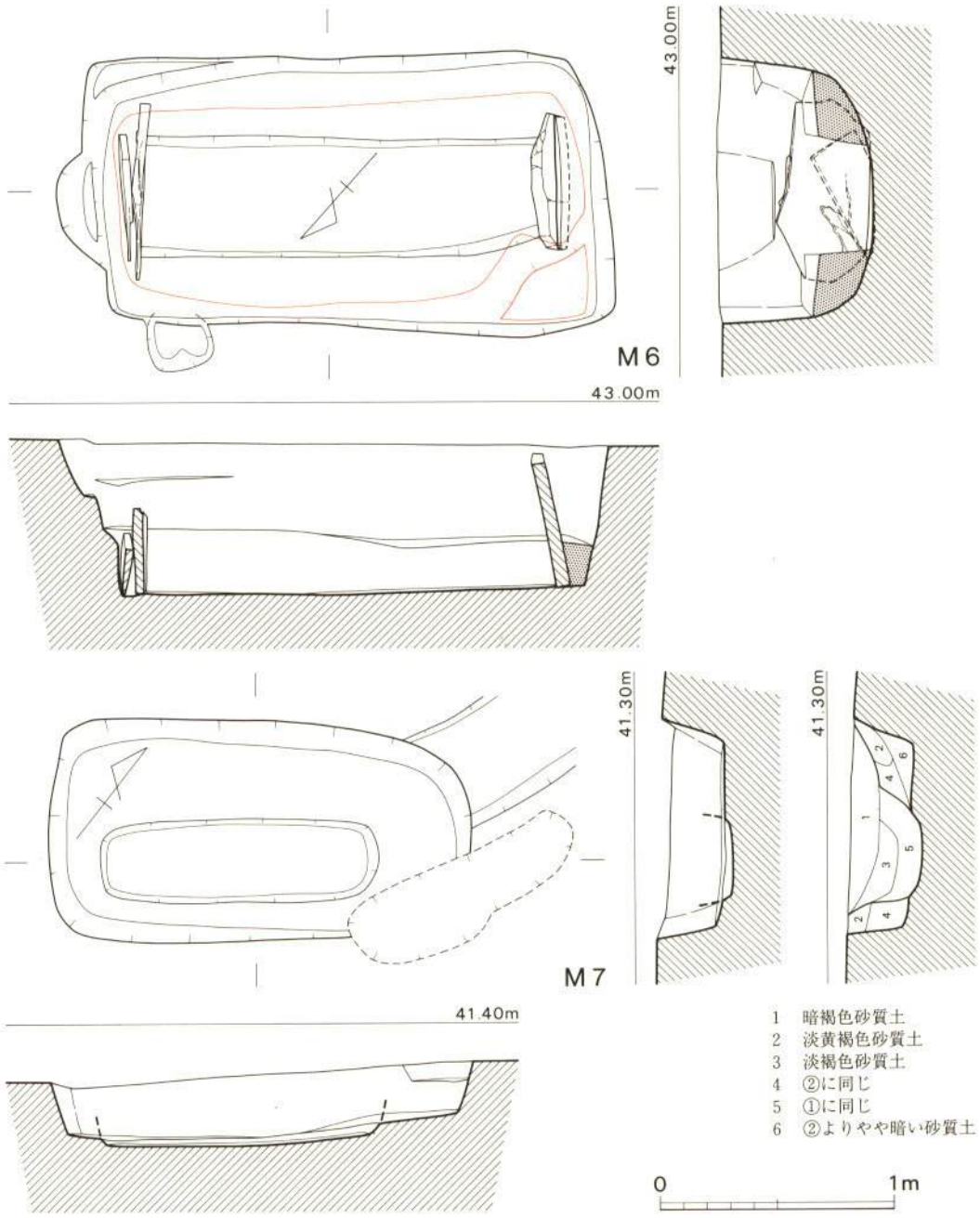
石材は3・4号墓同様，北東側が雲母片岩で，南西側



第52図　木棺墓出土石器実測図（1/2）



第 53 図 4・5号木棺墓実測図（1/30）



第 54 図　6・7号木棺墓実測図（1/30）

は安山岩を使用している。主軸方位は，N53°Eを示す。

出土遺物（図版31-2，第52図）

石　器（1）　1は裏込め土出土のサヌカイト製削器で，長さ7.9cm，幅3.6cmで，重さ23.6gを量る。側縁は両面より調整剥離を行う。

6号木棺墓（図版14-2，第54図）

3号木棺墓のすぐ南西側に位置し，4号住居跡を切っている。両小口部に石を立てたⅠ類の木棺墓である。墓壙は隅丸長方形を呈し，長軸218cm，短軸121cm，深さ64cmを測る。屍床はほぼ水平で，長軸176cm，短軸43cmを測る。幅が広い北東側が頭位になろう。小口石は屍床を掘り込まず，そのまま立てており，幅は北東側75cm，南西側58cm，高さは北東側36cm，南西側58cmを測る。石材は両小口とも安山岩で，北東側は2枚立てている。主軸方位は，N48°Eを示す。墓壙・棺内からの遺物の出土は無かった。

7号木棺墓（第54図）

中段中央で検出した木棺墓で，14号甕棺墓の4m南西側に位置する。土層観察によると，墓壙底から15cmの高さまで立上がりの確認ができたことから木棺墓とした。墓壙は長軸181cm，短軸96cmを測る隅丸長方形を呈し，二段に掘っている。屍床は北東壁に偏し，床面は南西側に若干傾斜する。長軸111cm，幅31cmを測り，深さは墓壙底より5cm下がる。他の木棺墓同様，北東側が頭位になろう。主軸方位は，N51°Eを示す。墓壙・棺内からの遺物の出土は無かった。

表3　木棺墓一覧表

番号	平面形	墓壙（cm）			屍床（cm）			小口石		主軸方位	類別	備考
		長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	深さ	北	南			
1	不整形	121	123	53	100	70	53	○		N51° E	Ⅱ類	敷石？あり
2	不整方形	168	134	40	93	31	22	○		N50° E	〃	D4を切る
3	隅丸方形	256	98	43	197	31	35	○	○	N50° E	Ⅰ類	住6を切る
4	〃	238	151	44	179	43	29	○	○	N37° E	〃	〃
5	〃	257	140	71	167	52	36	○	○	N53° E	〃	K16・17に切られる
6	〃	218	121	64	176	43	28	○	○	N48° E	〃	住4を切る
7	〃	181	96	30	111	31	5			N51° E	Ⅲ類	

※墓壙は，現状での数値による。

表4　土壙墓一覧表

番号	平面形	墓壙（cm）			屍床（cm）			主軸方位	備考
		長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	深さ		
1	楕円形	146	81	22	96	35	14	N43° E	住6を切る
2	不整長円形	170	95	30	124	32	17	N57° E	

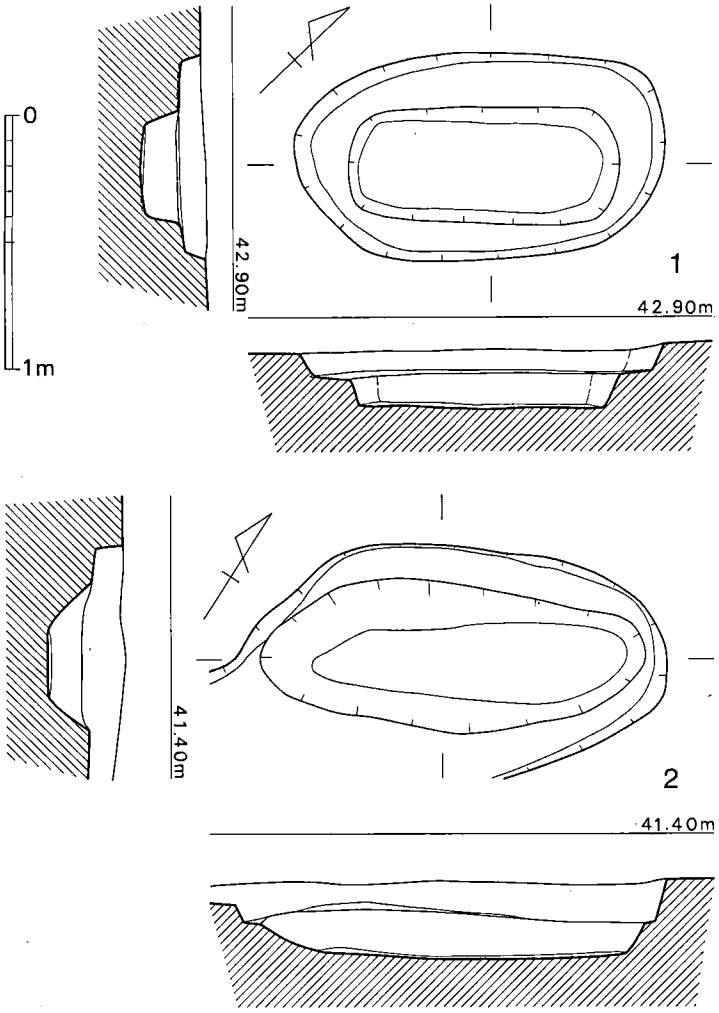
※墓壙は，現状での数値による。

(5) 土　壙　墓

上中段において2基検出した。出土遺物が無く時期不詳であるが，甕棺墓・木棺墓と軸を等しくして配されることから，それらと同一時期の所産と考えられる。

1号土壙墓（図版15-1，第55図）

6号住居跡廃絶後に掘り込まれた土壙墓で，3号木棺墓の3m東側に位置する。土層観察用のベルトを残して掘り下げたが，立上がりは確認できなかったことから土壙墓とした。また，



第 55 図　1・2号土壙墓実測図（1/30）

7号木棺墓の墓壙は隅丸長方形を呈するが，当土壙墓は長円形でかつ屍床と墓壙間が狭いことからも性格を異にするものと思われる。墓壙は長軸146cm，短軸81cm，深さ22cmを測る長円形を呈し，二段に掘っている。屍床はほぼ水平で，長軸96cm，短軸35cm，深さ14cmを測る。主軸方位はN43°Eを示す。遺物の出土は無かった。

2号土壙墓（図版15-2，第55図）

中段中央部で検出した土壙墓で，11号甕棺墓の3m南側に位置する。墓壙は長軸170cm，短軸95＋αcm，深さ30cmを測る不整円形を呈し，1号土壙墓同様二段に掘っている。屍床はほぼ水平で，長軸124cm，短軸32cm，深さ17cmを測る。幅の広い北東側が頭位であろう。主軸方位は，N57°Eを示す。遺物の出土は無かった。

(6) 土　　壙

調査区の全域において8基確認した。弥生期の土壙が大半を占める。他の遺構との切合い関係は，下記のとおりである（矢印は古→新を表す）。

3号住居跡 → 3号土　壙 → 2号住居跡
　　↘
　　3号甕棺墓 → 1号土　壙
2号土　壙 → 4号住居跡
4号土　壙 → 2号木棺墓

1号土　壙（図版7-3，第56図）

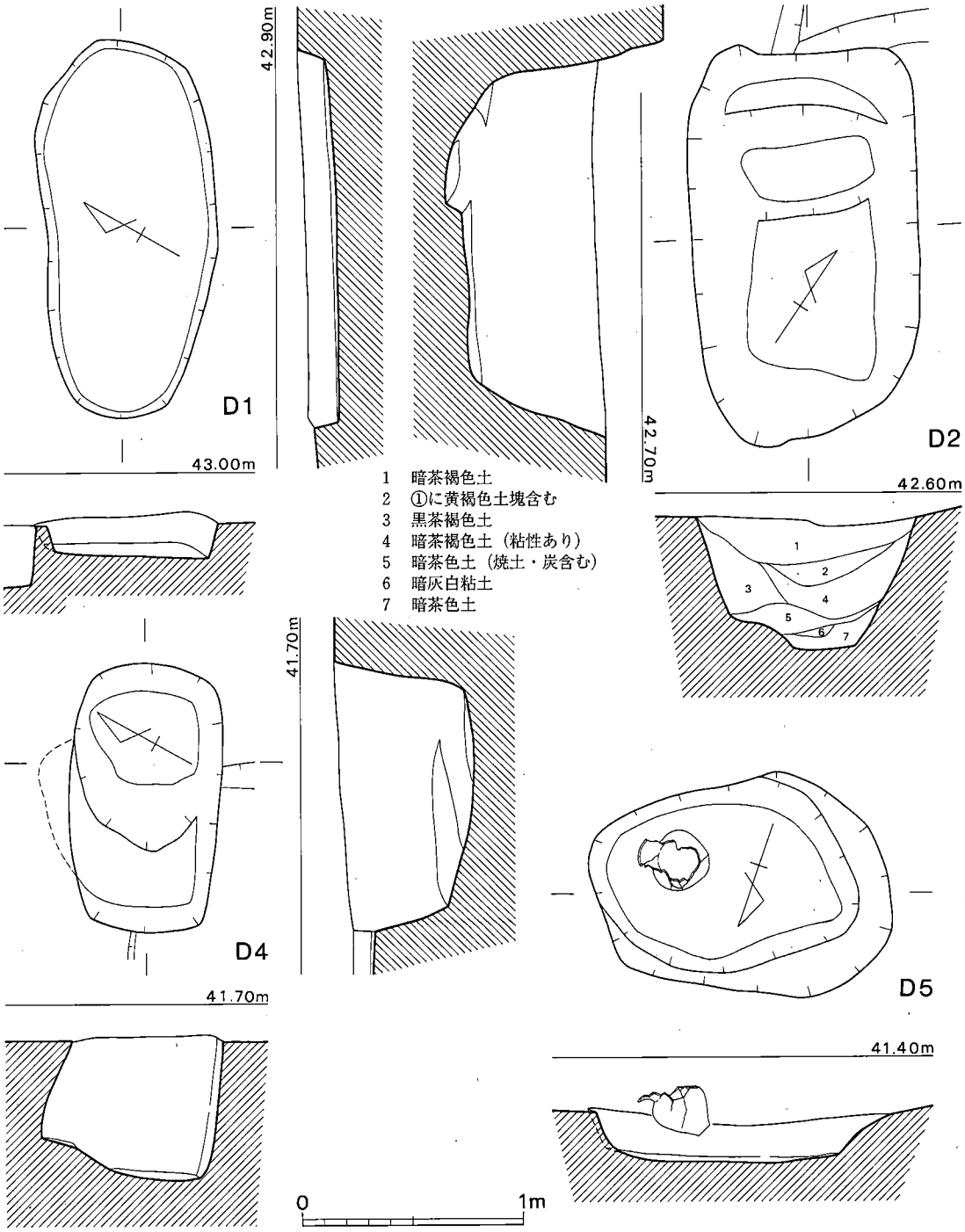
1・3号住居跡，3号甕棺墓を切る楕円形の土壙であり，長軸170cm，短軸79cm，深さ14cmを測る。主軸方位はN60°Eを示す。遺物の出土は無く，時期不明。

2号土　壙（第56図）

4号住居跡床面下層より検出した土壙であり，長軸182cm，短軸102cm，深さ62cmを測る隅丸方形を呈する。底面北寄りに幅50cm，深さ8cmのピットを有する。埋土は，暗茶褐色土を主体とする自然堆積を示す。遺物は黒曜石・サヌカイトの剝片が出土したのみである。

3号土　壙（第59図）

上段南端部で検出した土壙で，3号住居跡を切り，2号住居跡に切られる。長軸256cm，短

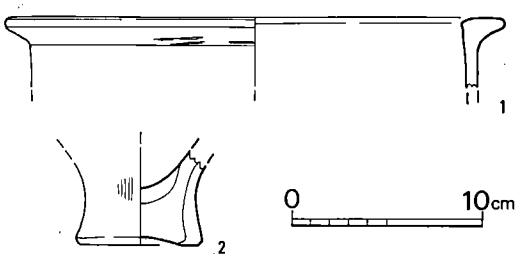


第 56 図　1・2・4・5号土壙実測図（1/30）

軸109cm，深さ47cmを測る長円形を呈する。埋土は暗褐色土であり，主軸方位はN45°Eを示す。埋土中より土器が出土した。

出土遺物（第57図）

土　器（1・2）　1は甕の口縁部破片で，逆L字状口縁を呈する。口縁部平坦面は水平で，復原口径は26.6cmを測る。胎土に2～3mm大の長石・石英・赤褐色粒を含む。焼成はやや軟質で，灰褐色を呈する。2は底径6.8cmを測る上底の底部片である。外面ハケ目，内面ナデ調整による。胎土に黒曜石粒を多く含む。



第 57 図　3号土壙出土土器実測図（1/4）

当土壙は，2号住居跡に切られるものの，両者には明瞭な時期差はない。

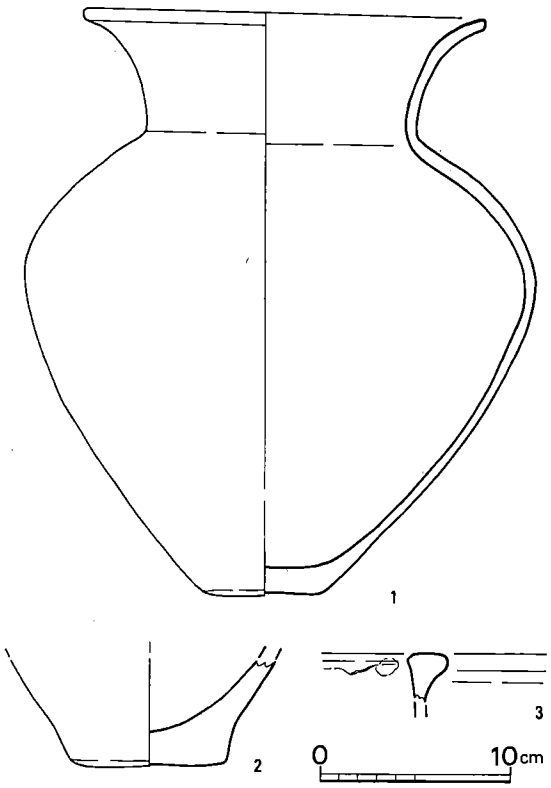
4号土　壙（図版16-1，第56図）

中段で検出した土壙で，2号木棺墓に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸122cm，短軸70cmを測る。底面は2段に掘られ，西側に30cm程のオーバーハングしたテラスを有する。再深部までの深さは，61cmを測る。弥生土器片が出土したのみである。

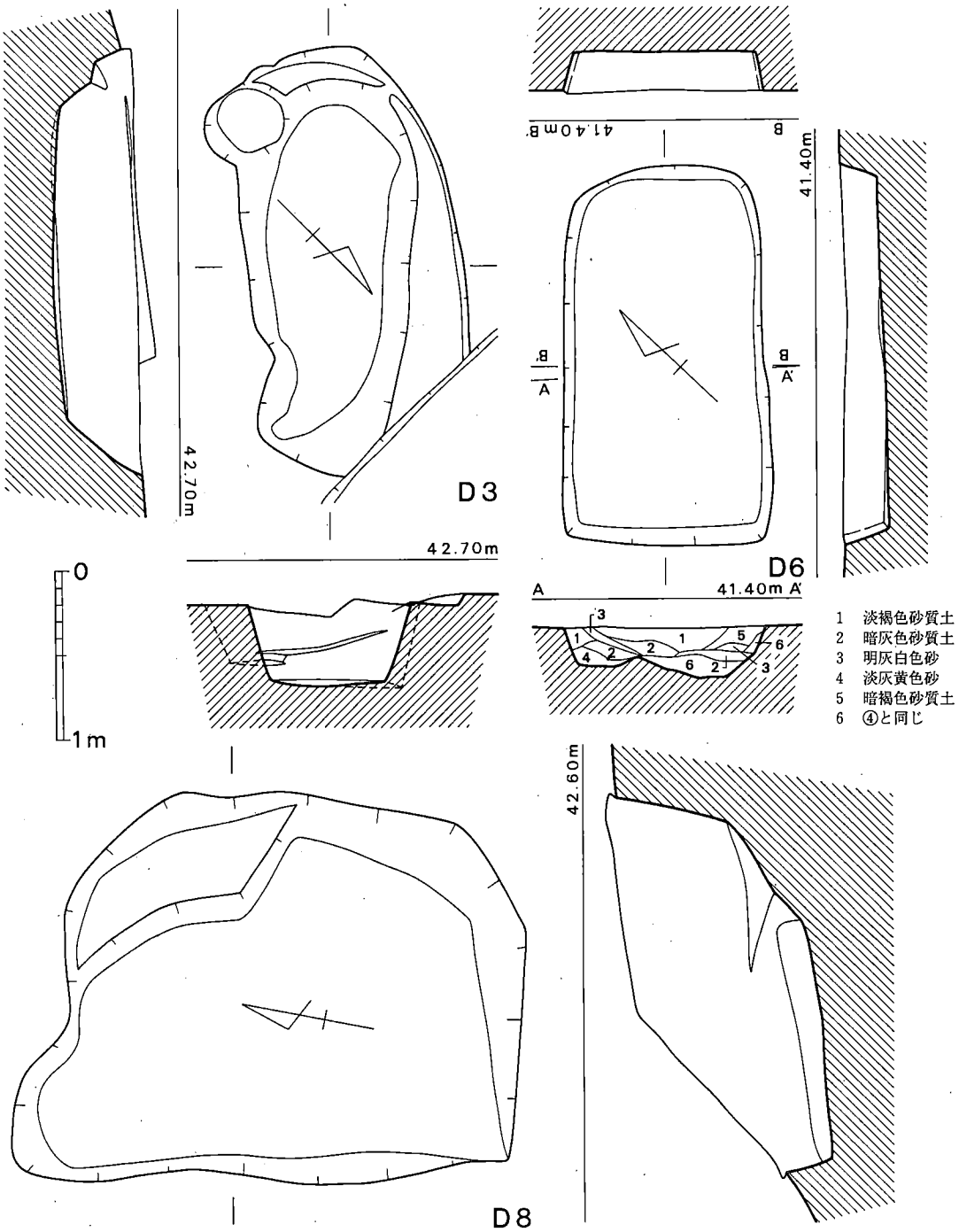
5号土　壙（図版16-2，第56図）

9号住居跡のすぐ西側で検出した土壙で，調査当初は土壙墓とした遺構である。不整方形を呈し，長軸127cm，短軸94cm，深さ22cmを測る。底面はほぼ水平で，壺が底面より11cm浮いた状態で出土した。主軸方位はN70°Eを示す。平面形が不整形であることから土壙に変更したが，墓としての可能性も残す。

出土遺物（図版29-2，第58・65図）



第 58 図　5号土壙出土土器実測図（1/4）



第 59 図　3・6・8号土壙実測図（1/40）

土　器（1～3）　1は広口壺で，器高31.4cm，口径21.3cm，頸部径14.4cm，胴部最大径27.0cm，底径5.6cmを測る。口縁部は大きく外方に開き，口唇部は単に丸く納めるのみ。頸部はよく締まり，口径より大きな胴部に移行する。底部は締りの悪い平底で，1.5cmと厚い。凸帯・沈線等の装飾は施していない。調整は摩滅により不明であるが，内底面にはユビオサエ痕がみられる。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母・黒曜石を多く含み，割合に雑である。焼成はやや軟質で，内面暗灰褐色，外面茶褐色を呈する。

2は底部破片で，底径8.3cmを測る。摩滅しているが，外面はヘラミガキされ，壺になるか。3は口縁部小破片で，口唇部は肥厚する。胎土に黒曜石粒を含む。

石　器（第65図1）　1は三角形を呈し，両端部を欠損するが，側縁には両面より調整剝離を施しており，削器になるか。サヌカイト製で，重さ9.35ｇを量る。

当土壙の時期は，1の広口壺により弥生中期初頭と考えられる。

6号土　壙（第59図）

２号墓の1ｍ北東側に位置する。隅丸方形を呈し，長軸227cm，短軸123cm，深さ27cmを測る。底面は南西側にやや傾斜している。主軸方位はN47°Eを示し，弥生墓地群とほぼ等しい。弥生土器片が出土したが，図示に耐えない。

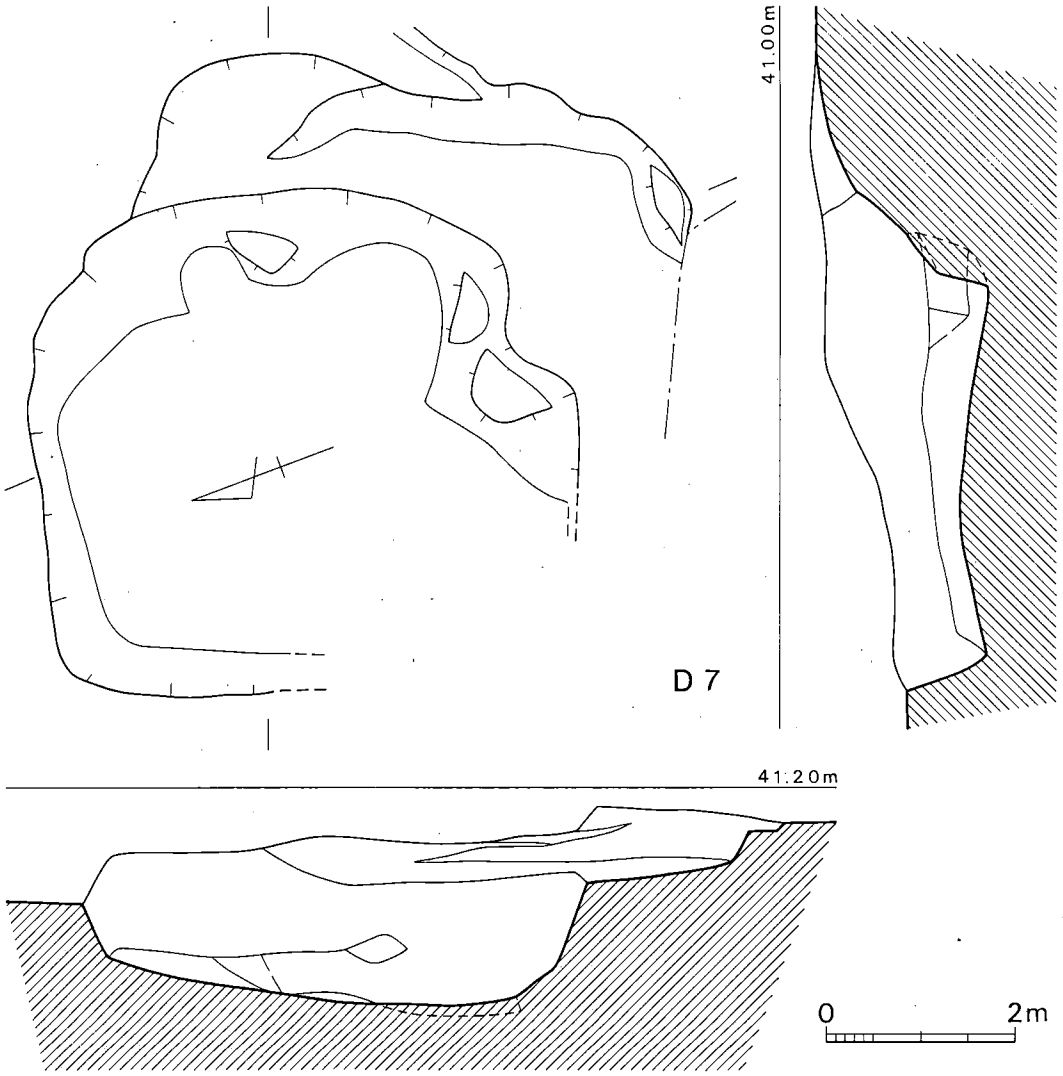
7号土　壙（図版16-3，第60図）

中段西端部で検出した大型の土壙で，長軸5.76ｍ，短軸5.28ｍ，深さ1.92ｍを測る不整方形を呈する。埋土上位は黄褐色粘質砂で，下位は暗青灰色粘土・青灰色砂であった。掘り下げていくうちに水が染みだし，ポンプアップしながらの調査となった。弥生土器が多量に出土しており，廃棄穴と考えられる。

出土遺物（図版22・29-3・30-1・31-2・33-3，第61～65図）

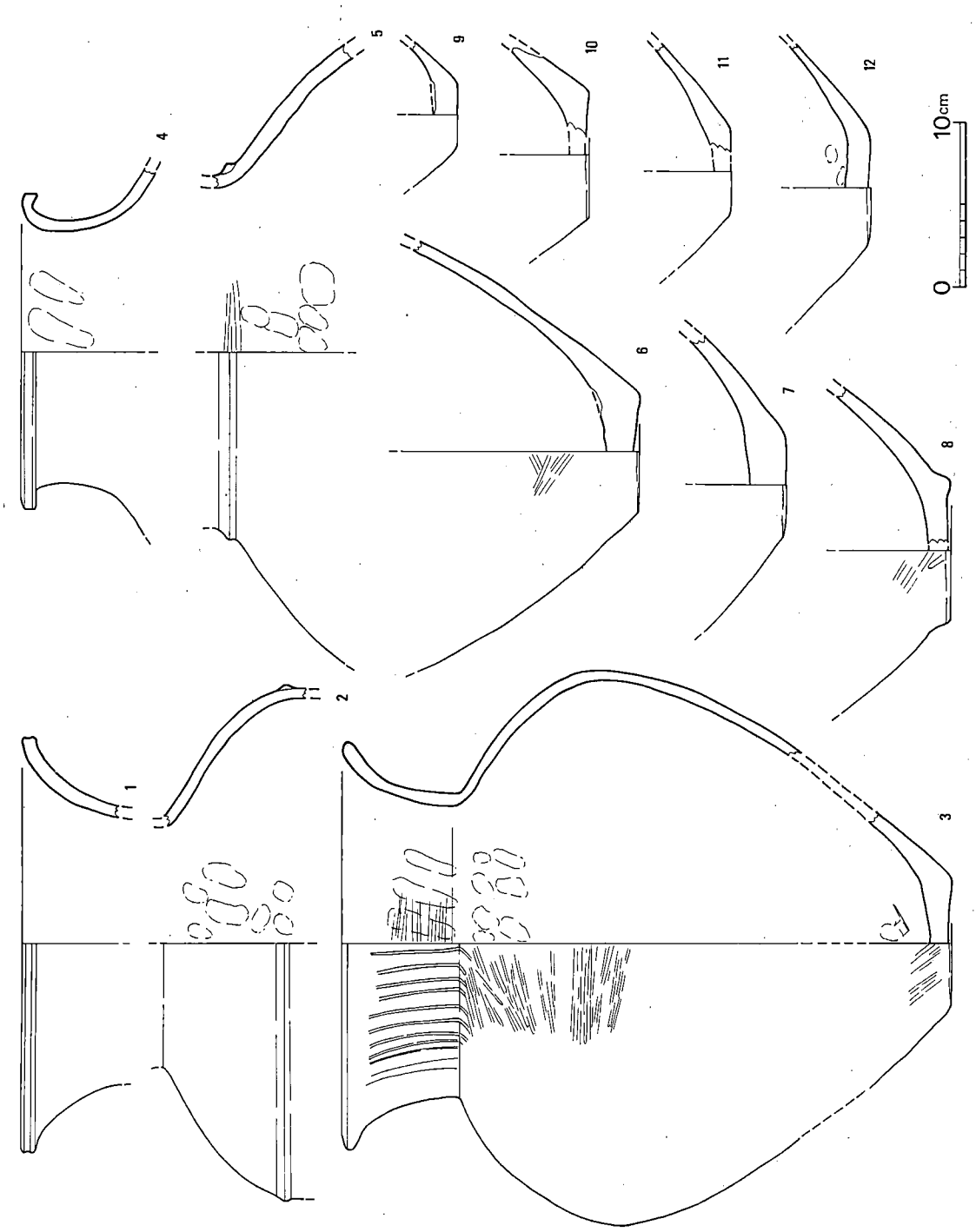
土　器（1～67）　1～12は壺である。1は広口壺の口縁部破片で，口唇部は若干窪む。口径は25.6cmに復原した。口唇部ヨコナデ，内面ヘラミガキによる。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母・赤褐色粒を含む。2は頸部～胴部中位にかけての破片で，胴部には断面三角凸帯を貼付する。内面にはユビオサエ痕がみられる。3も広口壺で，底部と接合しないものの同一個体である。口径25.2cm，頸部径18.8cm，胴部最大径34.6cm，底径8.0cmで，器高は37cm程になろう。器面調整はヘラミガキを主体とし，口唇部ヨコナデ，頸部内面ユビオサエ・ユビナデアゲにより，口縁部外面には暗文を施す。胎土に2～4mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で，内外面とも淡灰色を呈する。また，肩部と底部には黒斑がみられる。

4は復原口径19.3cmを測る壺の口縁部破片で，口縁部は大きく屈曲し，口縁端部は外方に垂れ下がる。内面はナデ・ユビオサエによる。5は頸部～肩部にかけての破片で，頸部には断面

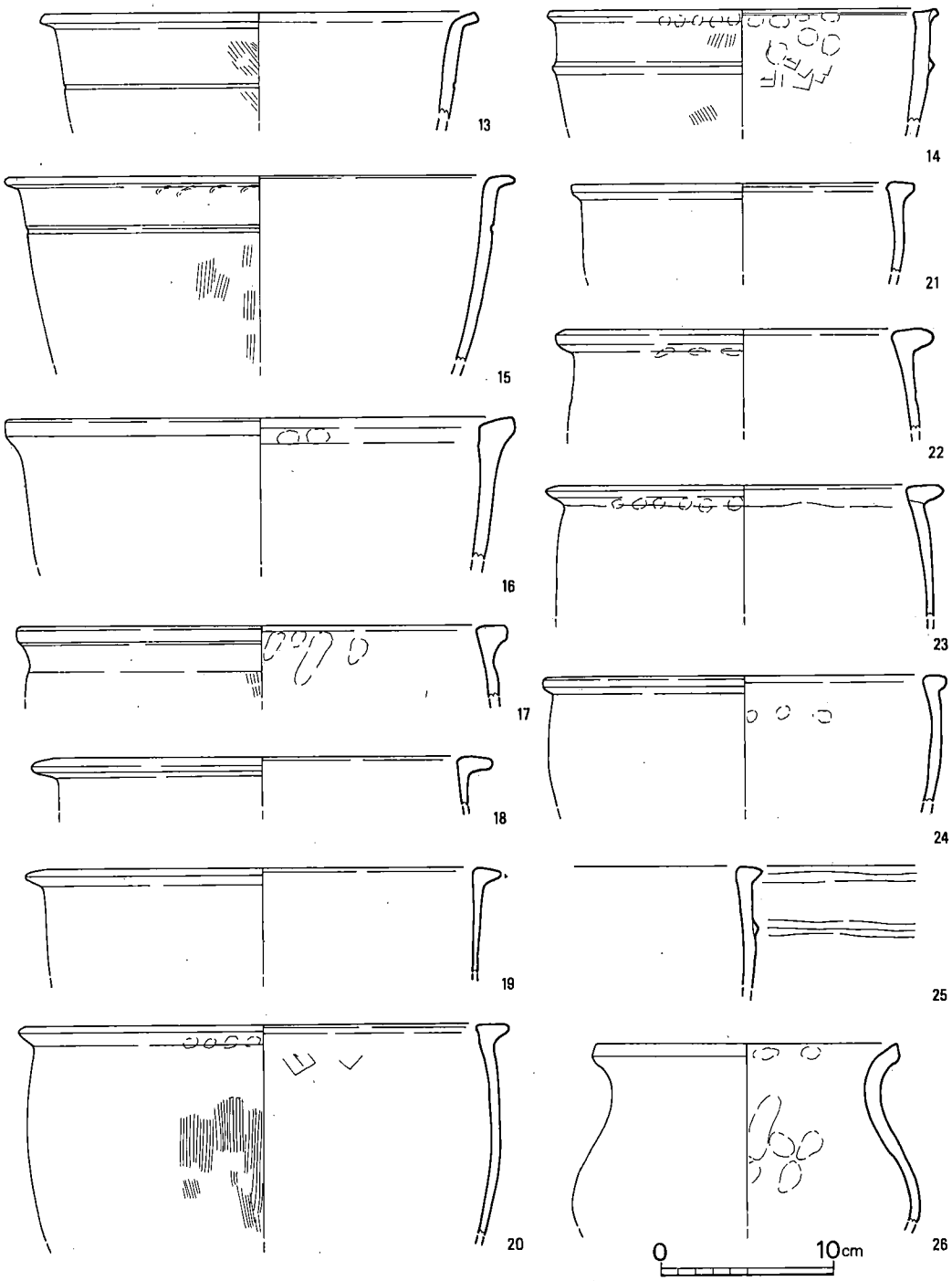


第 60 図　7号土壙実測図（1/80）

三角凸帯を貼付する。調整は内外面ともヘラミガキによる。胎土に黒曜石粒を含む。焼成は良好で，内外面とも茶褐色を呈する。6～12は底部破片で，6・8が上底で他は平底である。器面の摩滅が著しいが，外面ヘラミガキ，内面ナデないしはミガキであろう。6はさほど開いていないが，7・8・11・12の胴部はかなり張るものと思われる。底径は6が7.0cm，7は6.2cm，8は8.4cm，12は6.5cmで，9は3.9cmと小さいことから小型の壺になろう。何れも胎土に長石・石英・雲母を多く含む。埋土下位の出土である。



第 61 図　7 号土壙出土土器実測図① (1/4)



第 62 図　7 号土壙出土土器実測図②（1/4）

13～25は甕の口縁部破片である。13・15の口縁部は頸部を外方に小さく折り曲げたもので，口唇部は丸く納める。ともに頸部のやや下位にヘラ描き沈線を巡らす。調整は外面ハケ目，内面ナデによる。口径は13が25.2cm，15は30.0cmに復原した。14は口縁部の外方に粘土帯を貼付し，逆L字状としたもので，口縁部は内外面ともユビオサエが顕著である。頸部のやや下位に断面三角凸帯を貼付している。外面はハケ目，内面は工具ナデ調整による。頸部外面には煤が遺存しており，煮炊き用の甕である。16の口縁部は肥厚し，口縁部平坦面は内傾する。口径は30.0cmを測る。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で，内外面とも暗茶褐色を呈する。17の口縁部は肥厚し，頸部を強くナデる。内面はユビナデアゲによる。

18～20・22・23は肥厚する逆L字状口縁を呈し，21・24の口縁部は突出度が弱い。20の調整は外面ハケ目（8～9条／cm），内面工具ナデによる。また，20・22・23の頸部外面にはユビオサエ痕がみられる。何れも胎土に長石・石英・雲母を多く含み，赤褐色粒を含むものもある。口径は18が27.1cm，20は22.8cm，21は20.0cm，24は23.6cmに復原した。25の口縁部は断面三角形を呈し，頸部のやや下位に断面三角凸帯を貼付している。

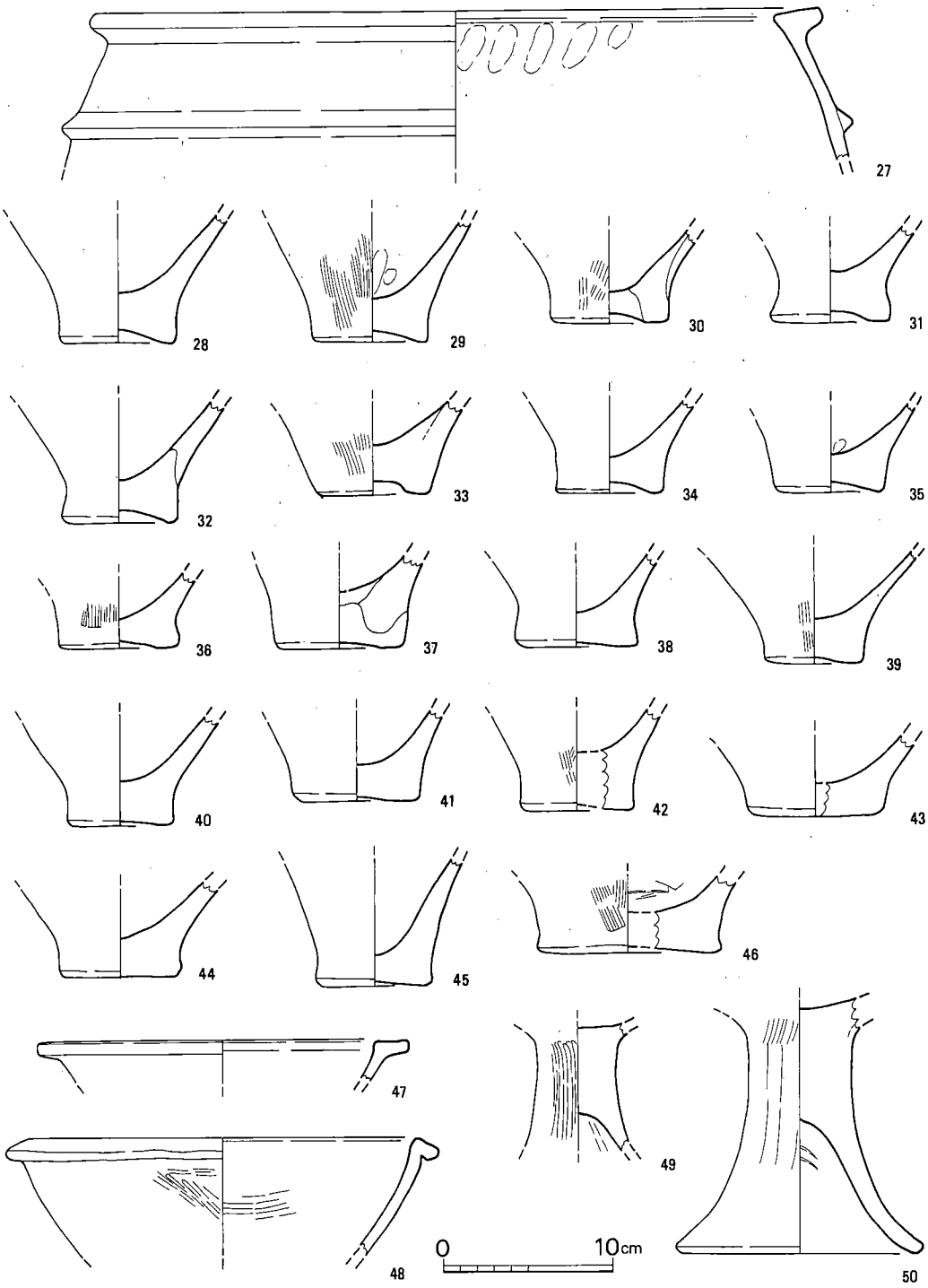
26は頸部が締まるS字形を呈し，口縁端部は上方に立つ。27は復原口径43.8cmを測る中型の甕である。口縁部は逆L字状を呈し，口縁部平坦面は内傾する。頸部のやや下位に太めの三角凸帯を貼付している。胴部はかなり膨らむようである。胎土に3～4mm大の長石・石英・雲母・赤褐色粒を多く含む。焼成はやや軟質で，内外面とも灰褐色を呈する。

28～46は底部破片である。上底のもの（28～32・34・35），高台状を呈するもの（33），若干窪む程度のもの（36～42・45），平底のもの（43・44）がある。調整は外面ハケ目，内面ナデによる。胎土に長石・石英・雲母を含み，36・38には黒曜石も含まれる。

47～52は高坏で，47の口縁部は水平方向に延びる。口径は22.4cmに復原した。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。埋土下位の出土である。48は口唇部に粘土を貼り付けたもので，断面蒲鉾状を呈する。内外面ともヘラミガキされ，割合に丁寧なつくりである。胎土に長石・石英・雲母を含む。焼成は良好で，淡灰色を呈する。

49は脚柱部破片で，外面は縦方向のヘラミガキによる。50は脚部破片で，残高15.2cm，脚柱部径6.0cm，脚径14.8cmを測る。外面はミガキではなく，板状工具による面取り風のナデ，内面はナデによる。胎土に2～4mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で，色調は内外面ともこげ茶色を呈する。また，脚裾部には黒斑が2箇所にみられる。51は坏部から脚柱にかけての破片で，脚柱部内面は剝離している。52は脚裾部破片で，復原脚径は14.6cmを測る。胎土に長石・石英の他に黒曜石を含む。焼成は良好で，内外面とも灰褐色を呈する。

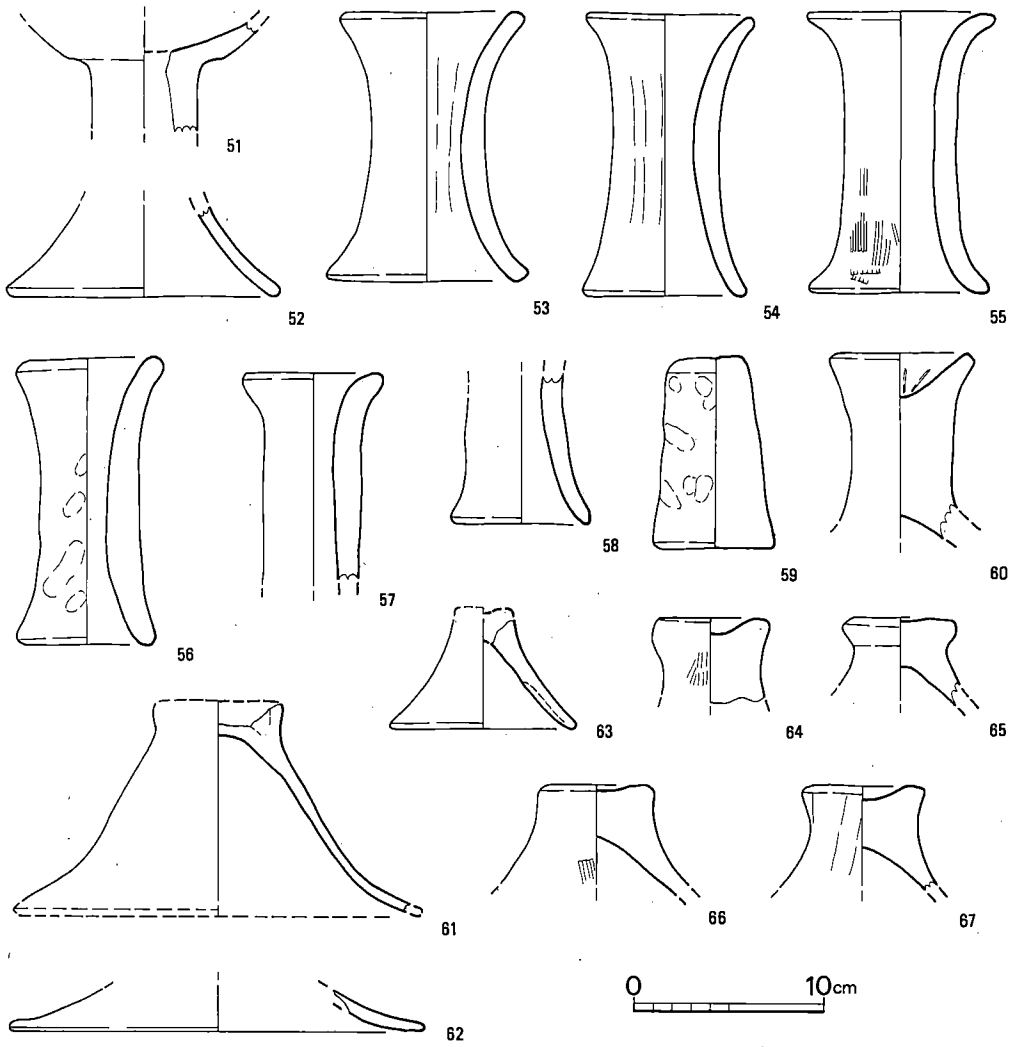
53～58は器台である。53～56の断面形は弓状にしなり，径の大きい方を脚とした。外面調整は，ハケ目・工具ナデ・ユビオサエにより，内面には成形時のシボリ痕がみられる。いずれも胎土に，長石・石英・雲母・赤褐色粒を多く含み，53～55・58には黒曜石も含まれる。器高は



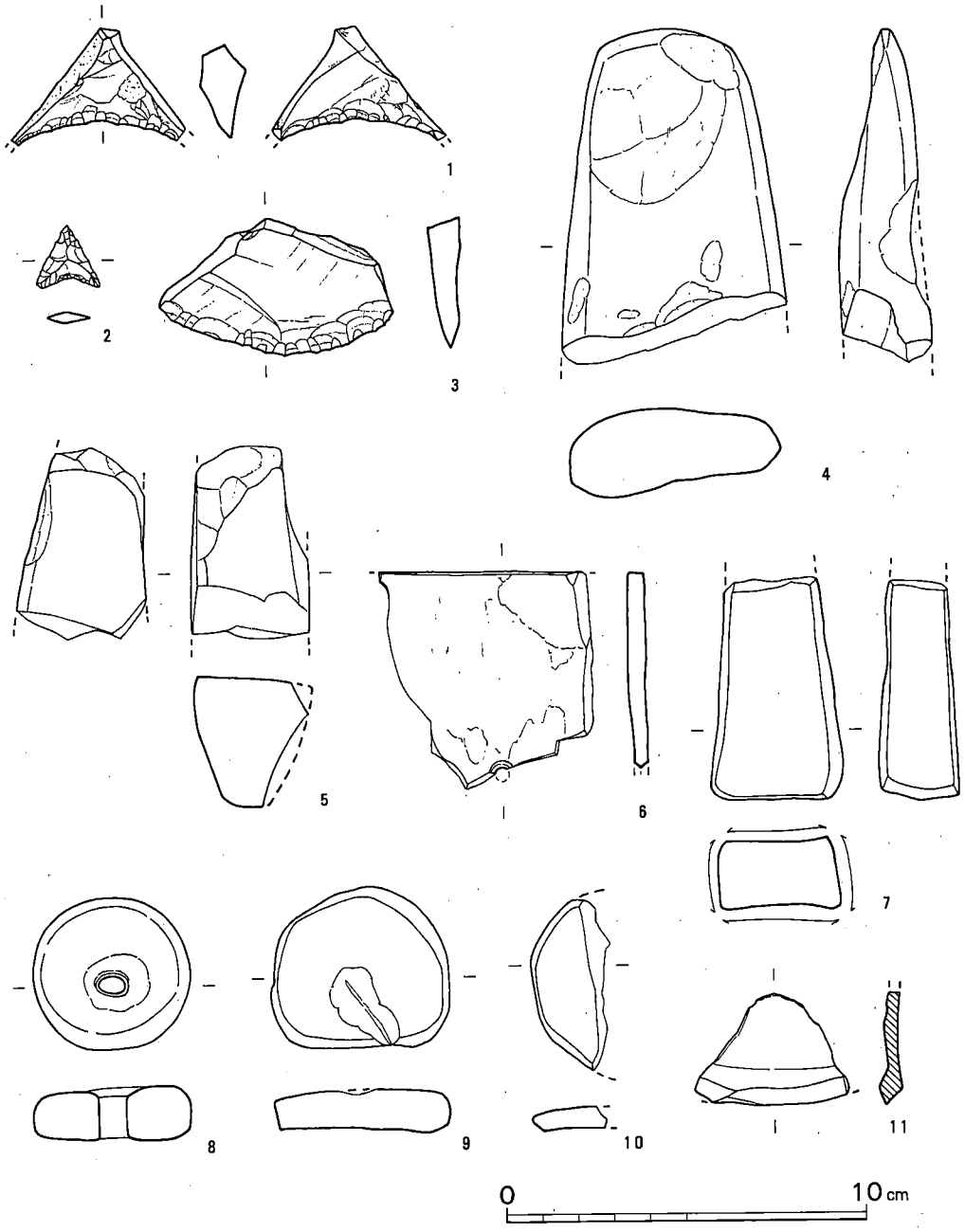
第 63 図 7 号土壙出土土器実測図③ (1/4)

53が14.2cm，54は14.9cm，55は14.7cm，56は15.3cmを測る。59は柱状の支脚で，器高10.1cm，上径3.8cm，底径6.6cmを測る。器面にはユビオサエ痕が明瞭にみられる。焼成はやや軟質で，茶褐色を呈する。埋土下位の出土である。

60～67は蓋である。60は下方が開き気味なので蓋の撮部としたが，撮部が長く，或は器台になるか。径は7.6cmである。61は撮部端と口縁端部を欠く。撮径は大きく，口縁部付近で大きく開く。摩滅により調整は不明。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母・黒曜石を含む。焼成はやや軟質で，色調は内面灰褐色，外面黄白色を呈する。器高は11.5cm程になろう。62は口縁部



第 64 図　7号土壙出土土器実測図④（1/4）



第 65 図　土壙出土石器・鉄器・土製品実測図（1/2）

の破片である。裾広がりで，端部は丸い。復原口径は22.0cmを測る。63は小型の蓋で，残高7.1cm，脚径10.0cmを測る。調整は摩滅により不明。胎土に2mm大の長石・石英・黒曜石を多く含む。焼成は良好で，黄灰色を呈する。

64～67は撮部破片で，64は径が小さく，厚手であることから蓋とした。65～67は甕の底部とは開き具合いが異なることから蓋とした。撮部径は64が6.2cm，65は6.0cm，66は6.2cm，67は6.5cmを測る。いずれも胎土に長石・石英・雲母を多く含む。

石　器（2～7）　2はサヌカイト製の石鏃で，長さ1.7cm，幅1.8cmで，重さは0.55ｇを量る。3は削器で，側縁を調整剝離している。サヌカイト製で，長さ6.5cm，幅3.8cm，重さ19.5ｇである。4は磨製石斧の基部片で，刃部を欠損する。凝灰岩製か。5は柱状片刃石斧の基部片で，頁岩製。6は石包丁の未製品であろうか，両面穿孔の円孔がある。右側縁は若干研磨しているが，上縁は自然面を留める。石材は粘板岩である。7は砂岩製の砥石で，残長6.3cm，幅3.7cm。

鉄　器（11）　埋土下位出土の鉄器で，三角形状を呈し，どの様な器形になるか不明。

土製品（8～10）　8は土製紡錘車で，径4.3cm，厚さ1.5cmで，重さは28.6ｇを量る。径0.7cmの円孔がやや偏して穿たれる。9・10は土器片利用の土錘である。9は4.5×5.0cmの大きさで，重さは26.3ｇ。10は半欠品。9・10ともに側縁は，打ち欠き後に研磨している。

当土壙は，弥生前期末～中期前葉にかけて土器が投棄されたものと考えられる。

8号土　壙（第59図）

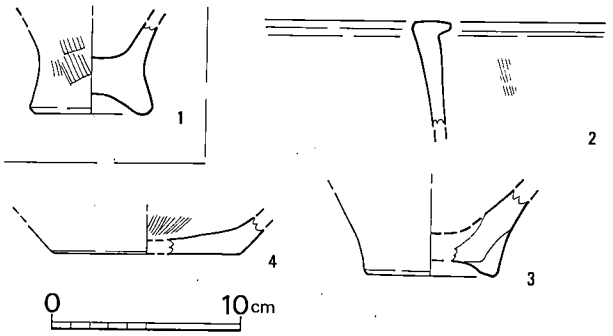
上段西端部で検出した土壙で，南北長276cm，深さは北壁で96cmを測る。北東側にテラスを有する。埋土は締りのない砂質土を主体とし，弥生土器の他に陶器が出土しており，後世の掘削と考えられる。

出土遺物（第66図）

土　器（1）　上底の底部破片で，底径は6.6cm。外面はハケ目，内面は工具ナデによる。

9号土壙出土土器（第66図）

9号土壙は後世の掘削と判明したので，遺物のみ紹介する。2は甕の口縁部片で，口唇部は僅かに突出する。3は底部片で，底径7.2cm。4は陶器製の擂鉢である。その他に，巴文の軒丸瓦・平瓦が出土している。



第 66 図　8・9号土壙出土土器実測図（1/4）

(7) 溝状遺構

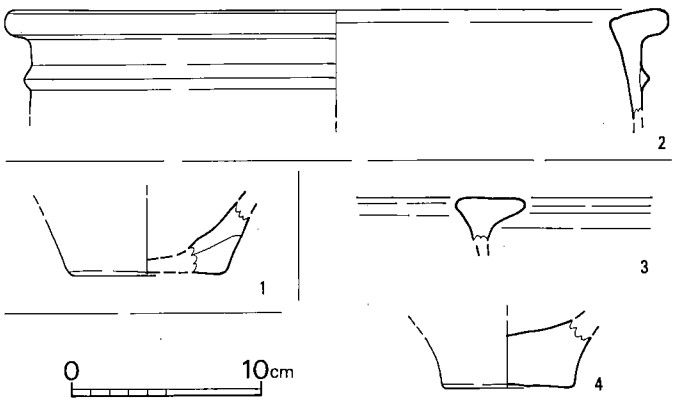
調査区全域において4条検出した。3・4号溝は谷状遺構埋没後に掘られたもので，奈良時代以降のものである。

1号溝（第68図）

上段西側で検出した溝で，2号建物跡のすぐ北側に位置する。東西長8.0m，東端部幅0.8m，西端部幅1.4m，深さは中央部で0.18mを測る。底面は西側に傾斜しており，溝内には大小のピットが存在する。埋土は暗灰色砂を主体とし，弥生土器・瓦片が出土した。

出土遺物（第67図）

土　器（1）　平底の底部破片で，底径8.4cmを測る。胎土に長石・石英・雲母を含む。焼成は良好で，暗褐色を呈する。



第 67 図　1～3号溝出土土器実測図（1/4）

2号溝（第68図）

10号住居跡の1m西側に位置する直線的な溝で，現状での長さ7m，北側幅0.82m，南側幅0.5mを測る。深さは削平により0.3mと浅い。埋土は暗褐色土で，弥生土器が出土した。

出土遺物（第67図）

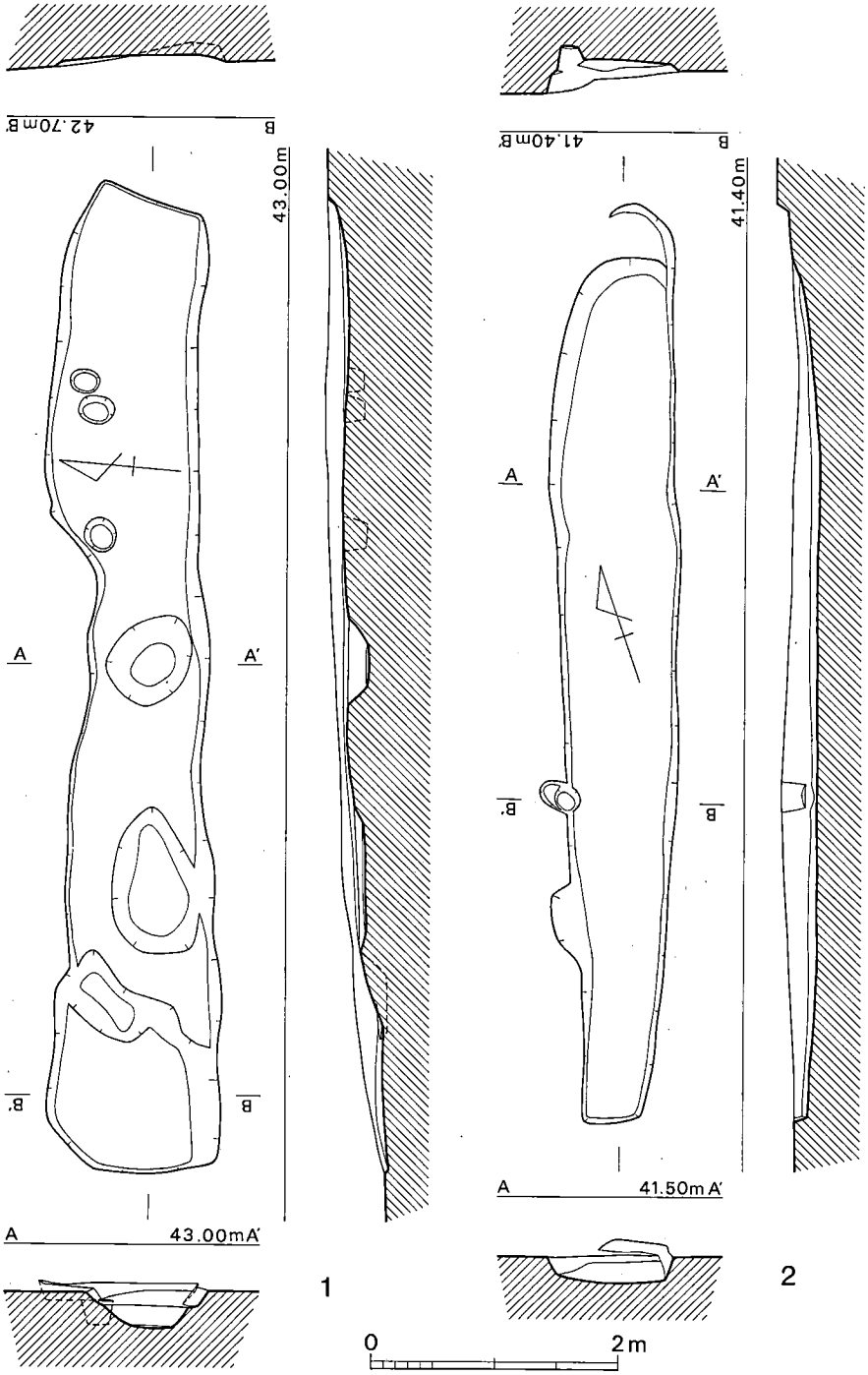
土　器（2）　逆L字状口縁の甕で，復原口径は35.4cm。頸部のやや下位に断面三角凸帯を貼付する。胎土に長石・石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で，灰黄色を呈する。

3号溝（付図1）

谷状遺構上面で検出した溝で，残長16m，幅1mを測る。埋土中から弥生土器が出土したが，混入品である。

出土遺物（第67図）

土　器（3・4）　3は甕の口縁部小片である。4は甕の底部破片で，底径は7.0cm。胎土に3mm大の長石・石英・赤褐色粒を多く含む。焼成はやや軟質で，内外面とも黄褐色を呈する。



第 68 図　1・2号溝実測図 (1/60)

(8) 谷状遺構

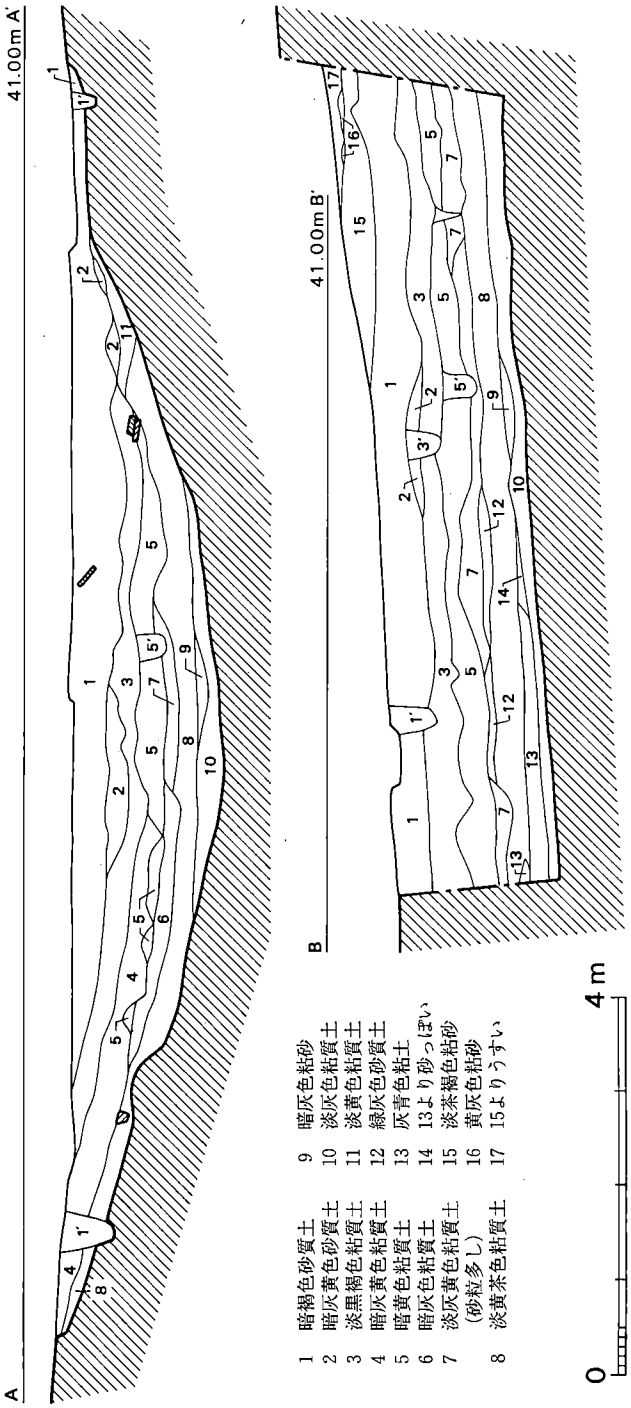
調査区の西側（下段）は，上中段の土層と異なり，暗褐色土であった。また，土器を含んでいたため，住居跡が切り合っているものとして線引きし，掘り下げた。

ところが，遺物は出土するものの柱穴・カマド・床面等は不明瞭で，住居跡に疑問を抱き床面にトレンチを入れた結果，地山が西側に傾斜しており，谷が存在するものと判明した次第である。住居跡としたのは，谷の肩部であった。

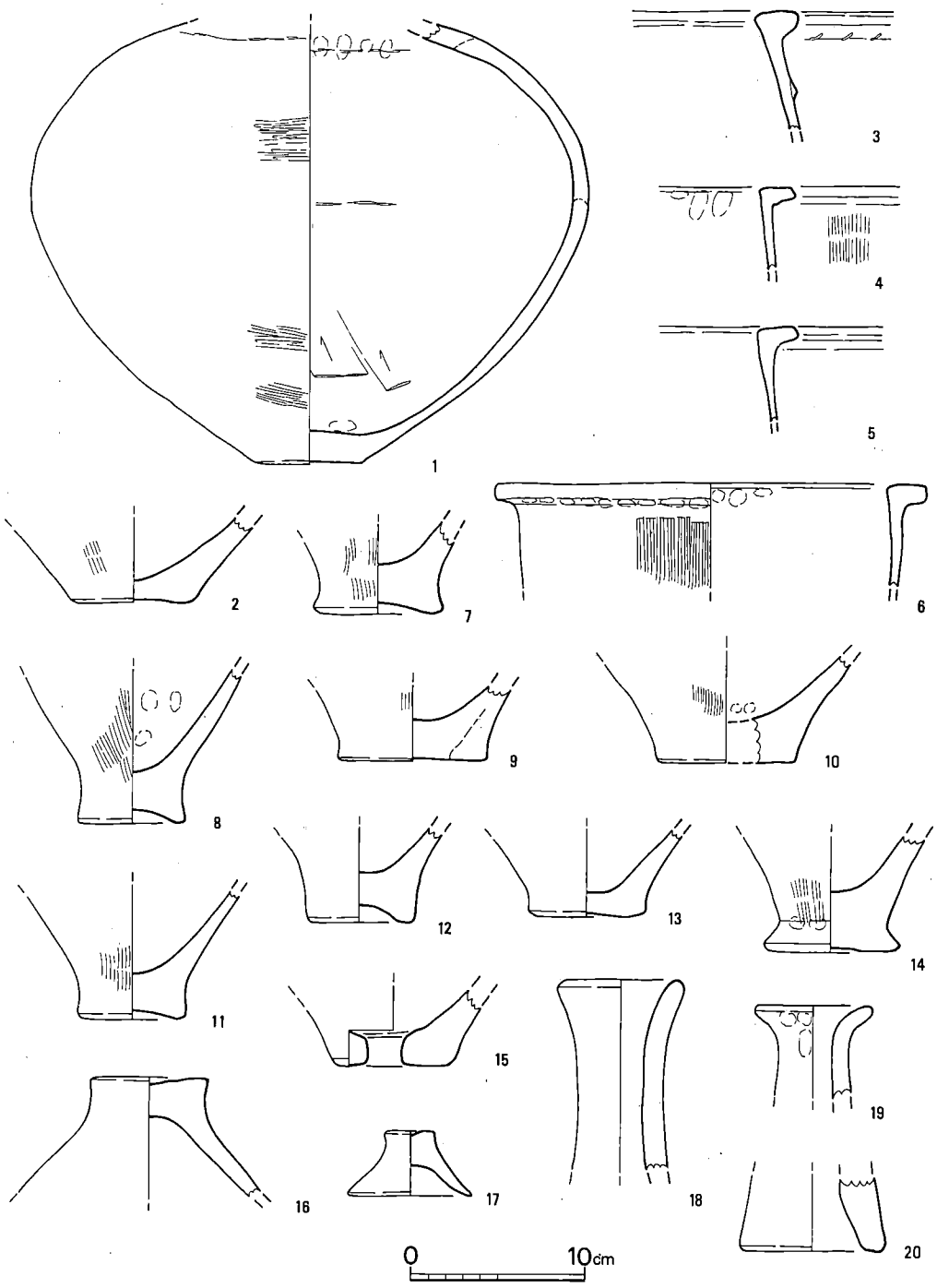
谷（図版17-1，第69図・付図1）

谷部中央に東西・南北方向に幅1mのトレンチを設定して掘り下げた。上端幅は北側で11.2m，南側で12.4m，下端は中央で5.6mを測る。深さは北壁で1.9m，南壁で1.7mで南側に傾斜している。堆積土は暗褐色砂質土を主体に，西方からの流入土による自然堆積を示している。

トレンチ調査であるため即断は禁じ得ないが，丘陵を横断しているようであり，単なる自然流路と言った性格ではなく，防御的な性格が窺える。



第 69 図　谷状遺構土層断面図（1/80）



第 70 図　谷状遺構出土土器実測図①（1/4）

出土遺物には，弥生土器・須恵器・土師器・青磁，石器・鉄器・土製品・銅銭等がある。

出土遺物（図版22・23，32-1，第70～73図）

土　器（1～29）　1は壺の胴部片で，口縁部を欠く。残高5.1cm，胴部最大径2.2cm，底径6.0cmを測る。外面ヘラミガキ，内面工具ナデによる。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で，褐色を呈する。また，外底面には黒斑がみられる。2は壺の底部で，底径は6.4cm。器面にハケ目を残す。

3～6は逆L字状口縁を呈する甕の口縁部片である。3の口縁部は肥厚し，頸部のやや下位に細目の断面三角凸帯を貼付する。6の口縁部は肥厚し，口唇部は方形状を呈する。調整は外面ハケ目（10条／cm），内面ナデで，頸部外面はユビオサエによる。口径は25.0cmを測る。いずれも胎土に長石・石英・雲母を含む。

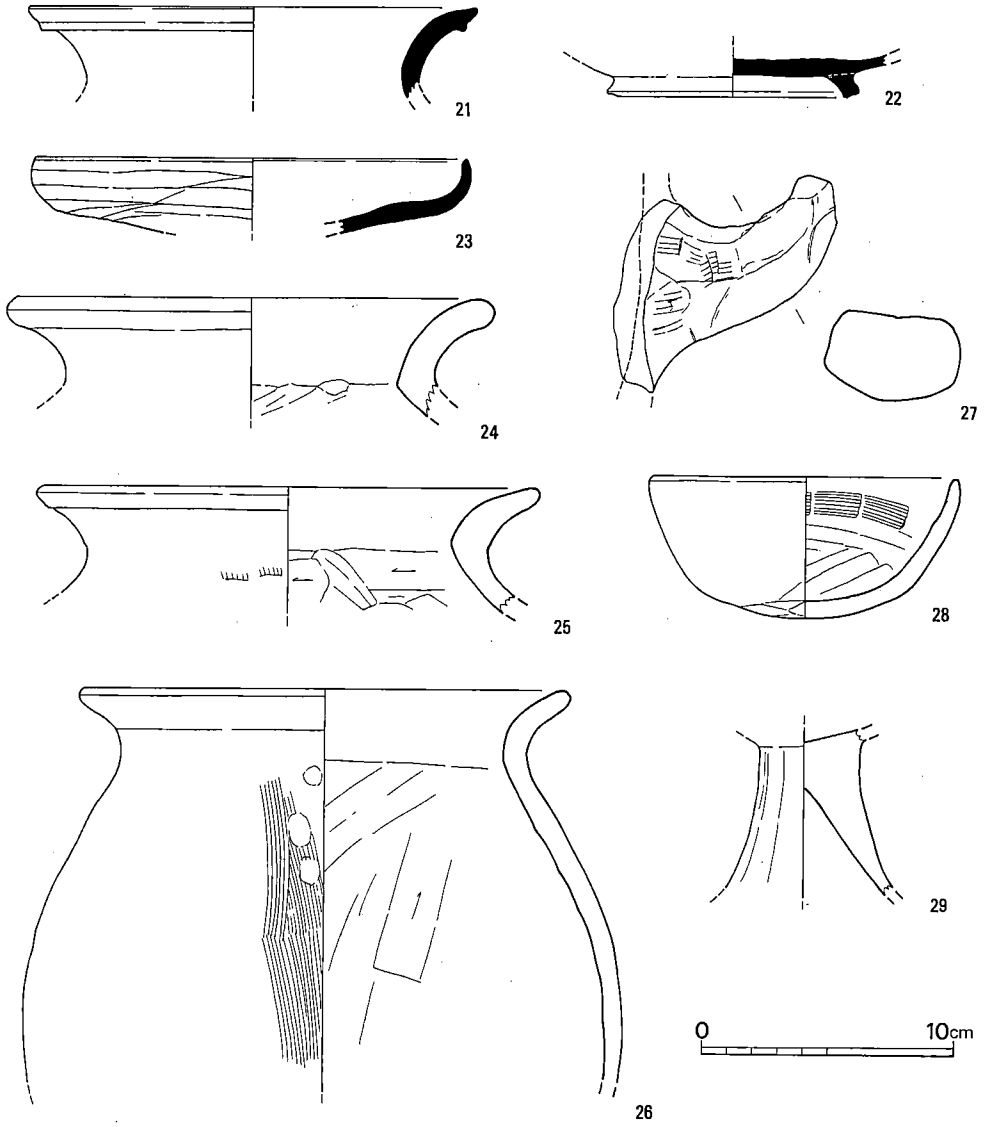
7～14は底部破片で，7・8・11・12は上底で，9・10・13は平底，14は内窪みである。底径は7が7.6cm，8は6.2cm，11は6.2cm，14は7.8cmである。調整は外面ハケ目，内面ナデである。胎土に長石・石英・雲母・赤褐色粒を含み，12・13には黒曜石粒も含まれる。また，9・10の外面には黒斑がみられる。15は甑で，焼成前に外→内方向に穿孔している。底径は7.2cmを測る。胎土に2mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成は良好で，外面は橙褐色を呈する。

16・17は蓋で，16は撮部の破片である。撮部径は6.8cm。調整は摩滅により不明。焼成はやや軟質で，内外面とも赤褐色を呈する。17はミニチュア状の蓋で，器高3.7cm，撮部径2.9cm，口径7.1cmを測る。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母を多く含む。焼成はやや軟質で，橙褐色を呈する。18～20は器台の破片で，18は残高10.8cm，口径7.3cmを測る。19は口縁が外方に屈曲するもので，口径は6.8cmに復原した。20は裾部小片で，或は支脚片か。

21～23は須恵器で，24～29は土師器である。21は口縁部片で，口径は17.8cmを測る。口縁部は大きく外反し，口唇部のやや下位に削出し凸帯を施す。焼成は良好で，灰青色を呈する。壺になるか。22は坏身で，ハ字形の高台を付す。接地面は内端部にあり，高台径は10.0cm。23の口縁部は鈎状に屈曲する。外面はヘラケズリを格子状に施し，内面はナデ調整による。坏になるか。焼成は堅緻で，青灰色を呈する。口径は17.2cmに復原した。

24～26は甕で，24・25の頸部内面のヘラヘズリは鋭い。26は外面ハケ目（7条／cm），内面ヘラケズリ調整による。口径は24が19.4cm，25は20.0cm，26は19.5cmを測る。いずれも胎土に長石・石英を多く含む。27は取っ手部破片で，ソケット式の挿入法で胴部と接合している。

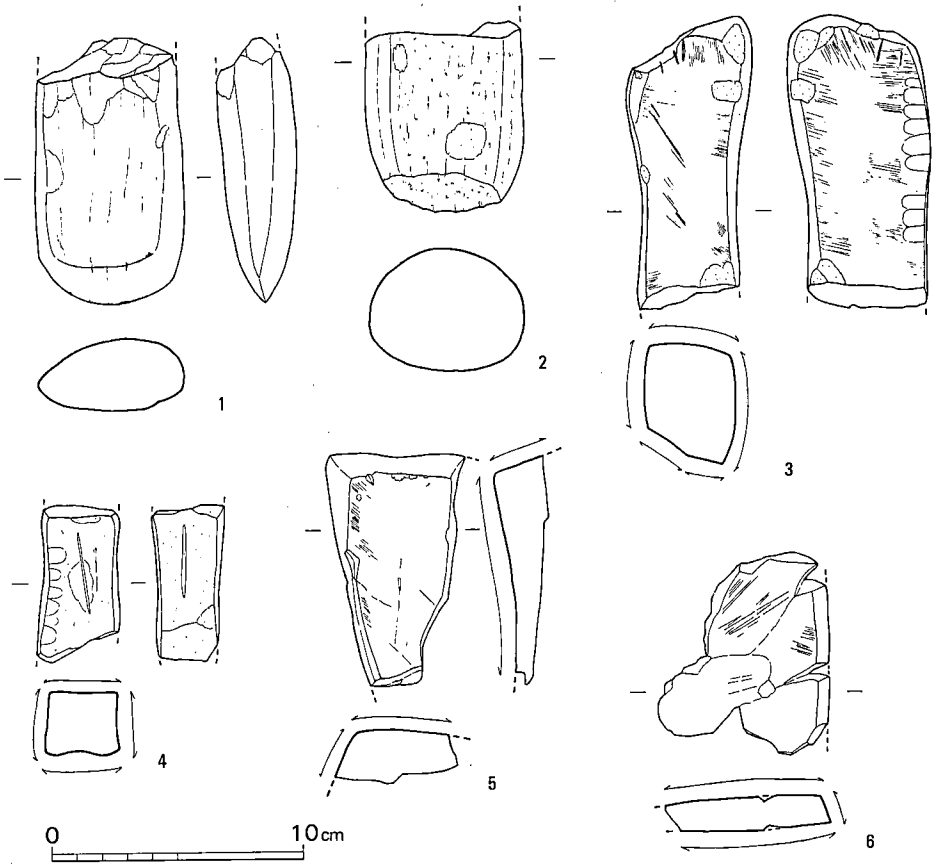
28は埋土中位出土の椀で，器高5.6cm，口径12.0cmである。調整は口縁部ヨコナデ，内面ヨコハケ・ヘラケズリ，外面ナデ，外底部はヘラケズリによる。胎土に長石・石英・雲母を多く含む。焼成はやや軟質で，色調は灰白色を呈する。29は高坏の脚部破片である。外面は縦方向のヘラケズリ，内面は回転ヘラケズリによる。胎土に微砂粒を含むものの精良である。



第 71 図　谷状遺構出土土器実測図②（1/3）

石　器（第72図1～6，第73図1～7）　1は磨製石斧の先端部破片であり，刃部は鋭い。白っぽい石材で，凝灰岩であろうか。残長10.5cm，刃部幅5.5cmを測る。2は全体に自然面を残すが，先端部を敲打している。石材は蛇文岩である。

3は硬砂岩製の砥石で，欠損品。残長11.5cm，断面は方形で，全周砥面として使用している。また，右側縁には鑿で削ったような痕跡がある。4は砂岩製の砥石である。残長6.2cm，幅2.8cm。



第 72 図　谷伏遺構出土石器実測図（1/3）

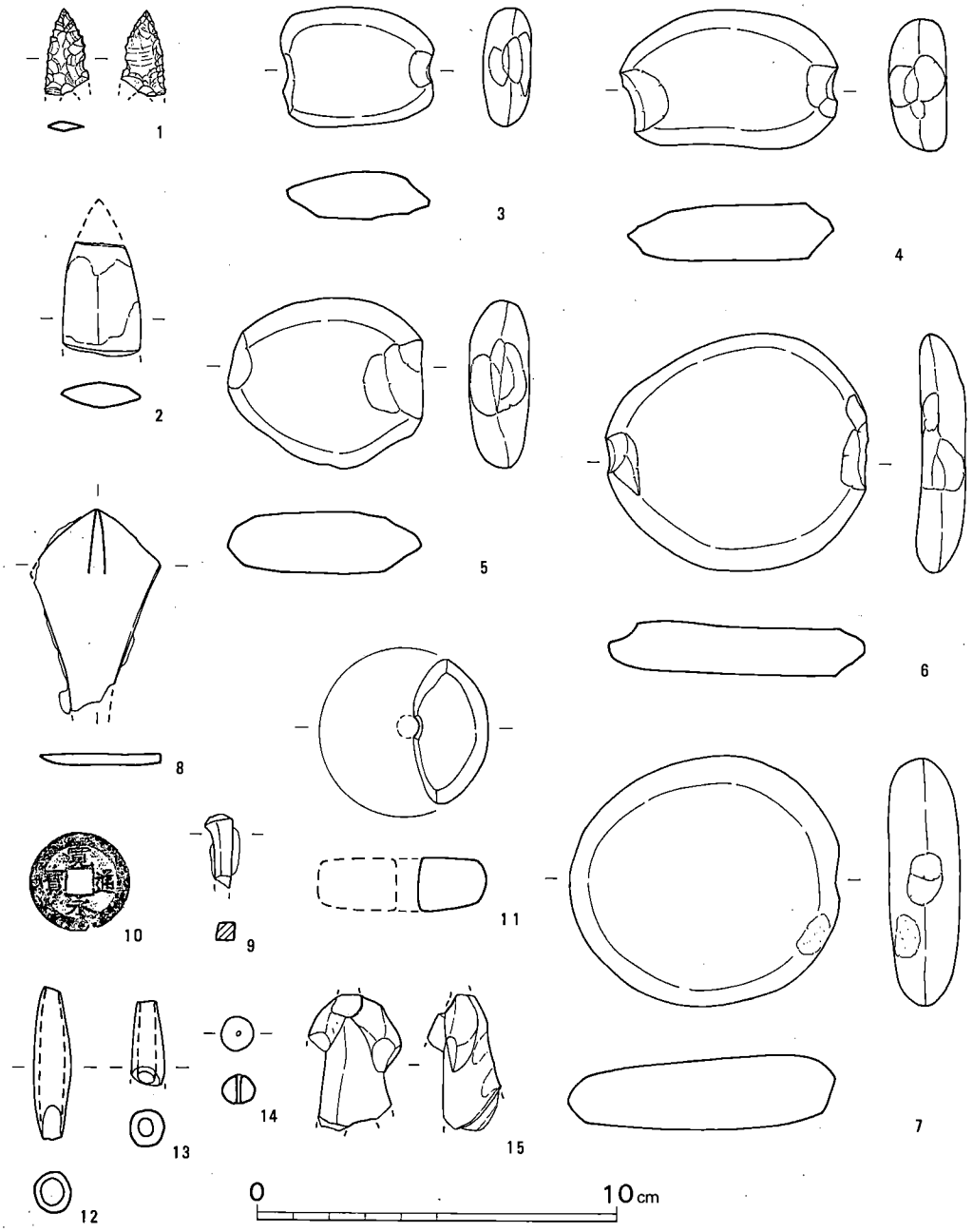
2面に溝状の砥痕がある。5は紅簾片岩製の砥石で，上面は平滑である。側縁は砥面ではなく，若干研磨調整したのみ。6は砂岩製の砥石で，折損品。非常に脆い。

1は基部を欠くが，凹基式の石鏃で，黒曜石製。2は石剣の先端部破片である。石材は砂岩質。3～7は石錘で，7を除き両端部を打ち欠く。重さは3が30ｇ，4は55ｇ，5は60ｇ，6は100ｇ，7は150ｇを量る。石材はいずれも安山岩である。

鉄　器（8・9）　8は鉄鏃の鏃身部破片で圭頭広根式。残存長5.6cm，幅3.6cm。9は鉄釘の頭部破片で，残長2.0cm。断面は方形を呈する。

銅　銭（10）　10は谷部南端表層出土の寛永通寶である。

土製品（12～15）　12・13は管状土錘で，12は長さ4.2cm，径1.0cm，重さ2.7ｇ。2は欠損品。3は土玉で，径0.95cm。1mm程の円孔を有する。重さは0.6ｇ。15は土製の人形で，頭・手足を欠損する。色調は淡褐色を呈する。



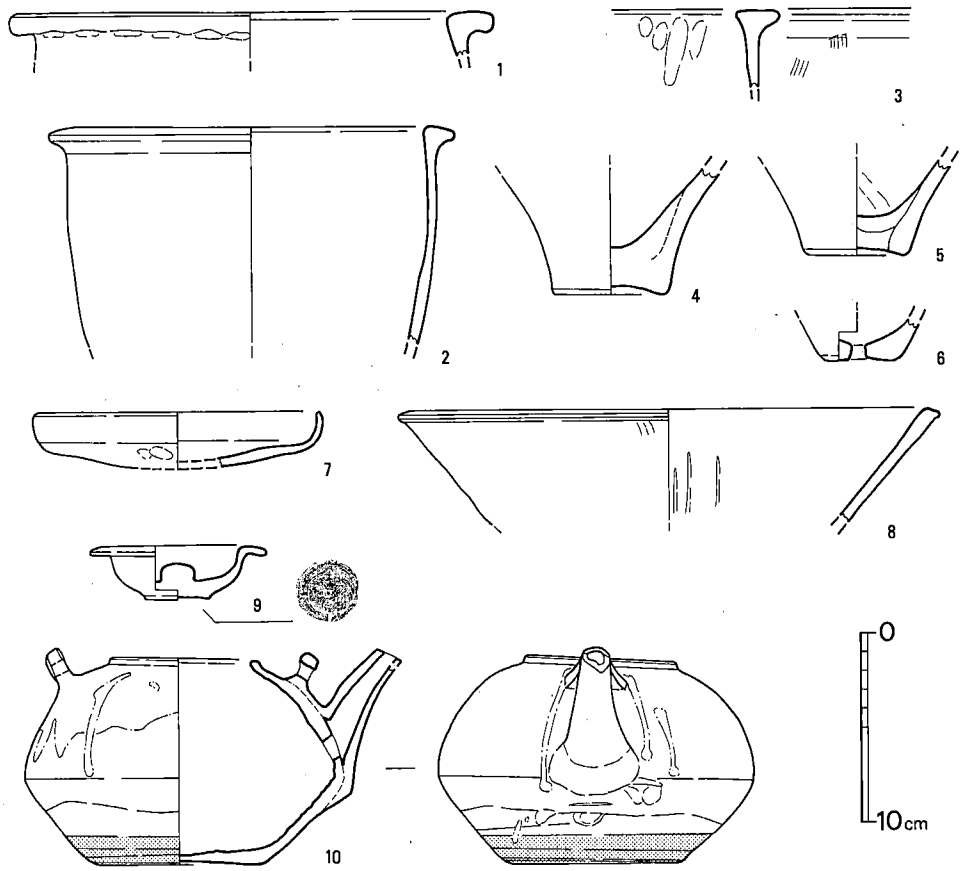
第 73 図　谷伏遺構出土石器・鉄器・土製品実測図（1/2）

(9) その他の遺構・遺物

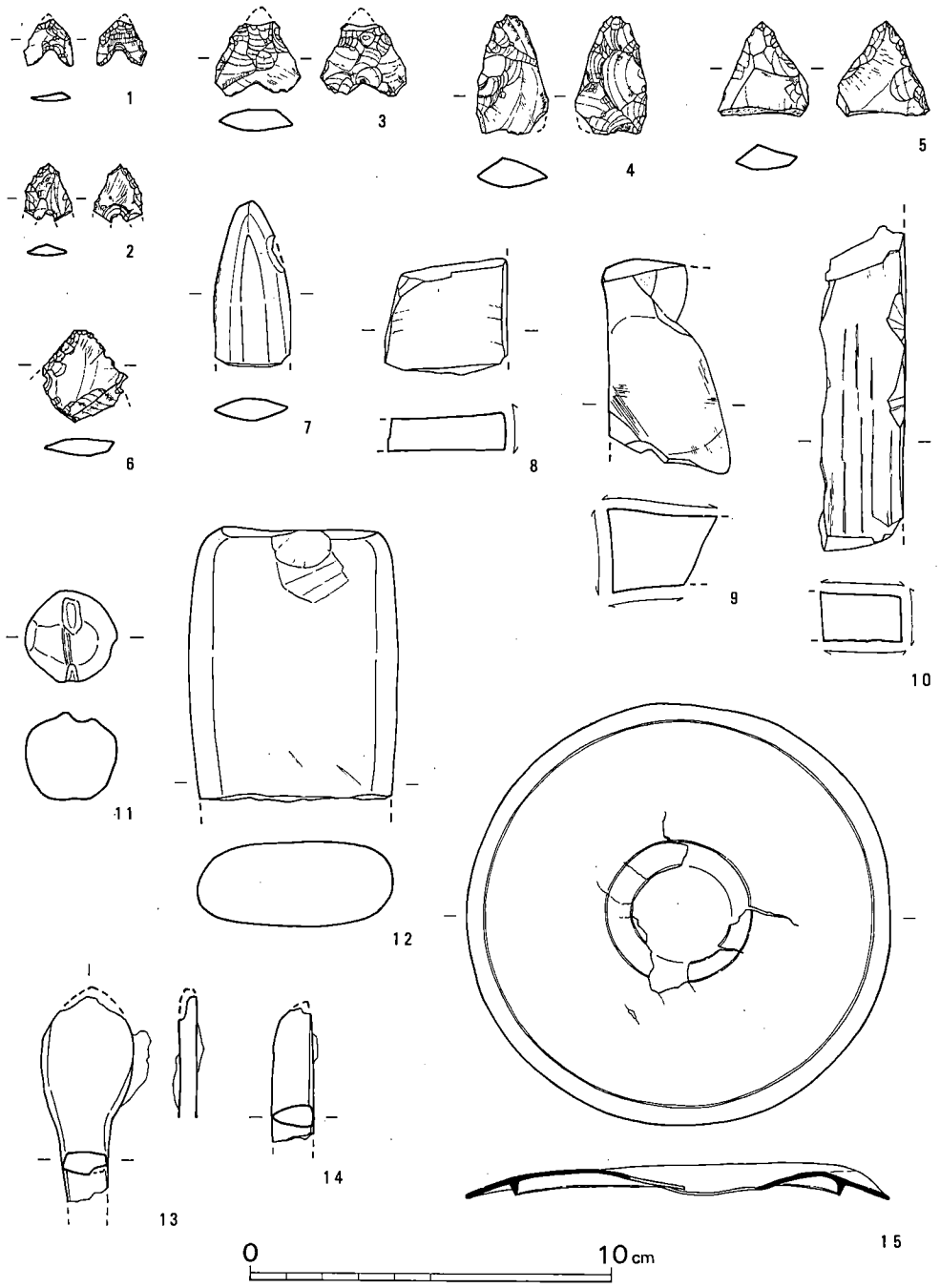
その他の遺構として，8号土壙のやや北側で発見した胞衣壺がある。また，ピットからも弥生土器・土師器が出土しており，採集品共々ここで説明したい。

胞衣壺

8号土壙のやや北側の斜面部より出土した。本体に土瓶を使用し，蓋を被せていた。土砂が若干流入しており，埋土は篩に掛けたが何も出てこなかった。胎盤を埋めたものか。地元作業員に聞いた話によると，「昭和30年代頃までは出産は自宅で行うのが普通で，後産は壺にいれて縁の下に埋めていた」との事であった。佐賀県金立開拓遺跡に類例がある（註２）。



第 74 図　Pit・その他遺構の出土土器実測図（1/4）



第 75 図　採集石器・鉄器・青銅器実測図 (1/2)

出土遺物（図版33-1，第74図）

陶　器（9・10）　9・10は陶器の土瓶で，9が蓋，10が本体である。蓋は器高2.9cm，口径9.4cm，撮部は内側に落ち込む。身は器高11cm，口径7.9cm，底径8.6cmで，暗灰色の胎に黒色の釉掛け。また，注口と側縁には灰白色の釉掛け。底部は回転ヘラケズリで，加熱を受け黒化する。日常容器の転用品。

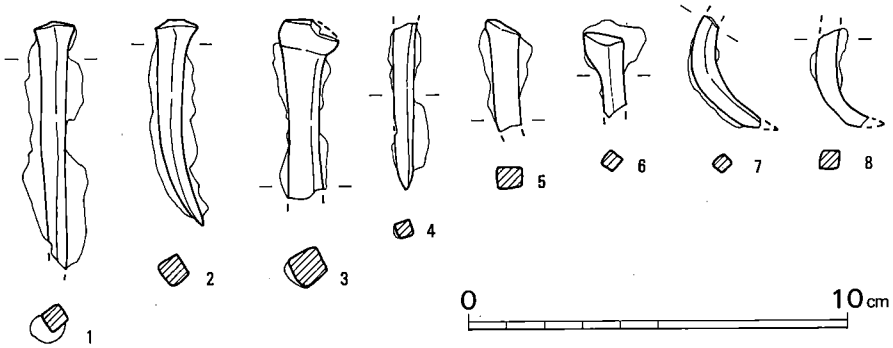
ピット出土の遺物（図版22-2・23-1・31-2・32-2・33，第74～76図）

土　器（1～8）　1～6は弥生土器，7は土師器，8は土師質である。1は甕の口縁部破片で，P57の出土。2は逆L字状口縁の甕で，P67の出土。36は甕で，P36の出土。4は底部破片で，底径は6.2cm。P49の出土。5は底部破片，6は甑でともに上段トレンチの出土。7は坏で，器高2.9cm，口径15.1cm，P20の出土。8は擂鉢でP25の出土である。

石　器（1～12）　1はP56出土の黒曜石製石鏃で，長さ1.3cm，重さ0.25ｇ。2・3・6は黒曜石の石鏃で採集品。4は旧3号土壙出土の黒曜石製石鏃の未製品。5はサヌカイト製の石鏃で採集品。7は上段出土の石剣で，残存長は4.6cm。8～10は砥石で，8・9は砂岩製。10は粘板岩製。8は検出時，9は上段，10は下段撹乱の出土。11は溝を有し，石錘になるか。採集品。12は残存長7.5cm，幅5.8cmで，全体を研磨している。上段包含層出土。

鉄　器（13・14，第76図1～8）　13・14は鉄鏃で，採集品。1～8は鉄釘で，P8の出土。1の長さ6.6cm。2は5.5cm。他は欠損品。

銅製品（15）　15は調査事務所裏の斜面部ー中段西斜面より出土した経筒の蓋部で，撮は欠損し，かなり歪んでいる。身部の出土は無かった。蓋部の径は11.8cm。外縁から5mmの箇所に一重の圏線，中央に二重の圏線を薬研彫りする。内面には径8.9cm，高さ4mmのかえりが付く。



第 76 図　Pit 出土鉄釘実測図（1/2）

3．小　結

当遺跡の調査面積は，3,400㎡程であったが，遺構密度はかなり高く，柿畑による削平を受けなかったら遺構の数は倍増したものと思われる。検出した主な遺構は，竪穴式住居跡11軒，掘立柱建物跡４棟，甕棺墓18基，木棺墓７基，土壙墓２基，土壙８基，溝４条，谷状遺構である。

以下，各遺構ごとに概述してまとめとしたい。

竪穴式住居跡

調査区の全域に分布し，かなり重複している。また，柿畑の削平により壁面の残りは悪い。弥生時代中期初頭と古墳時代後期（６世紀中～末）の二時期を主体とする。弥生時代の住居跡（８軒）は，4～11ｍの円形・楕円形を呈し，柱穴は８・10本である。７号住居跡は竪穴部外に６本の柱を立てたものと考えられる。また，住居跡とした規模４ｍ程の４号は，柱穴・炉址が不明瞭で，住居跡とは性格を異にするものか。いずれも竪穴部に炉址と認定できる穴はなく，竪穴部外に付設していたのであろう。

古墳時代後期の住居跡（３軒）は，横位の長方形を呈し，北壁にカマドを付設する。８～10号住居跡は一辺４ｍと小規模ながら４本柱である。９号住居跡のカマド右袖前面からは，一括土器とともに土玉が出土しており，カマドに対する祭祀行為がなされたものであろう。また，谷状遺構からも土玉が出土した。

掘立柱建物跡

上中段で４棟検出した。１号建物跡は，梁行２間（4.57ｍ）×桁行６間（13ｍ）の大規模な建物跡で，２～４号建物跡も１号と桁行方位（N40°W）を等しくして配される事から同時期に築造されたものと考えられる。掘方からの遺物の出土は無く，時期を明確にし得ないが，６世紀後半の住居跡を切っていることから，７世紀代以降に置けよう。

また，当遺跡から１㎞程東に行った志波桑ノ本遺跡（横断道第40地点）・志波岡本遺跡（同第41地点）でも時期は不詳であるが，２×６間の大規模で北西－南東方向に配される建物跡を検出しており（註３），当遺跡との関連を指摘できよう。また，志波岡本遺跡では，３棟の建物跡を検出しており，それらは標高62ｍの丘陵突端部に立地している。当遺跡から志波岡本遺跡までの１㎞の間に同規模・同方位を呈する建物跡が，調査した分で９棟検出された事は大きな成果と言える。当地は，斉明七（661）年に斉明天皇が行宮として築造した朝倉橘広庭宮跡に推定されており，現在のところ宮跡は確認されていないが，同時代の建物跡として注目されよう。

甕 棺 墓

上中段において成人棺７基，小児棺11基の総数18基検出した。甕棺墓の残りは悪く，口縁部しか留めないものも存在し，かなりの甕棺が削平されたものと考えられる。木棺墓・土壙墓とともに墓地群を構成し，北東ー南西方向に列状を成して配される。甕棺墓は弥生時代の住居跡を切っており，時期は弥生中期初頭～中期中葉までで納まる。埋葬形態は接口式が大半で，挿入式，石蓋の単棺もみられる。

面白いのは，当遺跡及び中町裏遺跡の甕棺は，胎土に黒曜石を含む点である。ただ，中期前半・中葉期の甕棺には含んでおらず，中町裏遺跡においても同様である。

木 棺 墓

上中段において7基検出した。小口部に石を立て，側板を挟み込んだものと考えられる。出土遺物は無いが，円形住居跡を切っているので，甕棺墓と同時併存する。木棺墓には3タイプあり，

Ⅰ 両小口部に石を立てるもの（４基）

Ⅱ 片側小口に石を立てるもの（２基）

Ⅲ 石を立てないもの（１基）

である。恐らく木蓋をしたものであろう。構造等に関しては，次章でふれたい。

土 壙 墓

上中段において２基検出した。土壙墓も遺物の出土はないが，その配列状態から甕棺墓・木棺墓と同時期と考えられる。

土 壙

調査区の全域において8基検出した。時期・性格ともに不明な土壙が大半を占めるが，7号土壙からは豊富な遺物が出土した。時期は，前期末～中期前半で，住居跡に伴う廃棄穴としての性格を付与できよう。

溝状遺構

調査区の全域において４条検出したが，正確な時期は不詳。

谷状遺構

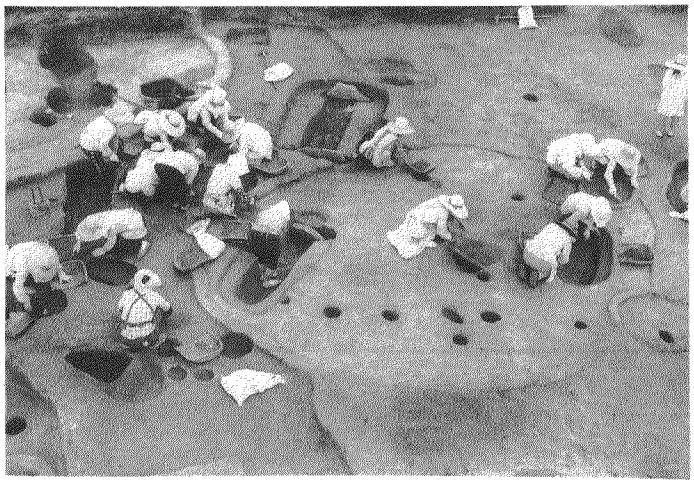
調査区の西側で検出した。谷状遺構としたが，規模は幅12ｍ，深さ２ｍで，調査区外に伸展することから，大溝的な遺構になろう。埋土下位より弥生土器，上位～中位より須恵器・土師器が出土した。また，当遺跡の立地する丘陵は，標高44ｍで，平地部との比高差は13ｍ程あり，

中町裏遺跡とは谷部を隔てている。当遺構は，丘陵先端部を横断する形で存在し，言わば環濠的性格を担ったものであろうか。

以上，各遺構別に概述してきたが，時期的には弥生集落→弥生墓地群→古墳集落→奈良？建物への変遷が窺える。特に，整然と配される建物跡群は，志波桑ノ本遺跡・志波岡本遺跡例も含めて詳細に検討されるべき建物と言える。

ともあれ当地区は，筑後平野の東端部でありながら，古代においては外之隈遺跡・本陣古墳・恵蘇八幡宮古墳・志波宝満宮古墳・大迫遺跡等の主要遺跡が密集する重要な地区であり，また近世においては，天領日田へと通じる街道筋にあたる重要な地区であった。

註1　福岡県教育委員会　1987　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－12－
註2　佐賀県教育委員会　1984　九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（11）金立開拓遺跡
註3　福岡県教育委員会が昭和61年度に発掘調査を実施。



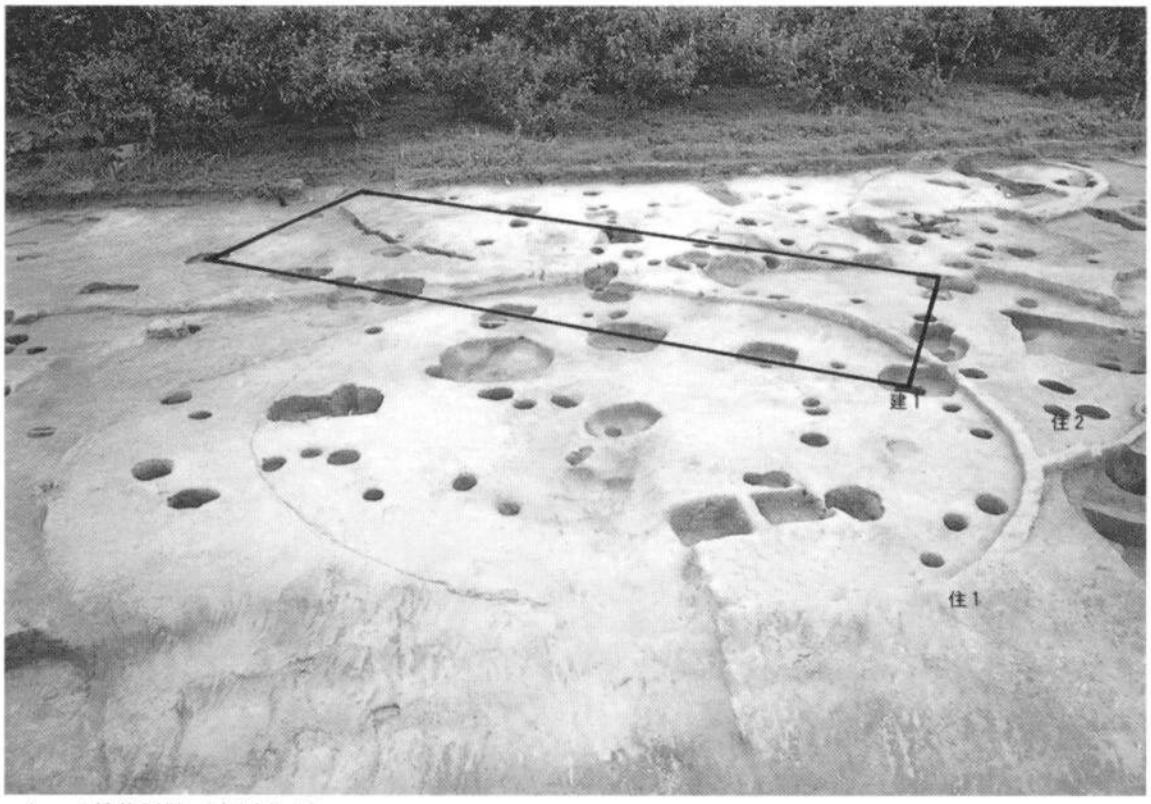
調　査　風　景

図　版

1　杷木宮原遺跡・中町裏遺跡遠景（南東から）

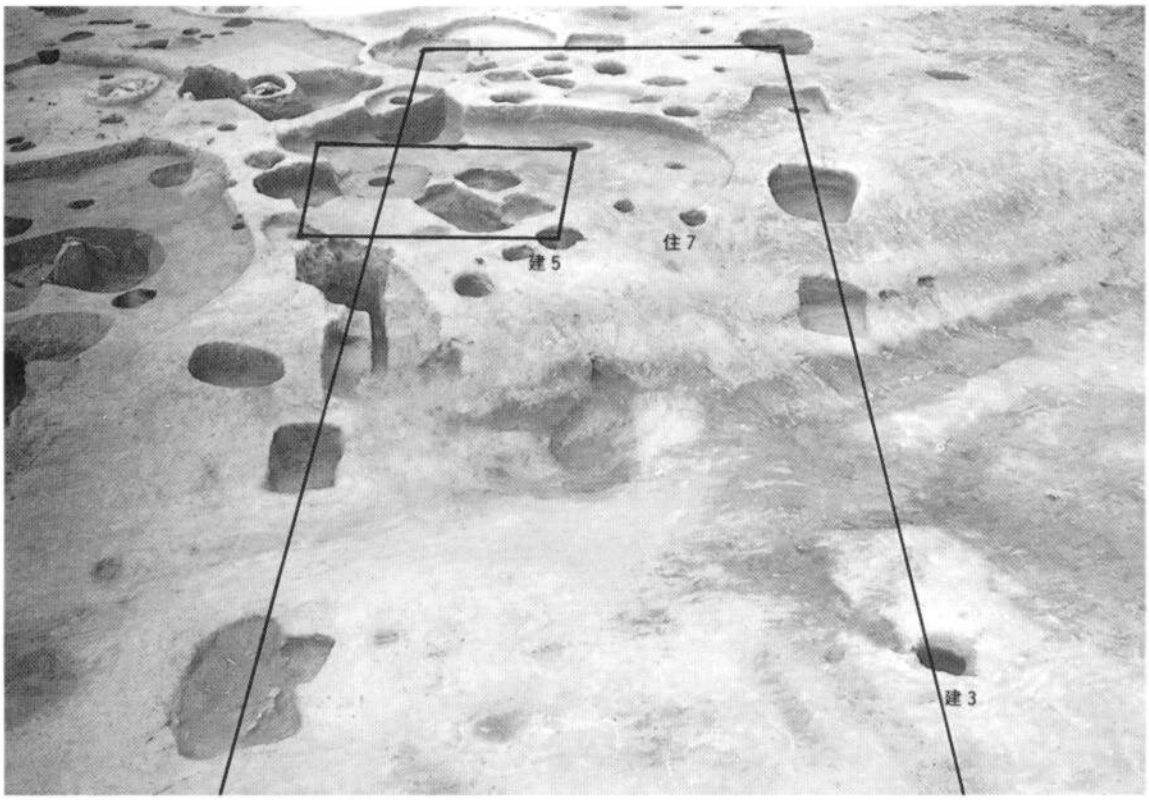
2　杷木宮原遺跡上層遺構全景（南東から）

1　上段遺構全景（上空から）

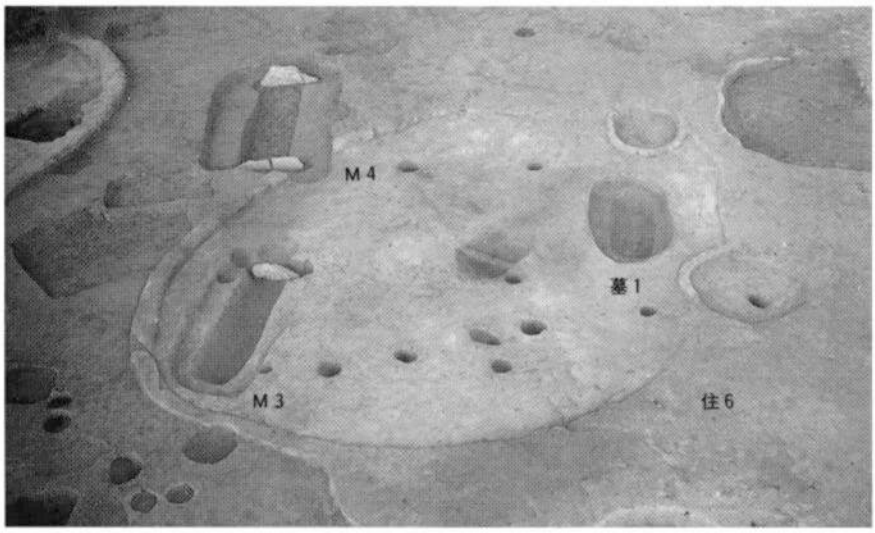


2　1号住居跡（南西から）

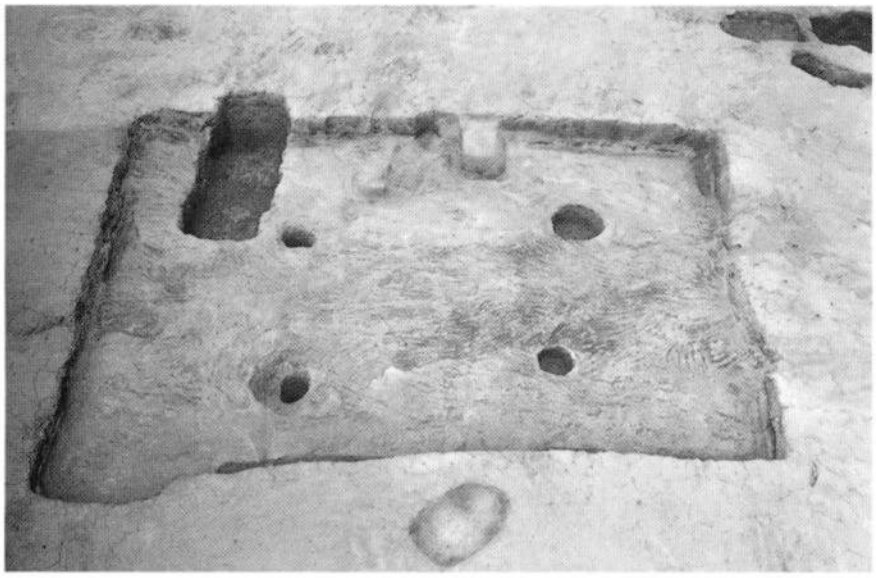
1　2～4号住居跡（南から）



2　7号住居跡，3・5号建物跡（南西から）

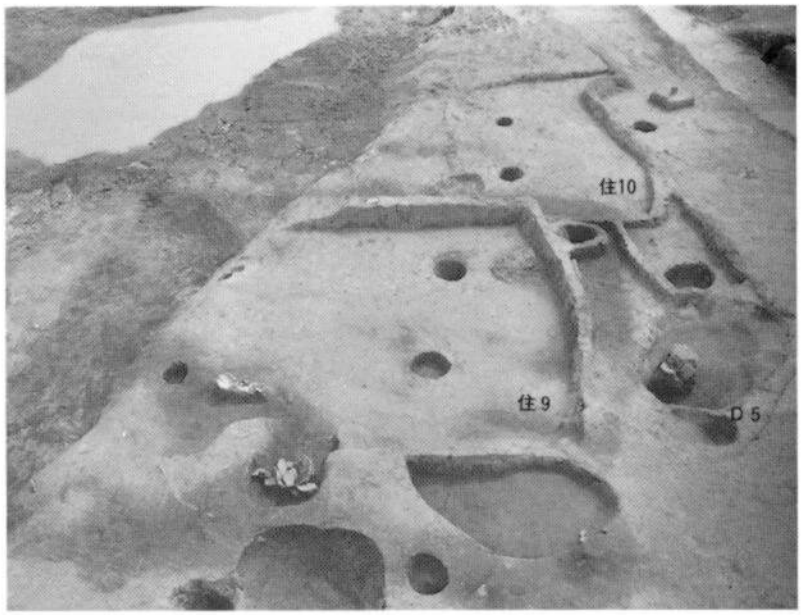


1　6 号住居跡
（南西から）



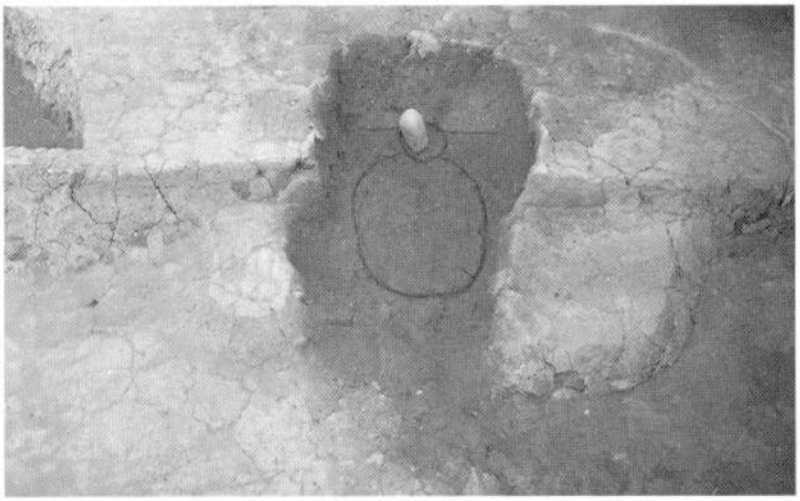
2　8 号住居跡
（南から）

3　8 号住居跡カマド
（南から）

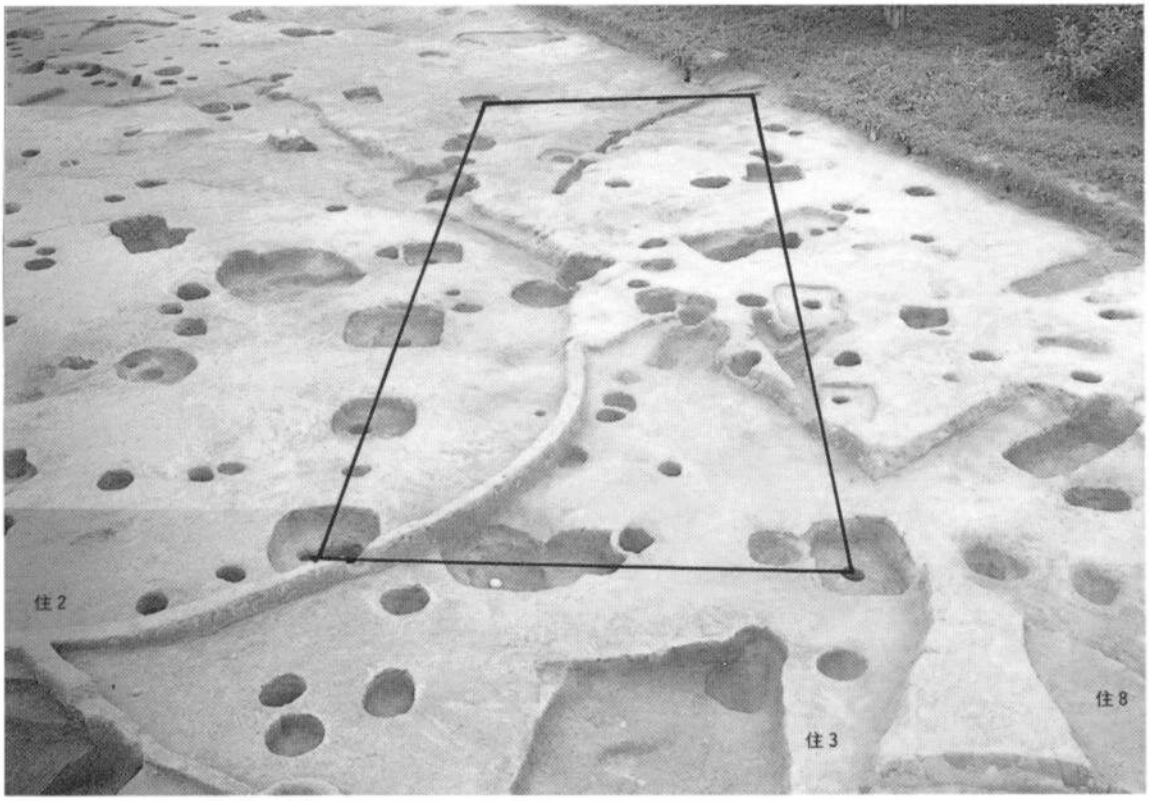


1　9・10号住居跡
（北東から）

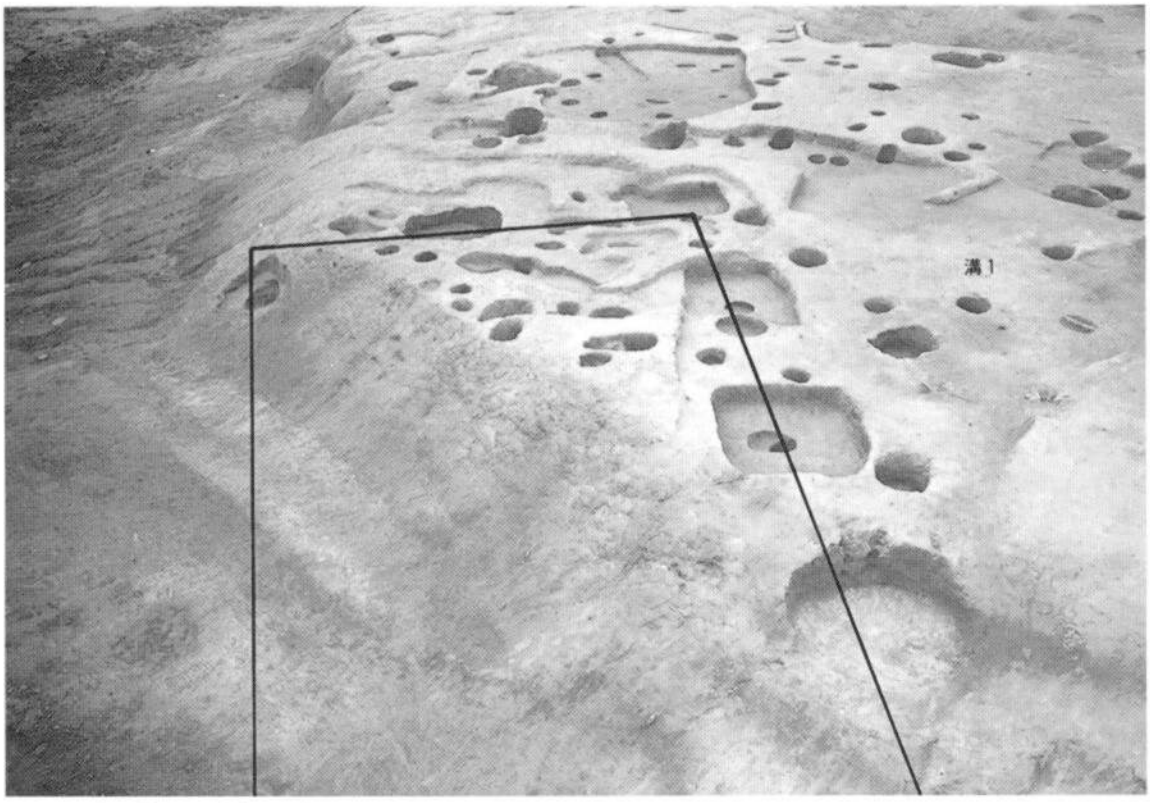
2　9号住居跡カマド
（南から）



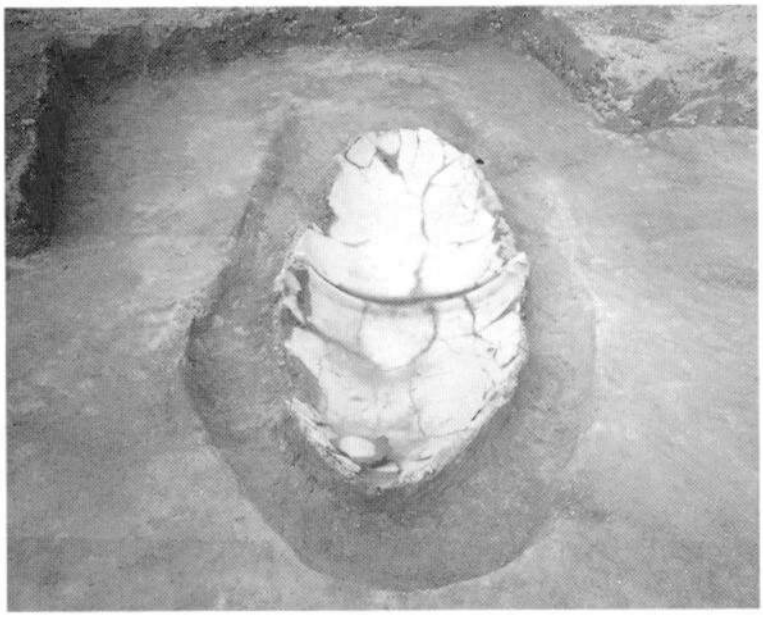
3　9号住居跡カマド
支脚（南から）



1　1号建物跡（南東から）

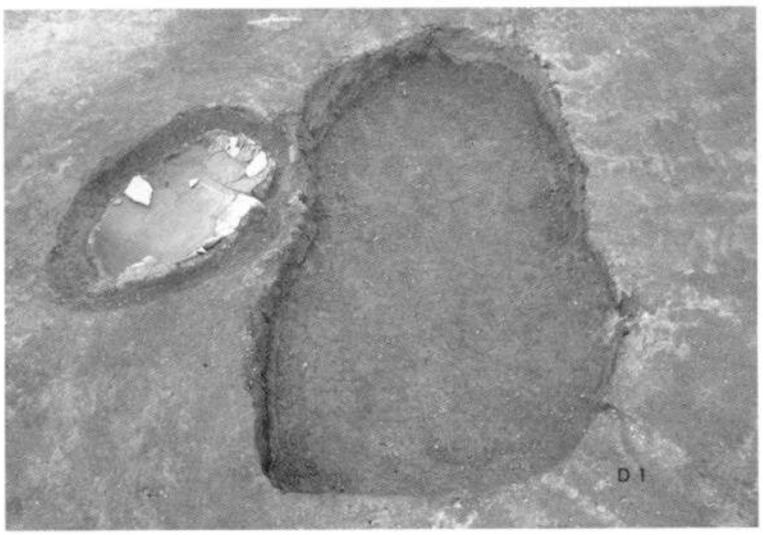


2　2号建物跡（南東から）



1　1号甕棺墓（南西から）

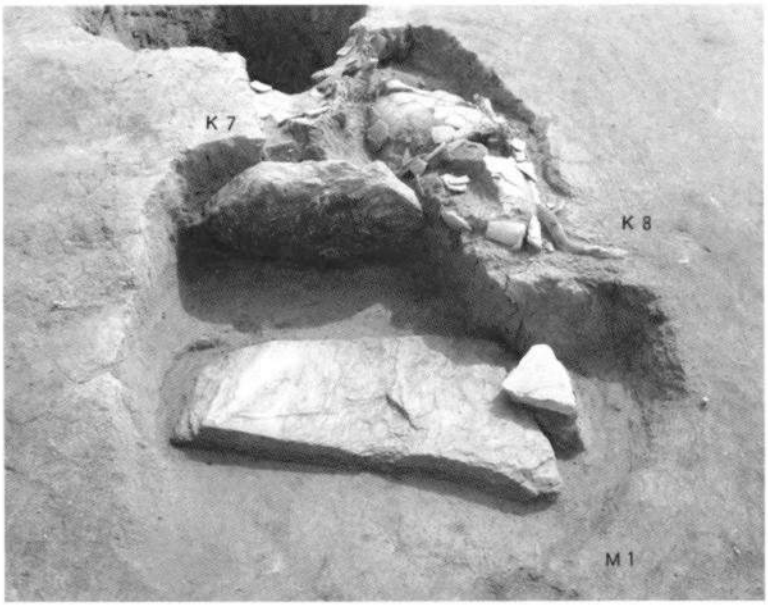
2　2号甕棺墓（東から）



3　3号甕棺墓，1号土壙（北東から）

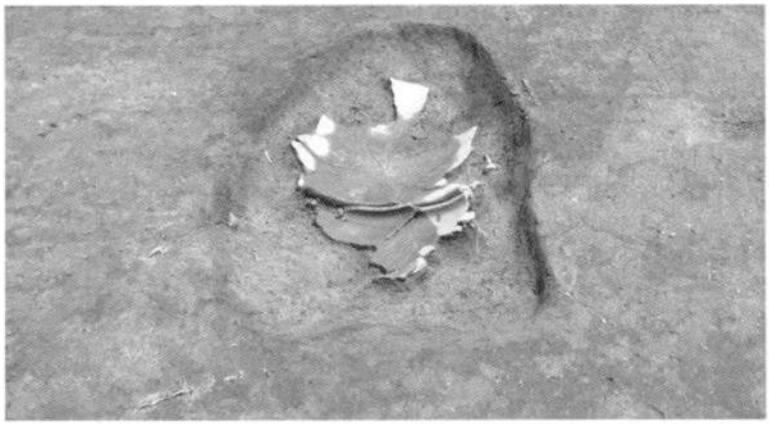
1　4～6号甕棺墓（北西から）

2　6号甕棺墓（南西から）



1　7・8号甕棺墓，1号木棺墓（南西から）

2　9号甕棺墓（南西から）



3　10号甕棺墓（南西から）

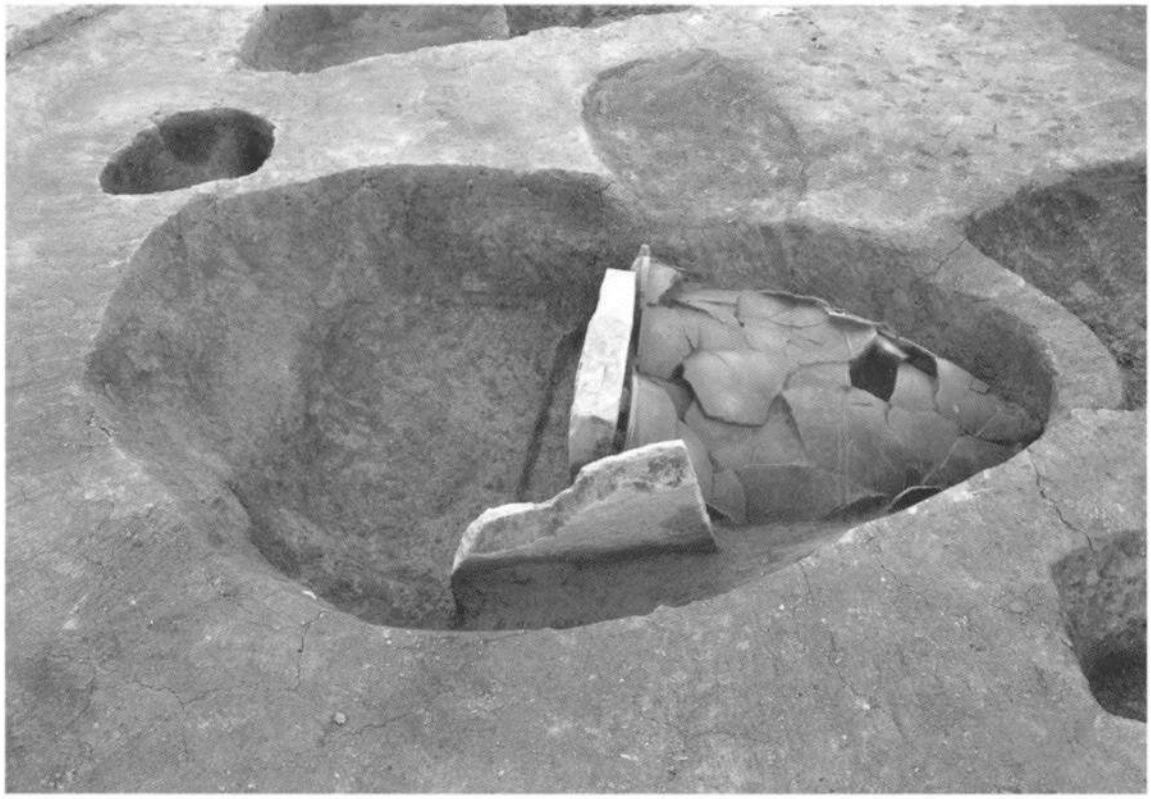
1　12号甕棺墓（南西から）

2　11号甕棺墓（南西から）

3　13号甕棺墓（南西から）

1　15号甕棺墓（南西から）

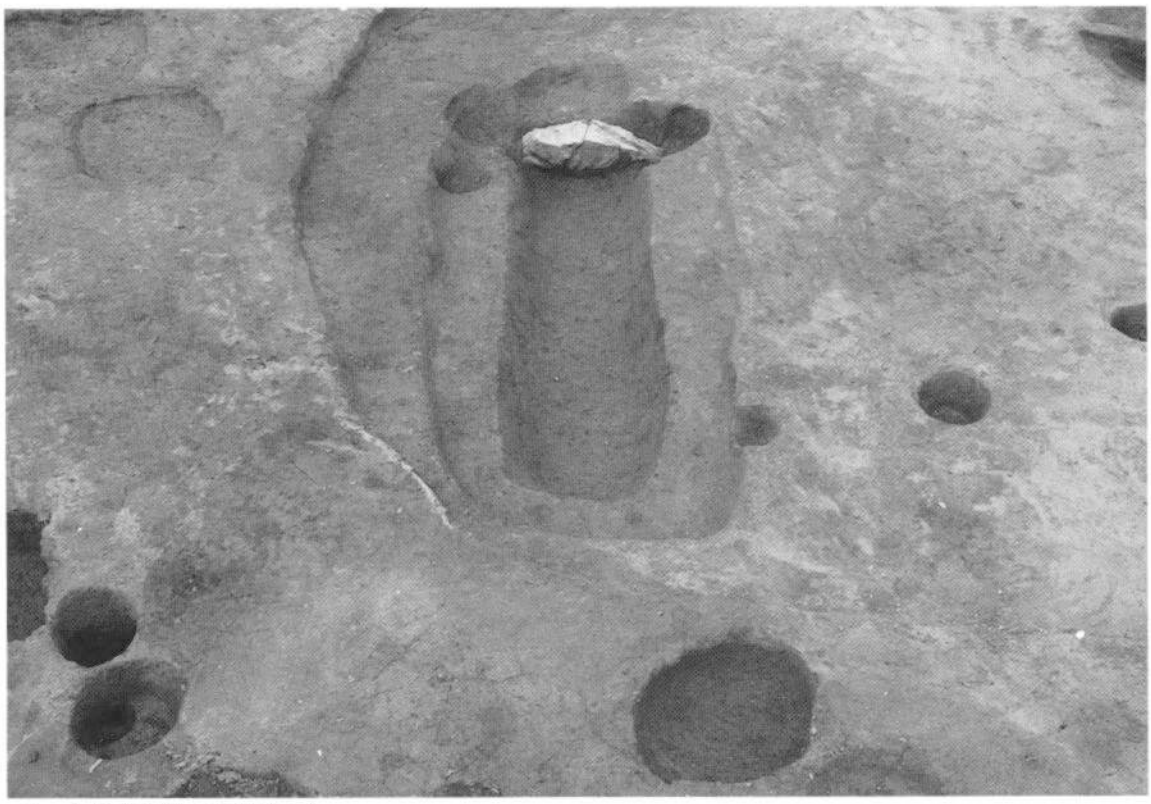
2　16号甕棺墓（南西から）



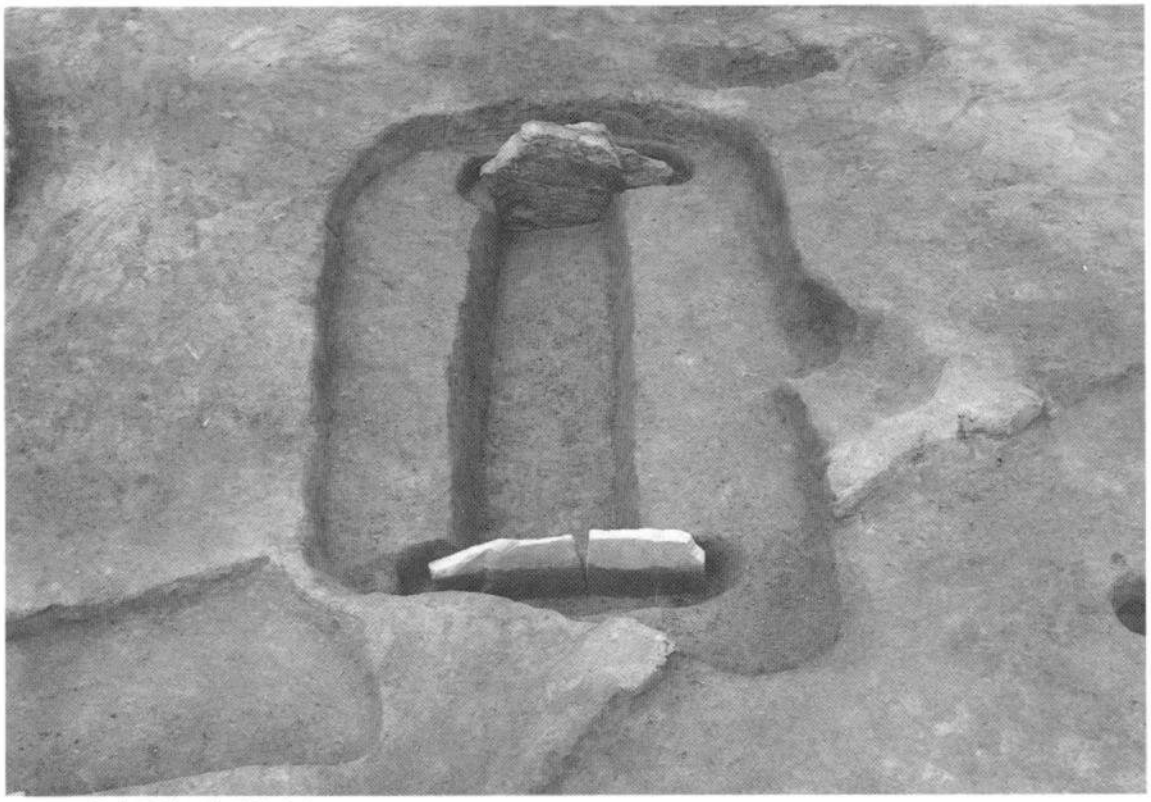
3　17号甕棺墓（北東から）

1　1号木棺墓（南西から）

2　2号木棺墓，4号土壙（南西から）



1　3号木棺墓（南西から）



2　4号木棺墓（南西から）

1　5号木棺墓，18号甕棺墓（南西から）

2　6号木棺墓（南西から）

1　1号土壙墓（南西から）

2　2号土壙墓（南西から）

1　4号土壙（南西から）

2　5号土壙（南西から）

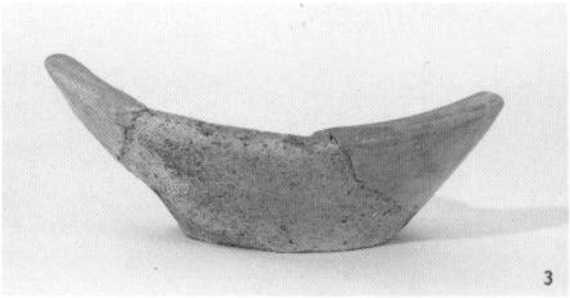
3　7号土壙（北から）

1　谷状遺構（南から）

2　杷木中学校の現場見学風景

1

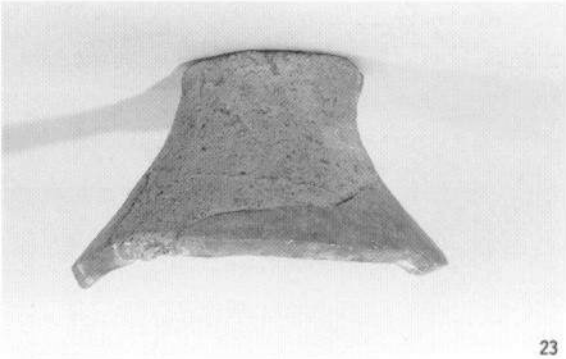
2



3

12

19

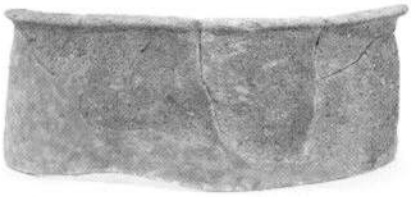


23

22

24

25 1



3

4 2

1　1号住居跡出土土器　2　2号住居跡出土土器

2

5

3

9

11

14

20 1

7

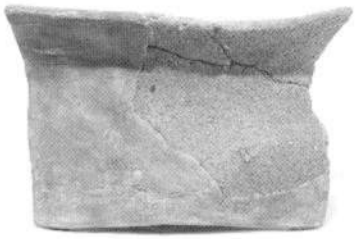
8 2

1　4号住居跡出土土器　2　5号住居跡出土土器①

1　9

5　2

3　4



1

1

4　4

3

5

5　4

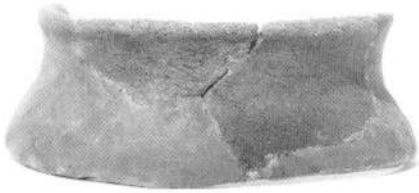
6

1　5号住居跡出土土器②　2　6号住居跡出土土器　3　7号住居跡出土土器
4　8号住居跡出土土器　5　9号住居跡出土土器①

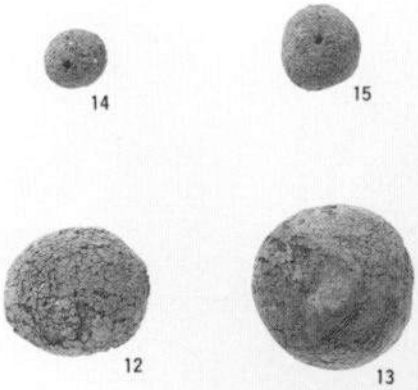
1　7

3

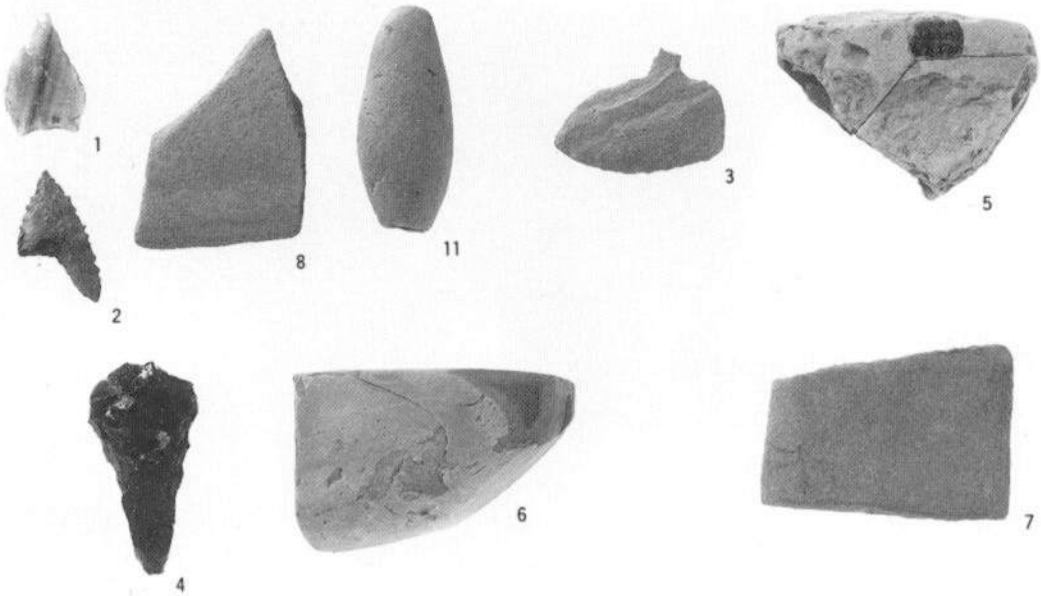
1



2　2

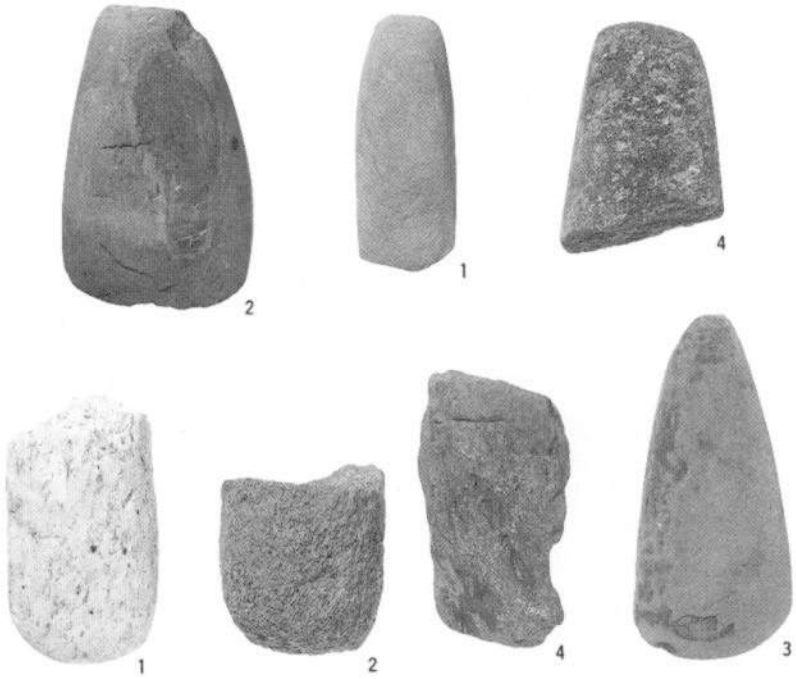


4

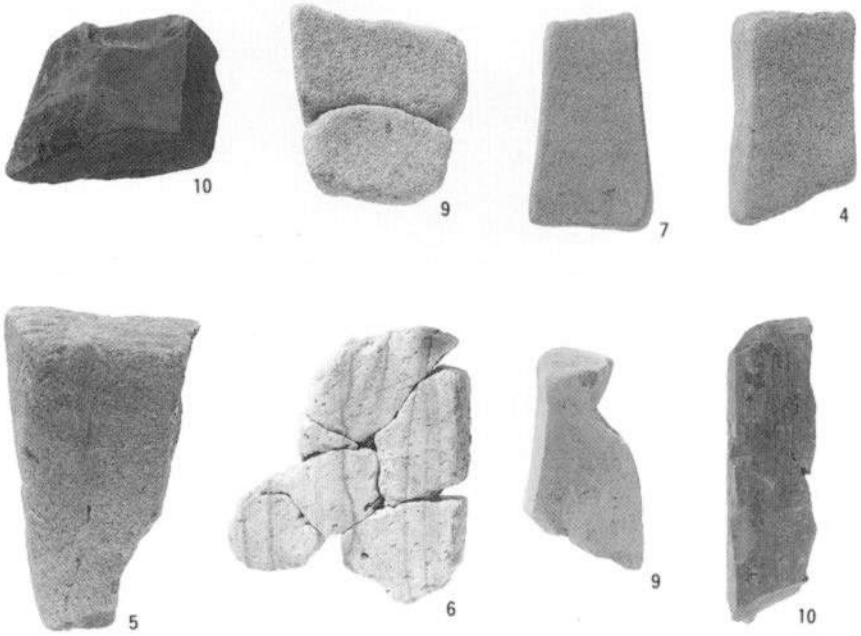


5

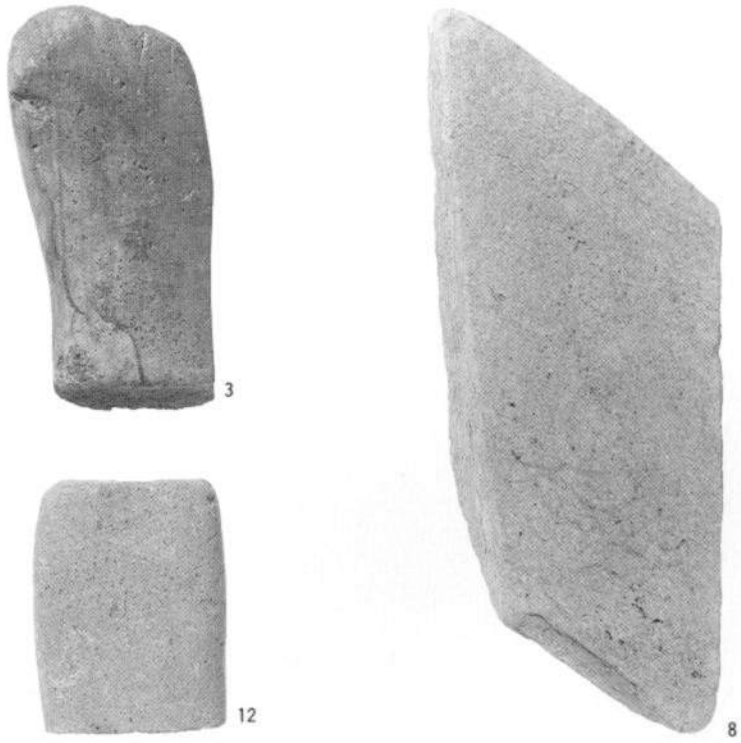
1　9号住居跡出土土器②　2　10号住居跡出土土器　3　11号住居跡出土土器
4　住居跡出土土製品　5　住居跡出土石器



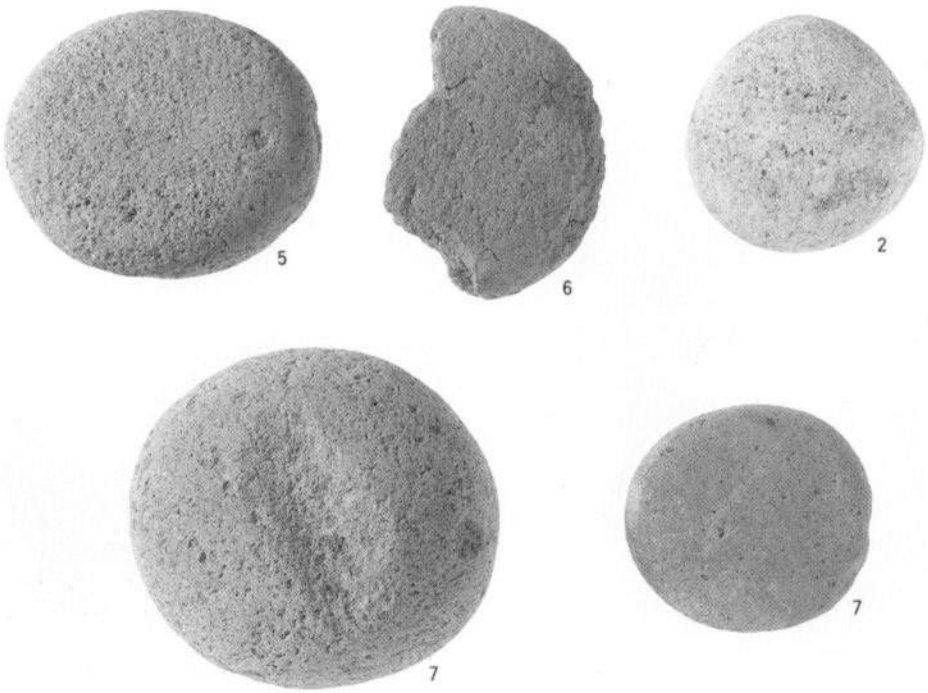
1　住居跡・土壙・谷，その他出土石器①



2　住居跡・土壙・谷，その他出土石器②



1　住居跡・谷，その他出土石器

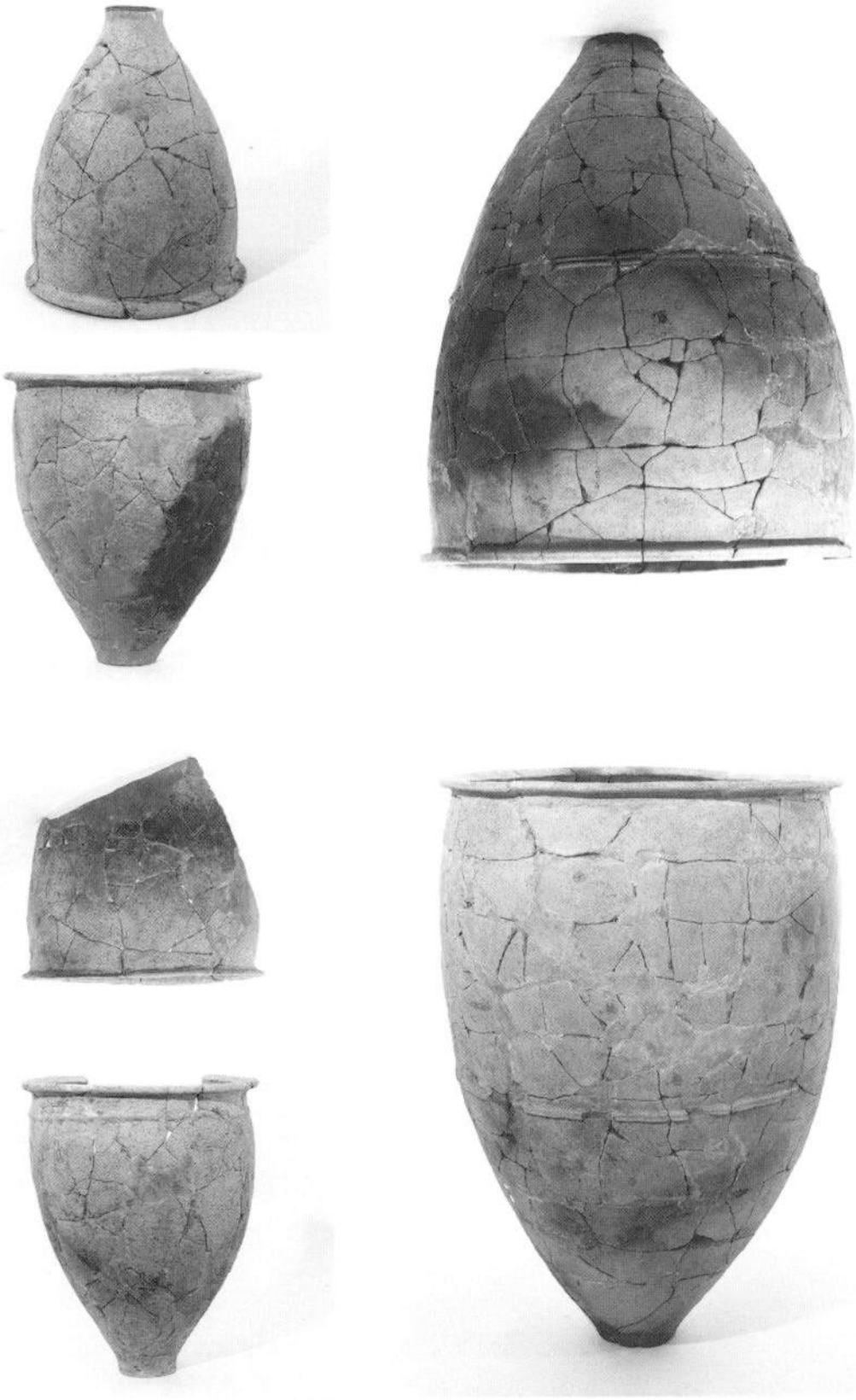


2　住居跡・溝・谷出土石器

2　2号甕棺

1　1号甕棺

3　3号甕棺



1　4号甕棺　2　5号甕棺　3　6号甕棺

1

3

2

1　7号甕棺　　2　8号甕棺　　3　9号甕棺

1

2

3

1　10号甕棺　　2　11号甕棺　　3　12号甕棺

1　13号甕棺　2　14号甕棺　3　15号甕棺　4　16号甕棺　5　17号甕棺

3

6

1

8

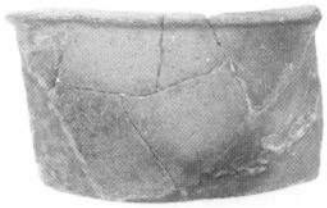
2

11

15 3

1　18号甕棺　2　5号土壙出土土器　3　7号土壙出土土器①

19



20

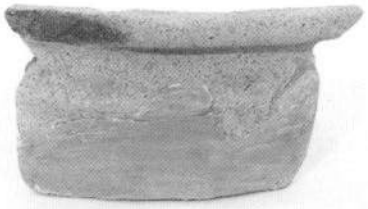
27

28

29

31

34



2 2

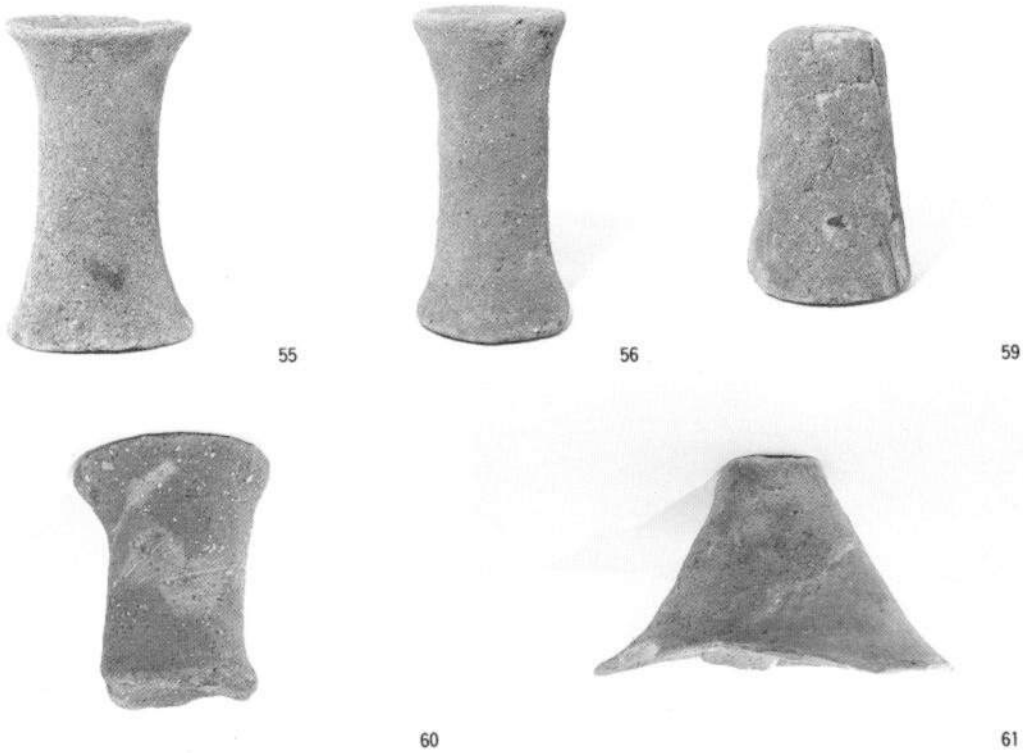
1

50

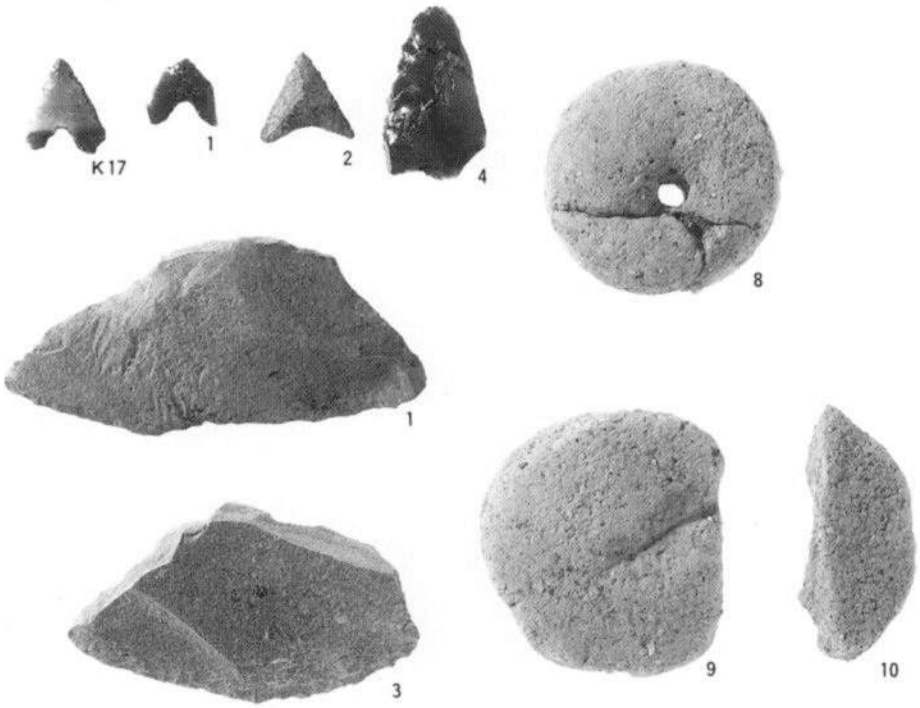
53

54

1　7号土壙出土土器②　　2　2号溝出土土器



1　7号土壙出土土器③

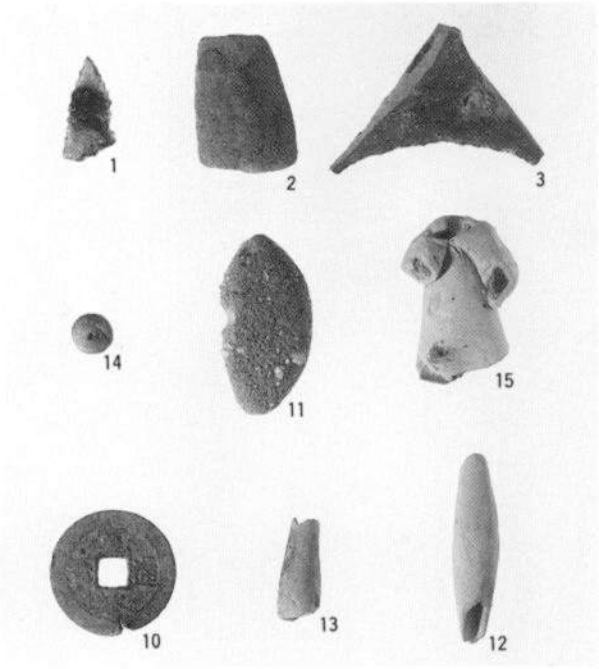


2　土壙，その他出土石器・土製品

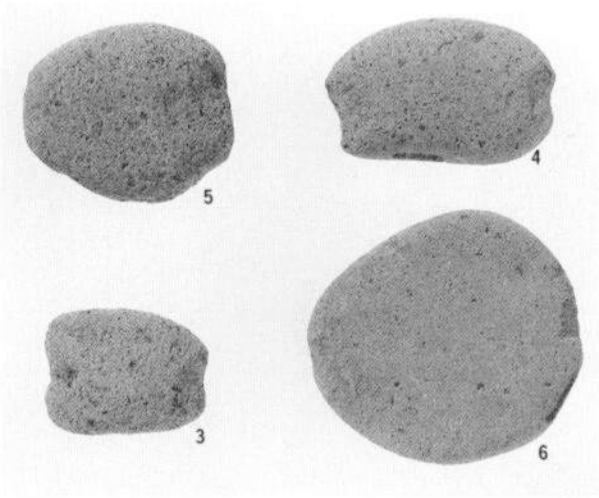
1

11

14



3



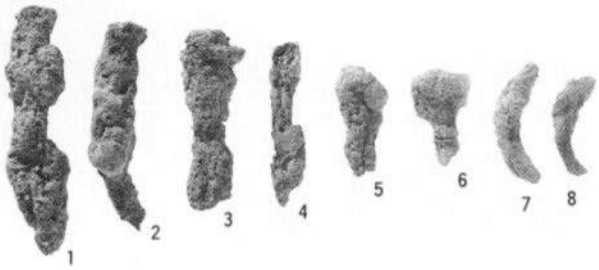
4

1

28

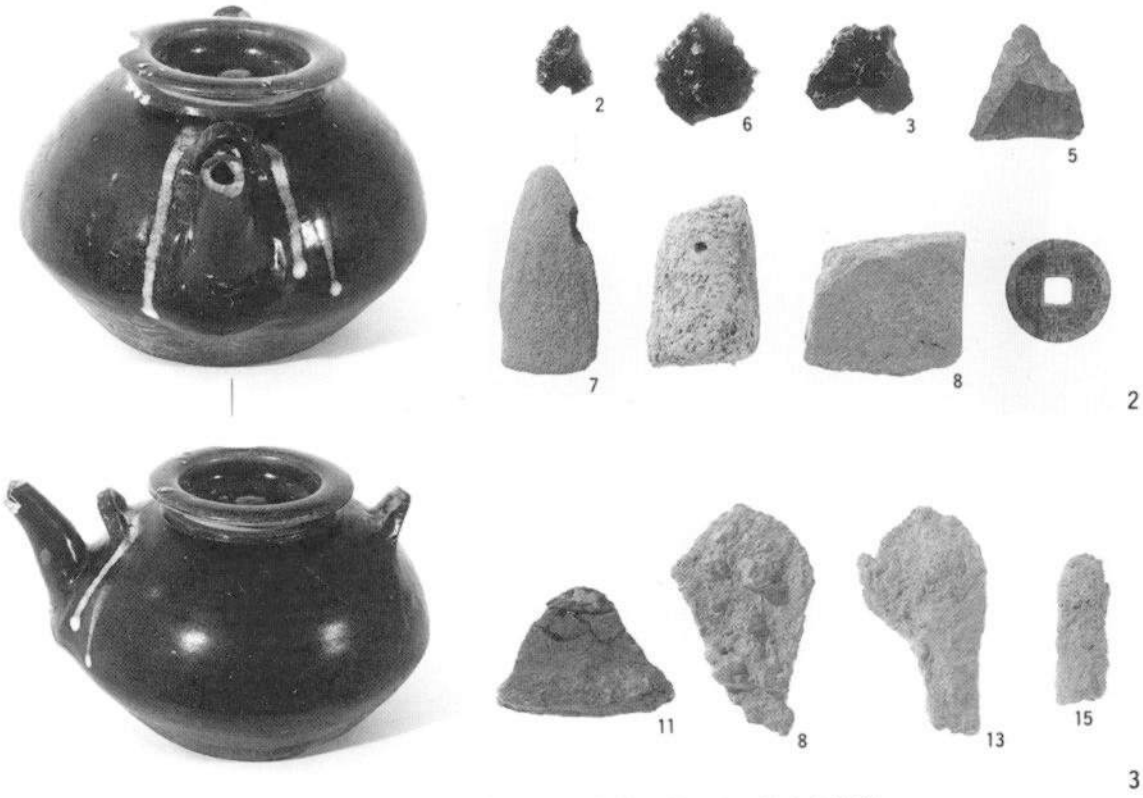
2

7

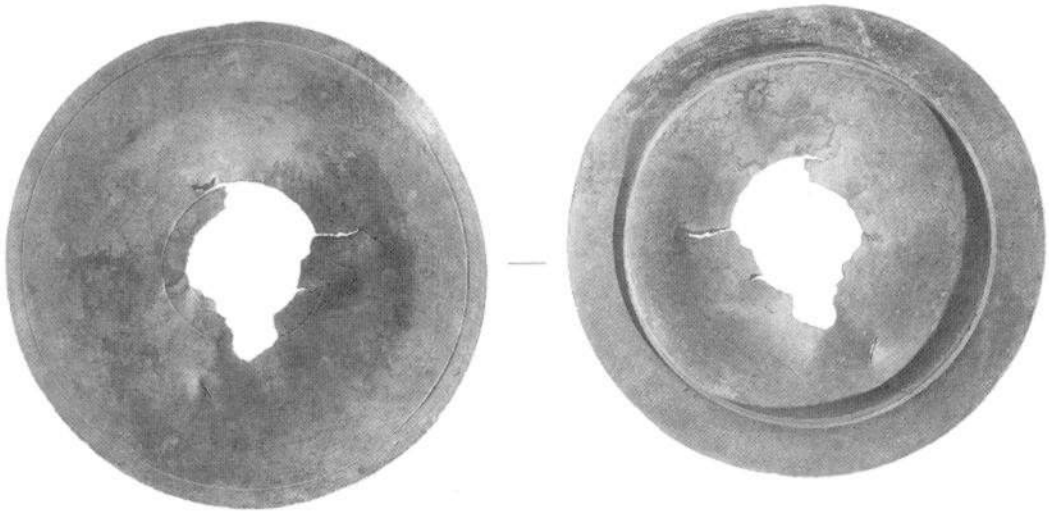


5

1　谷状遺構出土土器　2　Pit出土土器　3　谷・土壙出土石器・土製品他
4　谷・トレンチ出土石器　5　Pit出土鉄釘



1　上段斜面出土土瓶　　2　採集石器・銅銭　　3　土壙・谷，その他出土鉄器



4　採集経筒

中町裏遺跡

1．調査の概要

中町裏遺跡（39－B・C地点）は杷木町の西端，志波に位置する。

調査地は県指定天然記念物の志波宝満宮叢（樟・黄玉樹等の林相がある）から北方へ約200m程離れた位置にあり，九州横断自動車道はこの志波台地を東西方向に開設する。

遺跡地は「志波柿」の産地として名高く，その周辺一帯は柿果樹園でおおわれている。当然本跡にも植樹されており，柿の樹を除去した根株が遺構検出面全体に認められた。調査は便宜上西から39－B地点（A～C），39－C地点（D・E）の地区に分け説明することとする。昭和60年度の試掘調査の際，甕棺墓・住居跡等に加えて，谷部からは弥生式土器片を出土したことを予測して本調査に着手した。

調査の結果，A地区においては円形住居跡3軒，土壙跡1基を検出した。台地は上・下2段から成っていたが，下段からはピット数個を検出したのみで顕著な遺構は発見されなかった。

B地区は谷の調査である。谷の様相は古くは流れが強く，中世期になり氾濫した形跡が窺え，近世に至っては流れも弱く溜りの状況にあった事が想定される。最下層の出土遺物は縄文式土器（少数）と弥生式土器であり，弥生式土器は東西両台地の遺構と時期が符合し，その生活跡が39－A地点，第40地点にも広がっていることが判る。谷部の水力は土層観察の結果，それほど強いものとは考え難いが，筑後川沿岸に近いこともあり，9月9日の集中豪雨を実見すると，かなりの水量が筑後川に注いでいたものであろう。筑後川は常に豊かな保水力を持っているが，一度洪水に見舞われるとその様相は一変し，寛永22（1625）年から明治22（1889）年の264年間に25回もの洪水にあっている。平均すると10年に1回の割合である。このことについては後述するが，一級河川筑後川とそれに注ぐ支流谷のあり方として興味ある発掘であった。

C地区では甕棺墓群7基，古墳1基，竪穴状遺構2基，石組溝1条を検出した。甕棺墓は弥生時代中期初頭から中葉にかけてのもので，南北方向に2列配列されていた。削平が著しく一部の甕棺は盗掘をうけていることが判った。本跡で検出された甕棺は県内でも最も南東の位置にあたり，大分県内検出甕棺とのつながりの中で興味ある墓群といえる。また古墳は志波宝満宮社叢内に残っている古墳との関連が十分考えられる遺構である。

39－C地点（D・E地区）では主な遺構は検出されず，D地区の谷部もB地区谷と比較して滞水の状況を示していた。（高橋）

2. 遺構と出土遺物

A 地 区

A地区は西端を町道宮ノ原中町線に隣接し，南北に傾斜する細尾根丘陵上にある。西方には谷が入り600m先の丘陵が杷木宮原遺跡になり，東方はB地区の谷である。西南部は家屋建設時に削平され調査から除外した。調査前は柿園で植樹の時点で厚く削平され，南北に2枚の畑に造成されていた。遺構は北側部分で1号土壙跡，住居跡が検出された。

(1) 竪穴式住居跡

1号住居跡（図版36-1，第78図）

A地区上段部において数十個の柱穴を確認した。柱穴は円形にまとまり，竪穴住居2軒分を重複して検出した。1・2号の切合い関係は明らかでない。

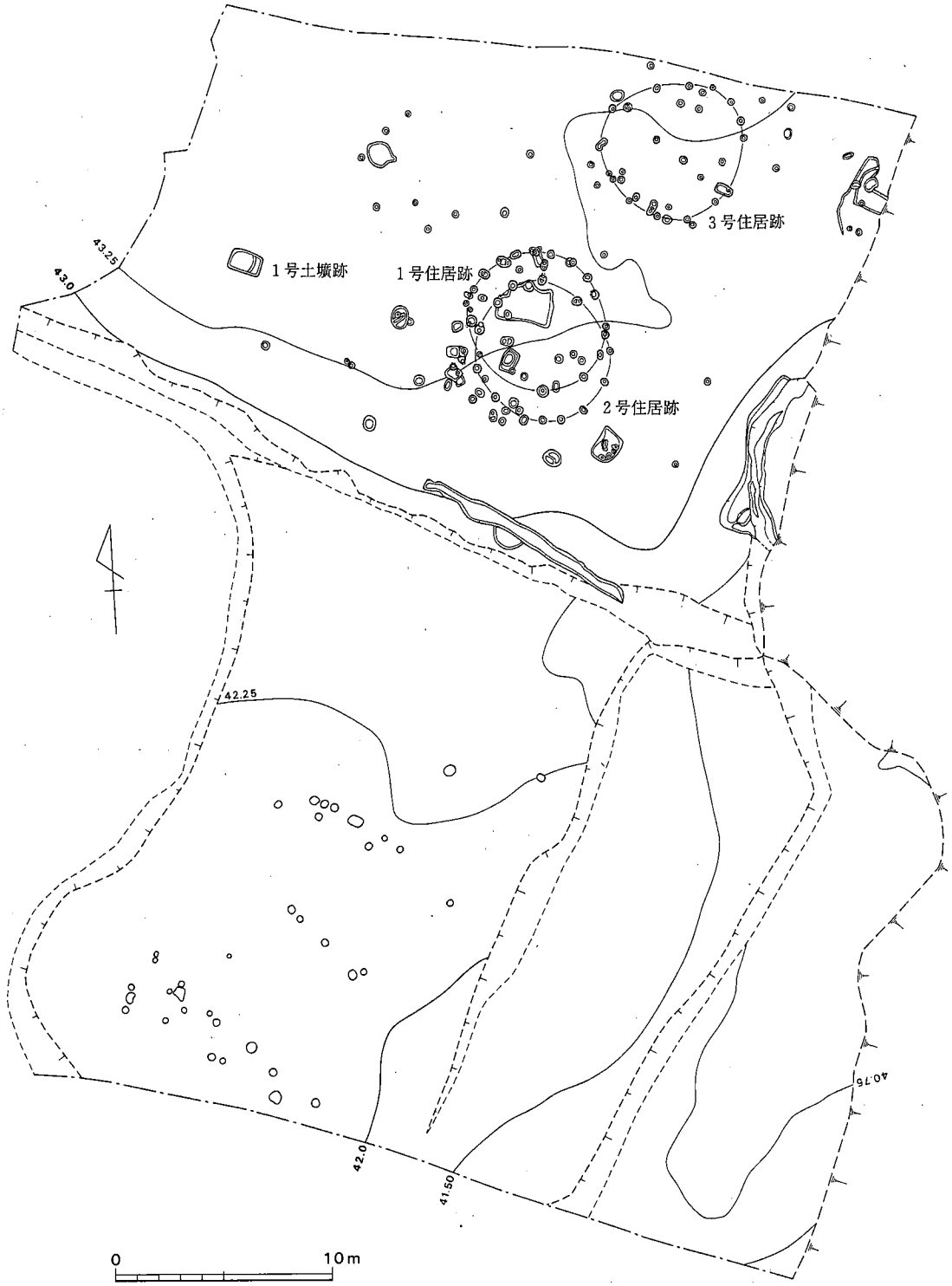
1号住居跡は柱穴16個を確認した。その中でも北側に配列した柱穴は，柱間間隔が約0.7～0.8mで，南側になると1.3～1.5mと広くなる。また第78図の柱穴No11～14は，11・12・14の柱穴の大きさと深さから，主柱穴と推定したもので，この4主柱を結ぶと長辺4.6m，短辺4.2mの長方形となり，No17・18が13と16の柱間のほぼ中央に位置してくる。この様に考えた時，一般的に弥生時代の住居跡の柱位置構造として，中央に二本柱が立つ柱穴が認められないことから，四隅の主柱穴を主とし，それに棟木をのせる構造と推知される。因に，13・14間には1個の柱穴が検出されたのみであることから，もしくは出入口が南西方向を向いていたのかも知れない。柱穴17と18の間隔は約6.6mを測るが，実際は直径8m前後の竪穴式住居跡であったろう。遺物の出土は認められない。

2号住居跡（図版36-1，第78図）

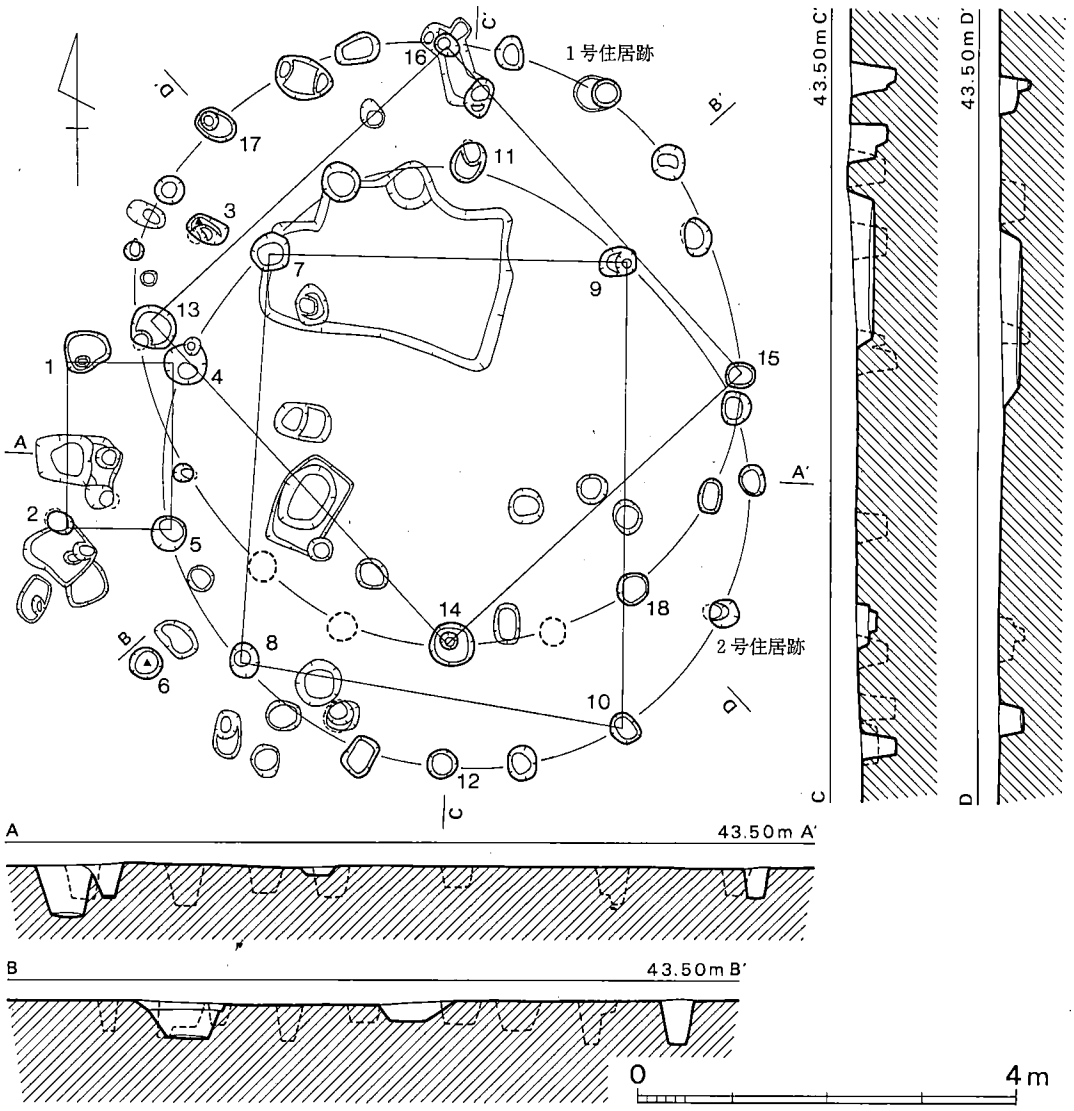
1号住居跡と重複して若干南寄りで検出した。1号住居跡と同様，側壁は削平され柱穴のみが確認された。柱穴は総数18個検出され，柱間間隔が長いもので約2.0m，短くて約0.8mを測る。また柱穴掘方と深さから，主柱穴として相当する柱穴を選定すると7～12があげられる。これらの柱間寸法は以下のとおりである。

No7←→No8（4.3m），No7←→No9（3.7m），No9←→No10（4.9m），
No8←→No10（4.1m），No11←→No12（6.4m）

このことから長軸径が若干異なるものの，ほぼ長方形の主柱を考えることができ，1号住居跡と同様の建物構造と想定する。また7↔8柱穴と同じ大きさ，深さを有する4↔5柱穴は1↔2とも並行に配列されている。さらに4↔5柱穴の延長上には柱穴3と6を確認した。4↔



第 77 図　A地区遺構配置図（1/300）



第 78 図　1・2号住居跡実測図（1/80）

5は1↔2の柱間寸法と同じで約1.8mを測る。これらの柱穴配置状況を勘案し1↔2，4↔5は2号住居跡の出入口と判断した。また3・6の柱穴に関しては柱穴7・8の支柱ではなかろうか。削平と資料の乏しい中から想定した柱関係であり，推察の域をでたことをお断りしておく。遺物の出土はみない。

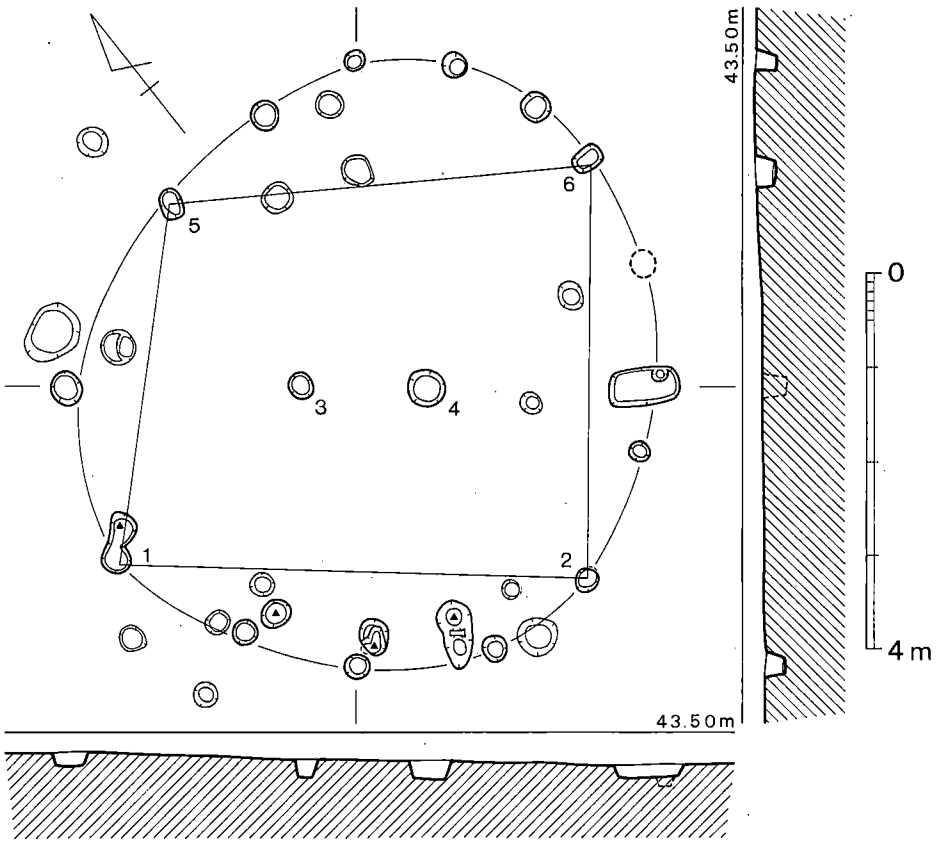
3号住居跡（図版36-2，第79図）

1・2号住居跡の北側で検出した。削平が著しく，柱穴の深さもわずかである。住居の柱穴は総数16個で，北側の柱間間隔がやや狭くなっている。1↔2，5↔6の柱間寸法は以下のとおりである。

No 1←→No 2（4.9m），No 1←→No 5（3.8m），No 5←→No 6（4.5m），

No 2←→No 6（4.3m）

1・2号と同じく柱穴の大きいもの，深いものを選定したが，1↔2，5↔6は必ずしも主柱穴とは限らず，3号住居跡に限って3↔4（柱間寸法1.3m）の2本主柱穴が確認された。しかし，この3↔4に結束する主四本柱として1・2・5・6が考えられるのである。さらに第79図に示す「▲」印の柱穴は立て替えもしくは，側柱の補強的な柱穴と考えられる。3↔4を延長した柱穴間は6.3mを測る。遺物の出土はない。（高橋）



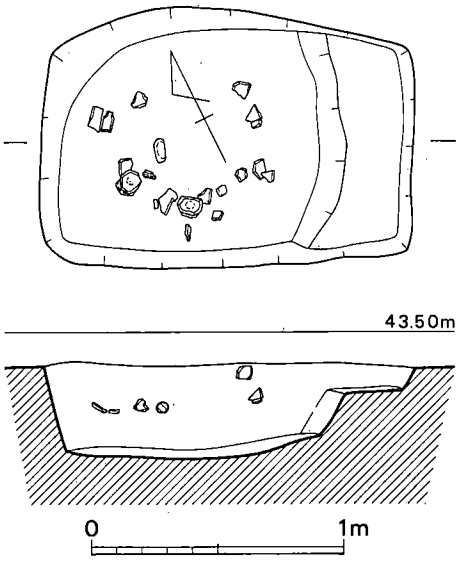
第 79 図　3号住居跡実測図（1/80）

（2）土　壙　跡

1号土壙跡（図版35-2，第80図）

A地区西端部で検出した。この土壙の東側には円形住居跡が存在するが，遺構検出面全体が柿樹園等によりかなり削平されている。

土壙形態は東西に長い長方形を呈し，長軸1.47m，短軸1.03m，最深部は検出面から36cmで，段が設けられている。主軸方位を長軸とすればN－65°－Eである。出土遺物は弥生土器片・石剣1本であった。



第 80 図　1号土壙跡実測図（1/30）

出土遺物

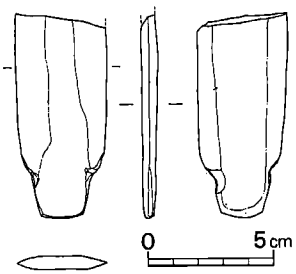
石　器（図版51-1，第81図）

磨製石剣の基部から刃部中央部破片。基部は側面・端部を平坦に面取りしている。刃部は研かれ，片面は中央に僅かに鎬がつくのであろう。現存長8.2cm，厚さ4.4～5.5mm，幅3.5cm，基部幅1.7～3.2cm，基部長3.0cm，重量26.35gを測る。表面が摩滅して判り難いが，縞目が入る頁岩質の石材を使用しているようである。

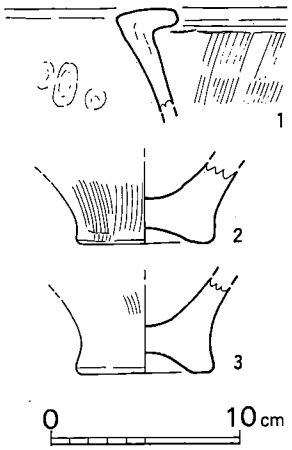
弥生式土器（図版51-1，第82図）

甕（1～3）　1は口縁片で，逆L字状口縁をなす。口縁端部は面をなし，ヨコナデ調整による。内体部はナデ調整で，所々に指頭圧痕が残っている。外体部はハケ目調整である。また，頸部に箆状工具痕が認められる。

2・3は底部片で，外体部は粗いハケ目調整。内部はナデ調整で，3には一部煤が付着している。2・3の底部は上底で，2は底径7.2cm，3は底径7.0cmを測る。胎土に粗い砂粒を含む。時期は弥生時代中期。（日高）



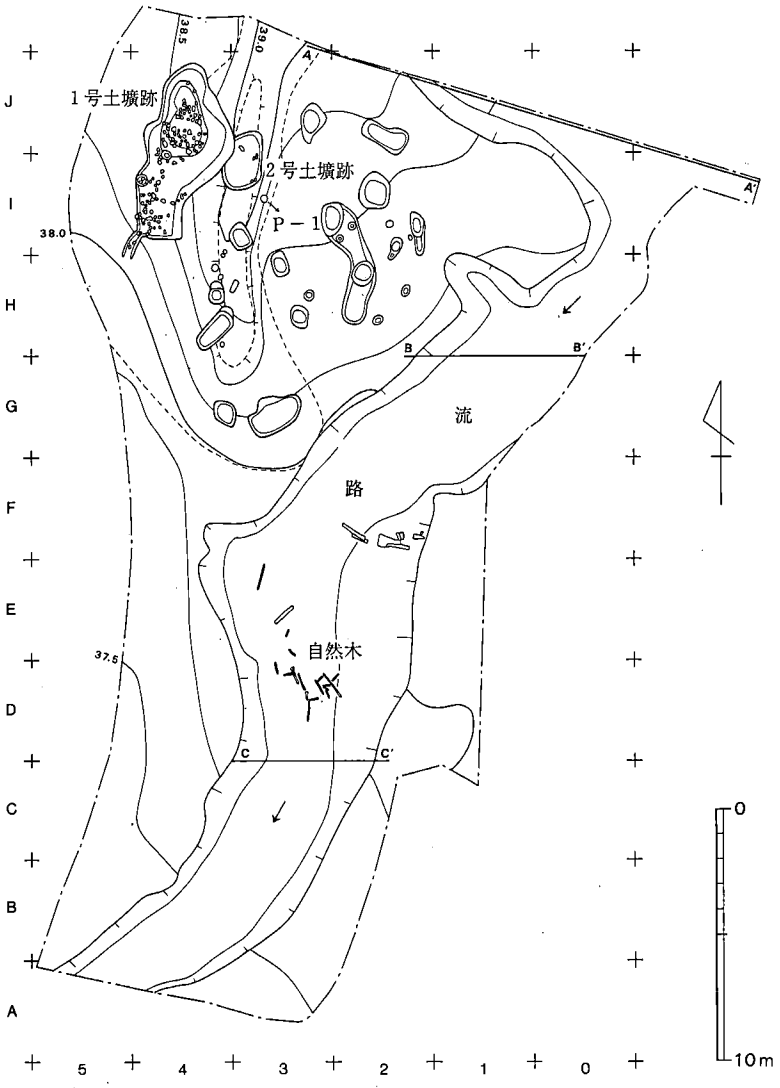
第 81 図　1号土壙跡出土石器実測図（1/3）



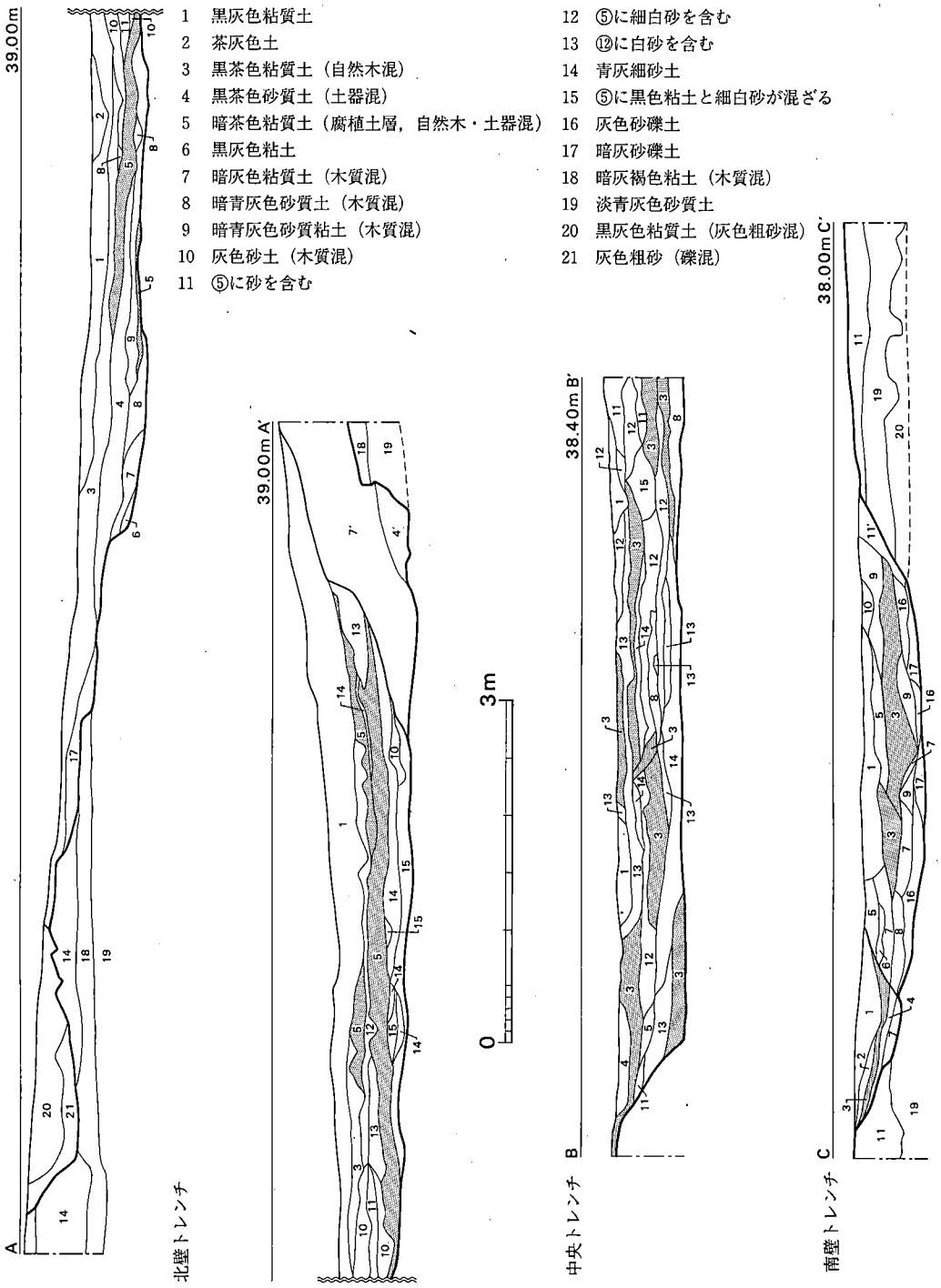
第 82 図　1号土壙跡出土土器実測図（1/4）

B 地 区 （図版37，第83図）

冒頭でも記したように谷部の調査地区である。土砂をA・C地区の台地上に盛り上げるため表土除去作業に時間を費やした。発掘は土層精査および遺物出土状況を把握するためグリットを設定し調査を進めた。



第 83 図 B地区遺構配置図（1/300）



1　黒灰色粘質土
2　茶灰色土
3　黒茶色粘質土（自然木混）
4　黒茶色砂質土（土器混）
5　暗茶色粘質土（腐植土層，自然木・土器混）
6　黒灰色粘土
7　暗灰色粘質土（木質混）
8　暗青灰色砂質土（木質混）
9　暗青灰色砂質粘土（木質混）
10　灰色砂土（木質混）
11　⑤に砂を含む
12　⑤に細白砂を含む
13　⑫に白砂を含む
14　青灰細砂土
15　⑤に黒色粘土と細白砂が混ざる
16　灰色砂礫土
17　暗灰砂礫土
18　暗灰褐色粘土（木質混）
19　淡青灰色砂質土
20　黒灰色粘質土（灰色粗砂混）
21　灰色粗砂（礫混）

1　黒褐色砂質土（小礫混）　2　①に砂を多く含む　3　暗茶色粘質土（腐植土層）　4　灰褐色砂質土（自然木混）
5　茶褐色砂質土（自然木・小礫混）　6　⑤のブロック混じりの砂　7　⑥より細かい砂　8　黄白色砂　9　③+⑦
10　⑨に⑦を多く含む　11　青灰色砂質土　12　③+⑪　13　③+⑧　14　⑬より③を多く含む　15　③+⑧+⑪
16　⑤に⑪が混ざる　17　灰白砂（礫混）　18　⑪に③が僅かに含む　19　淡青灰色砂質土　20　黒灰色粘質土

第 84 図　B地区谷部土層断面実測図（1/60）

（1）谷

a）調査前の状況

幅の狭い水路が谷の中央を蛇行しながら北から南方へ流れていた。谷の両岸壁は傾斜角約30°で，東西両台地の土砂が流れ込み堆積している状況であった。谷は北側で上端幅42m，下端幅36m，南側で上端幅24m，下端幅18mを測る。この谷の北方は調査地から約10mのところで立上り，幅の狭い水路のみが北へ延びている。また南方は国道386号線により削除されているが筑後川に向い開放的に低くなる。

b）土層について（図版38-2，第84図）

谷部を北壁・中央壁・南壁の3本のトレンチによって土層を観察した。詳細は第84図に示すとおりであるが，北壁と南壁ではかなり堆積土に異いが認められる。なかでも大きく土質を分類すると下層から砂土・砂質土（粘土を含む）・腐植土・泥質土等で，これらが互いに混在し互層をなしている。

北壁は長さ18.2mを観察した。最も堆積が厚いところで約75cmある。谷底は暗灰褐色粘土および淡青灰色砂質土で，初期の堆積土は東側と西側では若干様相が異っている。東側は腐植土・黒色粘土等が混ざった細白砂土で，自然木もかなり混在していた。このことは西側の最下層（暗青灰色砂質粘土）に比較すると，流水の強さを物語っているといえる。2期目の堆積は腐植土（暗茶色粘質土）で谷部全域に広がりを見せているが，初期の砂質土層等と腐植土との中間層には，東・西共に砂質土が流れ込み厚い堆積をなす。腐植土と細白砂土等が混在し，それに自然木の入った層が，腐植土の上・下にサンドイッチ状に互層をなす。この腐植土中の遺物を期待し精査したが，主たる遺物は検出されなかった。3期目の堆積層は灰色砂土およびそれに腐植土が混在する層で，谷部の中央部に一時的な水の流れがあったものと推知される。これより上層は4期堆積と考えられる黒灰色（自然木を含む粘質土）で，近世に至るまでの堆積土であり，最も厚いところでは約40cmを測る。

発掘区の中央部にトレンチを設定した。北壁で観察された砂土および腐植土層は，中央部においては，それぞれ混在し錯綜した土層が観察できた。腐植土は下層，中層，上層までおよび土層中間に砂礫層が混入していた。しかし層序の多くは腐植土と砂土が錯綜した暗茶褐色砂質土である。北壁で観察できた堆積状況は中央部トレンチでは明らかにし得なかった。

南壁は砂層が主体をなす。腐植土は土層中央部に帯状に堆積し，最も厚いところで25cmを測る。最下層は灰白砂土（礫を含む）で，流水が良い条件を備えており，自然木もそれに混ざって検出された。腐植土の上層は北壁の上層と同様，黒灰色泥質土が厚く堆積していた。砂礫土中に弥生式土器片が若干検出された。（高橋）

出土遺物

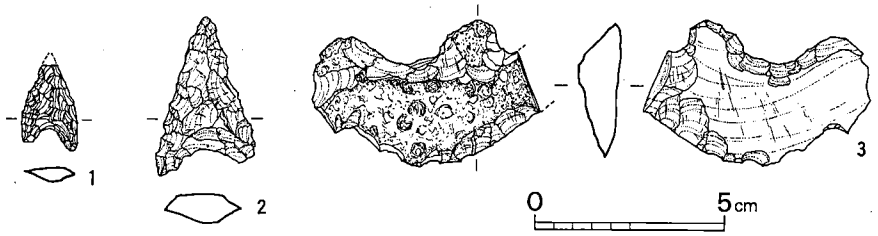
縄文時代の石器（図版51-2・53-2，第85・86図）

縄文時代に属すると思われる石器として打製石鏃２点・石匙１点・磨製石斧が５点が出土し，その内磨製石斧３点は土壙で扱った。他に図示しなかったが，黒曜石の剝片や縞目が入った黒色黒曜石原石，サヌカイト・メノウ・チャート製の石核状の石塊が出土した。

打製石鏃（１・２）　１は姫島産黒曜石製で先端部が欠損する。現存長2cm，最大幅1.5cm，厚さ4mm，重量0.9ｇを測る。２はサヌカイト製の大型石鏃，長さ4.2cm，最大幅2.6cm，厚さ7mm，重量5.5ｇを測る。

石　匙（３）　サヌカイト製で，横剝ぎの剝片を使用し，片面に自然面を残している。現存長6cm，最大幅3.8cm，厚さ1.1cm，重量20.8ｇを測る。G-4より出土。

磨製石斧（４・５）　４は緑泥片岩製。長さ14.3cm，最大幅4.3cm，厚さ3cm，重量262ｇを測る。H-1腐植土層より出土。５は安山岩製で刃部を欠損する。現存長8cm，最大幅4.9cm，厚さ2.8cm，重量180ｇを測る。I-3より出土。



第 85 図　B地区出土石器実測図（1/2）

弥生時代の石器（図版51-2，第86・87図）

磨製石剣（６・７）　６は硬質砂岩製の基部近くの破片。基部にはV字の抉りが入り，端部と側面を面取りしている。現存長4.9cm，最大幅3.9cm，厚さ7mm，基部幅3～3.3cm，重量24.7ｇを測る。G-2より出土。７は粘板岩製の刃部中央から端部にかけての縦割れ破片。方形の抉りが入り端部は面取りしている。現存長8.6cm。E-2より出土。

石包丁（８）　砂質片岩製の石包丁破片。厚さ3mmと薄く，刃部は両面から均等に研磨し，孔は両面から穿孔している。I-4より出土。

石　戈（９）　粘板岩製で，先端部と基部が欠損する。欠損後に再利用され先端部は研磨し尖らし，両側刃部は刃潰ししている。現存長8cm，最大幅5.5cm，厚さ1.8cm，重量72.8ｇを測る。F-4より出土。

磨製石斧（10）　粘板岩製の柱状片刃石斧先端部破片。F-3腐植土層より出土。

磨　石（11）　輝石安山岩製。楕円形で上面は僅かに窪み，下面は平坦である。研磨痕がこ

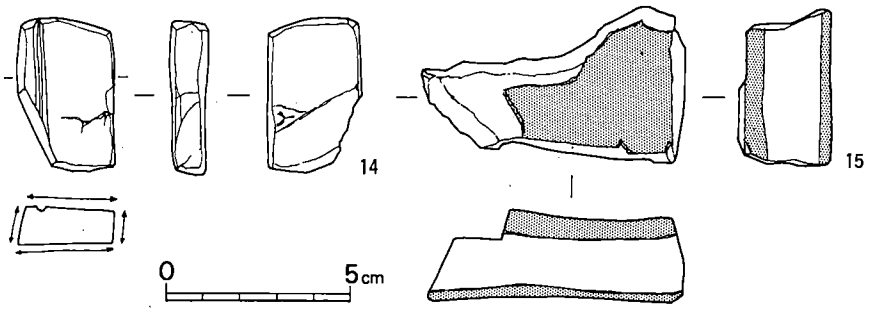
第 86 図　B地区出土石器・石製品実測図①（1/3）

の両面と側面の一部に見られる。長さ8×9.7cm，厚さ4cm，重量515ｇを測る。G-3より出土。

砥　石（12～14）　12は安山岩製の据え置きタイプの粗砥石破片。現存重量385ｇ。G-2腐植土より出土。13は砂岩製の据え置きタイプの粗砥石破片。現存重量880ｇ。H-1腐植土より出土。14は砂岩製の粗砥石破片。上面に断面V字状の条溝が1条深く入っている。上下面と側面3面が使用されている。現存長4cm，幅2cm，厚さ1cmを測る。G-1より出土。

鋳　型（図版51-2，第87図-15）　角閃安山岩製の破片で上面は研磨され窪み，割れ口を見ると表面から上面は5mm，下面は2mm程度の部分が黒く変色している。両面ともかなり高温を受けたと考えられることから鋳型の破片と思われる。厚さ2.3cm。D-3より出土。時期は不明。

（日高）



第 87 図　B地区出土石器・石製品実測図②（1/2）

縄文式土器

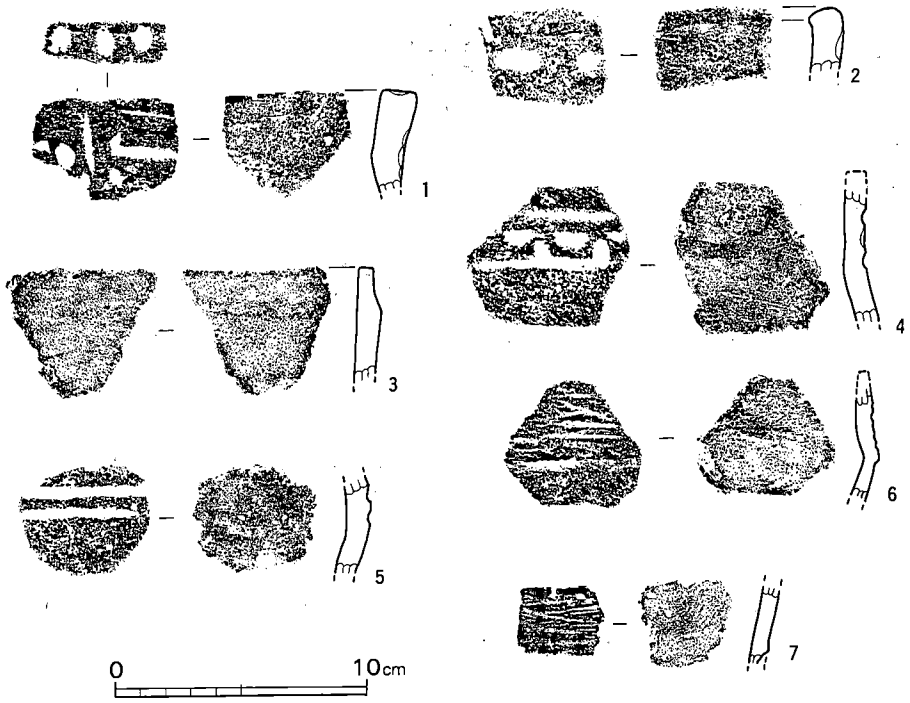
谷部の腐植土層・下層や土壙跡・土壙跡周辺から出土した縄文式土器を一括した。

第1群土器（図版52-1，第88図）

1は箆状工具により縦横位に直線的な凹線と凹点により施文する。口唇部には刻みを施している。E-3下層より出土。2は大きな楕円形の凹点が横位に連続して施されている。H-3より出土。3は口縁部を押し窪めて幅広の凹線状にし，口唇部を面取りしている。G-2下層より出土。4は直線的な凹線と楕円形の凹点を縦横位の配置により施文する。口唇部を欠いた口縁部破片。I-4より出土。5は直線的な2条の凹線を施す。口唇部を欠いた口縁部破片。G-1下層より出土。6は口縁帯部分に横方向と斜め方向に沈線を施す。H-0腐植土より出土。7は外面に条痕の調整を施している。I-0下層より出土。本群は縄文時代後期初頭に属する土器群と考えられる。

第2群土器（図版52-2，第89図）

1は波状口縁を有する精製磨研浅鉢の口縁部破片。I-0下層より出土。2は口縁端部を丸く仕上げ，内外面に1条の沈線が巡る。精製磨研浅鉢の口縁破片。H-4より出土。3は粗製深鉢

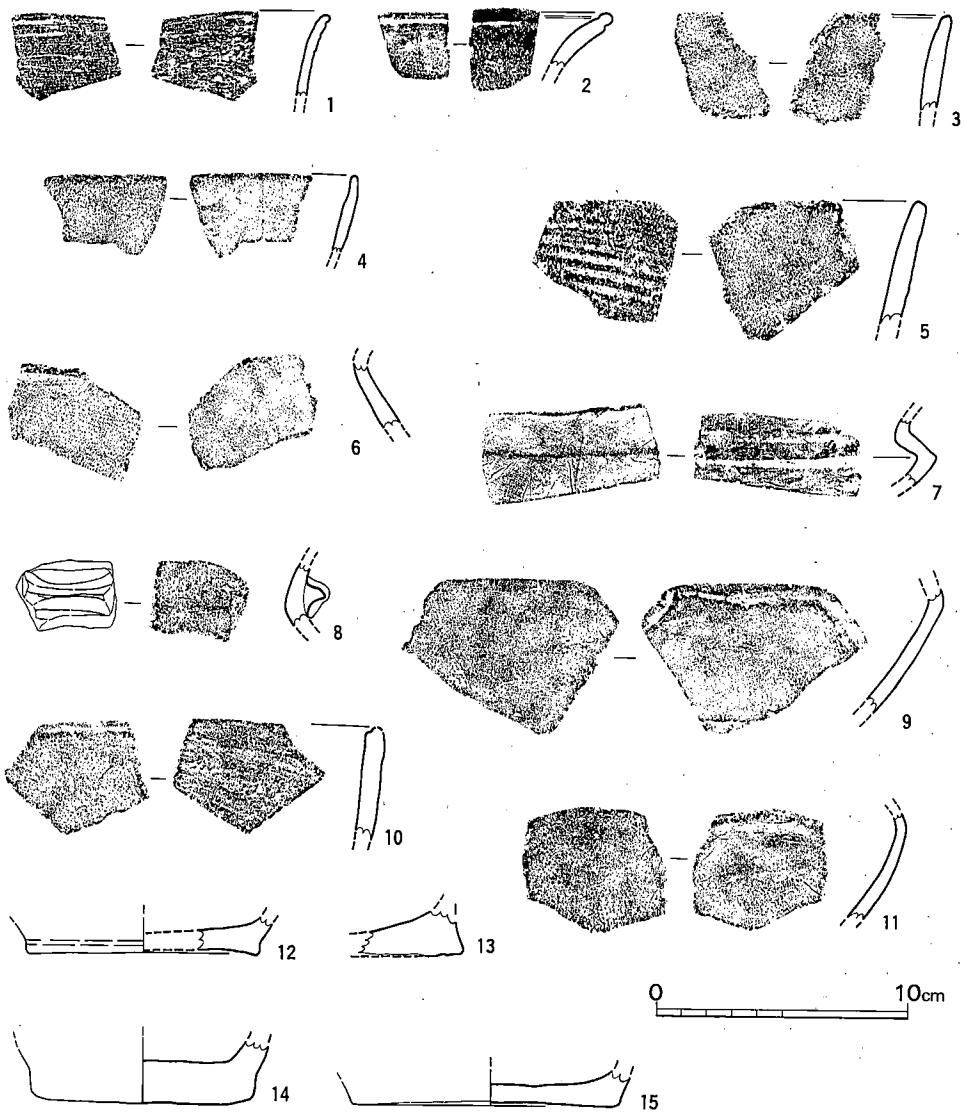


第 88 図　B地区出土縄文土器第１群拓影図（1/3）

の口縁部破片。G-1腐植土層より出土。４は精製浅鉢の口縁部破片。H-1腐植土層より出土。５は粗製深鉢の口縁部破片で，外面には条痕による調整を施している。E-3より出土。６は頸部から胴部にかけての破片。外面は細かい条痕調整している。G-2下層より出土。７は精製黒色磨研浅鉢の頸部から胴部にかけての破片。E-2より出土。８は精製磨研浅鉢の頸部と胴部の境部破片で，4cm程のリボン状粘土帯を貼りつけている。１号土壙跡より出土。９・11は精製浅鉢の胴屈曲部から下位の破片。内外面とも条痕調整のあと横位に篦研磨している。９はH-0，11はE-3下層より出土。10は胴部破片で，内外面とも条痕調整のあと粗いナデを施す。12～15は底部破片。12・13は底部端が張出し，14は垂直に立ち，15は鈍角に立ち上がる。12・15は上底，13・14は平底。12・14は復原底径9cm，15は10.5cmを測る。15は胎土に石英粒と細かい角閃石を含み，底面に煤が付着している。12はI-3，13は１号土壙跡，14はG-1下層，15はE-3腐植土より出土。本群は縄文時代晩期中頃に属する土器群と考えられる。

第３群土器（図版53-1，第90図）

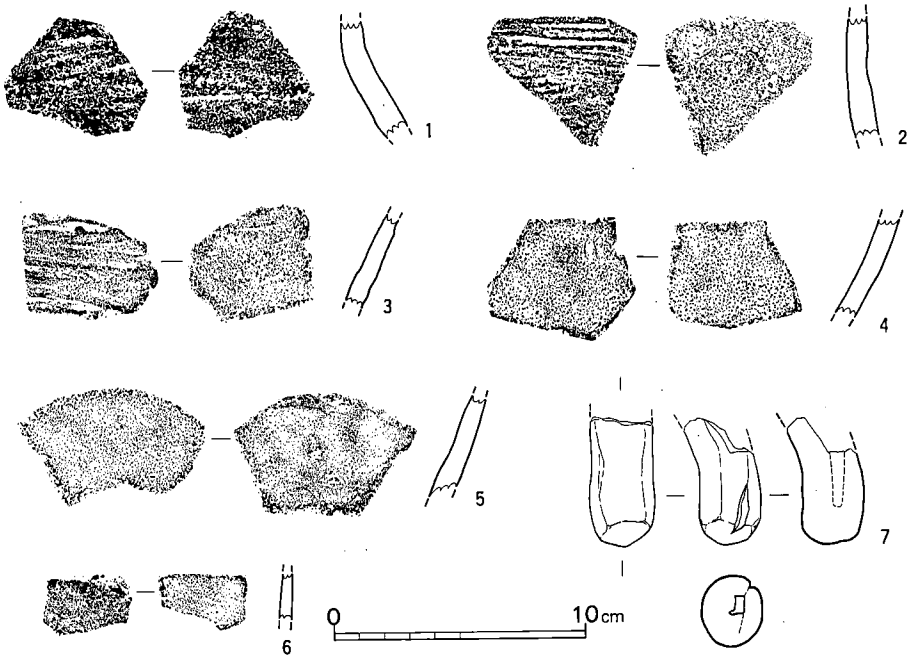
１は頸部から胴上半部破片で，内外面とも条痕調整。D-3腐植土より出土。２は外面に横・斜め方向の条痕調整，内面はナデ調整している。H-1腐植土より出土。３は胴部破片で，外面は横方向の条痕調整を施し，内面は条痕調整のあと粗いナデ調整している。C-3腐植土層より出土。４は胴下半部破片で，内外面とも細かい条痕調整のあとにナデ調整している。胎土に石



第 89 図　B地区出土縄文土器第２群拓影図（1/3）

英・角閃石を多く含む。Ⅰ-0下層より出土。５は胴下半部破片で，内面は条痕調整のあとにナデ調整し，外面はナデ調整している。H-0腐植土層より出土。６は胴部破片，内外面とも条痕調整のあとに粗いナデ調整を施す。C-3腐植土層より出土。

土　偶（７）　径2.5cm，現存長5cmの僅かに反り気味の棒状破片。割れ口中央付近に6×7mmの方形の穴が先細に穿って，一部に接合線が走る。粘土板を筒状に丸めて軸棒を包んだのであろう。器面は摩滅して細かい石英・長石粒が目立つ。土偶の腕ないし足の部分であろう。F-2



第 90 図　B地区出土縄文土器第3群拓影図・土偶実測図（1/3）

下層より出土。

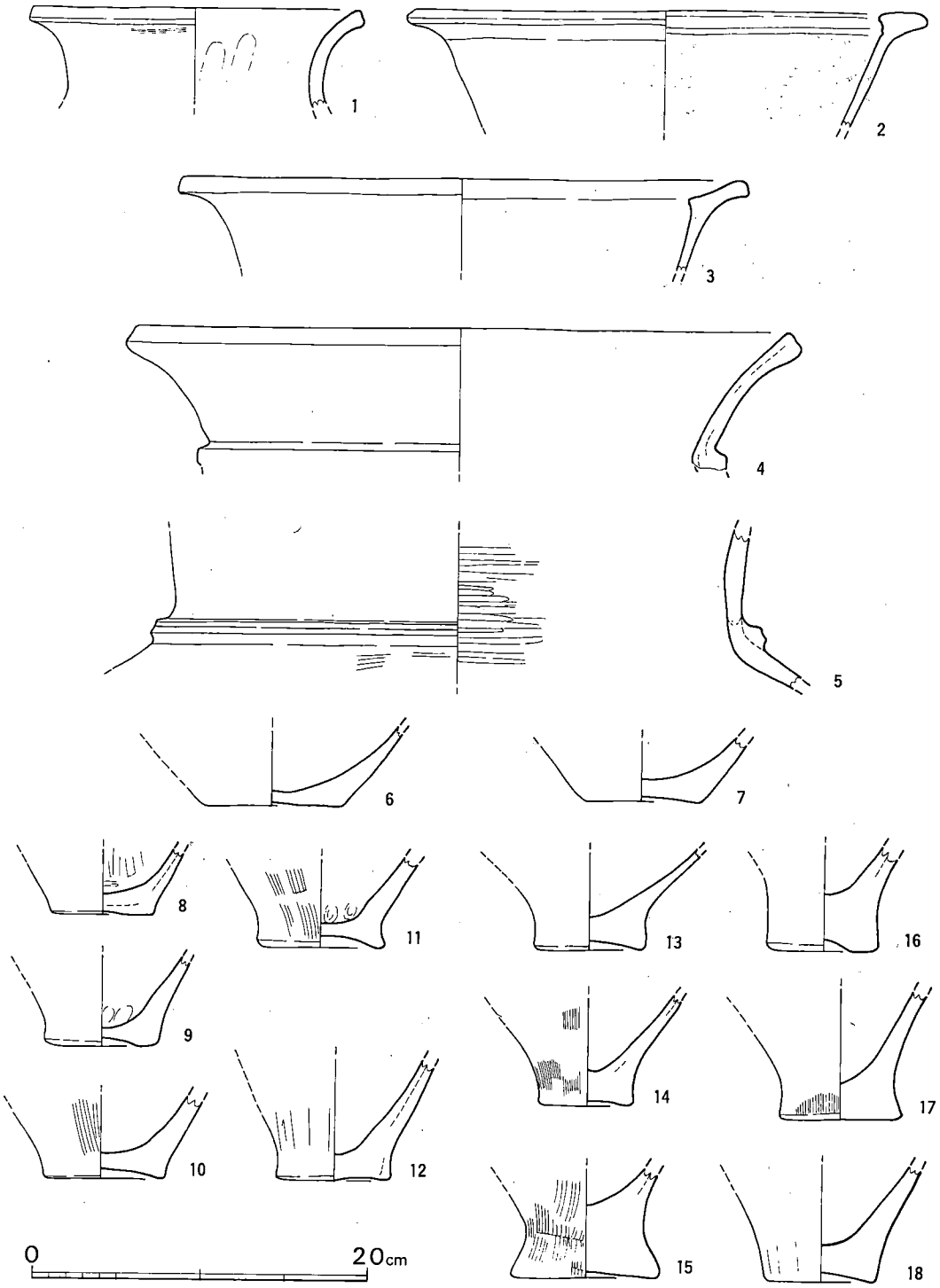
本群は，胎土・焼成が2群土器に類似するとこから同時期と考えられる。　（日高）

弥生式土器

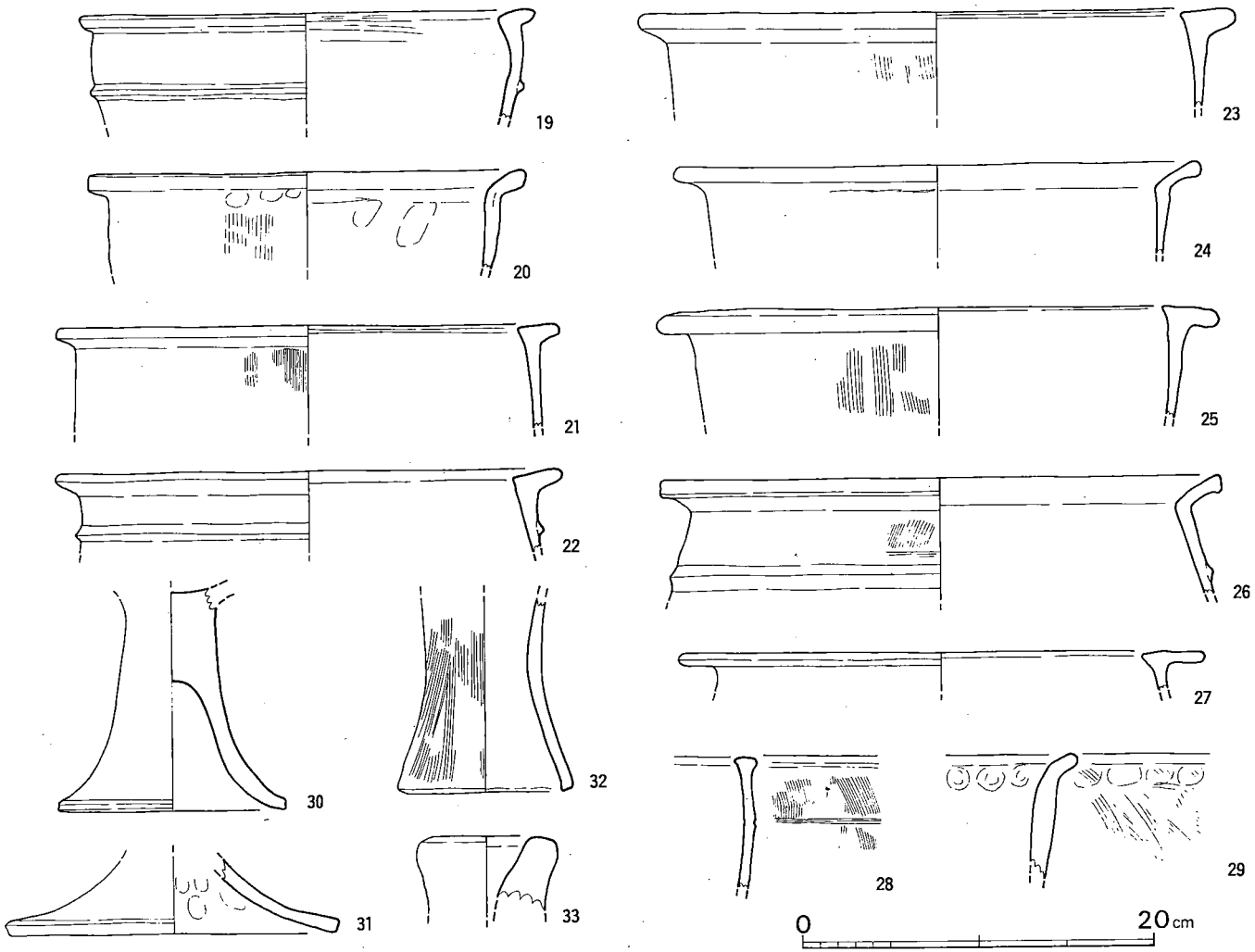
層位的に出土土器を分類すると下層出土土器と腐植土出土土器とがあり，下層の土器は砂土からの検出である。必ずしも砂土と腐植土とを厳密に区別できたわけではなく，流水・滞水の中で錯綜した層位からの出土土器であることをお断わりしておきたい。ただ出土層位が不明瞭な土器については割愛した。時期は弥生時代中期初頭から中葉のものが多い。

下層出土土器（図版54・55，第91・92図）

壺（1～7）　1～4は口縁破片である。1は復原口径20.0cmで，口縁部は肥厚せずに外反する。内外面共にナデ調整し，口縁端部はヨコナデ調整である。外体部に一部ハケ目痕，内面に指頭痕を残す。2は復原口径31.0cmで口縁端部は面をなす。内面の稜は三角形状に尖り，その下端に一条の沈線が入る。摩滅が著しい。3は復原口径34.0cmである。口縁部は強く外反し，内面の稜は尖り気味である。ナデ調整による。4は小片で復原口径40.2cmになる。口縁は大きく外反し，頸部に台形状の突帯が巡る。全体に摩滅が著しい。5は壺の頸部破片で，頸部径33.8cmを測る。頸部に低いM字状の突帯が巡る。内外面はミガキおよびナデ調整である。6・7は壺底部破片で，6は底径8cm，7は7cmである。共に外体部は黒変化している。



第 91 図　B地区下層出土土器実測図①（1/4）



第 92 図　B地区下層出土土器実測図②（1/4）

甕（８～29）　８～18は底部破片，19～29は口縁部破片である。８～10は順に底径6.0cm，6.6cm，7.2cmで，８の内面は工具アテの痕跡が認められ，９は指頭圧痕がある。共に摩滅が著しく，10は外体部ハケ目調整である。11は底径7.0cmを測り，浅い上底である。内面はナデ調整が観察でき，指頭圧痕が残り，一部煤が付着している。12・13・14は順に底径6.9cm，6.6cm，5.6cmを測る。14の外体部はハケ目調整である。15は底部が厚く，底がわずかに上底になっている。外体部ハケ目痕が明瞭に残る。16は底径6.6cmで，底面の中央部のみ上底である。摩滅が著しい。17･18は順に底径7.2cm，6.6cmを測り，17は外体部ハケ目調整をみる。

19は復原口径26.0cm。口縁は内弯気味に立上り，端部が強く外反する。外体部に断面コ状の凸帯を巡らす。内外面ともナデ調整であるが，口縁部のみナデ調整によっている。胎土中に雲母・細砂粒を若干含む。20は口縁部が「く」字状に強く外反し，復原口径25.0cmを測る。調整は内面ナデ，外体部はハケ目によっている。頸部下端に指頭圧痕が残る。21は復原口径28.8cmで，内面に稜が付く。口縁端部は面をなし，外体部の調整はハケ目による。頸部下位に一部煤の付着が認められる。22は口縁の器肉が厚く，端部は平坦な面をなす。外体部の頸部下位に断面三角形の凸帯を巡らしている。摩滅が著しい。

23は22の口縁部片に類し，口縁が肥厚するもので，端部は平坦な面をなす。内面ナデ，外体部はハケ目調整をみる。復原口径34.0cmである。24は復原口径30.0cmで，口縁を「く」字状に強く外反させ，内面に稜をもつ。全体に摩滅がひどく調整は不明。25は口縁が逆Ｌ字状をなし，ヨコナデによる調整をみる。内面ナデ，外体部はハケ目調整である。復原口径32.0cmを測る。26は復原口径31.6cmで，口縁を「く」字状に外反させ，外体部に低い断面三角形状の凸帯が巡る。凸体部はヨコナデ調整による。摩滅が著しい。27は小片で，口縁端部は面をなす。ナデ及びヨコナデ調整。復原口径30.0cmを測る。28は口径の復原は不可能である。口縁端部は丸味をもって作り，外体部に一条の沈線を巡らす。内面ナデ，外体部は丁寧にハケ目調整を施す。29も口径復原は不可能である。口縁を指圧により強く外反させる。そのため外体部の頸部下位に指頭圧痕が明瞭に残っている。内面ナデ，外体部はハケ目調整である。

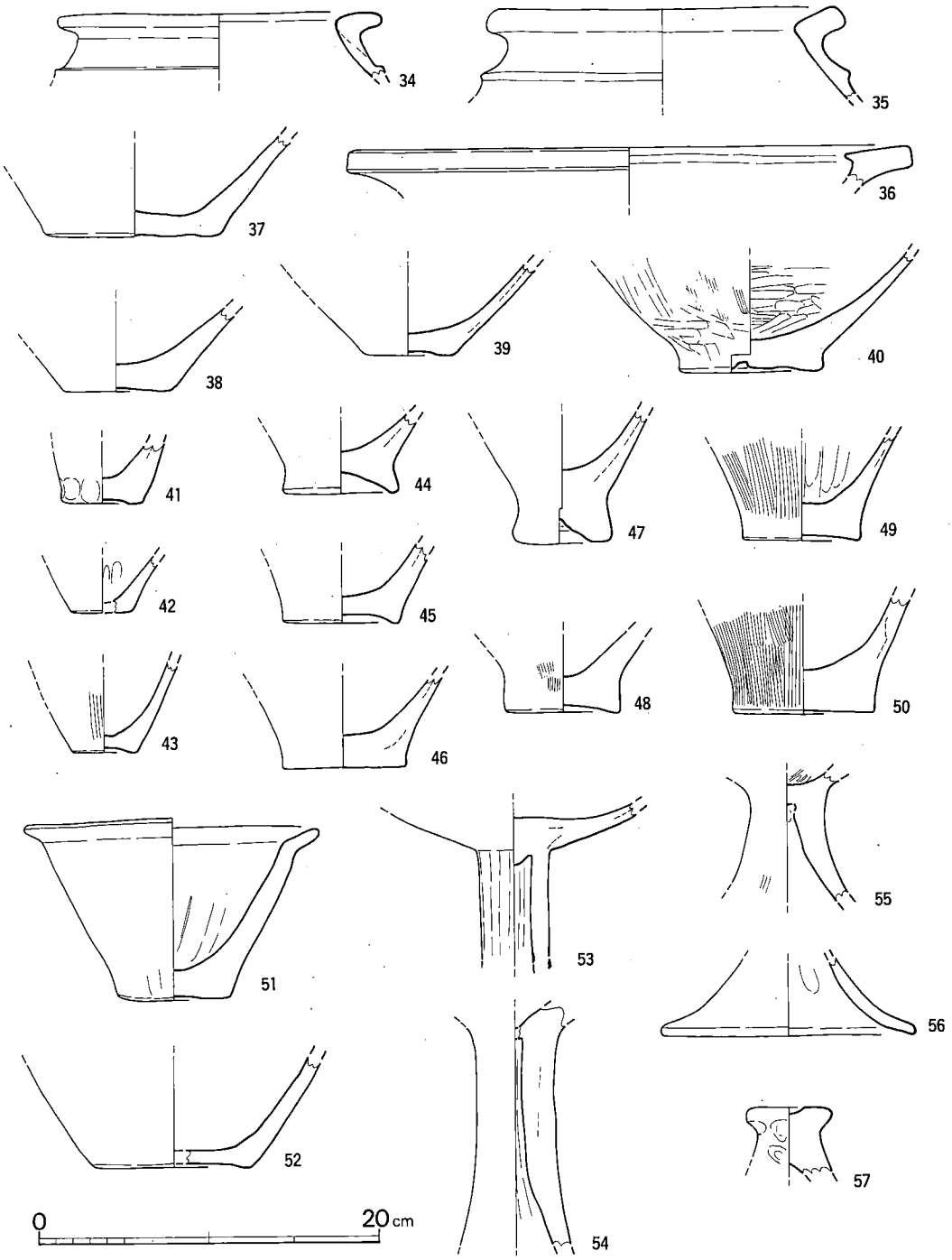
高　坏（30・31）　30は復原脚径13.0cm，坏部内底までの高さ12.4cmを測る。摩滅が著しく調整は明らかでないが，脚部端はヨコナデで一部黒変している。31は脚径18.8cmに復原可能であることから高坏脚部とした。摩滅が著しく調整は不明。内面に指頭圧痕を残す。

器　台（32・33）　32は底径10.0cmで，内面ナデ，外体部は縦方向に強いハケ目調整。胎土中に雲母を含み茶褐色を呈す。33は器肉の厚い器台で，復原口径7.6cmである。ナデ調整による。

腐植土層出土土器

弥生式土器（図版56・57，第93・94図）

壺（34～40）　34～36は壺口縁破片である。34は口唇部の器肉が厚く，「く」字状に強く外反する。全体に摩滅しているものの，内面ナデ，外体部ヨコナデ調整を観察できる。頸部下位



第 93 図　B地区腐植土出土土器実測図①（1/4）

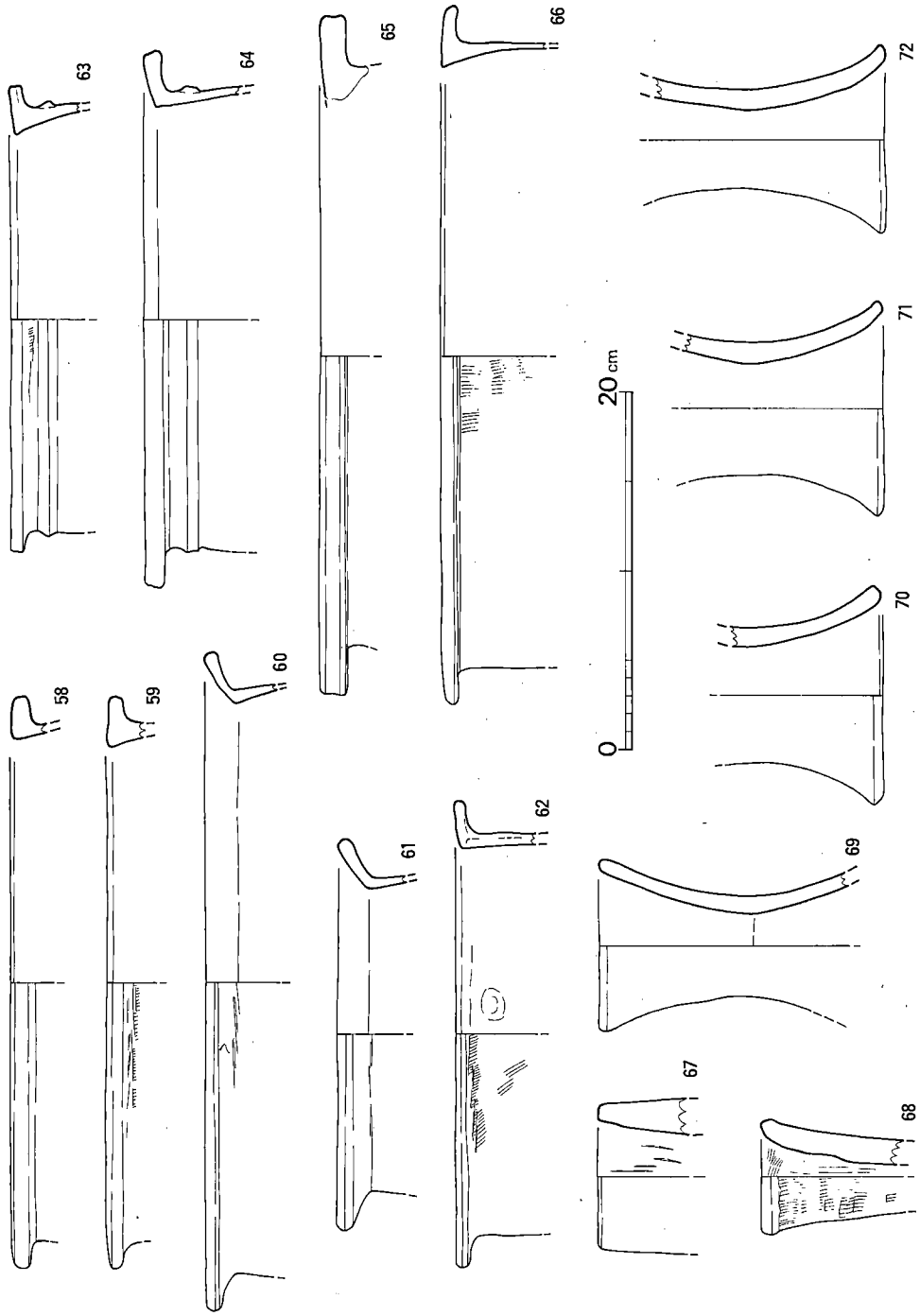
に断面三角形を呈する凸帯が巡る。胎土中に雲母・細砂粒を含み灰褐色である。復原口径19.0cmを測る。35は口縁が内傾し，口唇部が肥厚する壺破片である。外体部の頸部下位に断面三角形を呈する貼付凸帯が巡る。復原口径21.0cm。胎土中に細砂粒を含み灰褐色である。36は復原口径33.2cmで，上部端面は平坦に作る。内面に稜が入り，調整はヨコナデによる。

37～40は壺底部片である。37は底径10.3cmで内面ナデ，外体部は摩滅のため明らかでない。雲母・砂粒を含み黄褐色を呈す。38は底径6.4cm，39は5.0cmを測る。共に摩滅が著しい。内外面共にナデ調整であろう。40は底径8.4cmである。内外面共にミガキ調整によるが，外体部はハケ目調整後，ミガキを施し黒褐色に仕上げている。さらに底部中央には径1.0cm，深さ0.5cmの浅いホゾ穴をみる。

甕（41～50，58～66）　41～50は甕底部破片である。41～43は底径が他の例に比較して小さく，41から順に4.6cm，3.6cm，3.8cmを測る。共に内面はナデ調整で，外体部は41が指頭圧痕，43がハケ目調整を観察できる。共に外底から外体部にかけて黒変しているのが目立つ。44は底径6.6cmで，1.2cm程上底となる。内外面共にナデ調整で，内底一部に黒斑がある。45・46は底径6.8cm，7.2cmを測る。45は浅い上底となるが，46は平底である。摩滅が明瞭。47は器肉が肥厚する甕底部で，端部は丸味をおびる。摩滅が著しいが内外面共にナデ調整である。底部は上底となり，最も高い所で1.6cmを測る。胎土中に雲母・細砂粒を含み暗褐色をなす。48・49が浅い上底となる。また48・50の内底には煤と思われる黒変が数ヶ所認められる。共に焼成は良好で，暗褐色を呈す。

58～66は甕口縁破片である。58・59は口唇部が肥厚した口縁で，端部は丸味をおびる。59の頸部下位には僅にハケ目痕を観取できるが，共に摩滅が著しく調整法は定かでない。復原口径は58が32.0cm，59が32.1cmである。60・61は口縁部を「く」字状に外反させ，口唇端部が若干肥厚する。調整法は摩滅が激しいために不明。60の口唇部に一部黒斑が認められる。60・61共に頸部に箆状の工具痕がある。復原口径は60が36.9cm，61が22.0cmを測定した。62は復原口径26.2cmで，逆L字状に近い口縁である。内面はナデ，外体部はハケ目調整であるが，頸部に工具の痕跡が数ヶ所観取できる。胎土は粗砂を含み褐色を呈する。ちなみに口唇部はヨコナデ調整である。63・64は器形的に口縁が内傾し，逆L字状の口縁をもつ，共に内面に稜が入り口唇部はヨコナデ手法による。63は復原口径26.0cmで，頸部下位に断面三角形を呈する貼付凸帯が巡る。この凸帯と口唇部の間にハケ目痕を観察する。64は復原口径30.0cmで，外体部に断面台形状の貼付凸帯がある。内外面共にナデ調整であるが，64は二次的に加熱を受け赤変しているようだ。65は復原口径38.0cmである。口縁内部が欠損している。口縁上面は平らな面をなす。66は復原口径39.0cmで，口縁端部は平坦である。口唇部はヨコナデ，内面はナデ，外体部はハケ目調整で仕上げている。胎土中に砂粒を含み茶褐色を呈す。

鉢（51・52）　51は口径17.3cm，底径6.6cm，器高10.6cmの鉢である。口縁部を「く」字状



第 94 図　B 地区腐植土出土土器実測図②（1/4）

に外反させ，端部は丸くおさめている。内面はナデ，外体部はナデ調整と思われるが摩滅のため明らかでない。口縁部はヨコナデ調整である。内面中位から外体部下位にかけて黒変化している。52は鉢の底部で，復原底径9.5cmを測る。調整は不明。胎土中に石英・砂粒を多く含み，色調は灰茶色である。

高　坏（53～56）　53は坏部上位と脚部下端を欠損する。坏部は摩滅が著しく調整は不明。脚部内面はヘラケズリによっており，その工具痕がよく判る。外体部は縦方向のヘラケズリの後にナデ調整を行っている。54・55は脚部中位のみで摩滅が激しく調整は明らかでない。しかし55の内面一部にケズリ痕と外体部の一部にハケ目の痕跡を観察できる。共に胎土中には砂粒・雲母を含み茶灰色を呈する。56は復原脚径14.8cmの脚底部である。内面ナデ調整，外体部から内底にかけては摩滅している。

蓋（57）　蓋の取手部であろう。天井部中央を0.4cmくぼめ，内外面共にナデ調整を行い，各所には指頭圧痕を認める。外体部の一部は黒変している。天井部径4.8cmである。胎土中に雲母・細砂粒を含み，焼成は良質である。

器　台（67～72）　67は直立形の器台で，器肉が中央にかけて厚く，2.0cmを測る。口径8.0cmに復原でき，胎土に砂粒を多く含む。68は復原口径6.4cmで，口唇部のみヨコナデ調整を観る。内面は強いナデ，外体部は縦方向のハケ目調整である。胎土中に黒雲母を観取する。69～72は器形を同じくするものである。69は上下が明らかでないが，復原口径9.8cmとした。端部を丸く作り，ナデ調整であろう。70は復原底径12.2cmで，摩滅が著しい。砂粒・雲母を多く含有する。71は復原底径12.0cm，72は10.6cmを測る。胎土に砂粒が多く，焼成もやや軟質である。

円盤状土器片（図版58-1，第95図）

１～８は弥生式土器壺・甕の胴部を打ち欠いて楕円形に成形し，さらに概ね長径部の両端を打ち欠いて抉りを入れている。土錘的な用途に用いられたのであろう。大きさは3.8×4.2cm～5.0×6.0cm，重さは12.5～26.9ｇまである。詳細は表５の計測表に記す。

土製品（図版58-2，第96図）

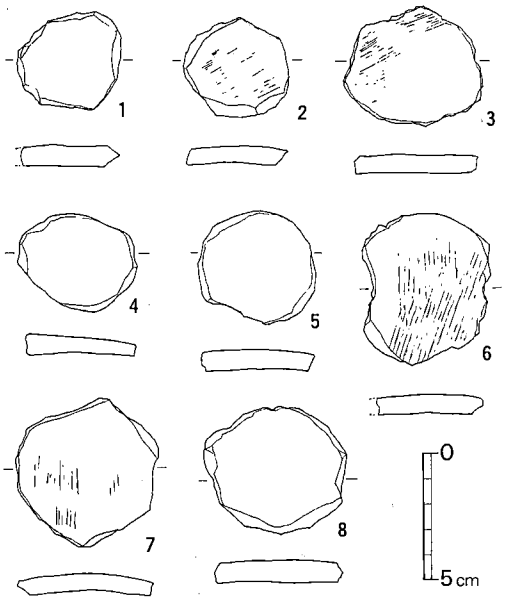
紡錘車（1）　穿孔は片面。器面は摩滅が著しい。胎土には，角閃石・石英・赤褐色粒を多く含む。径3.8cm，孔径6～9mm，厚さ1.5cm，重量20.5ｇを測る。H-3より出土。

土　錘（2）　管状の土錘で，胎土はきめ細かい。長さ5.6cm，最大径6.7cm，重量6.7ｇを測る。Ｊ-2より出土。

土師器（図版58-3，第97図）

壺（1）　口縁～頸部破片。頸部で屈曲し，口唇部にかけて直線的に外方に広がる。口縁部内面は横方向のハケ目調整を施すが，指頭圧痕が残る。頸部はナデ調整。口縁部外面は，斜め・縦方向のハケ目調整を施す。復原すると口径は12.4cm，頸部は径9.4cmになる。

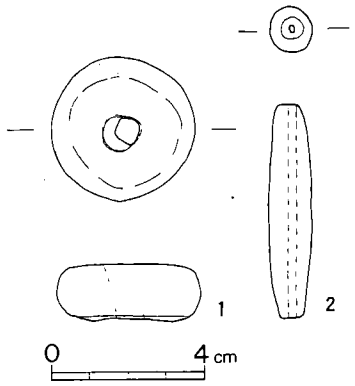
甕（2）　口縁～肩部破片。頸部から丸味をもって外反する。口縁は器肉が厚く，端部はや



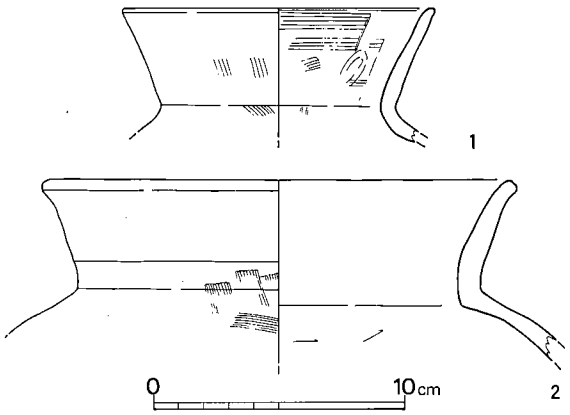
第 95 図　B地区出土円盤状土器片実測図（1/3）

表 5　円盤状土器片計測表　（単位：cm）

	長径	短径	厚さ	重量 (g)	出土地
1	4.2	3.8	0.8	17.2	D－2
2	4.2	3.8	0.6	12.5	I－0
3	4.9	4.6	0.7	22.5	F－2下層
4	4.6	3.8	0.45～0.85	13.5	F-2腐植土
5	4.5	4.2	0.8	19.6	E－2下層
6	5.9	5.2	0.75	26.9	G－2下層
7	5.8	5.5	0.7	25.5	I－0下層
8	6.0	5.0	0.9	24.9	H－0下層



第 96 図　B地区出土土製品実測図（1/2）



第 97 図　B地区出土土器実測図（1/3）

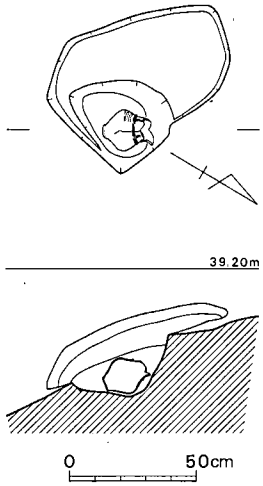
や角張る。器面は摩滅が著しいが，口縁は内外面ともヨコナデ，外面頸部下位はハケ目調整がみられる。復原すると口径は18.8cm，頸部径は16.0cmになる。（高橋）

P－1遺構（図版40-3，第98図）

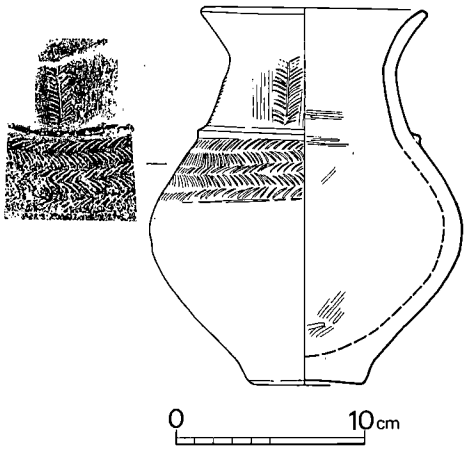
2号土壙跡の南東50cmの斜面上にあり，楕円形で2段掘りである。

出土遺物（図版58-3，第99図）

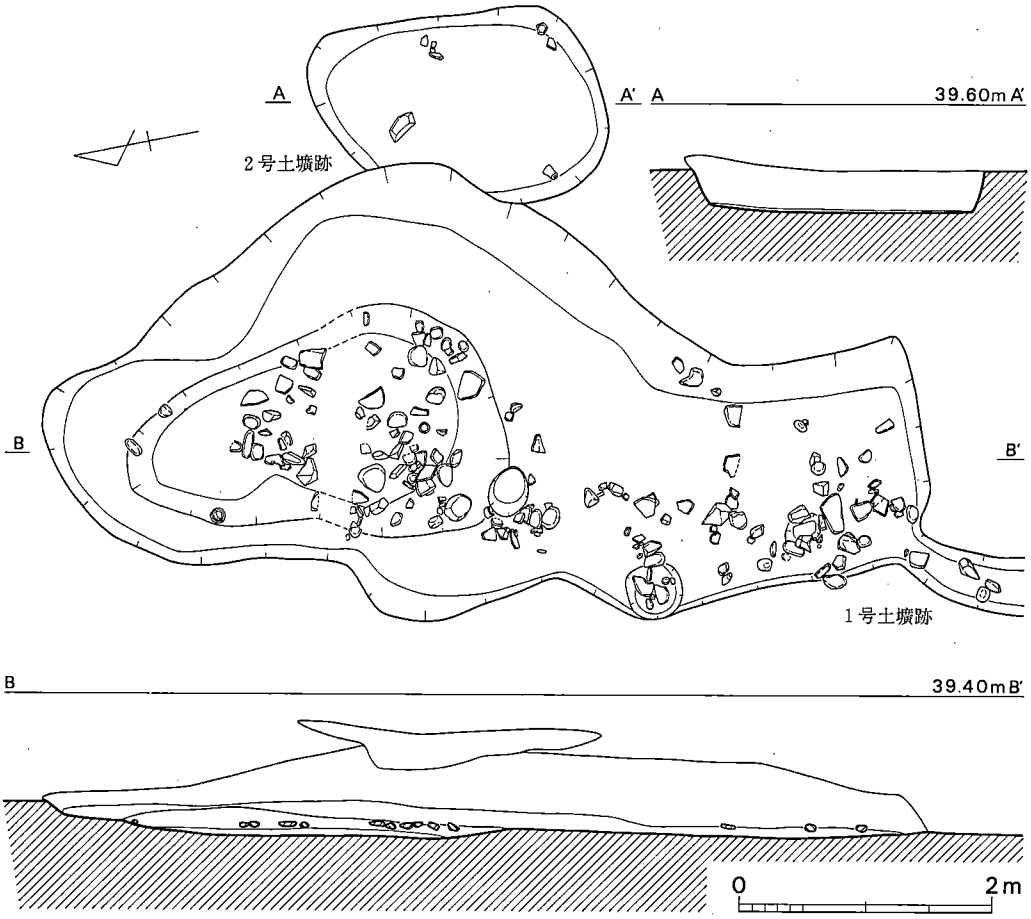
口縁は外反し，頸部に広がりながら肩になり，胴部中位が張りだす。肩部にはシャープな三



第 98 図　P－1土器出土状態実測図（1/30）



第 99 図　P－1出土土器実測図（1/4）



第 100 図　1・2号土壙跡実測図（1/60）

角凸帯を貼付する。頸部には有軸羽状文，肩部には無軸羽状文を施す。器表面はヘラミガキされていたであろうが，頸部内外面を残し摩滅している。胎土は細砂粒を多く含み，細かい雲母・黒雲母・角閃石や粗砂粒を僅かに含む。焼成は良く，黄褐色～黒色を呈す。時期は弥生時代前期末頃であろう。（日高）

（2）土　壙　跡

1号土壙跡（図版40-1，第100図）

B地区北西端部に位置する。北側丘陵から延びたA地区の台地縁辺が浸食されてできた島状部分の西側斜面にある。

土壙形態は南北方向に長い楕円形に南側に方形がついた形を呈する。長軸が7m，短軸は3.6m，最深部は頂部付近上面より70cmを測る。底面は北側に僅かに低い部分があるが，ほぼ平坦である。西側壁は4～5cm程しか残存しないが，浸食を受けていると思われる。主軸方位を長軸とすればN－10°－Wである。出土遺物は流れ込みで縄文式土器片，石斧2点，弥生式土器片，須恵器片，土師器片，陶磁器片，石鍋片，坩堝片などが出土した。

2号土壙跡（図版40-1，第100図）

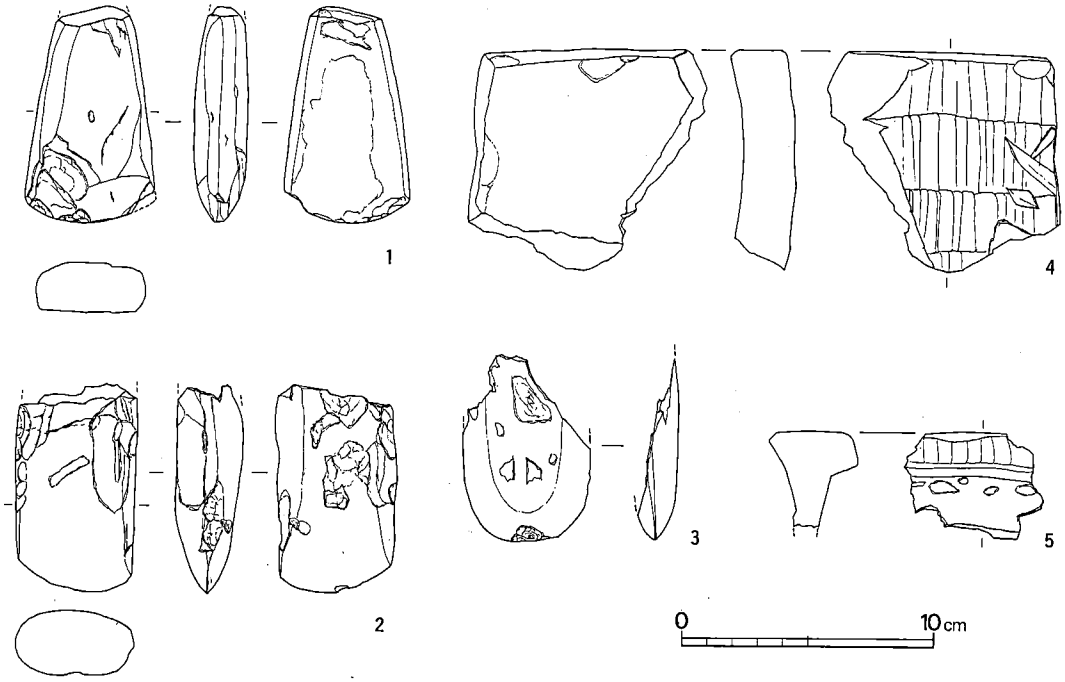
1号土壙跡東部に隣接し，西側を1号土壙跡に切られている。土壙形態は南北方向に長い楕円形を呈する。長軸が2.3m，短軸は1.54m，最深部は検出面から40cmを測る。主軸方位は1号土壙跡とほぼ平行である。出土遺物は流れ込みで石斧1点，弥生土器片，須恵器片などが出土した。

出土遺物

石器・石製品　（図版59-1，第101図）

磨製石斧（1～3）　1は安山岩製。刃部は刃こぼれが著しく，大きく剝離した部分がある。側面・端部は丁寧に研磨されている。長さ8.5cm，最大幅5cm，厚さ2.1cm，重量130gを測る。2は蛇紋岩製で，基部が欠損する。現存長8.2cm，幅4.7cm，厚さ2.6cm，重量152gを測る。3は蛇紋岩製の磨製石斧刃部破片。刃部幅は5cm。

石　鍋（4・5）　滑石製の石鍋口縁部破片。4の体部は内弯気味に立上り，鍔が付かない器形である。外面は細かい縦方向のノミ痕が2.5cm単位に残る。割れ口の一面は口縁と直交的に粗く削られ，破損後に再利用されている。外面には煤が付着している。厚さ2.1cm。5は体部が内湾し，鍔が付く器形であろう。鍔外端部に細かいノミ痕が残る。外面には煤が付着している。1・2・4・5は1号土壙跡出土。3は2号土壙跡出土。（日高）



第 101 図　1・2号土壙跡出土石器・石製品実測図（1/3）

弥生式土器　（図版60-1・2，第102図）

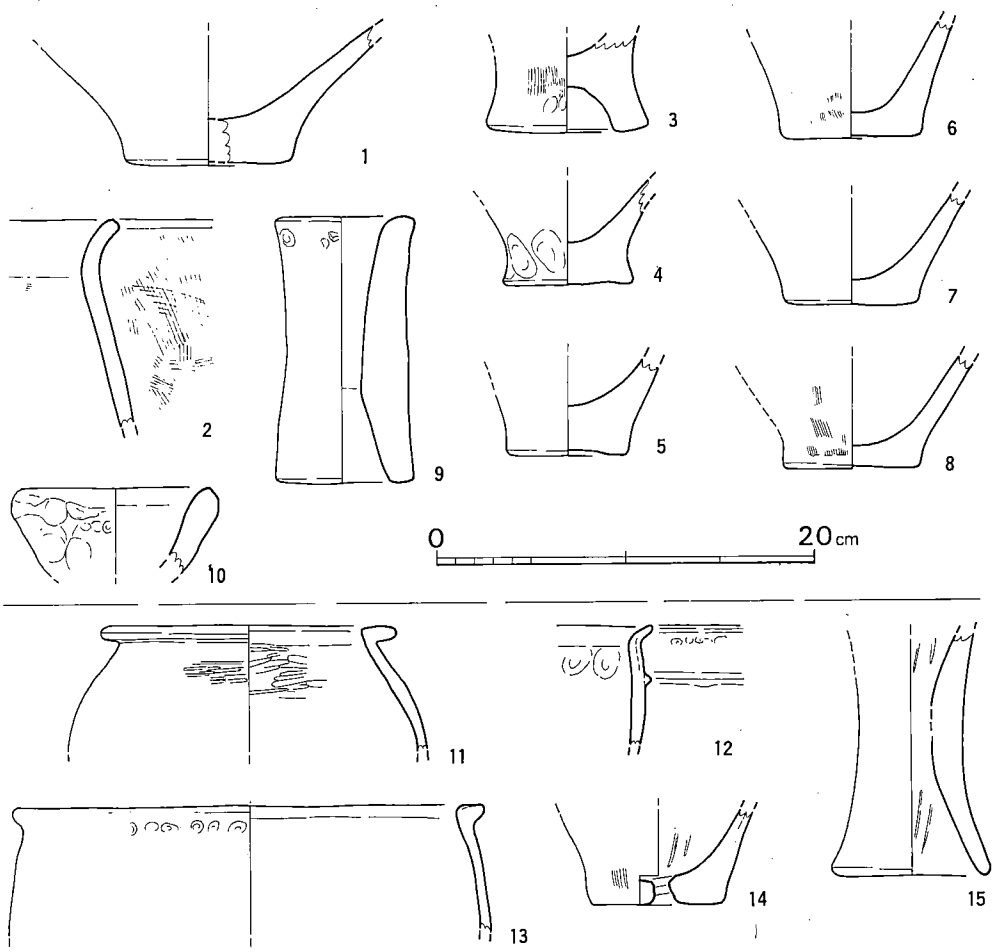
壺（1・11）　底部片である。底径8.8cmに復原した。体部は逆八字状に強く底部から立上り，内外面は摩滅が著しい。1号土壙跡出土。11は復原口径15.6cmで2号土壙跡出土。

甕（2～8，12～14）　2は甕口縁片で，口縁部は屈曲し外反する。端部は面をなす。口縁部は摩滅して明らかでないが，ヨコナデ痕を一部観察できる。内体部ナデ，外体部は粗いハケ目調整である。3～8は甕の底部片である。3は底径8.6cmで，上底で部厚く，底面からの抉りの深さ2.2cmを測る。外体部はハケ目調整で，一部に指頭圧痕が残る。4～8は底部を平坦にする器形で，底径は4から順に6.8cm，6.4cm，7.4cm，7.0cm，7.2cmを計測する。6と8は外体部ハケ目調整痕が認められるが，他は摩滅が著しく明らかでない。1号土壙跡出土。12・13は口縁片，14は甕底部を穿孔して甑とする。時期は弥生時代中期頃である。

器　台（9・15）　9は上端径7.4cm，下端径7.2cm，器高14.0cmで，内外面共に摩滅が著しく，調整は明らかでない。器肉は最も厚いところで2.5cmを測る。15は下端径8.0cmで，上端は欠損する。時期は弥生時代中期。

須恵器・土師器（第103図）

蓋（16）　須恵器の坏蓋である。復原口径12.2cm，器高4.5cmで，口縁端部はゆるく外反し，丸味をもって仕上げる。天井部はヘラケズリ，体部はヨコナデ調整である。2号土壙跡出土。



第 102 図　1・2号土壙跡出土土器実測図①（1/4）

小　皿（17）　口径9.85cm，底径5.7cm，器高1.8cmを測る。ほぼ完形品で全体に黒灰色を呈する瓦質土器である。内底部はミガキ調整。底面は糸切りで板状圧痕が残る。1号土壙跡出土。

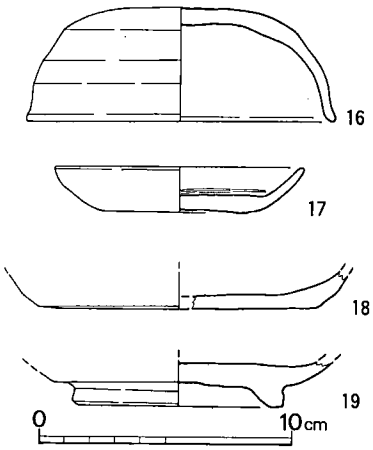
坏　身（18・19）　18は復原底径11.0cmである。全体に摩滅が著しく，底面は糸切りである。19は高台付の坏身で，底径8.2cmを復原する。淡橙色を呈し，18・19共に胎土中に細砂粒を含む。1号土壙跡出土。

陶磁器（図版59-2，第104図）

白　磁（20～24）　白磁類は全て1号土壙跡から出土した。20は復原口径15.8cmで，器肉は薄く胎土は灰色を呈す。施釉は全体に薄く，淡緑灰色である。21は口縁端部を「く」字状に外反させ先端を丸く仕上げている。復原口径15.7cmで，内面中位に沈線を施す。乳白色の胎土に

淡緑灰色の釉が薄くかかる。22・24は玉縁付の口縁片である。共に灰色の胎土に淡緑灰色の釉が施されているが，24は釉が厚くかかっている。復原口径は22が16.7cmである。23は胎土が濁白色で，外体部中位から内面は薄く白い釉がかかる。高台断面は逆三角形を呈し，底径6.3cmを計測する。20～24は共に器形は椀である。時期は12世紀後半から13世紀前半。

青　磁（25・26）　25は小片で器形を復原するのは難しいが，外体部の蓮弁から想定して椀形になる。胎土は濁灰色で，暗青灰色の釉が薄く施されている。26は台形状の高台付椀であろう。外体部から底部は露胎でケズリ調整。内面は灰色の施釉である。共に１号土壙跡出土。時期は13世紀。

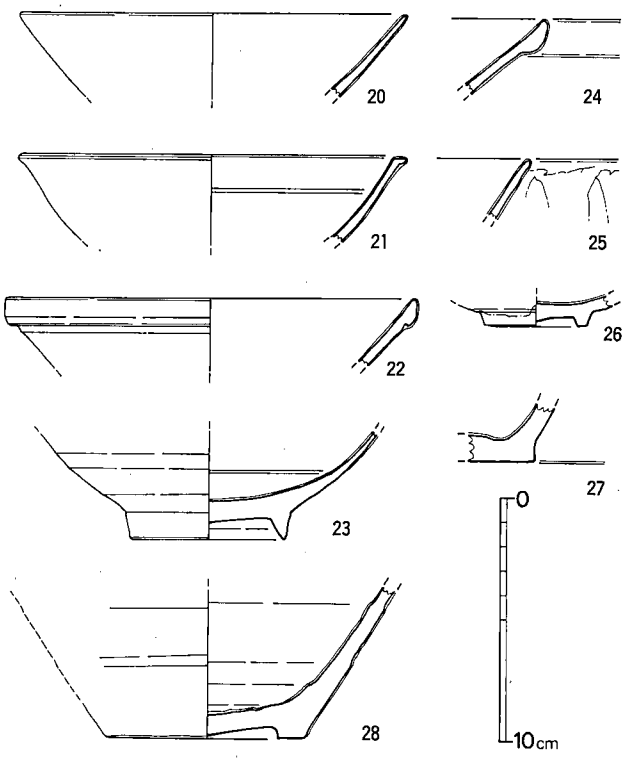


第 103 図　１・２号土壙跡出土土器実測図②（1/3）

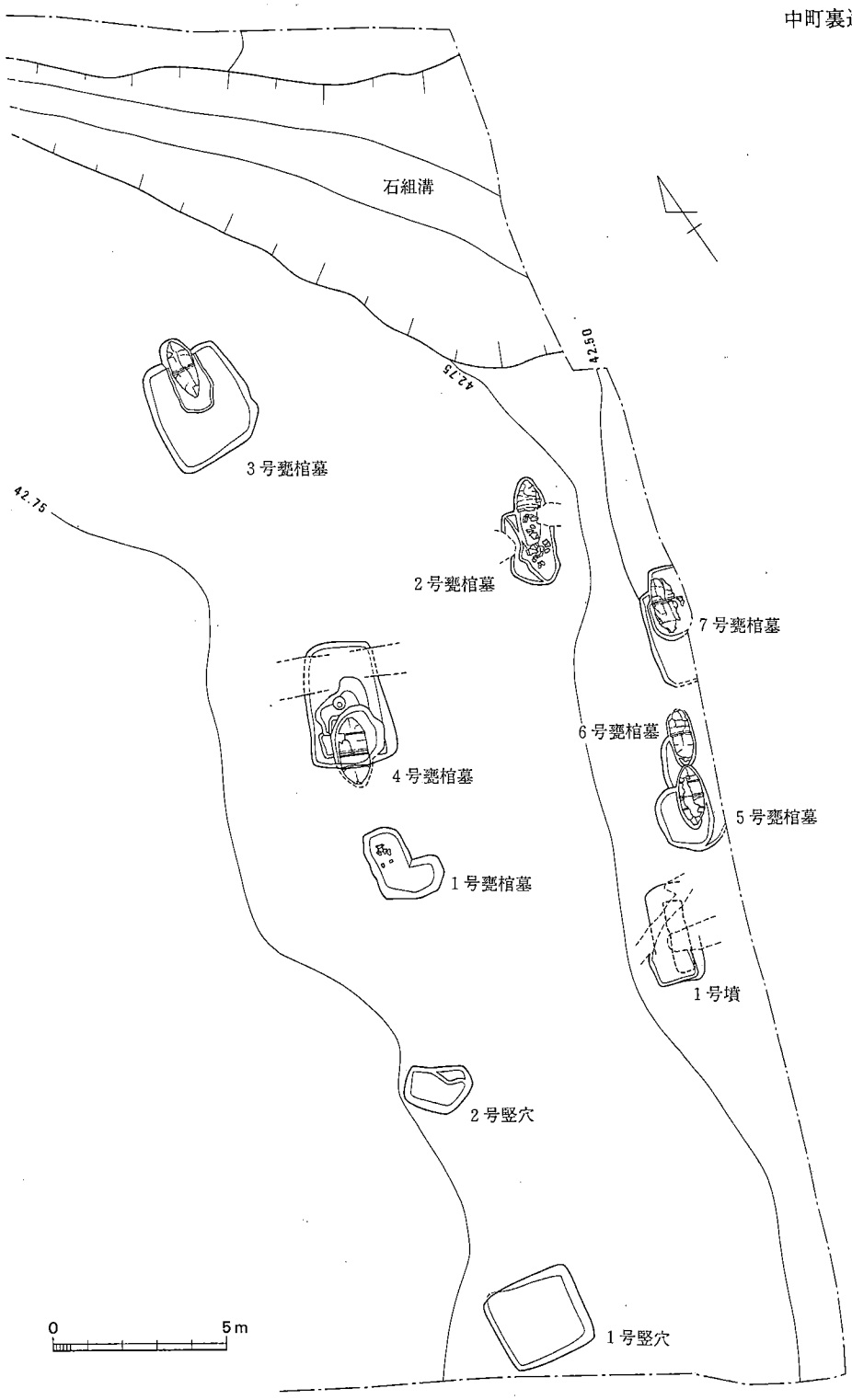
褐釉盤・壺（27・28）　27は小片で器形は明らかでないが盤の底部と判断する。内面は褐色の釉を施し，外体部は丁寧なナデ調整である。28は壺の底部破片。見込み部分に粘土塊が付着している。重ね焼きの痕跡であろうか。内・外体部は薄く乳白色の釉がかかり，底部は高台でケズリ調整である。底径8.4cm。１号土壙跡出土。

坩　堝（図版67-2，第102図10）

１号土壙から出土した。復原口径10.3cm，底部は欠損している。擦り減っていて調整法は明らかでないが，手捏による工法で，指頭圧痕の凹凸が観察できる。口縁端部に一部銅が付着する。　（高橋）



第 104 図　１・２号土壙跡出土陶磁器実測図（1/3）



第 105 図　C地区遺構配置図（1/200）

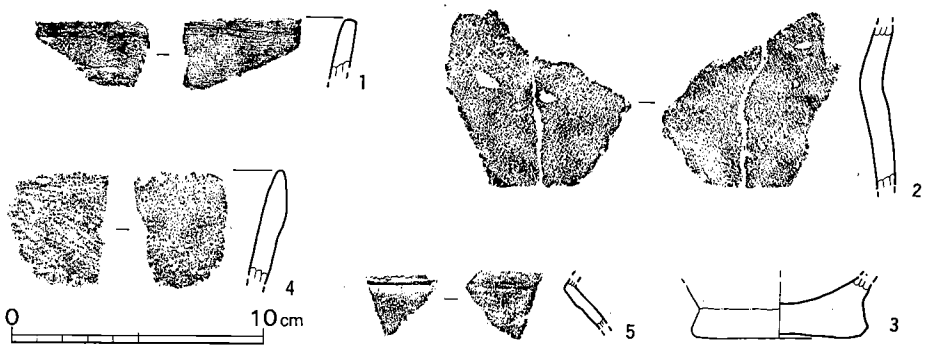
C地区（図版42，第105図）

C地区の発掘対象面積は，約1100m²である。発掘中央部に玉石組溝を南北方向に検出したが，この溝は近世になっての下水溝であることが判った。また台地北隅と東半部は果樹園による肥料穴や新期溝により撹乱が著しかった。さらに甕棺墓壙中から若干の縄文土器を検出したため，ここでは先に縄文土器の説明を行い，つぎに甕棺墓を記すこととする。

C地区出土縄文土器（図版65-1，第106図）

C地区で出土した遺構に伴わない縄文土器を一括した。

1は口縁部破片。内面は口唇部から条痕調整のあと横方向のヘラ研磨し，外面は条痕調整を施している。胎土はきめ細かく，微細な雲母・石英・角閃石粒を含む。1号竪穴上層より出土。2は頸部破片。内面に横方向の条痕調整が見られる。胎土には細かい雲母・角閃石粒を含む。3は端部がつき出る底部破片。胎土はきめ細かく，石英粒と微細な雲母・角閃石粒を含み赤茶色を呈する。2・3は2号甕棺墓埋土より出土。4は口縁部破片。外面に斜め方向の条痕調整がみられる。胎土に雲母・石英粒を含む。5は精製磨研浅鉢の頸部破片。4・5は7号甕棺墓埋土より出土。いずれも時期は晩期中頃と考えられる。（日高）

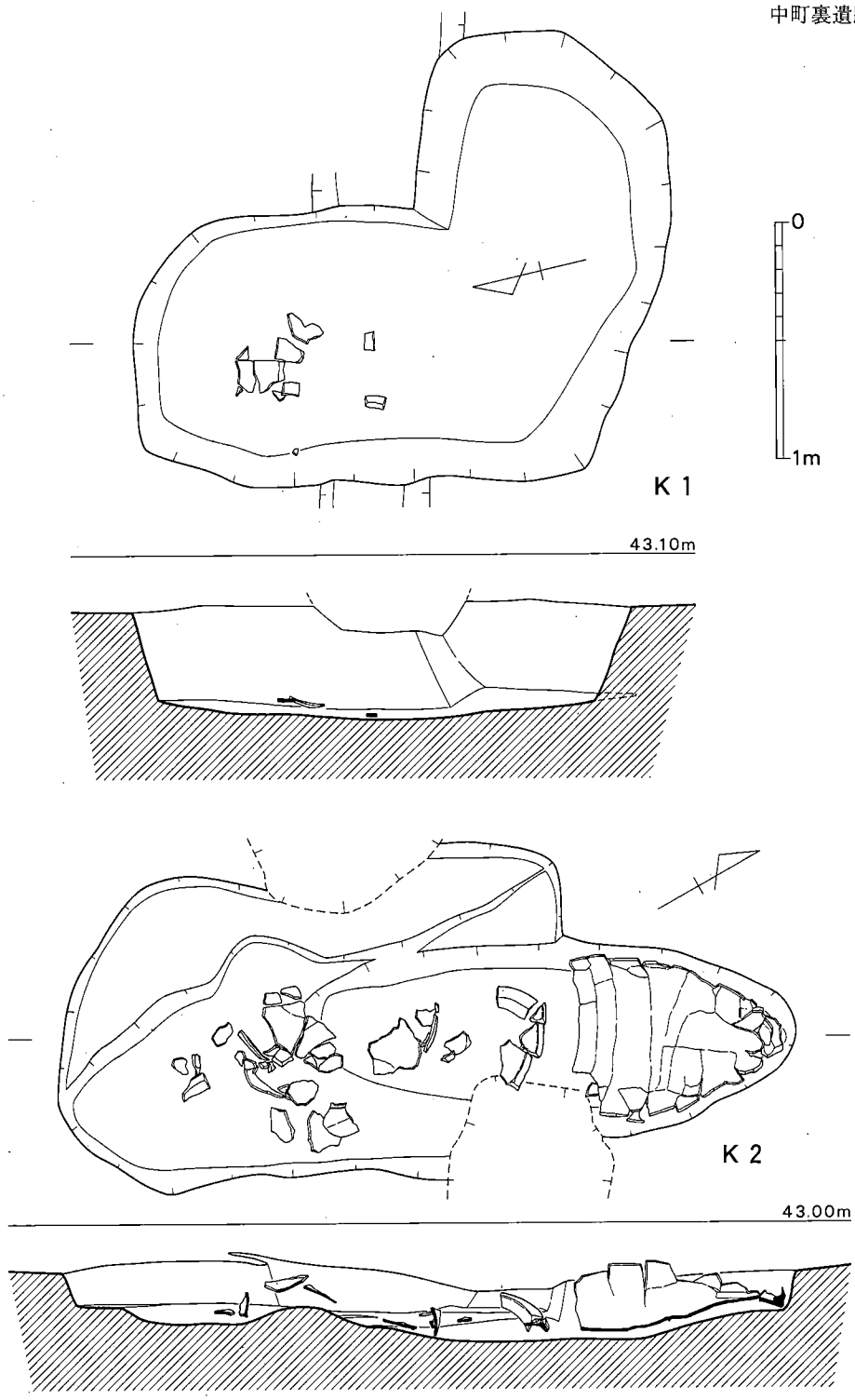


第 106 図　C地区出土縄文土器拓影図（1/3）

（1）　甕　棺　墓

1号甕棺墓（図版43-1，第107図）

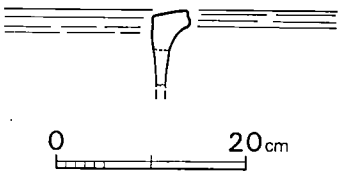
発掘区の最も南側で検出し，3・4号甕棺墓と同列である。甕棺はすでになく，墓壙床面に甕棺片9点を検出したのみである。墓壙は南北に長い不整楕円形を呈し，長径2.1m，短径1.17m，深さ47cmを測る。墓壙の東側には幅1.1m，深さ45cmの盗掘坑が穿たれており，甕棺はこの時点で



第 107 図　1・2号甕棺墓実測図（1/30）

抜き取られたものである。墓壙床面の状態から甕棺は水平に据えたものと考えられる。　（高橋）

甕　棺（第108図）　口縁部に粘土帯を貼付して肥厚させたもので，口縁端部と内面はユビナデにより窪む。胎土に2～4mm大の長石・石英・黒曜石を多く含む。焼成は良好で，灰褐色を呈する。　（小田）



第 108 図　1号甕棺実測図（1/8）

2号甕棺墓（図版43-2，第107図）

7号甕棺墓に接する北西側で検出した。本墓と配列を同じくする甕棺はない。当初墓壙内部に柿根が多く入り込んでいたことと，近世の撹乱も手伝って甕片が散在しており，2基並列しているのではないかと考えられた。しかし墓壙の検出状況から1基のみの存在が確認された。

墓壙形態は南北に長く長径2.3m，短径1.5m，検出面からの深さ26cmを測り，不整長方形を呈する。墓壙北壁中央部から北側へ幅85cm，奥行1.0mを穿ち下甕を挿入している。下甕は上半部が削平されており，原形はとどめていない。墓壙床面の状況から水平に安置されたものと思われる。上甕は口縁端部や胴片が散在し，安置した状況は明らかでない。主軸方位はN－30°－Eである。目張り粘土は認められない。　（高橋）

上　甕（図版61-1，第109図）　器高69.7cm，口径48.2cm，頸部径32.0cm，胴部最大径58.7cm，底径10.4cmを測る大型の広口壺である。口縁部は大きく開き，口縁部内面に粘土帯を貼付し，段を有するが，鋤先状とまではなっていない。胴部はかなり張り，上位に最大径を有し，断面コ字形凸帯を貼付する。胴部の張りに比して底部の締まりは良く，緩やかに上底の底部に移行する。器面調整はヘラミガキを主体とし，口縁部には暗文がみられる。また，肩部のミガキは連弧状に施している。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母・黒曜石を多く含む。焼成は良好で，内外面は淡緑褐色を呈する。また，胴部には黒斑がみられる。

下　甕（図版61-1，第109図）　器面が脆弱なため，復原し得ていない。口縁部は小片であるが，口径は50cm程になろう。胴下半部には，細目の三角凸帯を貼付している。調整は内外面ともナデによる。底部は上底で，復原底径は13.8cmを測る。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母・黒曜石を多く含む。　（小田）

3号甕棺墓（図版44，第110図）

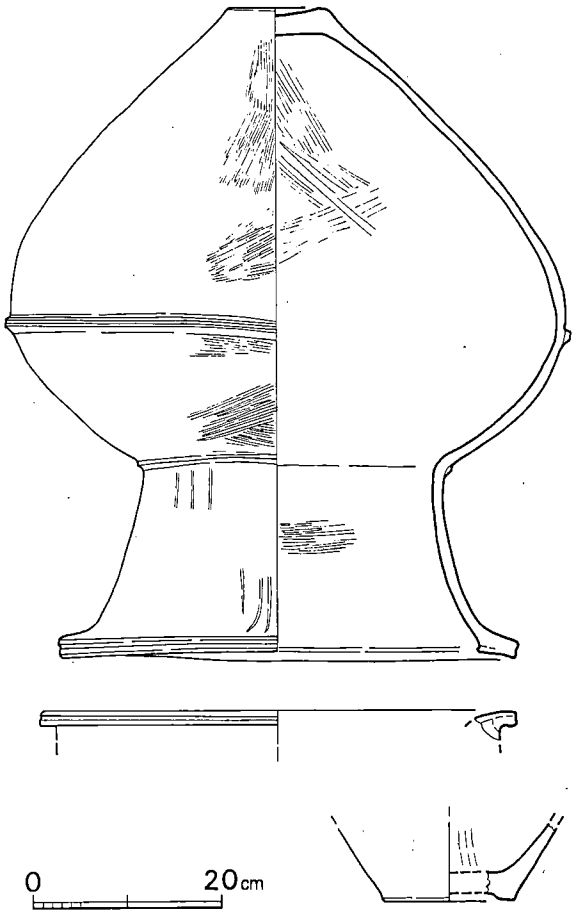
発掘区の北端部で検出し，1・4号甕棺と配列を同じくする。甕棺は接口式成人棺で上半部約1/2が削除されているが，形状は留めている。墓壙は2段掘りで，墓壙形態は南北に長い長方形を呈し，長径3.2m，短径2.8m，深さ50cmを測る。合口付近から北へ約35cmのところで，

奥行55cmの横穴を掘り込み下甕を挿入している。主軸方位はN－11°－Eで，埋葬傾斜角度はほぼ水平である。合口部には黄白色の目張り粘土が甕棺下端まで認められた。発掘調査中に甕棺内部からビニール袋が出てきたため，近代に至って撹乱されたことが判る。　（高橋）

上　甕(図版61-2,第111図)

逆L字状口縁を呈する大型の甕で，器高88.7cm，口径63.8～69.3cm，頸部径62.7cm，底径13.1cmを測る。口縁部平坦面は内傾し，口縁部内面は小さく突出する。胴部に張りはなく，締まりの悪い底部に移行する。胴部中位には幅広の断面三角凸帯を貼付している。底部は内窪みで，4.8cmとかなり厚い。

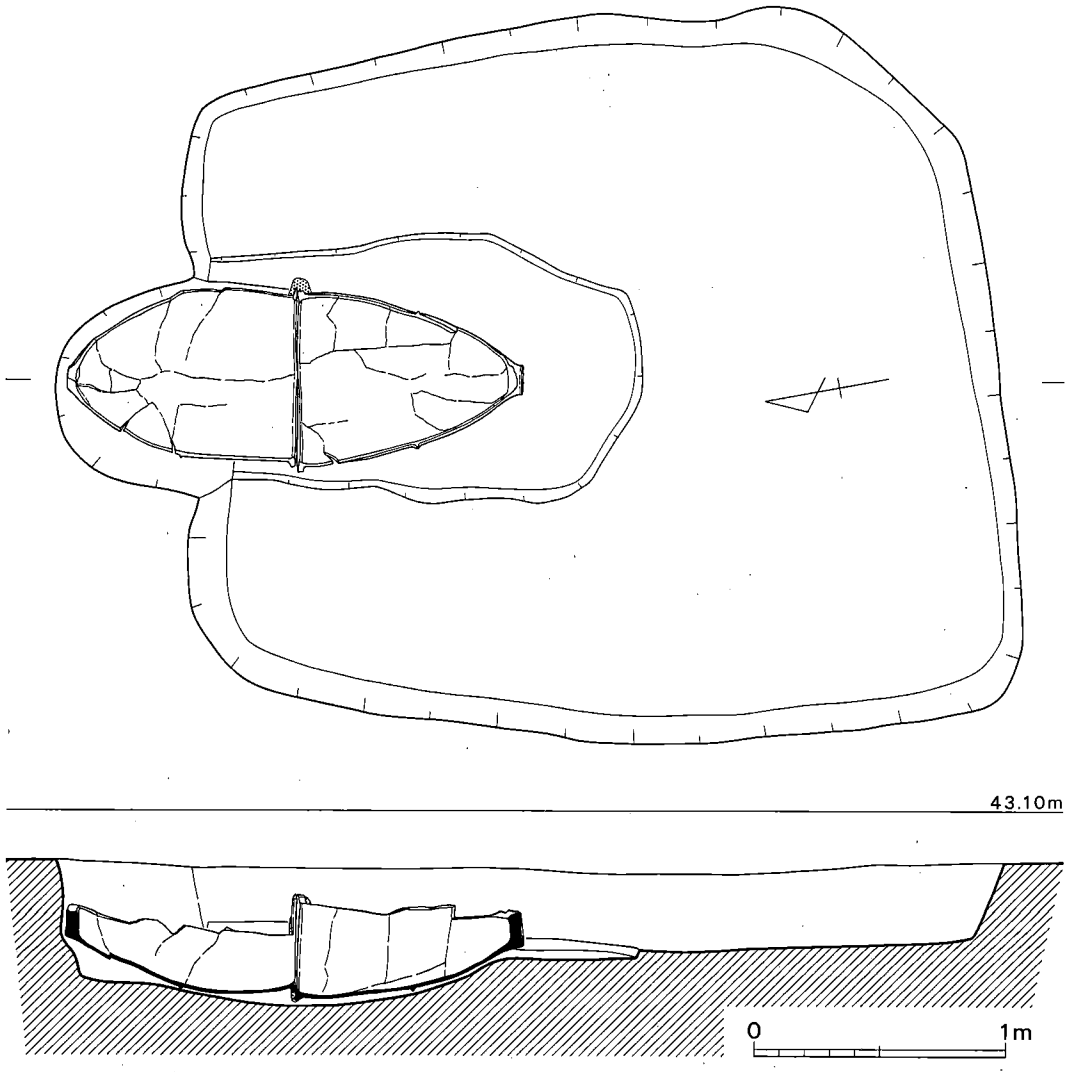
調整は口縁部ヨコナデ，外面ハケ目（5～6／cm），内面工具ナデによる。胎土に1～3mm大の長石・石英・雲母・黒曜石を多く含む。焼成は良好で，内面黒灰色，外面淡黄灰色を呈する。



第 109 図　2号甕棺実測図（1/8）

下　甕(図版61-2,第111図)

口縁部は内側に突出する逆L字状口縁を呈する大型の甕で，器高90.5cm，口径65.9cm，頸部径61.6cm，底径13.2cmを測る。胴部はやや張り，下膨れの胴下半部から締まりの悪い底部に移行する。胴部中位には断面三角凸帯を貼付している。底部は内窪みで，4.4cmとかなり厚い。調整は口縁部ヨコナデ，外面工具ナデ，内面粗いハケ目（3～4条／cm）による。胎土に3～4mm大の長石・石英・雲母・黒曜石を多く含む。焼成は良好で，内面黒灰色，外面淡黄灰色を呈する。穿孔は施していない。　（小田）

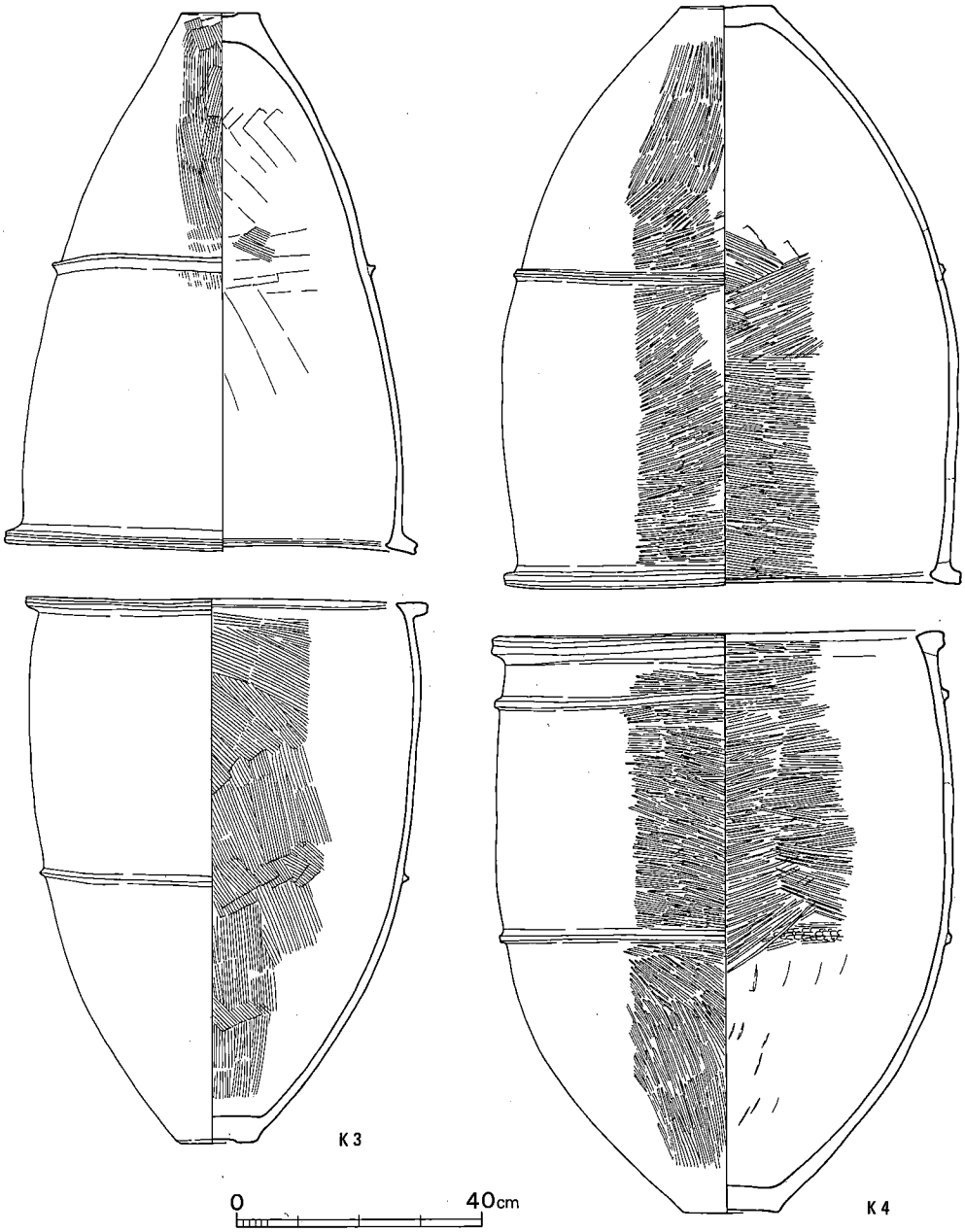


第 110 図　3号甕棺墓実測図（1/30）

4号甕棺墓（図版45-1，第112図）

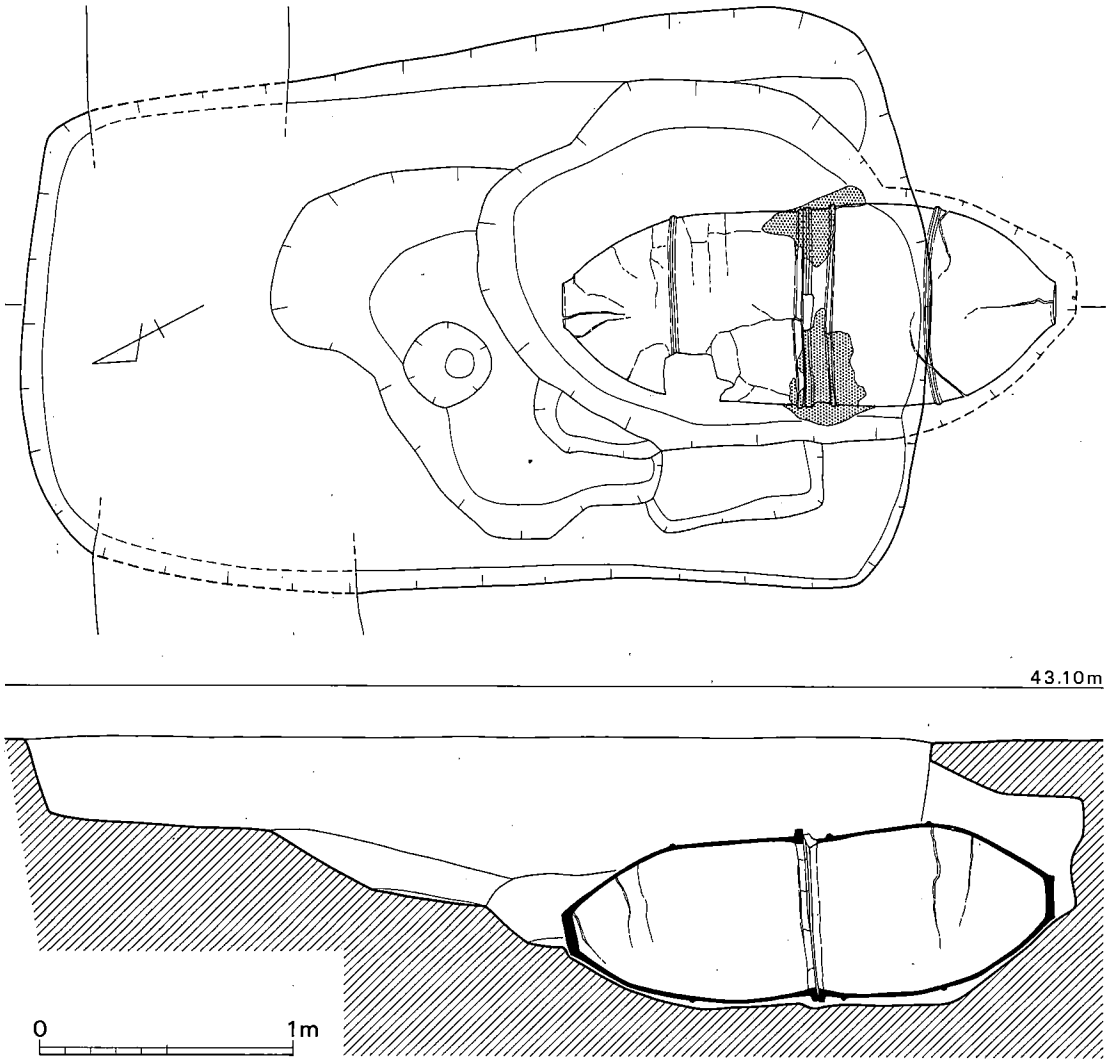
C地区中央部で検出した接口式成人用甕棺墓である。今回検出した中では最も墓壙が大きく，しかも完形とあって，検出時には大きな期待が寄せられた。

墓壙形態はやや胴張りの長方形を呈し，規模は長径3.5m，短径2.1m，3段に掘り込まれており，深さは上部床面から37cm，58cm，最深部で108cmを測る。南壁中央部には奥行長62cm，幅約1.0mの横穴を掘り込み，下甕を挿入している。墓壙の2段，3段目は不整形な掘方を呈し，特に3段目は甕棺の器壁に沿って掘られている。主軸方位はN－28°－Eを示し，埋葬傾



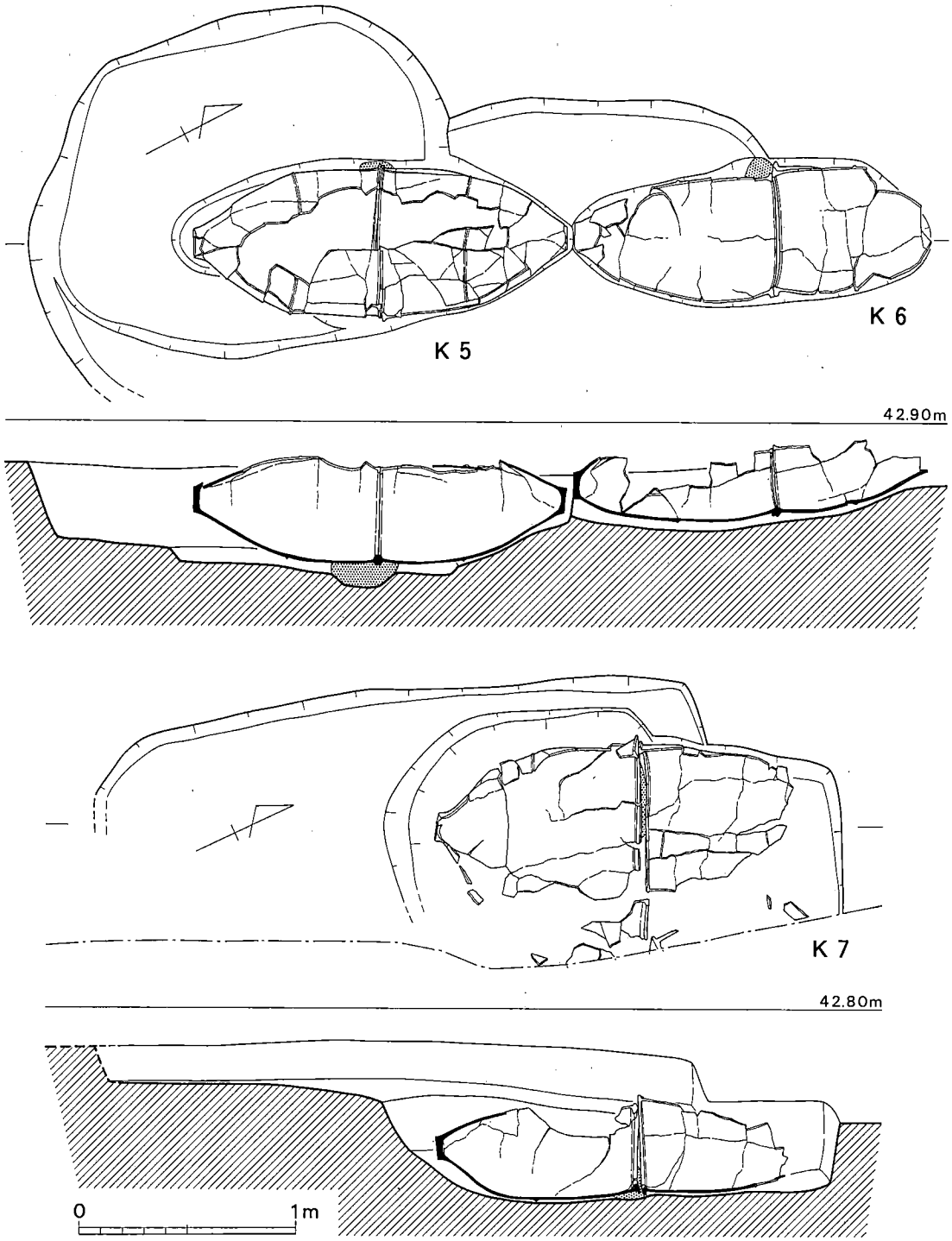
第 111 図　3・4号甕棺実測図（1/12）

斜角度は－5°である。目張り粘土は黄白色で，合口部全体に施している。残念なことに棺内の人骨は遺存していない。（高橋）



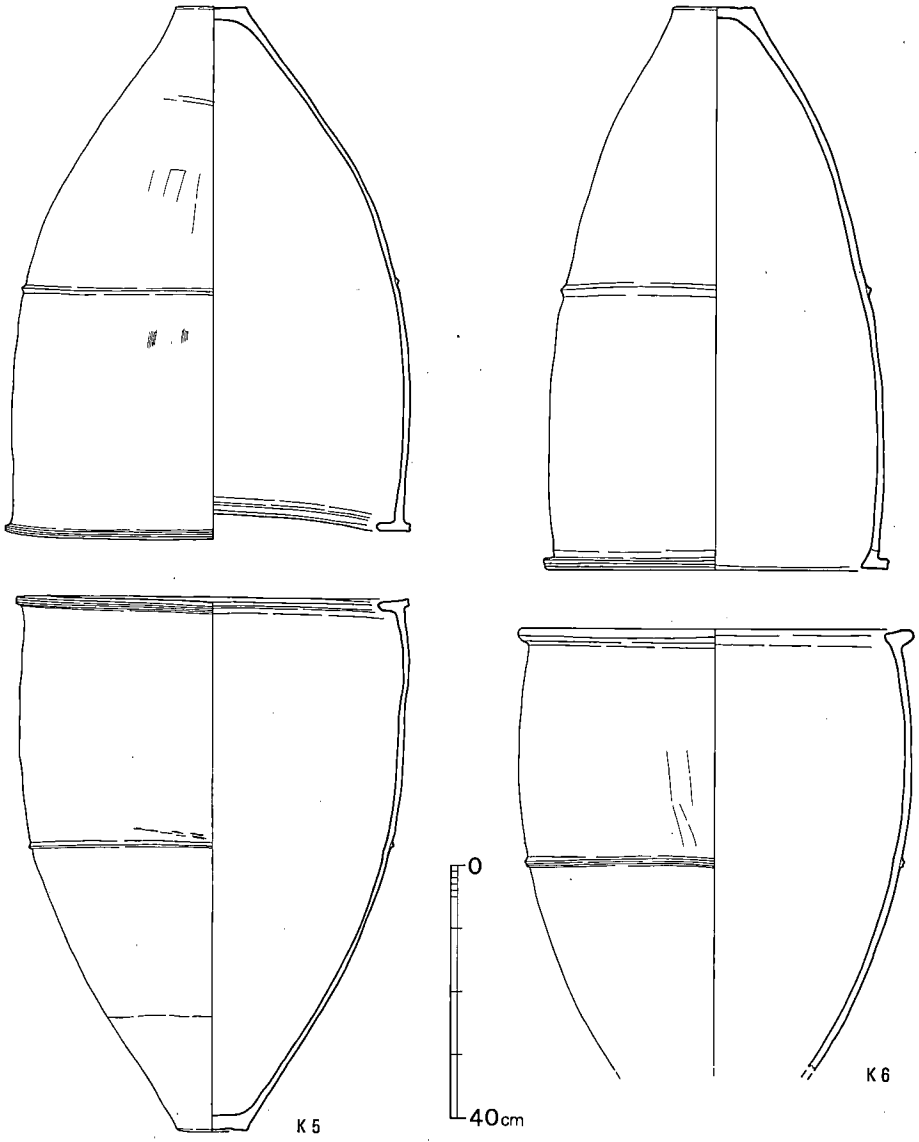
第 112 図　4号甕棺墓実測図（1/30）

上　甕（図版62-1，第111図）　器高95.7cm，口径74.9cm，頸部径70.9cm，底径15.2cmを測る大型の甕である。口縁部は逆L字状を呈し，内側に若干突出する。口縁部平坦面は丸味を有して内傾する。胴部中位で卵形に膨らみ，締まりの悪い底部に移行する。底部は平底で，3.2cmとかなり厚い。胴部中位に断面コ字形凸帯を貼付する。調整は内外面ともヘラミガキにより，内面のミガキは手の届く範囲まで施しており，6分割による。また，頸部には接合痕がみられ，単に口縁部を乗せただけの接合法をとる。胎土に長石・石英・角閃石・雲母を多く含む。焼成は良好で，内面緑灰色，外面緑黄色を呈する。重量感のある丁寧なつくりの甕棺である。



第 113 図　5 ～ 7 号甕棺墓実測図（1/30）

下　甕（図版62-1，第111図）　器高96.2cm，口径71.5～78.2cm，頸部径71.3cm，底径14.7cmを測る大型の甕である。口縁部は肥厚する逆L字状を呈し，口縁部平坦面は丸みを有して内傾する。胴部は卵形を呈し，締まりの悪い底部に移行する。底部は平底気味で，3.9cmとかなり厚い。頸部のやや下位と胴部中位に断面コ字形凸帯を貼付する。調整は内外面ともヘラミガキにより，上甕同様，内面のミガキは手の届く範囲まで施しており，6分割による。また，口縁



第 114 図　5・6号甕棺実測図（1/12）

の接合法は，単に口縁部を乗せただけの接合法をとる。胎土に3～4mm大の長石・石英・角閃石・雲母を多く含む。焼成は良好で，内面暗緑褐色，外面緑灰色を呈する。全体として，重量感のある丁寧なつくりの甕棺といえる。穿孔はみられない。（小田）

5号甕棺墓（図版46-1，第113図）

発掘区東側道路沿いで主軸を同じくして5・6号甕棺墓を検出した。5・6号の切合い関係は5号が後からの埋置で新しい。墓壙形態は胴張り正方形を呈し，規模は長径1.95m，短径1.57m，検出面からの深さ40cmである。甕上半部は潰れた状態で検出し，北壁中央部に奥行68cmの横穴を穿ち下甕を挿入している。甕の中には土砂が充満しており，目張り粘土は合口部の上・下面と両側面の4ヶ所に配している。棺内の人骨は遺存しない。墓壙床面は2段に掘られ，埋葬傾斜角度は水平である。主軸方位はN－27°－Eで，6号甕棺墓と同一方位を示す。（高橋）

上　甕（図版62-2，第114図）　器高85.1cm，口径64.0cm，頸部径62.5cm，底径11.2cmを測る大型の甕である。口縁部は内方に大きく突出するT字形を呈し，口縁部平坦面は内傾する。胴部はやや張りをみせ，締まりの良い平底の底部に移行する。胴部中位にシャープな断面三角凸帯を貼付し，その間は強くナデている。調整は口縁部ヨコナデ，内外面工具ナデによる。胎土は2～3mm大の長石・石英・雲母を多く含むものの，黒曜石粒はみられない。焼成は良好で，内外面とも緑褐色を呈する。

下　甕（図版62-2，第114図）　器高85.8cm，口径64.0cm，頸部径60.8cm，底径11.2cmを測る大型の甕である。口縁部は内方に大きく突出するT字形を呈する。胴部中位に張りをみせ，締まりの良い平底の底部に移行する。胴部中位にシャープな断面三角凸帯を貼付し，その間は強くナデている。調整は口縁部ヨコナデ，内外面工具ナデによる。胎土に2～3mm大の長石・石英・雲母を多く含むものの，上甕同様黒曜石粒はみられない。焼成は良好で，内面灰褐色，外面緑褐色を呈する。穿孔はみられない。（小田）

6号甕棺墓（図版46-1，第113図）

5号甕棺墓の北側で検出し，5号甕棺の下甕底部と接するように配されている。切合い関係は前述のとおり6号甕棺墓が古いが，東側は道路で切られ，墓壙掘方は明らかでない。墓壙掘方は西壁のみ検出した。恐らく5号甕棺墓と同形態をなすものと考えられる。また合口部付近から北側に幅62cm，奥行80cm強ほどの横穴を穿ち下甕を挿入している。甕棺は上半部が欠損しており，西側合口部に黄白色粘土の目張りが確認された。主軸方位は5号甕棺と同じでN－27°－Eを示し，埋葬傾斜角度は－5°である。また下甕底部は新期溝により削除されていた。（高橋）

上　甕（図版63-1，第114図）　器高89.8cm，復原口径54.2cm，復原頸部径51.2cm，底径

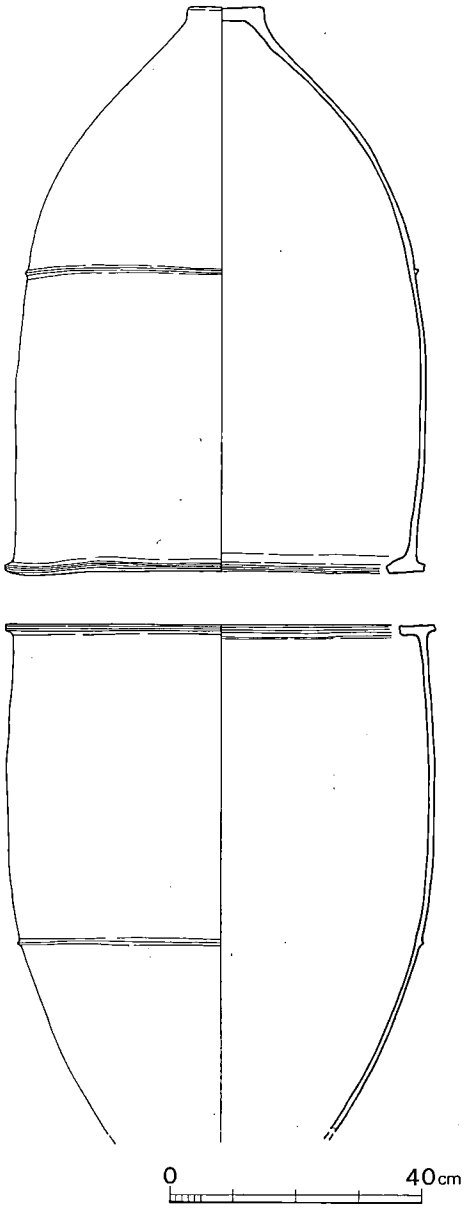
12.8cmを測る大型長胴の甕である。口縁部は逆L字状を呈し，口縁部平坦面はほぼ水平である。口縁部内面は小さく突出する。胴部にはあまり張りはなく，平底の底部に移行する。口径に比し器高が高いので，長胴な感を受ける。胴部中位には幅広の断面三角凸帯を貼付している。調整は口縁部ヨコナデ，内外面工具ナデによる。胎土に1～3mm大の長石・石英・雲母・黒曜石を多く含む。焼成は良好で，内面赤灰色，外面橙褐色を呈する。

下　甕（図版63-1，第114図）

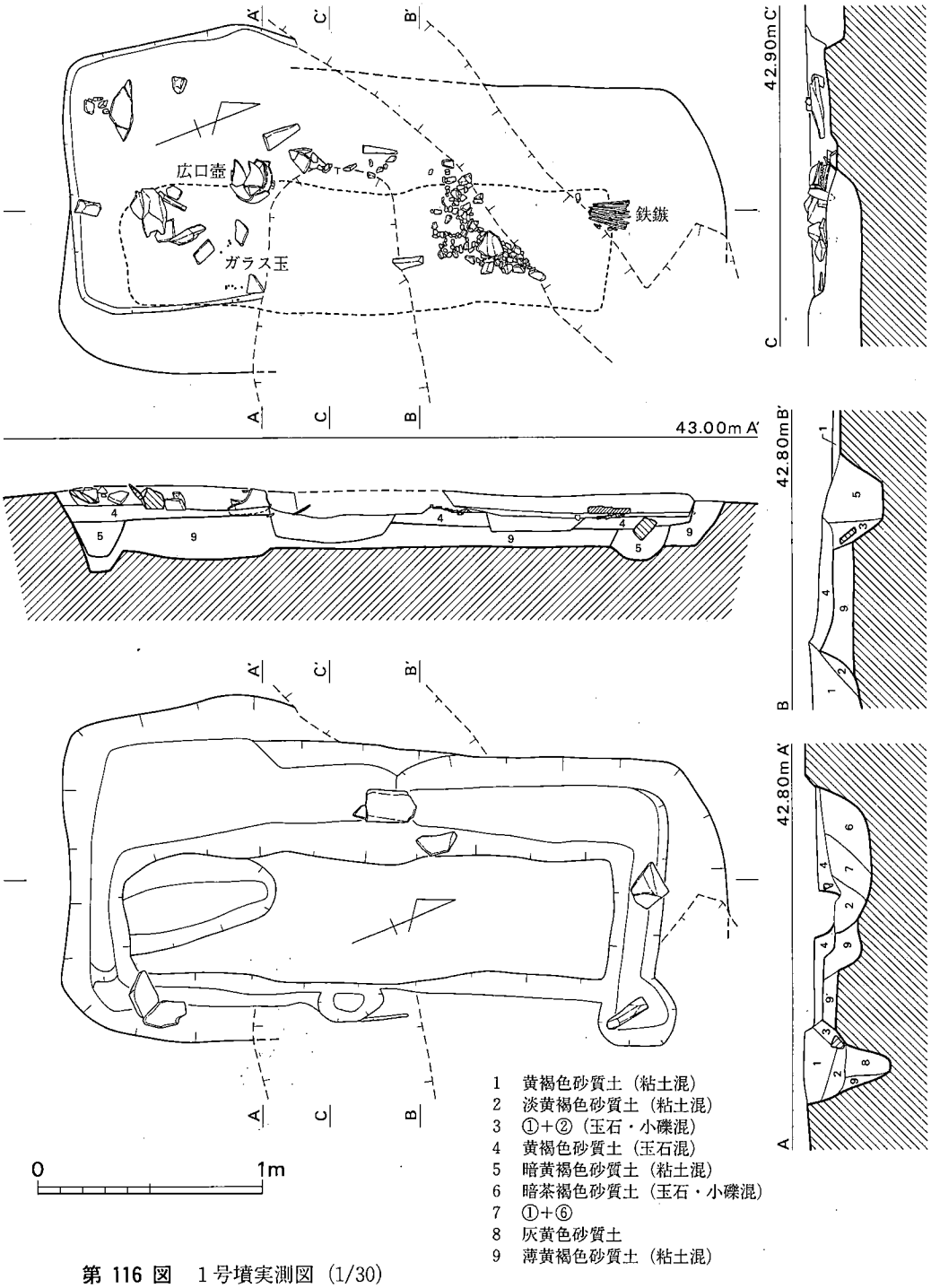
胴下半部を欠き，残高71.2cm，復原口径62.5cm，復原頸部径59.0cmを測る大型の甕である。口縁部は肥厚する逆L字状口縁で，口縁部平坦面は内傾する。胴部には張りがみられ，底部に移行する。胴部中位には断面コ字形凸帯を貼付している。調整はヨコナデ，内外面工具ナデによる。胎土に2mm大の長石・石英・雲母・黒曜石を多く含む。焼成は良好で，内面灰褐色，外面灰緑色を呈する。穿孔は施していない。　（小田）

7号甕棺墓（図版46-2，第113図）

5～7号甕棺墓は道路側沿いで検出し，6号甕棺墓の北側に位置する。甕棺は接口式成人用甕棺で約1/3が現存し，上半部は削除されている。墓壙は甕の大きさを考慮してか，甕の周縁に沿って掘られており，長径2.1mを測るが，短径は東側が道路縁であるため確認できなかった。北壁側は甕の合口部付近から北側に約80cmの横穴を穿ち下甕を挿入している。主軸方位はN－25°－Eで，埋葬傾斜角度は約2°で水平に近い状態に据えられている。目張り粘土は西側の合口部下端に認められた。（高橋）



第 115 図　7号甕棺実測図（1/12）



第 116 図　1号墳実測図（1/30）

上　甕（図版63-2，第115図）　器高90.6cm，口径66.5cm，頸部径64.6cm，底径12.0cmを測る大型の甕である。口縁部は内方に大きく突出するT字形を呈し，口縁部平坦面は外傾する。胴部はやや張りをみせ，締まりの良い平底の底部に移行する。胴部中位にシャープな断面三角凸帯を貼付し，その間は強くナデている。調整は口縁部ヨコナデ，内外面工具ナデによる。胎土に2～3mm大の長石・石英・白色粒を多く含む。焼成はやや軟質で，内面灰褐色，外面淡緑褐色を呈する。また，外面には黒塗りを施した痕跡がみられる。

下　甕（図版63-2，第115図）　底部を欠き，残高81.7cm，復原口径68.0cm，復原頸部径66.0cmを測る大型の甕である。口縁部は内方に大きく突出するT字形を呈し，口縁部平坦面は若干内傾する。胴部に張りはなく，底部に移行する。胴部中位にシャープな断面三角凸帯を貼付し，その間は強くナデている。調整は口縁部ヨコナデ，内外面工具ナデによる。胎土に2～4mm大の長石・石英・雲母を含む。焼成はやや軟質で，内面灰黄色，外面黄褐色を呈する。穿孔はみられない。（小田）

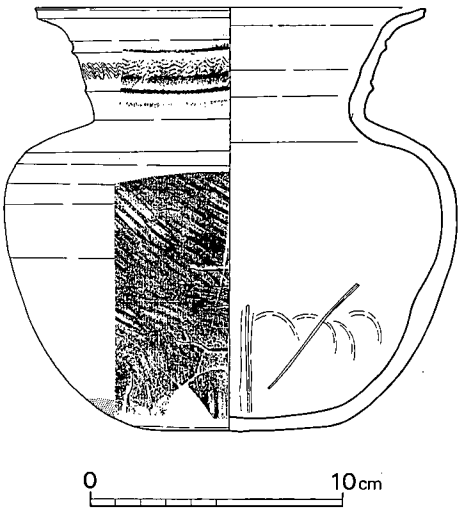
（2）古　　墳

1号墳（図版47-1，第116図）

C地区東側の中央南に位置し，北隣に5号甕棺墓がある。調査前は柿畑で削平されて，検出面では墳丘や周溝は判らなかった。

主体部も削平された上に柿木の肥料溝が2本横切り非常に残りが悪かった。僅かに棺材の掘方の一部が残っていた。土層を観察すると概ね掘方は長軸2.96m・短軸1.3mで，内法は小口側で0.45＋αm・側壁側で2.2＋αmとなる。掘方平面から小口部分は厚さ10cm前後の板石を横長に据え，側壁部は片側3＋α枚の板石を立てていたと推定される。土層断面Aの部分では10cm幅の板石を立てていたことがわかる。2段目の有無は判らなかった。主軸は丘陵に平行でN－21°－Eである。

撹乱土内に1～3cmの角張った小石が多数混入しており，出土遺物は北側小口西方に鉄鏃の束，東方の掘方内から鉄鎌1点，南側小口から中央にかけての40cm付近一帯にガラス小玉23点，その西に初期須恵器壺1点とその下から鉄製留金



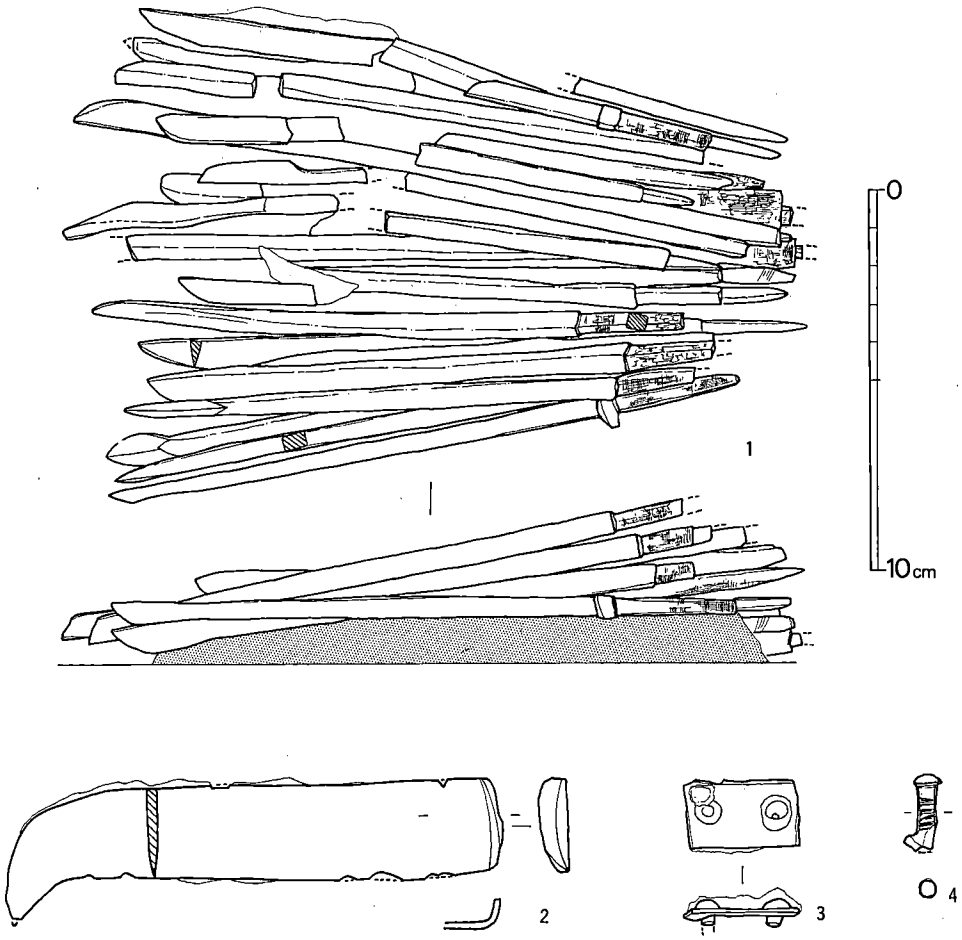
第117図　1号墳出土土器実測図（1/3）

具1点，埋土内から鋲状鉄器1点・砥石1点・弥生土器破片が出土した。これらの遺物は原位置は保っていなかったが，大きくは動いていないと思われる。

出土遺物

初期須恵器広口壺（図版47-3・64-3，第117図）

口唇部は上下端が直で中央部に僅かに凹み，凹線状を呈す。口縁部は弯曲気味に外反する。頸部に2条の三角凸帯を巡らせ，その間に5条の櫛状工具によるやや粗いが整った波状文を施す。底部は平底に近く，座りは良く径7㎝程である。胴上半は内面肩位までは回転ヨコナデ，胴中位は回転ヘラナデ，胴下半から底部にかけては平行タタキ目を施し，粗くナデ調整を施し



第 118 図　1号墳出土鉄器実測図（1/2）

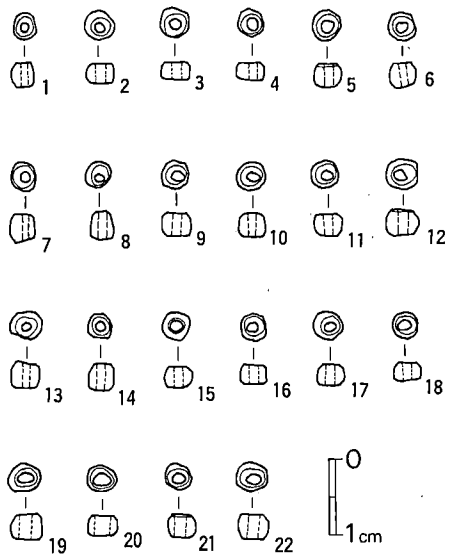
ている。内底にはタタキ時のあて具痕が残り，内面の胴下半はあて具痕を粗くナデ消す。胎土に細かな砂粒を含む。焼成は堅緻で，口縁部内面・肩部・内底部は灰かぶりで灰色，他は黒色，をなしている。ただ底外面から2cm程は灰色で焼成時に直接火を受けていない。つまり焼成時には床面内に埋まっていたようである。口径15.45cm，器高16.7cm，胴最大径17.9cmを測る。この土器は口唇部形態・波状文・平底などの特徴から，橋口編年による池の上Ⅱ～Ⅲの中間的な形態で，時期は5世紀前半に比定できる。

鉄　器（図版64-1・2，第118図）

鉄　鏃（1）　鉄鏃の束で総数は50本程度になる。鏃身部は錆でわかり難いが全て細根系の形態で，鑿箭式・腸抉片刃箭式・片刃箭式・鎬造柳葉式がある。箆被部は棘状や直角となるもの，箆被の無いものがある。茎部には矢柄が残るものもある。片刃箭式の1点は鏃身長2.5cm，箆被長10.5cm，茎長3.5cmで，腸抉片刃箭式の1点は鏃身長2.8cm，箆被長0.5cm，茎長2.2cm＋αを測る。概ねこの2点が平均的なサイズと思われる。

鎌（2）　折り返し部分は半円形で，刃に対して丸味をもって直角になっている。長さ13cm，身幅20～25cm，背の厚さ3mmを測る。

留金具（3・4）　3は長さ3cm・幅1.8cmの長方形で2本の鋲が付く。4は半球状の頭をもつ鋲状金具で，先は折れ曲がる。金具に直交して木質が錆着する。留金具の鋲であろう。長さ2cm，頭径7mm，軸径4mmを測る。



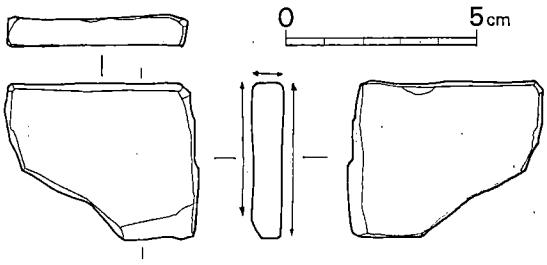
第119図　1号墳出土ガラス玉実測図（1/1）

表6　ガラス玉計測表　（単位：mm）

No	長径	短径	厚さ	孔径	色　調
1	3.35	3.0	3.1	0.8	スカイブルー
2	3.0	2.9	2.65	1.0	スカイブルー
3	4.15	3.8	2.25	1.15	スカイブルー
4	3.65	3.55	2.4	1.0	スカイブルー
5	3.95	3.85	3.25	1.0	スカイブルー
6	3.5	3.5	3.1	1.05	スカイブルー
7	3.8	3.5	3.6	0.85	スカイブルー
8	3.7	3.6	3.5	1.0	スカイブルー
9	3.8	3.8	3.3	0.8	スカイブルー
10	3.9	3.6	3.15	1.1	スカイブルー
11	3.6	3.6	3.0	0.7	コバルトブルー
12	4.15	4.15	3.2	0.9	スカイブルー
13	4.1	3.7	3.2	0.8	スカイブルー
14	3.3	3.1	3.7	1.2	スカイブルー
15	3.85	3.7	2.8	1.1	スカイブルー
16	3.75	3.6	2.65	0.9	スカイブルー
17	3.85	3.55	2.75	1.2	スカイブルー
18	3.3	3.25	2.2	1.2	スカイブルー
19	4.0	3.45	3.2	1.4	スカイブルー
20	3.9	3.5	2.55	1.3	スカイブルー
21	4.0	3.5	2.65	1.1	スカイブルー
22	4.0	3.7	3.5	0.9	コバルトブルー

ガラス玉（図版64-1，第119図）

総数は23点で，1点は半分に割れて出土した。径は3～4.15㎜，孔径0.7～1.4㎜，厚さ2.2～3.7㎜と小型である。色調はスカイブルーを主とし，僅かにコバルトブルーのものがある。糸に通すと6.5㎝を測る。総重量は1.2ｇである。計測表を表６に付す。

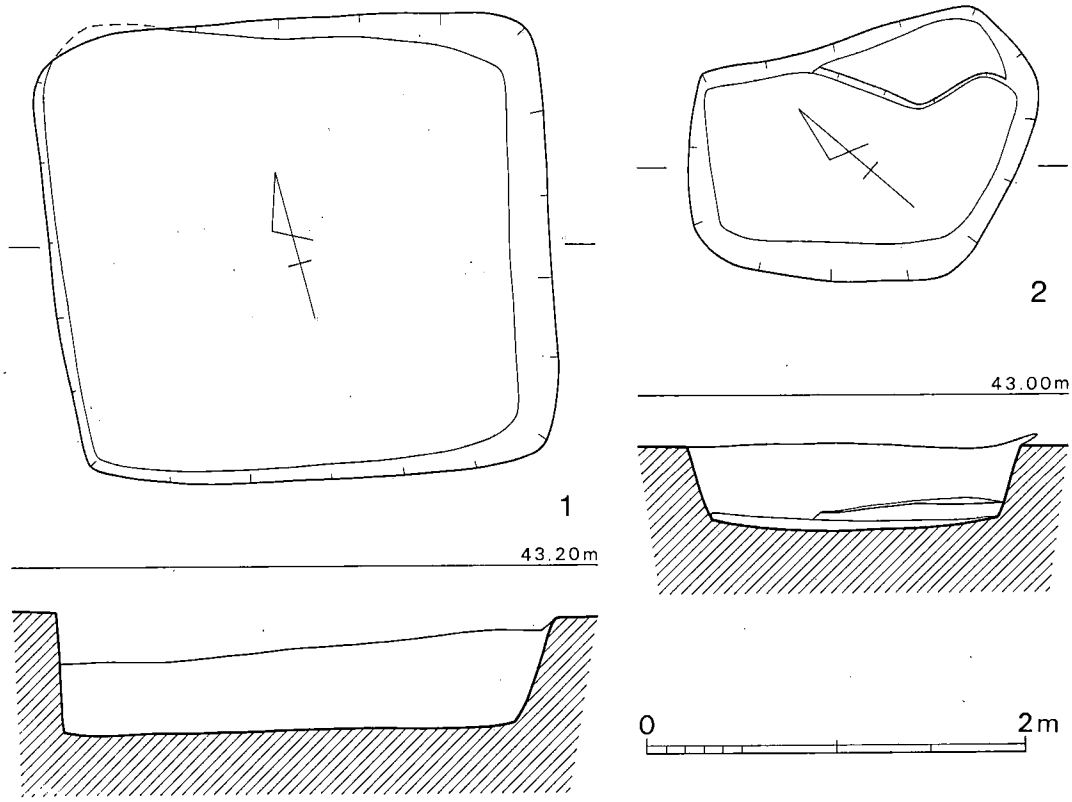


第 120 図　１号墳出土砥石実測図（1/2）

砥　石（図版64-1，第120図）

縞目が入った粘板岩製の中砥石であろう。現存長4.9㎝，幅4.1㎝，厚さ8㎜を測る。（日高）

（３）竪穴状遺構



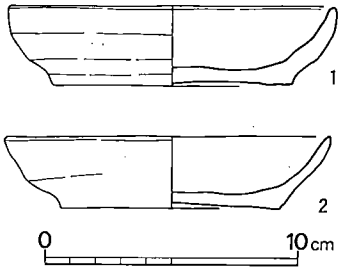
第 121 図　１・２号竪穴実測図（1/40）

1号竪穴（第121図）

C地区南端に位置し，周囲は柿木の肥料溝が巡り撹乱が著しかった。

竪穴形態は東西に僅かに長い方形を呈し，長軸2.65m，短軸2.45m，最深部は検出面から64cmを測る。長軸方位はN－75°－Wである。

出土遺物は上層から縄文土器片，下層から土師器が出土した。



第 122 図　1号竪穴出土土器実測図（1/3）

2号竪穴（第121図）

1号竪穴の北方5mに位置する。東方6mに1号墳がある。

竪穴形態は南に頂点を持つ扁平な五角形を呈し，一部に底面より4～8cm高いテラスが付く。長軸は1.8m，短軸1.3m，最深部は42cmを測る。長軸方位はN－40°－Wである。

出土遺物は無かった。

出土遺物

竪穴からの出土遺物は少なく，1号竪穴の下層部から土師器2点を出土したのみである。

土師器（図版65-2，第122図）

坏　身（1・2）　口径13.0cm，底径9.5cm，器高3.1cmである。体部から口縁部にかけて内弯し，全体的に摩滅が著しい。内面底部はナデ，外体部はヨコナデ調整である。底部は糸切り痕が認められ，板状圧痕がある。二次的な加熱を受けており，全体的に歪んでいる。2は口径12.9cm，底径8.6cm，器高2.9cmである。体部は内弯気味に立上り，口縁端部を薄くつまみ上げている。内面底部はナデ，体部はヨコナデ調整。底面は糸切りである。1・2共に1号竪穴の上層から出土した。時期は13世紀後半と考えられる。（日高）

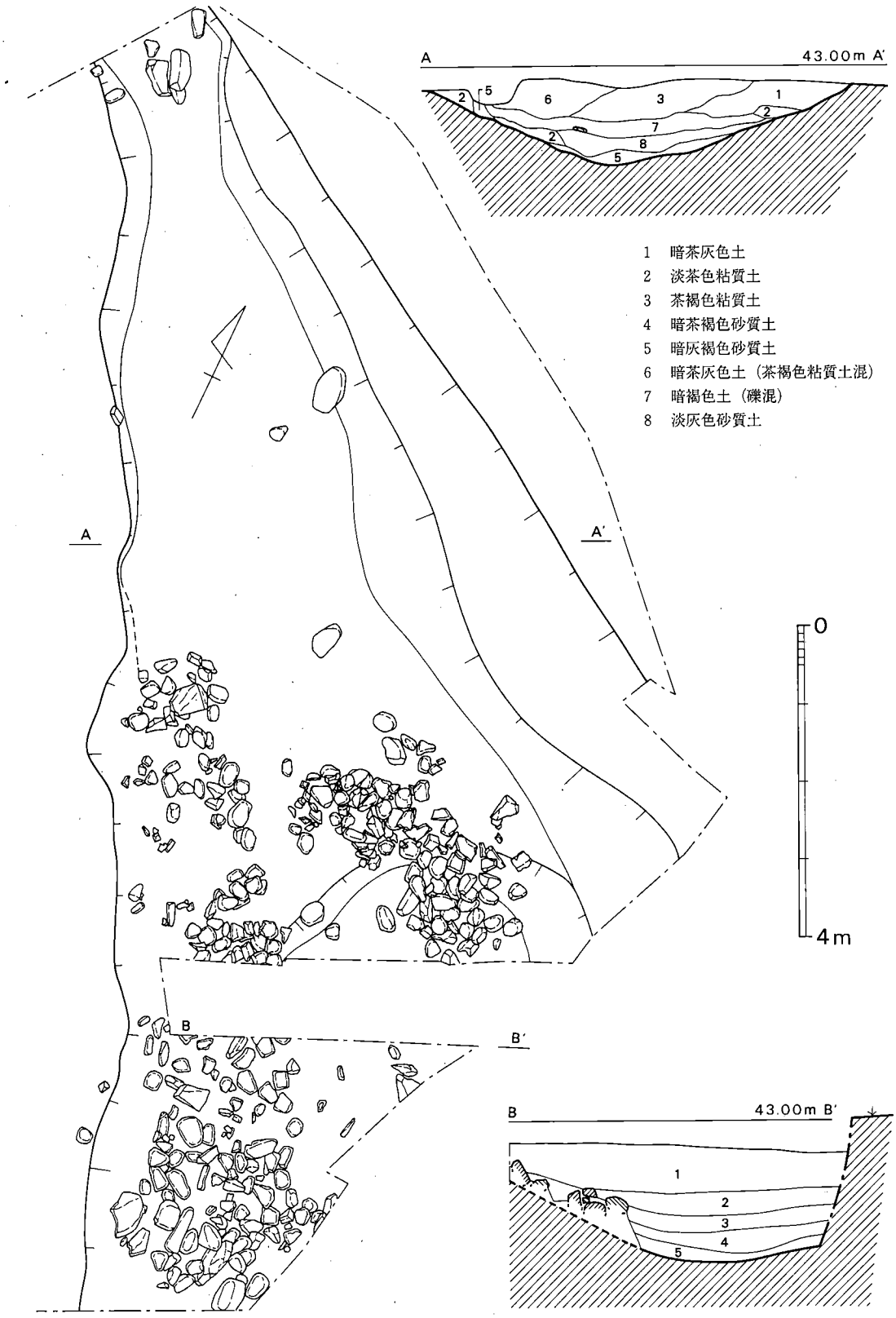
（4）石組溝（図版41-2，第123図）

C地区の北端で東西方向に検出した溝である。発掘区内での溝の計測値は下記のとおりである。

表7　石組溝計測表

（単位：m）

	上端径	下端径	深さ	その他
西壁	1.6	1.15	—	——
A	4.1	2.9	1.0	側壁は玉石礫
B	7.3	4.1	1.5	側壁は玉石礫



第 123 図　石組溝実測図（1/80）

計測値が示すとおり西から東方向に傾斜し，溝床面角度は約0.5°である。壁はそれほど急な傾斜角度ではないがA点で22°，B点で25°である。A－B区間の南壁は人頭大の河原石を乱積みしており，地山面に築いていない為か，全体に崩れた状態である。

層序は下層部から暗灰褐色砂質土，淡灰色砂質土，礫混りの暗褐色土で，最上層が暗茶灰色土と茶褐色粘質土が互層になっている。最下層及び淡灰色砂質土からみて，二次的に強い流れがあったものと考えられる。

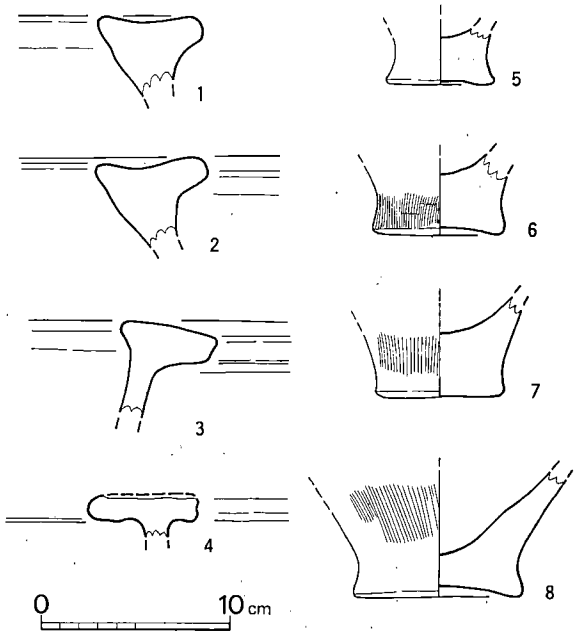
出土遺物は多くないが，最下層および層中位から土師器皿・坏，陶磁器，鉄器が検出された。このことから溝の埋没時期を13世紀末頃としたい。

出土遺物

石組溝から検出した遺物の多くは，埋土中の暗茶色土であるが，他に溝床面上から検出したもの，石組中に混在していたもの等がある。ここでは最下層出土土器・暗茶色土層出土遺物・石組内出土土器について記すこととする。

暗茶色土層出土弥生式土器(第124図)

甕（1～6）　1～4は甕口縁部破片で，いずれも復原不可能である。1・2は口縁を断面逆三角形状につくり，面中央部はやや凹む。3は内面の稜がやや突出た口縁で，面は平坦である。調整はヨコナデ。4は破損しているが，内面に稜を長く突き出した口縁で，上面は平坦である。



第 124 図　石組溝出土土器実測図①（1/4）

5～6は甕底部片である。5は底径3.8cmで，ヨコナデ調整。6は底径6.8cmで，浅い上底である。外体部は縦方向に強いハケ目が残る。時期は弥生時代中期前半から中葉。

最下層出土弥生式土器（第124図）

甕（7・8）　7・8は甕底部破片。7は器肉が厚く，底径6.8cmである。内外面ともに摩滅しているが，外体部はハケ目調整である。8は底径9.0cmを測り，約0.6cm程の上底である。やはり外体部はハケ目調整を行い，内面は丁寧にナデ調整である。時期は弥生時代中期。

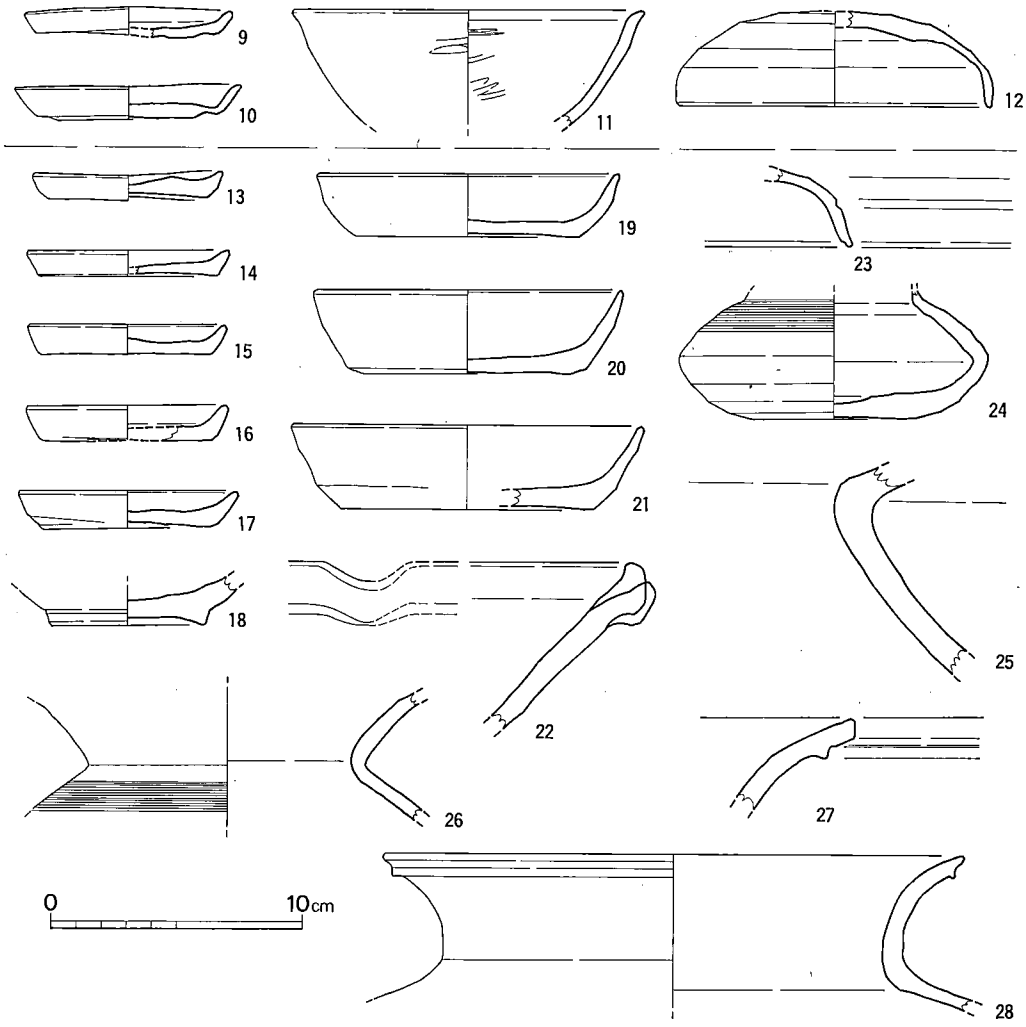
最下層出土土器（図版66，第125図）

土師器

小　皿（9・10）　9は底部糸切り痕を有し，内面はナデ，外体部および口縁部はヨコナデ調整である。口径8.3cm，底径7.1cm，器高1.1cm，10は口径9.1cm，底径7.2cm，器高1.1cmを測る。

黒色土器

椀（11）　体部は丸味をもち，口唇部が僅かに外反する。内外面とも丁寧なヘラミガキを施



第 125 図　石組溝出土土器実測図②（1/3）

し，黒色を呈す。胎土は僅かに細砂粒を含むが精良である。復原口径14cm。時期は11世紀前半である。

須恵器

坏　蓋（12）　直立気味の口縁をもち，端部は丸く作っている。天井部はヘラ切り離しのままで，その他はヨコナデ調整を施す。復原口径12.5cm，器高3.7cmを測る。年代は6世紀後半である。

暗茶色土層出土土器（図版65-3，第125図）

土師器

小　皿（13～17）　13の底部には糸切り痕が残るが，体部は摩滅が著しい。体部の器肉が厚い器形。復原口径7.5cm，復原底径6.2cm，器高1.0cm。14は内面はナデ，外体部および口縁部はヨコナデ調整を施している。底部は摩滅している。復原口径8.0cm，底径7.2cm，器高1.0cm。14～16の底部には糸切り痕の上に板圧痕が残る。15は口径7.7cm，底径6.7cm，器高1.2cm。16は復原口径8.0cm，復原底径7.0cm，器高1.4cm。17は体部が全体に歪む。口径8.7cm，底径6.6cm，器高1.5cm。

坏　身（19～21）　19は体部が内弯して立上る。器面の摩滅が著しい。口径7.0cm，底径8.8cm，器高2.5cm。20・21は体部が直線気味に立上る。口径12.1cm・14.0cm，底径8.0cm・10.1cm，器高3.3cm・3.4cmである。これらの土師器は，13世紀後半～14世紀にかけての所産である。

瓦　器

椀（18）　底部破片で，貼り付けの断面三角形の蛇の目風高台を有す。高台内には指頭痕が残る。焼け過ぎてなのか，内外面ともに火ぶくれがみられ須恵器風になる。高台径は6cm。時期は13世紀前半である。

須恵質土器

片　口（22）　口縁は内に屈曲し口縁帯をつくる。内外面はナデ，口縁部周辺は粗い回転ヘラナデを施している。内面は使用により磨り減っている。時期は14世紀前半である。

須恵器

坏　蓋（23）　天井部と口縁部の境に沈線が巡り，口唇部は斜めの段がある。外面には焼きぶくれがある。時期は6世紀中頃である。

坩（24）　口径に比べて器高の低い形で，口縁は短く端部は尖り直立する。焼成は良く胴上半は灰かぶりで黒色を呈するが，肩部から内面にかけては灰を受けずに小豆色に発色する。灰かぶりの境から蓋の口径を推定すると口径は8.5cm程度である。底面には鋭い細線で井形の線刻を施している。内底中心部には指先の押えが残っている。復原口径6.2cm，器高5.3cm，最大胴径12.3cm，底径6.4cmを測る。時期は6世紀後半であろう。

甕（25～27）　25・26は頸部破片。27は口縁部破片。口縁端部は角張り，口縁下に三角凸帯を有する。5世紀後半頃のものであろう。26も同時期であろう。

石組内出土土器

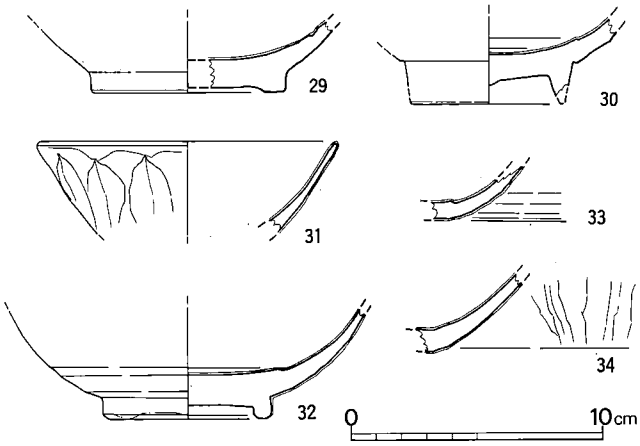
須恵器

甕（28）　口縁から頸部破片。口唇部は丸味をもち，僅かに下がった部分に三角凸帯が巡る。頸部は内外面ともヨコナデを施すが数ヶ所の指頭痕が残る。外面肩部には縦方向のタタキで，内面はヨコナデを施している。復原口径23cm，頸部径18.2cmが推定できる。古寺19号墳周溝内出土の大甕に類似する。時期は5世紀前半である。

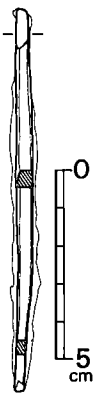
暗茶色土層出土陶磁器（図版65-3，第126図）

白　磁（29・30）　29・30は白磁椀である。29は復原底径7.7cmで，浅い高台を有する。露胎部は灰色でケズリ調整。見込みに浅い沈線が入る。施釉は薄く乳白色である。30は比較的高い削り出し高台が付き，端部は欠損している。露胎部は濁灰色で，丁寧にケズリ調整。内面見込みには浅い一条の沈線が入り，釉は薄く施されている。時期は12世紀後半～13世紀。

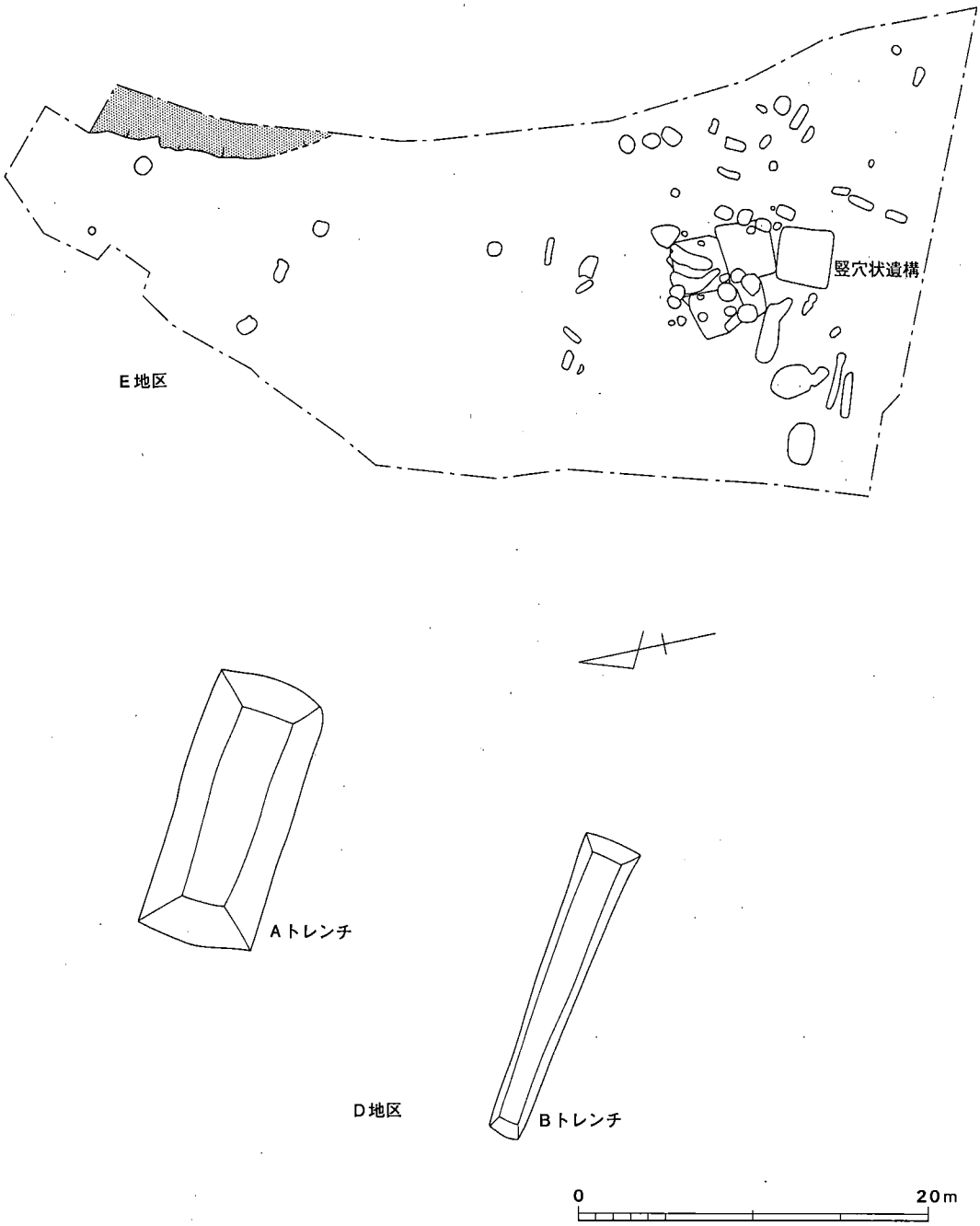
青　磁（31～34）　31は口径11.7cmに復原でき，比較的小さな椀である。胎土は精良で灰色を呈し，外体部は掻取りによる蓮弁文である。釉は明緑灰色で厚く施されている。32は高台付椀で，底径6.2cmを測り底面は露胎である。内面見込みに浅い沈線が入る。施釉は比較的厚く，外体部のケズリ調整が，施釉を透して良く判る。釉色は緑灰色である。33・34は小片であるが，内面見込みに沈線があることなどから，器形は椀になるものであろう。釉色は濁緑色で，胎土は精良である。時期は13世紀。（高橋）



第 126 図　石組溝出土陶磁器実測図（1/3）



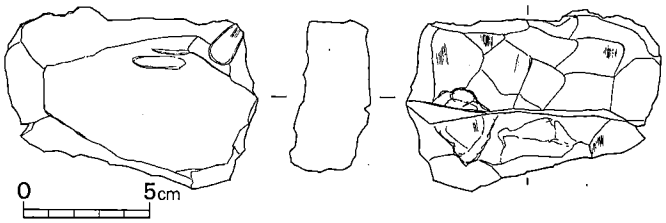
第 127 図　石組溝出土鉄器実測図（1/2）



第 128 図　D・E地区遺構配置図（1/400）

鉄　器(図版66,第127図)

先端部は断面三角形で，中央は3×5cmの台形，基部は2.5×3.5cmの台形を呈す。現存長10.3cmで，機能は判らない。



第 129 図　石組溝出土石製品実測図（1/3）

石製品（図版66，第128図）

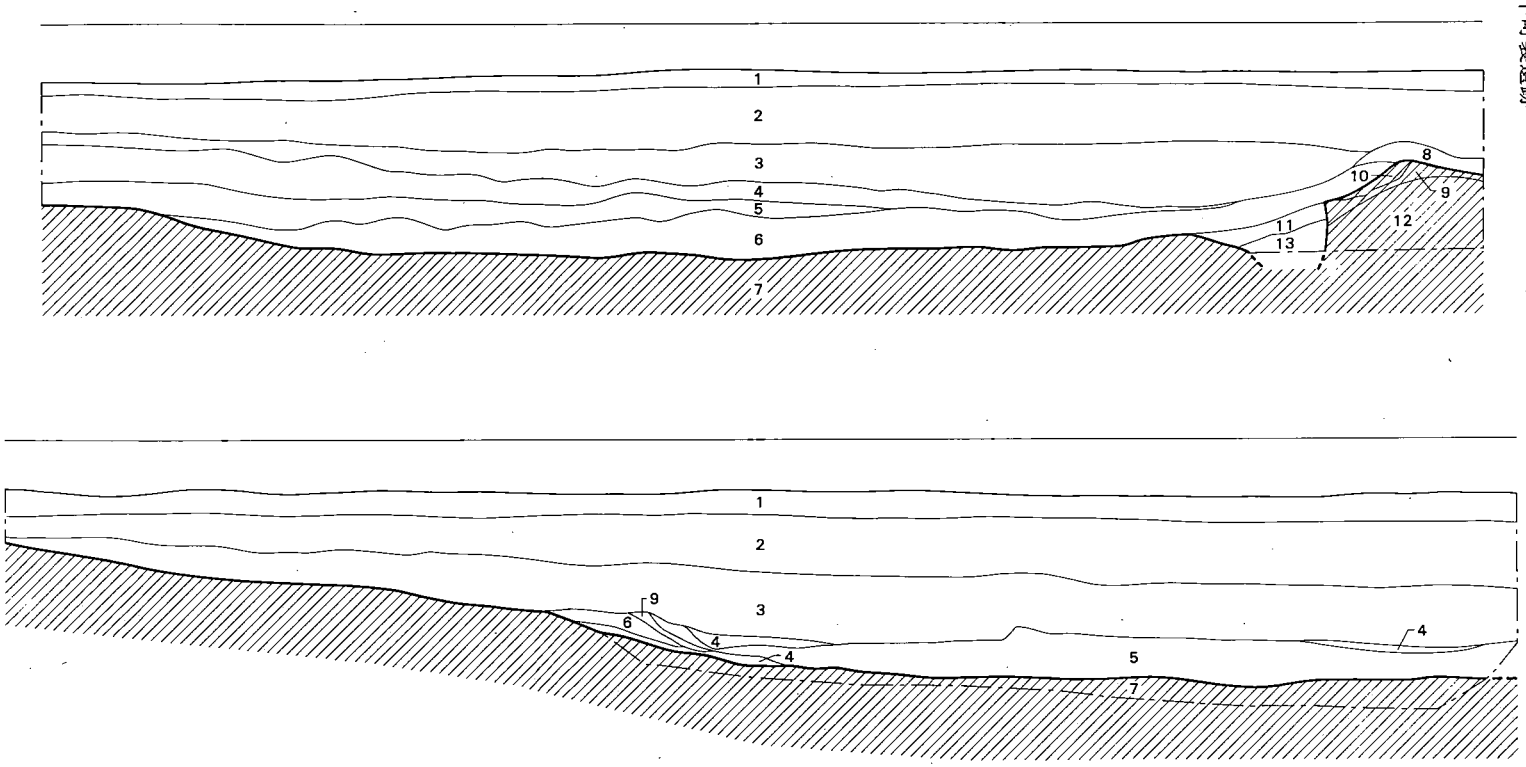
滑石製の石鍋破片で，外面は粗い縦方向のケズリのあとに横方向のケズリを施す。内面は滑らかに仕上げている。内面から径1cm程度の孔が穿孔されている。（日高）

D・E地区

39－B地点から東方に南北道路を挟んで谷と台地が存在する個所が39－C地点である。この地区を調査の便宜上D地区（谷部）とE地区（台地）とに区別し発掘を進めた。

D地区の谷はB地区の谷に比較してそれほど深くはないが，現状は北部から続く幅約30m，深さ約2.5mの谷である。2本のトレンチ（A・B）を入れ，土層観察を行った結果，最下層は黒茶色の腐植土層であるが，B地区の腐植土とは異なり木質の混在が認められなかった。最も堆積が厚いところで約50cmを測り，遺物の出土はみない。2度目の堆積層は暗灰茶色土層で，Aトレンチでは東西幅に帯状に認められたが，Bトレンチではレンズ状に数ヶ所に堆積していた。この層から上部の堆積土は，A・Bトレンチ共に同じで，下層から暗灰褐色土，暗黄灰色土，黒灰色土（表土）が，厚さ1.5m程認められた。特に暗灰褐色土は堆積が厚く，この谷部が埋没する当初の堆積土と考えられる。

E地区は約900m²について発掘調査した。遺構面は黄灰色砂質土を呈し，極めて軟質土であった。調査の結果，発掘区南半部に方形状の形態を有する竪穴式住居跡らしき穴や，不整楕円形を呈する土壙状のもの，あるいは大・小のピットを検出したが，近世に至っての掘削で古代の遺構でないことが明らかになったため，調査を中止した。従って主な遺構は検出されなかった。



1　黒灰色土（表土）
2　暗黄灰色土（床土＋黄灰色土）
3　暗灰褐色土
4　暗灰茶色土
5　黒灰色粘質土（僅かに腐植土混）
6　黒茶色土（腐植土層）
7　黒灰色粘質土
8　黄灰色粘質土
9　黄灰色砂質土
10　暗黒黄色土（⑧混）
11　⑦＋⑩
12　青灰色粘質土
13　黒灰砂質土

第 130 図　D地区土層断面実測図（1/80）

出土遺物

E地区の出土遺物は極めて少なく，発掘区北東隅の暗茶灰色土（包含層）から出土した須恵器および南端の竪穴状遺構から弥生式土器片を検出したにすぎない。

弥生式土器（図版67-1，第131図）

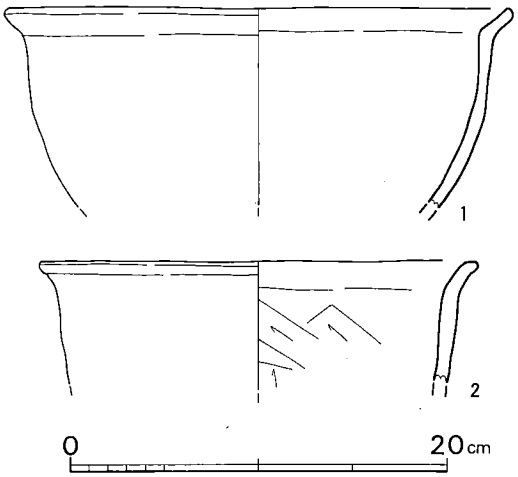
鉢（1）　1の口縁部は「く」字状に屈曲して短く外反する。外体部・内部はナデ，口縁部はヨコナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み，黄橙色を呈する。復原口径27.0cmで，器高がやや高い鉢であろう。竪穴状遺構から出土した。

甕（2）　復原口径23.3cmで，口縁端部はゆるく屈曲し外反する。内体部は底面から口縁部方向にケズリ調整を施す。胎土中の雲母を含み，黄褐色を呈する。表面採集した。

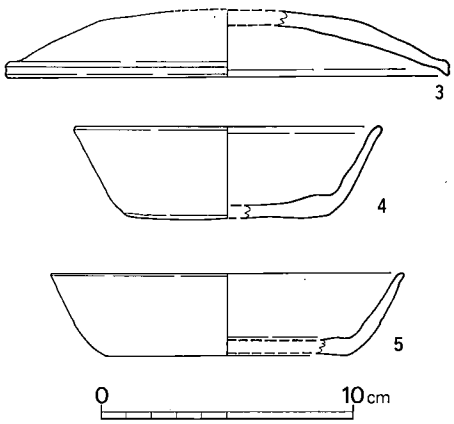
須恵器（図版67-1，第132図）

蓋（3）復原口径17.6cm，器高約2.6cmを測る。口縁端部は丸くつまみ上げ，内体部と外体部中位までヨコナデ調整。天井部はヘラケズリ調整である。胎土中に砂粒を若干含み，暗灰色を呈する。暗灰色土出土。

坏　身（4・5）　4は復原口径12.2cm，底径7.8cm，器高3.7cmを測る。底部器肉に比し，大部器肉が薄い。内面底部はナデ，体部はヨコナデ調整を施し，底部は未調整ヘラ切り離しである。胎土中に砂粒を含み，暗灰色を呈する。暗灰色土出土。5は復原口径14.0cm，底径9.5cm，器高3.2cmである。口縁端部は薄くつまみ上げ丸く仕上げている。内底部はナデ，体部はヨコナデ調整である。胎土には砂粒を若干含む。暗灰色土から出土した。　（高橋）



第 131 図　E地区出土土器実測図①（1/4）



第 132 図　E地区出土土器実測図②（1/3）

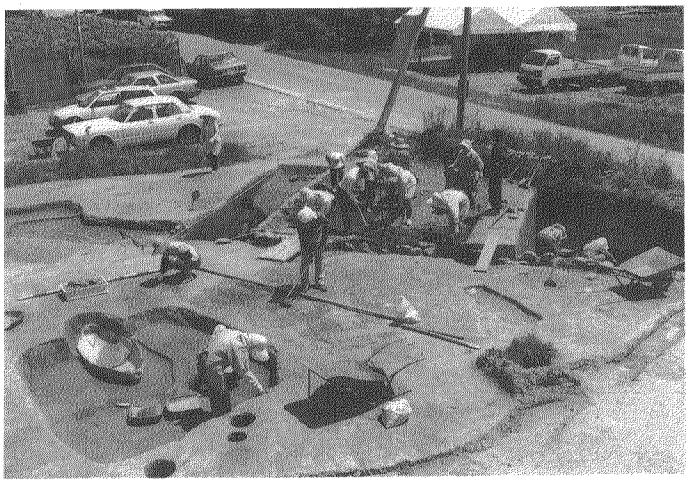
3．小　　結

第39－B・C地点は約11,000㎡の発掘調査面積であった。前述のごとく調査結果で得た主な遺構は竪穴住居跡，甕棺墓，古墳，土壙跡，石組溝と大きな谷であり，年代は縄文時代から中世にかけて広範囲にわたっている。遺構の性格を点検し，総合的に遺跡の性格を位置付けるならば弥生時代の生活跡であろう。検出した遺構にならい特記すべき点を二三あげておこう。

遺構については削平・撹乱が著しく残存状態が良好でなかった事が残念でならない。

A・C両地区の性格からすれば，C地区は甕棺墓群である。杷木宮原遺跡（第39－A地点）からは甕棺墓，住居跡等が検出され，志波桑ノ本遺跡（第40地点）においても遺物が採集されている。志波という広域的台地を想定すると筑後川沿岸近くに弥生時代の集落遺跡を多く分布しているように見える。今回検出した甕棺墓は，弥生時代中期初頭から中葉の年代があたえられ，A地区検出の円形竪穴住居跡等もそれに並ぶ時期と考えられる。

もう一点は中世代に入ってからの志波台地である。本跡検出の遺構を特筆すべき点とすれば石組溝と谷だけである。横断道の発掘では志波桑ノ本遺跡から土壙墓，火葬墓，池状遺構等が検出され，さらに奥まった山裾の江栗遺跡では室町時代頃の仏教関係の建物，火葬墓等が発掘されている。今回検出の石組溝等は出土遺物から13世紀後半頃の年代が考えられ，大きな建物に付設する溝と考えるのは飛躍しすぎであろうか。谷については後述する。　　（高橋）



C地区甕棺及び石組溝発掘風景

Ⅳ 各　　論

1．弥生時代の墓地群について

（1）はじめに

杷木町における発掘調査には，昭和6年の島田寅二郎等による志波宝満宮古墳の調査（註1），朝倉高校史学部による西林田地区・志波地区の調査（註2），昭和44年の県教委による杷木神籠石の調査（註3）等がある。

今回の横断道関係の発掘調査により，縄文時代から中世に及ぶ多数の遺跡が発見された。当町においては横断道が山間部を走るということもあって，縄文時代の遺跡が主体をなすが，西ノ迫高地性集落の発見は画期的なものであった。杷木宮原遺跡と中町裏遺跡では，弥生時代の集落・墓地群を検出しており，両筑平野東端部における本格的な甕棺墓・木棺墓の調査となった。本頁では墳墓の時期・配列等について述べることにしたい。

（2）甕棺墓について

杷木宮原遺跡では18基（成人棺7基・小児棺11基）検出したが，甕棺墓の遺存状態は悪く，口縁部しか留めていない甕棺墓も存在することから，かなりの数の甕棺墓が削平されたものと考えられる。甕棺墓群は木棺墓・土壙墓とともに北東ー南西方向に列を成して埋葬されており，調査区外の東北側に進展するものと考えられる。また，中町裏遺跡では成人棺7基を検出したが，以前にも農協柿選果場横の柿園から甕棺墓が出土しており（註4），墓域は調査区外の南側及び県道側へ進展するものと考えられる。

埋葬形態は接口式が大半を占め，杷木宮原K3・同K16は挿入式で，杷木宮原K17は石蓋単棺である。甕棺はほぼ水平に埋置され，中町裏遺跡甕棺墓の合口部には，目張り粘土が丁寧に施されていた。甕棺墓の時期は，杷木宮原遺跡が弥生中期初頭～中葉で，中町裏遺跡は弥生中期初頭～前半である。また，両遺跡とも人骨・副葬品は出土していない。

甕棺の編年

甕棺は，切合い関係をもとに形態・手法からⅠ～Ⅳ期に編年することが可能で，以下説明を加える。また，小児棺は日常容器の転用品である。

Ⅰ　期……成人棺は，器高90～100㎝・口径65～75㎝を測る。口縁部は内傾する逆L字状を呈し，胴部上位に張りをみせ，厚い平底の底部に移行する。胴部中位に断面台形・

三角凸帯を1～2条貼付する。調整は外面ハケ目→ナデ消し，内面ナデで，胎土に長石・石英・黒曜石を含む。杷木宮原K6・12・14，中町裏K3・4・6が該当し，中町裏K4上下は内外面ともヘラミガキ調整を施し，古い様相をみせる。

小児棺は，器高40cm・口径30cm内外を測る。口縁部は内傾する逆L字状を呈し，胴部上位に最大径を有し，厚い上底の底部に移行する。口縁部のやや下位に，三角凸帯を貼付。調整は外面ハケ目，内面ナデで，杷木宮原K8′・18下が該当する。

Ⅱ　期……成人棺は，器高90cm・口径70cm前後を測る。口縁部は内面に大きく突出し，口縁部平坦面はほぼ水平である。胴部上位に張りをみせ，締りの悪い底部に移行する。胴部中位に三角凸帯を1～2条貼付する。調整はハケ目→ナデ消しで，胎土に長石・石英・雲母を含む。杷木宮原K1・10，中町裏K5・7が該当する。

小児棺は，器高40cm・口径30cm内外を測る。口縁部はやや内傾する逆L字状を呈し，内面に小さく突出する。胴部はⅠ期程張らず，平底の底部に移行する。口縁部のやや下位に，三角凸帯を貼付する。調整は外面ハケ目，内面ナデによる。杷木宮原K2～5・11上・13・15・18上が該当する。

Ⅲ　期……成人棺は，器高90cm・口径60cm前後を測る。口縁部は内面に大きく突出し，口縁部平坦面は外傾する。胴部に張りはみられず，よく締まった底部に移行する。胴部中位に三角凸帯を1条貼付する。調整は外面ハケ目→ナデ消し，内面ナデで，胎土に長石・石英・雲母を含む。色調は暗赤褐色を呈する。杷木宮原K17が該当する。

小児棺は，器高40cm・口径30～40cm内外を測る。口縁部は内傾する逆L字状を呈し，Ⅰ・Ⅱ期程肥厚しない。口縁部のやや下位に，三角凸帯を貼付する。調整は外面ハケ目，内面ナデによる。杷木宮原K11下・16が該当する。

Ⅳ　期……成人棺は，器高90cm・口径70cm前後を測る。口縁部は内面に大きく突出するT字状を呈し，口縁部平坦面は外傾する。胴部に張りはなく，よく締まった底部に移行する。胴部中位に三角凸帯を2条貼付する。調整は外面ハケ目→ナデ消し，内面ナデで，胎土に長石・石英を含む。色調は暗赤褐色を呈し，杷木宮原K9が該当する。また，K9上甕は頸部下に断面三角凸帯を1条貼付する。

小児棺は，器高40cm・口径30cm内外を測る。口縁部は「く」字状を呈し，口唇部は丸く納める。口縁部のやや下位に，三角凸帯を貼付する。調整は外面ハケ目，内面ナデによる。杷木宮原K7・8が該当する。

以上の4期に分けたが，Ⅰ期は城ノ越式甕棺の様相を呈し，弥生中期初頭における。Ⅲ期は永岡遺跡の甕棺に類例を見いだせ，中期前半に比定できる。Ⅱ期は形態的にⅠ期とⅢ期の中間に納まる。Ⅳ期は口縁部の形状・凸帯等からⅢ期より後出すると考えられ，中期中葉におけよう。Ⅰ期は橋口編年Ⅱa式，Ⅱ期はⅡb式，Ⅲ期はⅡc式，Ⅳ期はⅢa式に併行しょう（註5）。

（3）木棺墓について

杷木宮原遺跡では，小口部に石を立てた墓を7基検出した。立石内側の埋土は，外側の埋土より黒っぽく，両者に差異がみられた。柿原遺跡Ｆ地区（註6）・大庭久保遺跡（註7）例では，側壁部に粘土が存在し，側板押え・目張りのためと考えられ，側板は既に腐朽していたが，小口部に石を立て，側壁・蓋に板材を用いたタイプの木棺墓と考えられる。また，甕棺墓と主軸を同じくして造墓されており，甕棺墓とで一連の墓地群を構成する。

このての木棺墓には，他に朝倉町上の原遺跡（註8）・原の東遺跡（註9）・上ノ宿遺跡（註10），浮羽町岩野遺跡（註11）等に類例があり，ここでは木棺墓の構造・分布について若干ふれたい。

木棺墓の分類

小口石の有無により下記の3形態に大別できる。

Ⅰ　類……両小口部に石を立てるタイプで，墓壙の形態によりａ～ｃ類に細分できる。

ａ）素掘りの墓壙に石を立てるもの（杷木宮原3～6号木棺墓）。

ｂ）片側にテラスを有するもの。

ｃ）二段掘りの墓壙で，上段に石を立てるもの。

Ⅱ　類……片側小口部に石を立てるタイプで，墓壙の形態によりａ～ｃ類に細分できる。

ａ）素掘りの墓壙に石を立てるもの。

ｂ）二段掘りの墓壙で，上段に石を立てるもの。

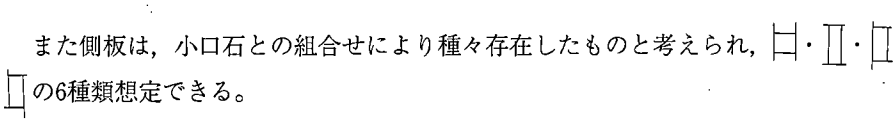
ｃ）ｂ同様二段掘りの墓壙で，下段に石を立てるもの（杷木宮原2号木棺墓）。

Ⅲ　類……小口部に石を有さないタイプで，墓壙の形態によりａ～ｃ類に細分できる。

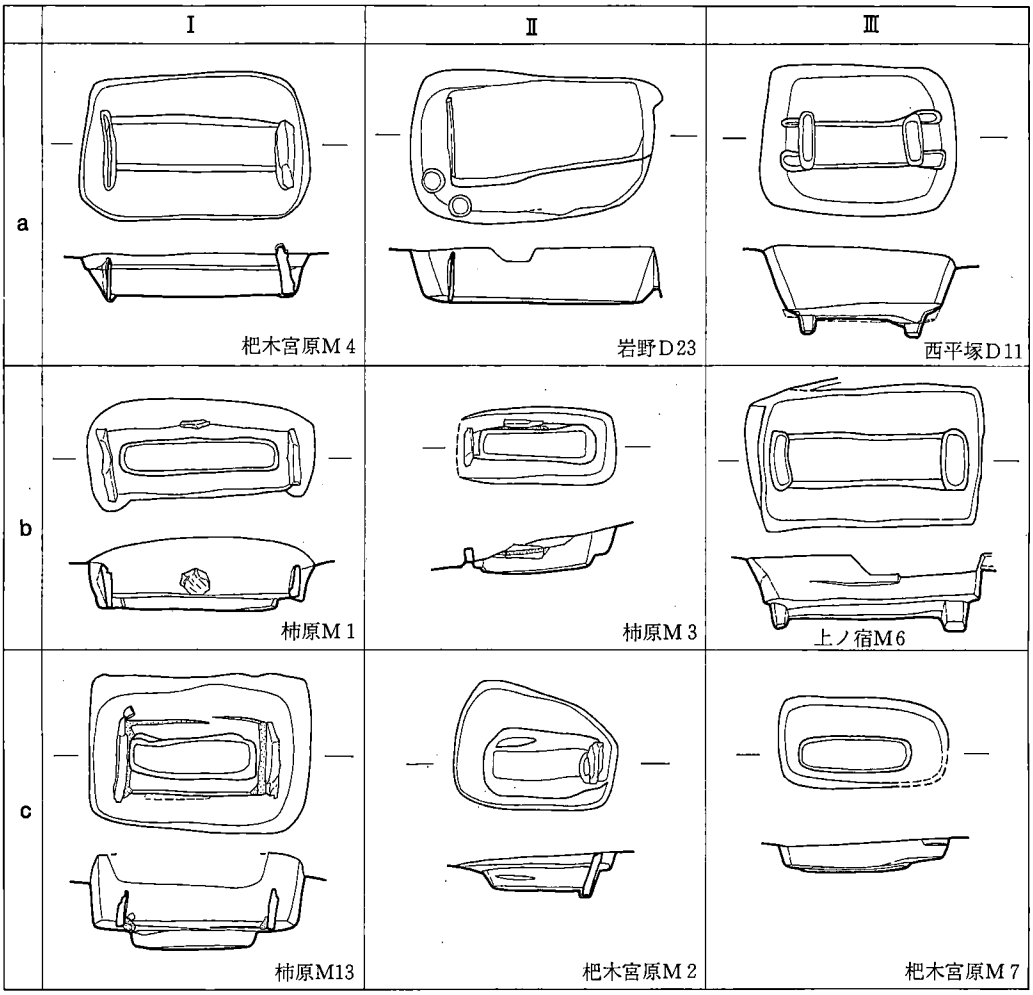
ａ）素掘りの墓壙で，小口部に掘り込みを有するもの。

ｂ）二段掘りの墓壙で，下段小口部に掘り込みを有するもの。

ｃ）墓壙を二段に掘り込んだだけのもの（杷木宮原4号木棺墓）。

また側板は，小口石との組合せにより種々存在したものと考えられ，  の6種類想定できる。

杷木宮原遺跡の木棺墓は，素掘りの墓壙の小口側に石を立てたもので，柿原遺跡Ｆ地区・岩野遺跡例は，墓壙を二段に掘り，上段の小口部に石を立てている。この様なＩｃタイプの木棺墓は，素掘りの木棺墓に比して掘削する土量が少なくて済む。また，木蓋を小口石の高さに想定した場合，立てる石もＩａタイプに比して低めの物で済み，かなりの省力化が図れる。



第 134 図　木棺墓分類図(1/80)

木棺墓の分布

小口部に石を立てた木棺墓は，主として甘木市～杷木町にかけての両筑平野北東端部と神埼町～多久市にかけての背振山系裾部に分布している（表7参照)。通常は，甕棺墓・石棺墓・土壙墓・石蓋土壙墓等とともに墓地群を形成し，一遺跡内にあっては1～2基存在する程度であるが，柿原遺跡・大庭久保遺跡・上ノ宿遺跡・杷木宮原遺跡・岩野遺跡では，甕棺墓とともに墓地群の主体を成している。

甘木市柿原地区では，通称「柿原石」と呼ばれる緑色片岩を産することから，柿原遺跡においては極めて容易に石材が入手でき，かつ木材に比して加工が容易な石材であるため成人棺として多用されたものと考えられる。また，麻底良山・高山は，結晶片岩を基盤とするため，杷

木宮原遺跡においても石材の入手は容易であったと考えられる。

最も近い石材産出地（片岩を基盤とする烏集院～宮野地区）から約2kmの距離に位置する大庭久保遺跡の場合は，小口に石を有する木棺墓と石を有さない木棺墓が1対4の比率で存在し，両者において被葬者の優劣は見いだせない。これらの事から，石材入手が容易であるか困難であるか，及び高度な木材加工技術の存否が，小口部に立石を有する木棺墓の分布状況に強く関連するものといえる。

（4）墳墓の配列について

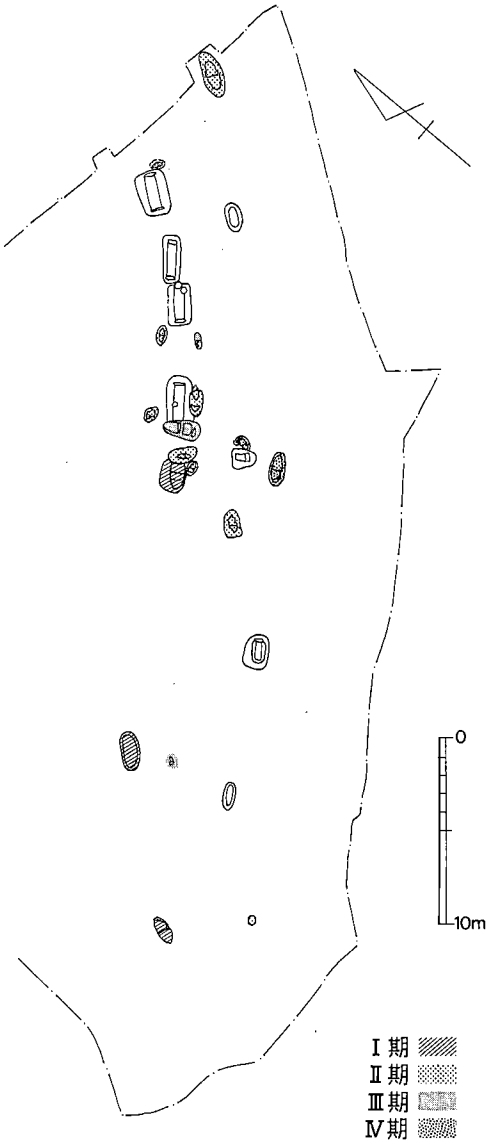
前述したように，杷木宮原遺跡では甕棺墓18基（成人棺7基・小児棺11基），木棺墓7基，土壙墓1基から成る弥生墳墓群を検出した。

弥生墳墓群は，北東ー南西方向にかけて幅8m，原状での長さ50mの規模を有し，時期的には弥生中期初頭～中期中葉で納まる。墳墓の大半が主軸を北東ー南西方向に向け，3・5・6号木棺墓及び6号甕棺墓は直線的に配され，全体として3列の列埋葬が窺える。

甘木・朝倉地域において列埋葬形態を呈する遺跡には，夜須町吹田遺跡（註12）・城山遺跡（註13），甘木市栗山遺跡（註14）・柿原遺跡F地区，朝倉町大庭久保遺跡・原の東遺跡等がある。

二列埋葬になった理由として，列間を墓道とする見方があるが，墓所において強い規制の下に逐次墳墓を造営していった結果と考えられ，一集落における血縁的集団を単位とした共同墓地としての性格が窺える。

また，中期初頭～中頃までは二列埋葬形態を呈していた墓地群が，中期中頃以降になると崩壊する。これは，墓地群に対しての強い規制が緩んだためで，一家族を基本単位としたグループに分散するものと考えられる。



第 135 図　弥生墳墓群配置図(1/400)

（5）おわりに

杷木宮原遺跡・中町裏遺跡のⅠ期甕棺墓は，胎土に黒曜石を含んでいる。浮羽町岩野遺跡の52・64号甕棺墓（中期初頭）も胎土に黒曜石を含み（註15），形態・手法的にも類似しており，両者は同一工人の作によるものであろうか。

恵蘇宿から志波にかけての地区は，外之隈遺跡・恵蘇八幡古墳・本陣古墳・志波宝満宮古墳・志波桑ノ本遺跡・大迫遺跡等の大規模遺跡が集中する重要な地区であり，これには両筑平野という豊富な生産性をバックボーンとしたものと言えよう。　（小田和利）

表8　木棺墓地名表

No	遺跡名	所在地	タイプ（数）									備考
			Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅲa	Ⅲb	Ⅲc	
1	牟田辺遺跡	多久市南多久町下多久字牟田辺					1	1				
2	本告遺跡	小城郡三日月町						1				
3	四本黒木遺跡	神埼郡神埼町城原字四本谷						1				
4	横隈狐塚遺跡	小郡市大字横隈字狐塚361			1							
5	柿原遺跡F地区	甘木市大字柿原字若山・大谷	1	1	7		1				3	
6	大願寺遺跡	甘木市大字平塚字大願寺					1					
7	大庭久保遺跡	朝倉郡朝倉町大字大庭字久保	4		2			1	6	11	9	甕棺墓に切られる
8	上の原遺跡	朝倉郡朝倉町大字大庭字上の原				1				1		
9	原の東遺跡	朝倉郡朝倉町大字菱野字原の東	1									
10	上ノ宿遺跡	朝倉郡朝倉町大字山田字上ノ宿	4		3？		3	2	19	12	4	甕棺墓（中期前葉）に切られる
11	杷木宮原遺跡	朝倉郡杷木町大字志波字宮原	5？					1			1	甕棺墓（中期前葉）に切られる
12	岩野遺跡	浮羽郡浮羽町大字三春字岩野	7	1	4	2		5			2	甕棺墓と相互に切合う

2．中町裏1号墳と宝満宮古墳群について

まず中町裏1号墳をまとめる前に本墳の南西200ｍ程にある宝満宮古墳群について触れておく。同丘陵の先端部に位置し，本遺跡より標高はやや高く楕円形島状を呈し，北は国道386号線，南はすぐ筑後川になる。この古墳群がある志波宝満宮社叢は巨木が多く，昭和44年に暖地特有の植物が多数繁殖して学術的価値が高いことから県の天然記念物に指定されている。

この古墳群については，福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第七輯（註16）に記されてあり要約すると，昭和6年6～7月の頃の長雨により，境内の丘陵の南側が崩れて，その下にある白蜂神社（金比羅宮）の篭堂の横に箱式石棺の棺材と副葬品が転落し発見された。副葬品は直刀5本（その内，鉄刀106cm・鉄剣92cm），仿製鏡1面（内区に珠文，櫛歯文帯，複線波文帯，外行鋸歯文帯あり，広い素縁に終る形式のもので，径9cm，鏡面両端において一分のそりを有す珠文鏡（註17）），槍身1本（鎬あり長さ18.1cm），短甲破片，砥石1点（一辺3.9cm，長さ9.1cm）であった。石棺より90cm程隔てて，家形埴輪の切妻形片と四柱形片が出土した。このため試掘し，2基の石棺を発見した。説明の為，前述の1基を仮に1号石棺とし，他を2・3号石棺とする。

2号石棺は主軸が南北で，長さ173cm，僅かに幅24.2cmにすぎないが，側壁は傾いて，石蓋が無く，板を蓋にしたものか。副葬品は直刀1本・鉄鏃1束・鉄斧1点であった。

3号石棺は長さ188cm・幅82cmで，蓋石2枚（大きいものは縦横121×182cm）で，側面の東西は一枚石，南北は所々に割石の面を揃えて厚く粘土により封鎖し，棺内及び底部に敷いた礫石に至るまで朱を塗ってあった。棺の主軸方位は概ね東西で，頭位を東と西に向け屈葬した2体があった。副葬品は鉄剣2本（41.8cm・81.8cm），貝釧？2点（「剣の柄には共に貝細工の装飾ありしものの如し」と書かれているが，石棺内写生図を見るとこれは貝釧の可能性がある。），刀3本（長さ各77.2cm・78.8cm・79.7cm），兜1領，鎧1領，骨鏃数十本，鉄鏃数十本（その内には長さ14.2cmで逆刺をもつものがある），鉄斧3点（長さ9.1cm）であった。

1号石棺と2号石棺との間には90cm程の距離があり，その中間より経筒1点（高さ24.2cm，蓋は五角で高さ3.6cm）に直刀が木炭に囲まれて出土した。以上のようになる。

他にこの古墳群に関連する報告としては，以下のものがある。

『古寺墳墓群』（註18）では，「甘木・朝倉地方を中心としてみた陶質土器・初期須恵器資料」の中に田中幸夫コレクション（註19）の志波千代島出土の初期須恵器把手付碗（第133図）が取り上げられている。これは，境内の箱式石棺から1931年に出土したもので，メモには“勾玉と共に”と書かれている。橋口編年によると池の上Ⅱ式，つまり4世紀末～5世紀初頭に比定されている。

『埋もれていた朝倉文化』（註20）には，「宝満神社境内古墳」として取り上げられ，県報告七輯と出土遺物の考察がなされている。その中に「石棺発掘の北部に於ても，露出破損した石

棺が見受けられ……神社の北方，境内に添うて谷に下る径に，甕棺の露出しているものを見得る」と記されている。前者は後述する4号石棺であろうか。

『杷木町史』（註21）には，県報告七輯と以下の報告が記載されている。「昭和34、5年ごろの梅雨のとき南側の県道上の崖が崩れた時に鉄製の鎌が出土した」とある。

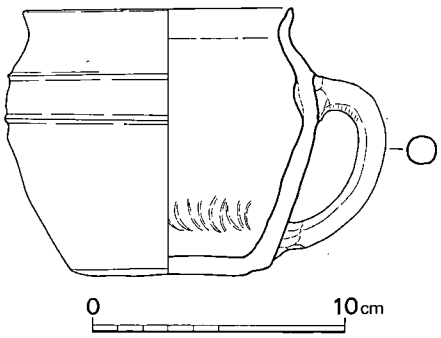
いずれも，県報告七輯により遺構・遺物が注目されている。現在に至るまで境内の遺構は，自然崩壊は進んでいるものの保存され，2・3号石棺と他に宇賀神社の社裏に1基ある。この石棺を仮に4号石棺とする。現況について触れておく。

2号と思われる石棺（図版68-1）は，北側の小口部と東側壁一部，蓋石1枚が残っている。小口部は1枚石で，東側壁の基底部は板石を立て，その上に1枚小口積みしている。主軸はN－18°－W程になり，小口幅から推定するとおよそ幅は45cm・高さ55cm程である。県報によると側壁は傾いて，石蓋が無いと書かれているが，恐らく蓋石が落ちていたのであろう。

3号（図版69-1）は，2号の北に1.8m程離れてあり，調査後に南側壁側に石の扉が付けられ保存されている。内部は側壁のため見づらいが，北側の側壁は立てた板石の上に小さな板石を3段程小口積みしている。主軸はN－48°－W程度になり，蓋石から盛土上面までは1m程である。見かけの墳丘径は概ね20mで，北側は墳丘高2.5m程あり，1～3号石棺はこの墳丘内にあったようである。この古墳は，この様な主体部・副葬品等と志波平地や筑後川を介し両筑平野を見渡せる要所に立地することから，この地区の首長墓であろう。

4号（図版69-2）は，3号石棺から概ね北方28mにあり墳丘は無い。西側小口部が壊されて無いが，概ね残存長160cm・幅40cm・高さ64cmで，小口部・側壁基底部は板石を立て，側壁上部は小さい板石を3段程小口積みしている。2・3号石棺と4号石棺の間にも墳丘状の高まりがあり，数基の古墳の可能性がある。また，現在では国道で寸断され，柿木園で削平されているが，これらの古墳群から調査地区にかけても甕棺・古墳があったようである。

1号墳をまとめると，主体部は前述のように内法は短軸45＋αcm，長軸220cm±αcmで，小口・側壁の基底部は厚さ10cm程度の板石を立てて据え，床面には15cm程度の埋土をし，その上に1～3cmの敷石を施している。基底部の構造しか判らないが，前述した宝満宮古墳群と同様の石棺系竪穴式古墳であろう。20m北方の石組溝内からは厚さ10cm前後・幅60cm前後の棺材と思われる板石が数枚出土し，その中には朱が塗られたものがあった。この溝の埋没時期は中世で，その頃に1号墳も壊されたのであろう。この溝から出土した須恵器甕口縁部破片（第125図28）



第 136 図　志波千代島出土の初期須恵器把手付碗（1/3）

は主体部内から出土した広口壺に近い時期のものであり，1号墳の棺外副葬品の可能性もある。

出土品は何れも原位置を保ってなく，棺材を抜き取った後に床を均し戻されたようである。副葬品と考えられるものは，須恵器広口壺・鉄鏃・鉄鎌・鉄製留金具・ガラス小玉・砥石であった。砥石は埋土内からの出土で，なかには弥生土器片も混ざっており，時期は決め難いが前述した宝満宮仮1号石棺からの出土をみるように，この時期の古墳には副葬品として用いられることがあり，副葬品と考える。

以上のように，非常に遺構の残りが悪かったにも関わらず多数の出土品があり，それらから宝満宮古墳群と関連する古墳であることが判った。　（日高正幸）

3．志波の支流谷について

中町裏遺跡が所在する杷木町大字志波は，朝倉町との境にあって南は筑後川に接し，北は古処山系連山に囲まれ，筑後川の南方に広がる浮羽郡，つまり両筑平野を一望する好所に位置する。標高約42～43mの台地に広がる志波の中央部には北川が筑後川に注いでおり，この川を挟んだ両台地にはいくつもの入り組んだ小谷が存在し，台地と一帯となって沖積平野をつくっている。従って，本跡検出の谷や杷木宮原遺跡の谷，志波桑ノ本遺跡の谷等も沖積台地に形成された一支谷である。

谷部の発掘調査結果は前述のとおりであるが，層位を大きく下層（砂層）と腐植土とに分けることが可能である。下層は礫と腐植土が混入した砂層で，一見錯綜状態のようにあるが，谷部の北から南になるにつれ砂層の堆積が厚く，水流の強さを示しているものと思える。この砂層からの出土遺物に古くは縄文土器があり，弥生時代中期頃の土器を主体に出土していて，谷を挟んだ両台地上にも弥生時代の集落・墓地跡等の生活跡地であったことが知れる。

これらの状況は，北壁と南壁では堆積土の様相が若干異なっており，前述のごとく中央トレンチでは腐植土層と砂礫層がサンドイッチ状になっている点が注目される。つまり，水そのものは滞水状態にあったと思うが，場所によっては流水状態にあったわけで，腐植土を砂土（水を多く含んだ砂）がゆらし，散らせたような堆積状況がうかがえた。この時点での腐植土中の遺物は，弥生時代中期の土器片が中心をなす。

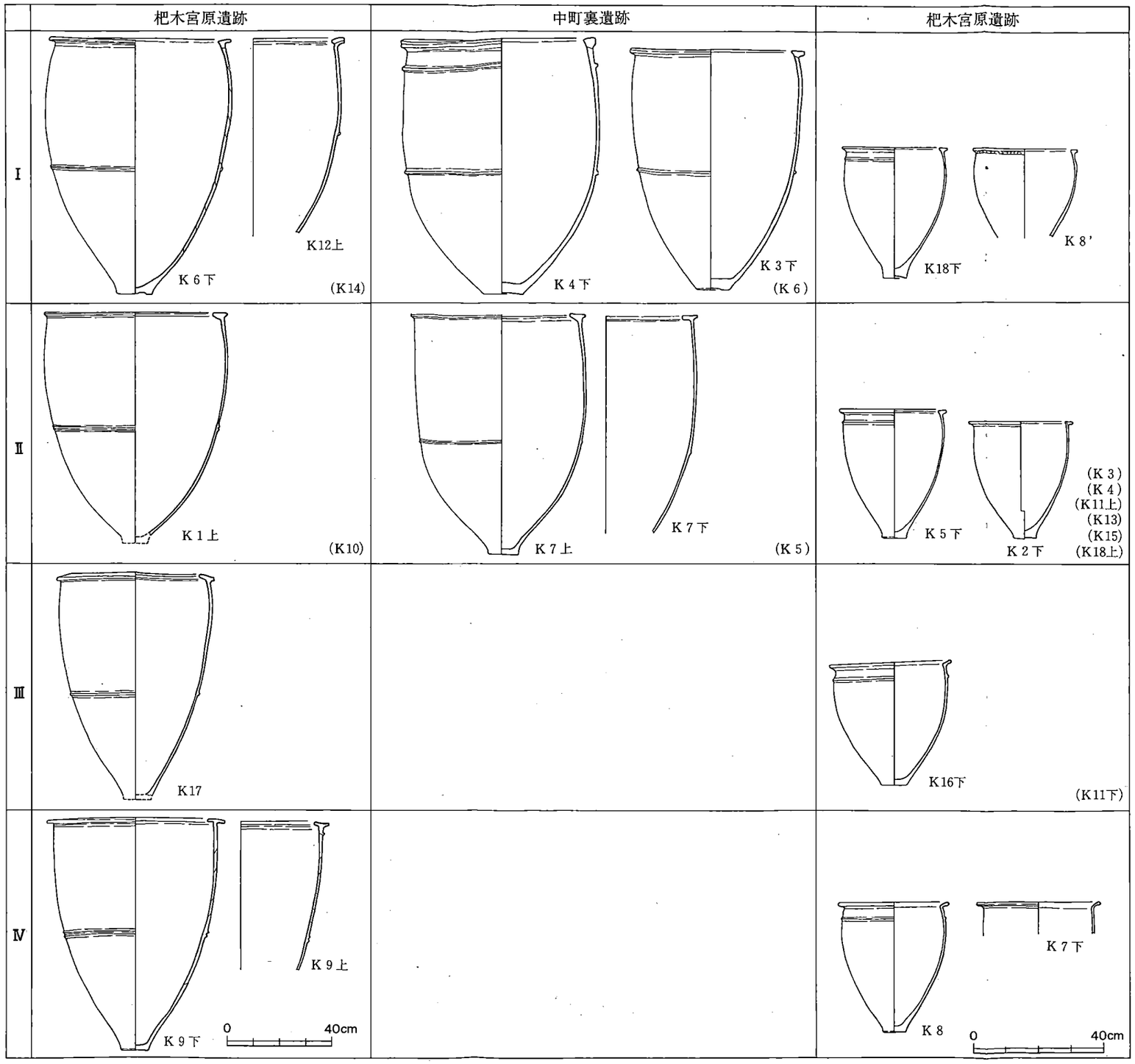
その後の谷は現在も存続しているわけであるが，大きな変化は中世（13世紀頃）に訪れる。土層の観察状況からかなり大きな洪水もしくは増水量の動きがある。先ず北壁土層図（第84図）の東側の状態である。最下層には砂層及び腐植土等が僅かに堆積し，その上に暗茶色土・暗青灰色粘質土が前者を覆い被すかのように堆積している。腐植土等の埋没時期は，弥生時代中期を中心としたそれ以降とすれば，この崩れ落ちた土砂は中世時かそれ以前に動いたことになる。この事は谷底で検出した1・2号土壙が証明資料である。この土壙が掘られた土質は，先

の北壁土層で観察できた暗茶色土・暗青灰色粘質土と同質土で，土壙中から検出した遺物の中で最も新しい土器等は13世紀後半～14世紀代の年代を示している。常識的に考えて，この時期に谷底に土壙を掘削したとは考え難く，1・2号土壙の掘削土が自然災害により谷部に崩れ流されたとする方が妥当かと思われる。従って，これらの諸状況から判断して，中世期に当志波地域において集中豪雨・増水・洪水等の自然災害があったものと推知する。この谷部に増水した水は筑後川に流れ込むものと考えられるが，ここで筑後川の氾濫状況を少し述べてみよう。

筑後川は熊本県阿蘇郡小国町の外輪山に源を発し，杖立川や玖珠川が合流し，また各支流を掌握しながら有明海へと注いでいる。筑後川の歴史は話題に富み，中でも洪水，それによる護岸工事・土地争い・水請（みずうけ）工事等災害にからんだ記録が多く残されており，常に人々と筑後川が関わりを持ち続けている。特に洪水については文献が残っており，災害記録が永年にわたり記されている。建設省九州地方建設局監修『筑後川』を引用し，寛永二（1625）年～昭和28年までのかなり被害の大きいものを抽出すると，328年間に25回もの洪水があり，10年に一回の割合で大洪水が起こったと記されている。中でも明治22年・大正10年・昭和28年にはそれまでにない稀有のものであった。時代を遡ってみると，延宝元（1673）年五月には「近年にない大洪水」，同四年には「延宝元年を上回る水量」とか，江戸時代においても自然災害は今と変わらず，かなり大きな被害を残している。

この様に，筑後川の水害状況をみてみると，今回発掘した谷は，筑後川に注ぐ小支流にすぎないが，中世期における土砂の崩壊状況を観察すると，当時は水力の強さが激しく，その流れも強かった事が推知される。（高橋章）

註1　福岡県　1932　史跡名勝天然紀念物調査報告書第七輯
註2　杷木町史刊行委員会　1981　杷木町史
註3　杷木町教育委員会　1970　杷木神籠石（杷木町文化財調査報告書第1集）
註4　註2に同じ
註5　福岡県教育委員会　1979　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＸＩ
註6　福岡県教育委員会　1987　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―12―
註7　福岡県教育委員会が1985～1986年に発掘調査を実施。
註8　福岡県教育委員会が1985～1986年に発掘調査を実施。
註9　福岡県教育委員会が1983年に発掘調査を実施。
註10　福岡県教育委員会　1991　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―20―
註11　浮羽町教育委員会　1990　岩野遺跡（浮羽町文化財調査報告書第5集）
註12　福岡県立朝倉高等学校史学部　1969　埋もれていた朝倉文化
註13　夜須町教育委員会　1973　城山遺跡群発掘調査報告書
註14　甘木市教育委員会　1982　栗山遺跡（甘木市文化財調査報告第12集）
註15　浮羽町教育委員会寺島克史・佐土原逸男氏のご好意により，甕棺を実見させて頂いた。
註16　註1に同じ
註17　註12に同じ
註18　甘木市教育委員会　1982　古寺墳墓群（甘木市文化財調査報告第14集）
註19　九州歴史資料館　1982　田中幸夫寄贈品目録
註20　註12に同じ
註21　註2に同じ



第 133 図　甕棺編年図（成人棺1/20・小児棺1/16）

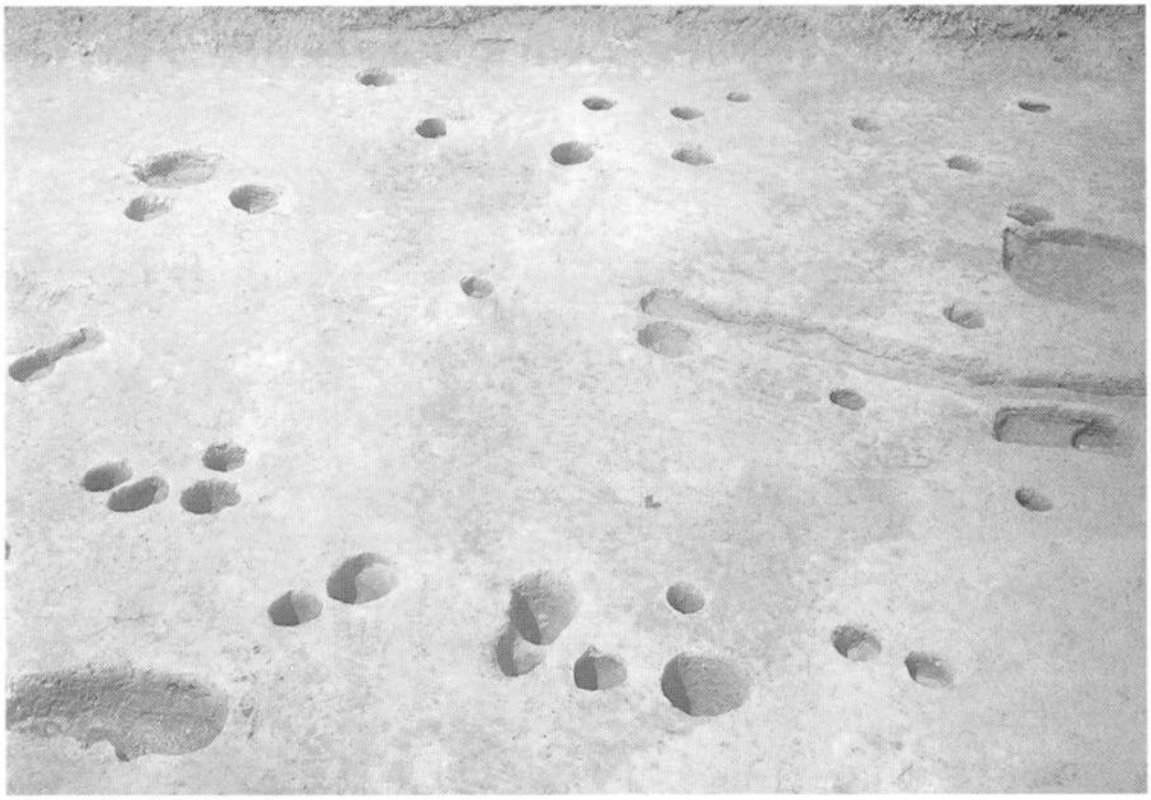
図　版

中町裏遺跡全景（西から）

1　A地区全景（東から）

2　1号土壙跡（北から）

1　1・2号住居跡（西から）



2　3号住居跡（南から）

B地区全景（北上空から）

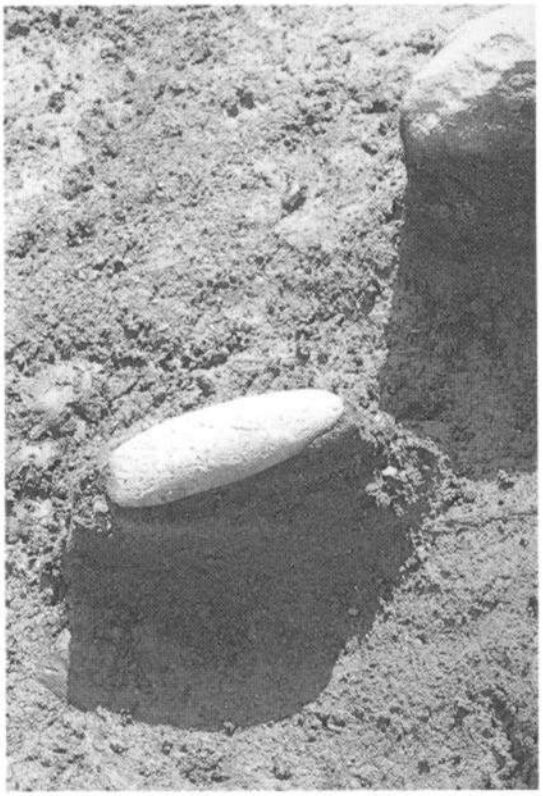
1　自然木出土状態（南から）

2　谷中央部土層（南から）

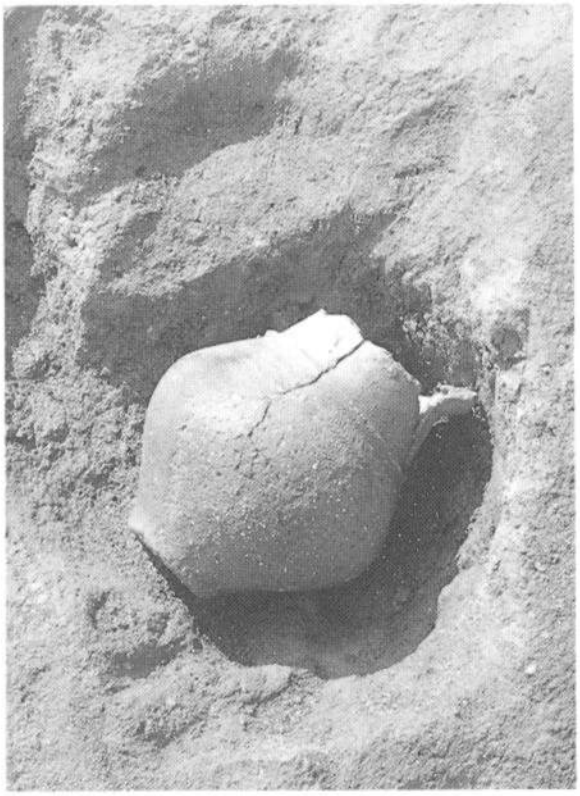
1　谷部検出状況（南から）

2　谷部検出状況（西から）

1　B地区1・2号土壙跡（西から）



2　石斧出土状態（南から）

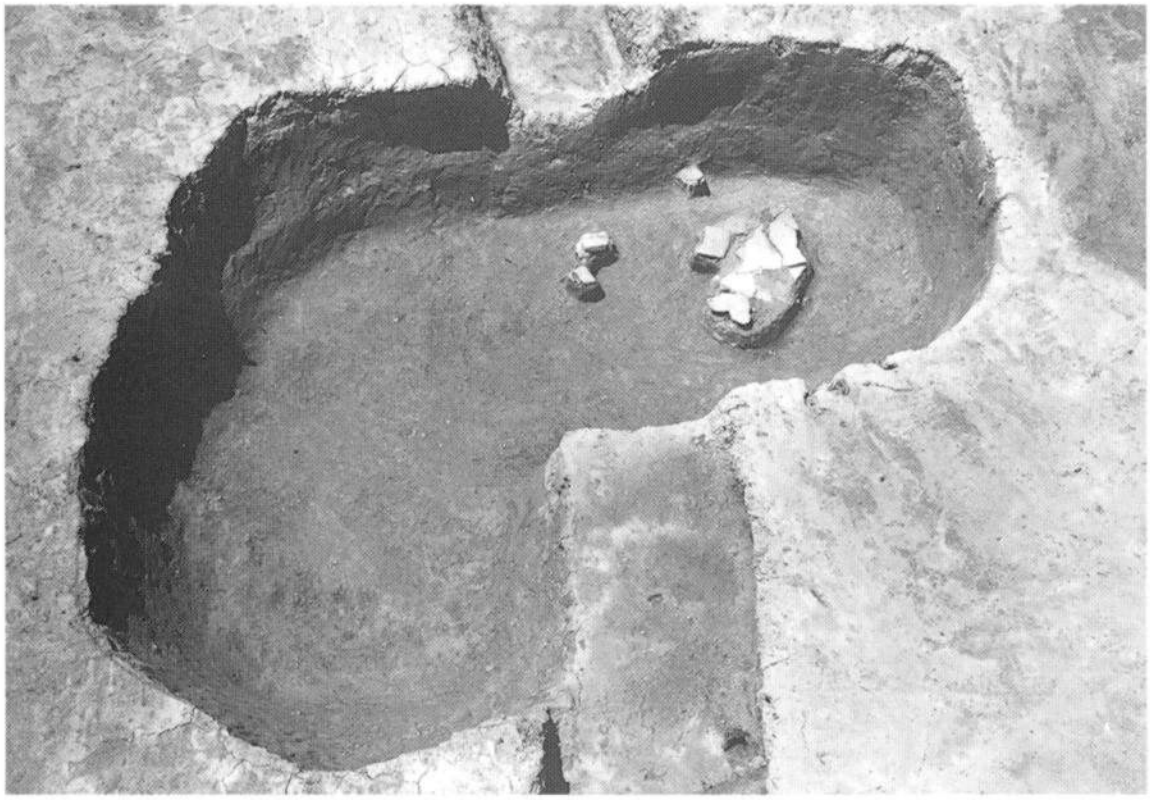


3　壺出土状態（南から）

1　C地区全景（北から）

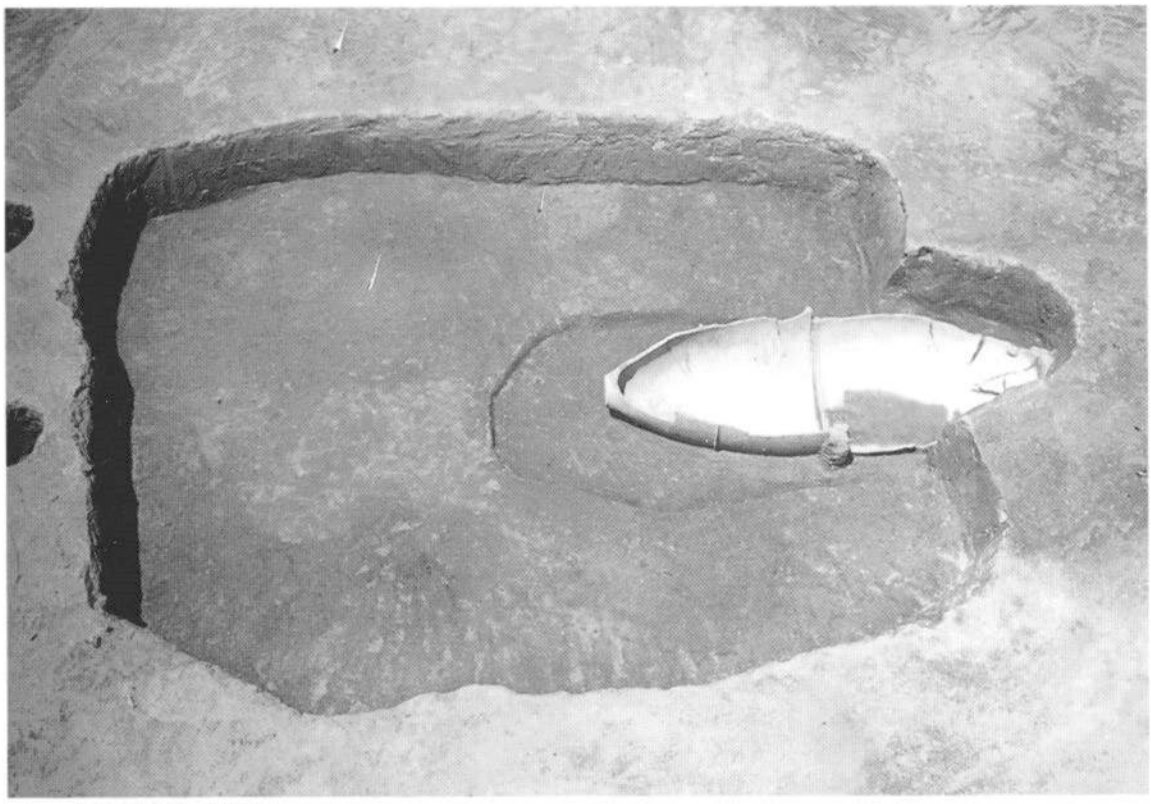
2　石組溝（北から）

C地区墓地群全景（北から）

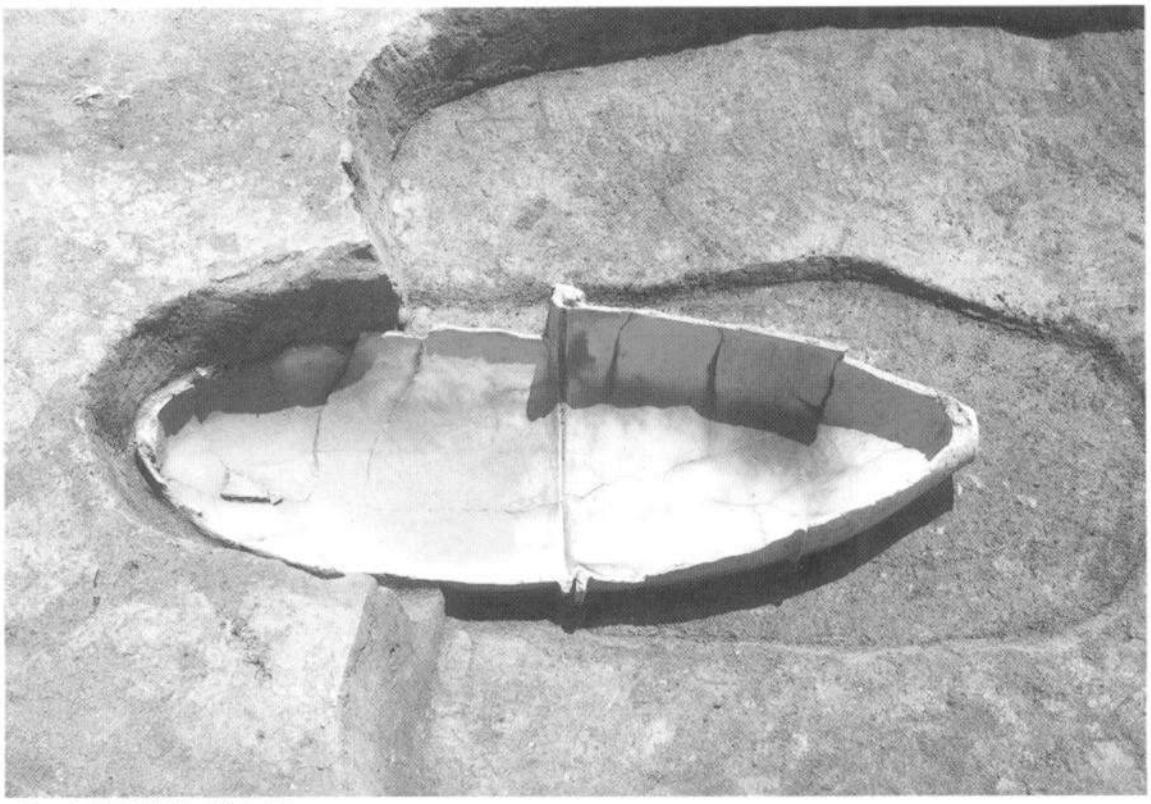


1　1号甕棺墓（東から）

2　2号甕棺墓（西から）

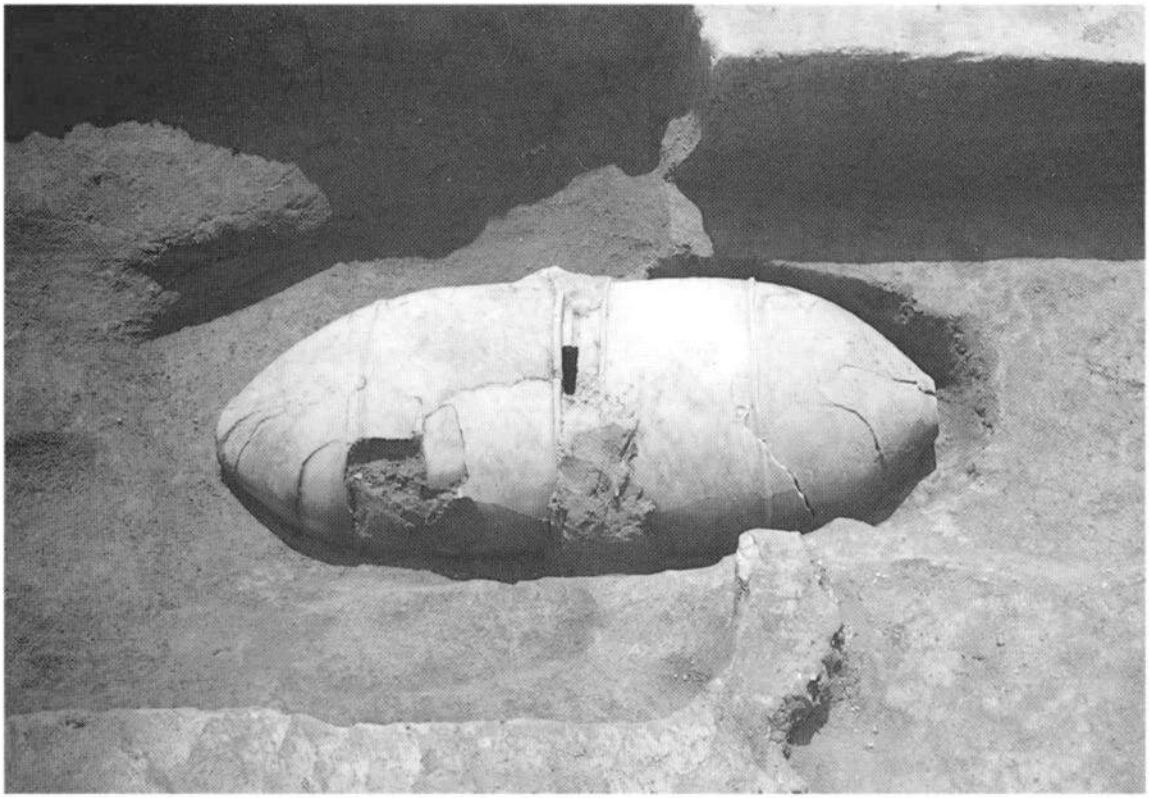


1　3号甕棺墓（東から）



2　3号甕棺墓（西から）

1　4号甕棺墓（西から）



2　4号甕棺墓（西から）

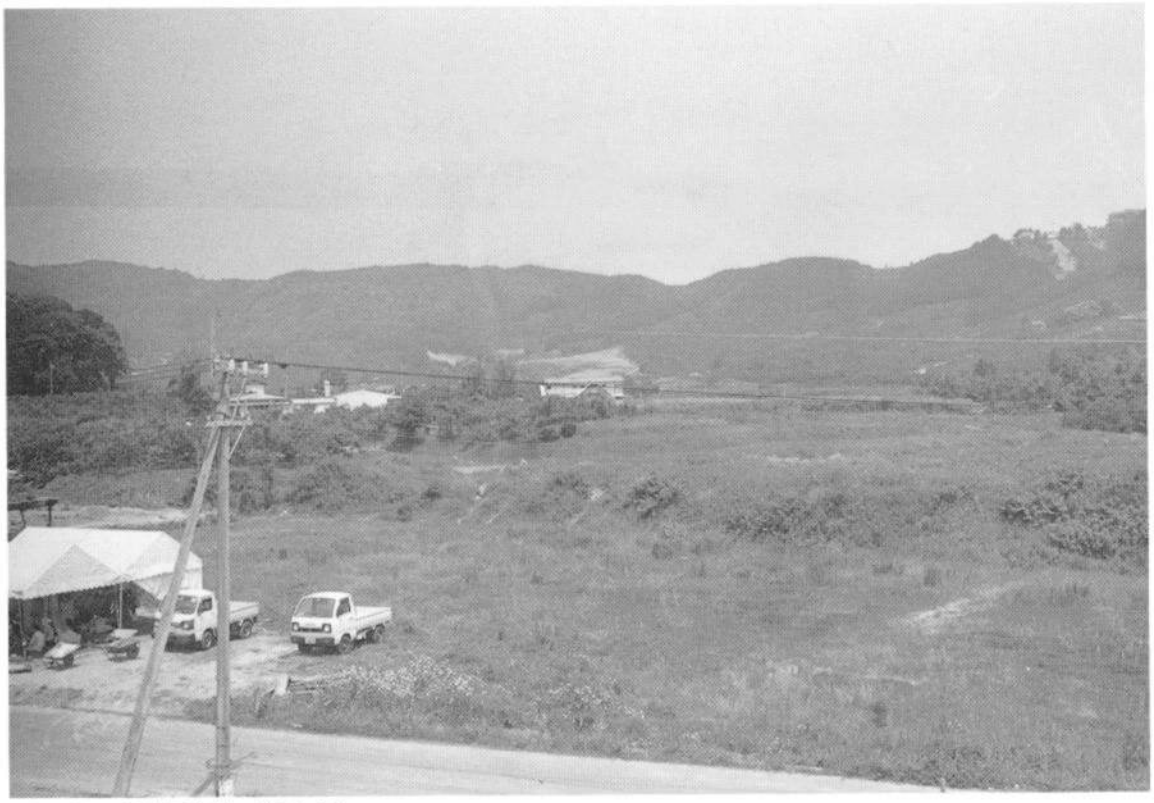
1　5・6号甕棺墓（東から）

2　7号甕棺墓（東から）

1　1号墳（西から）

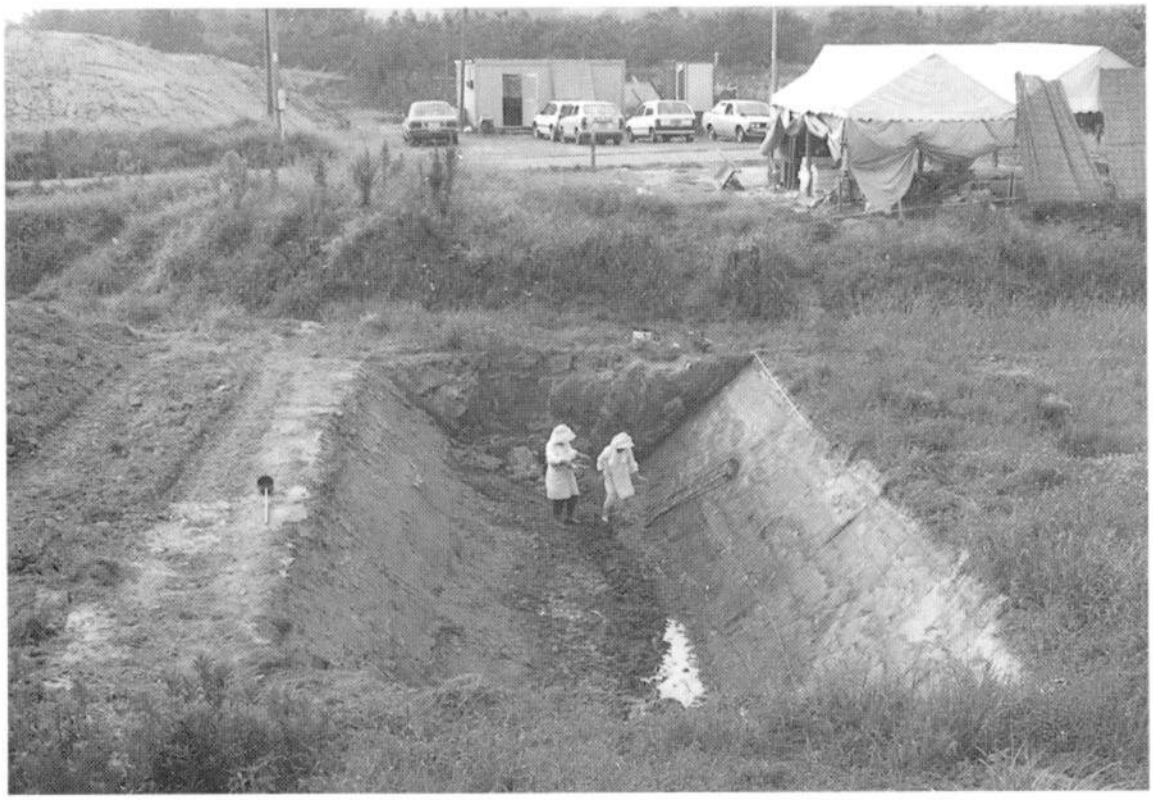
2　鉄鏃出土状態（西から）

3　須恵器壺出土状態（西から）

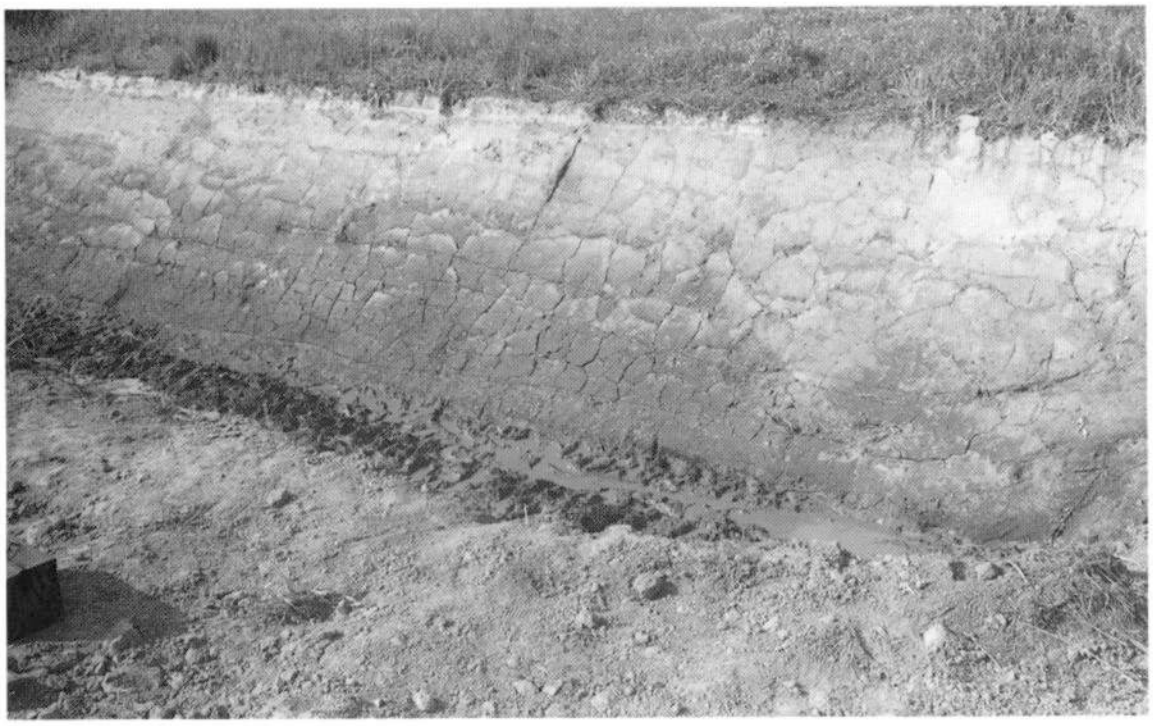


1　D・E地区全景（西から）

2　Aトレンチ全景（東から）



1　Bトレンチ全景（東から）

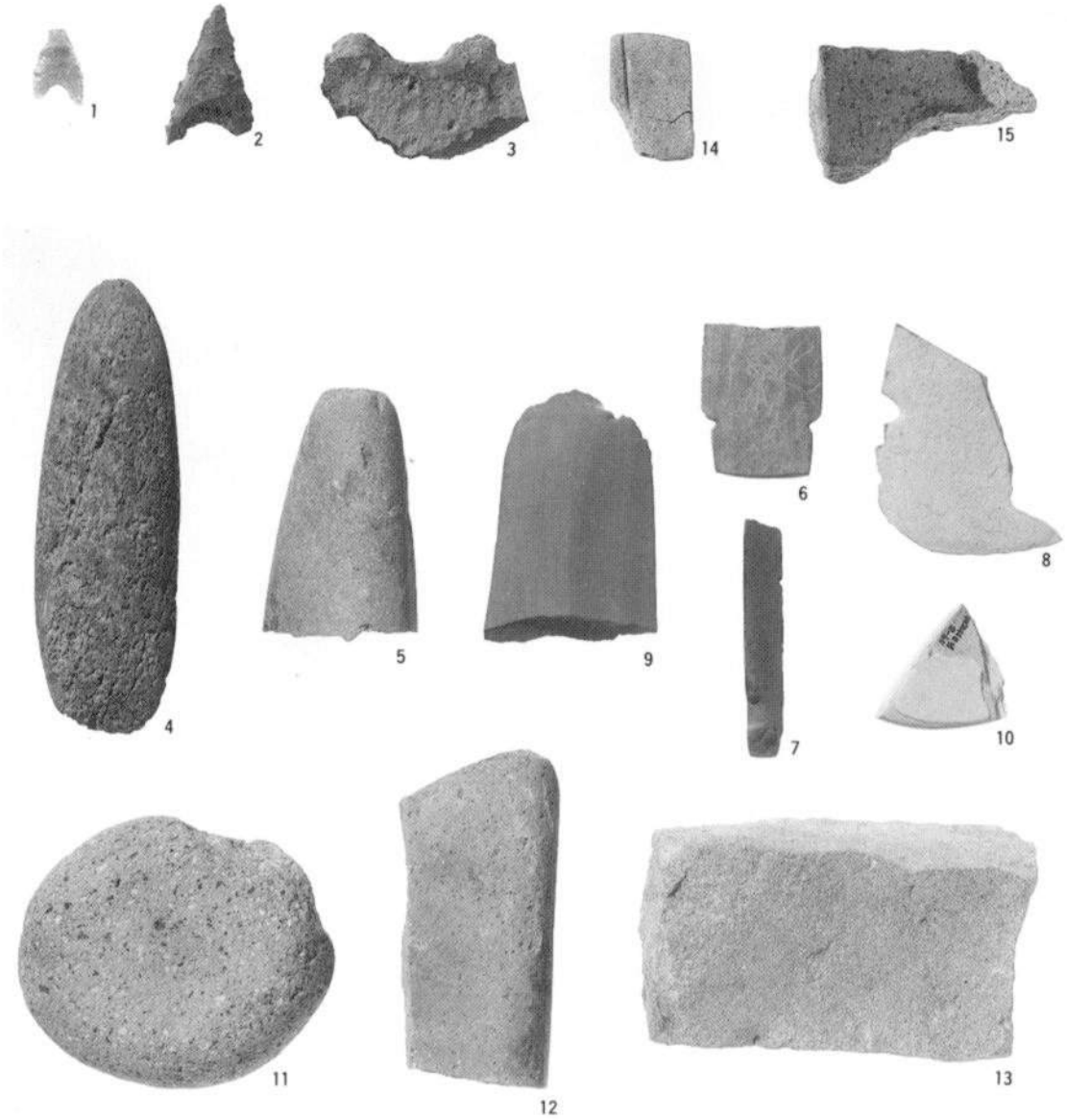


2　土 層（南から）

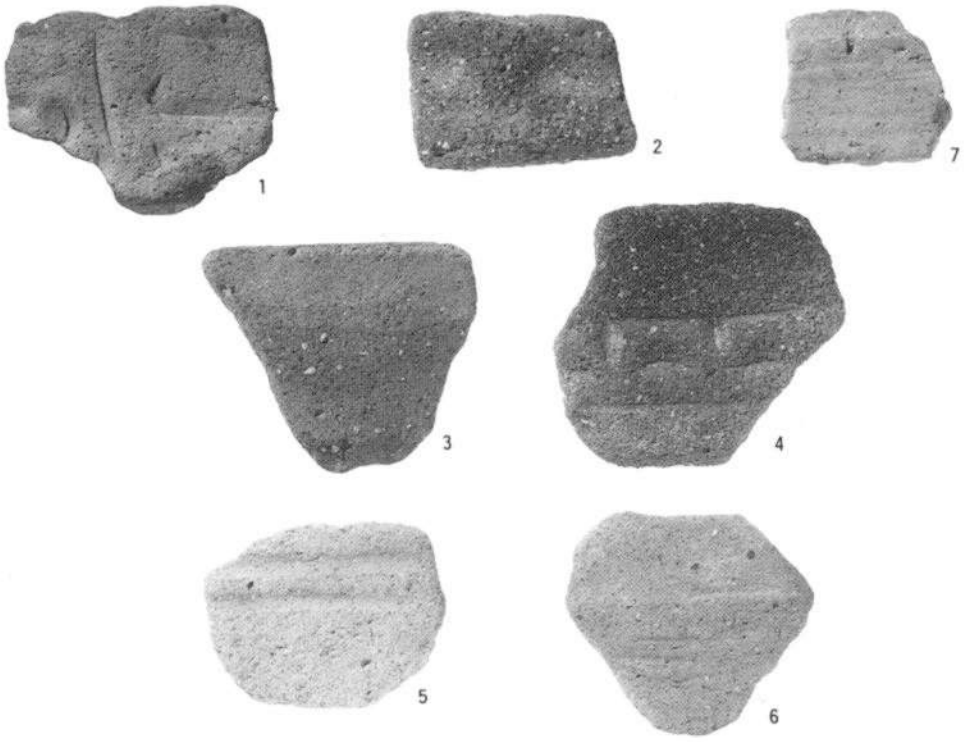
1　E地区全景（北から）

2　E地区検出状況（北から）

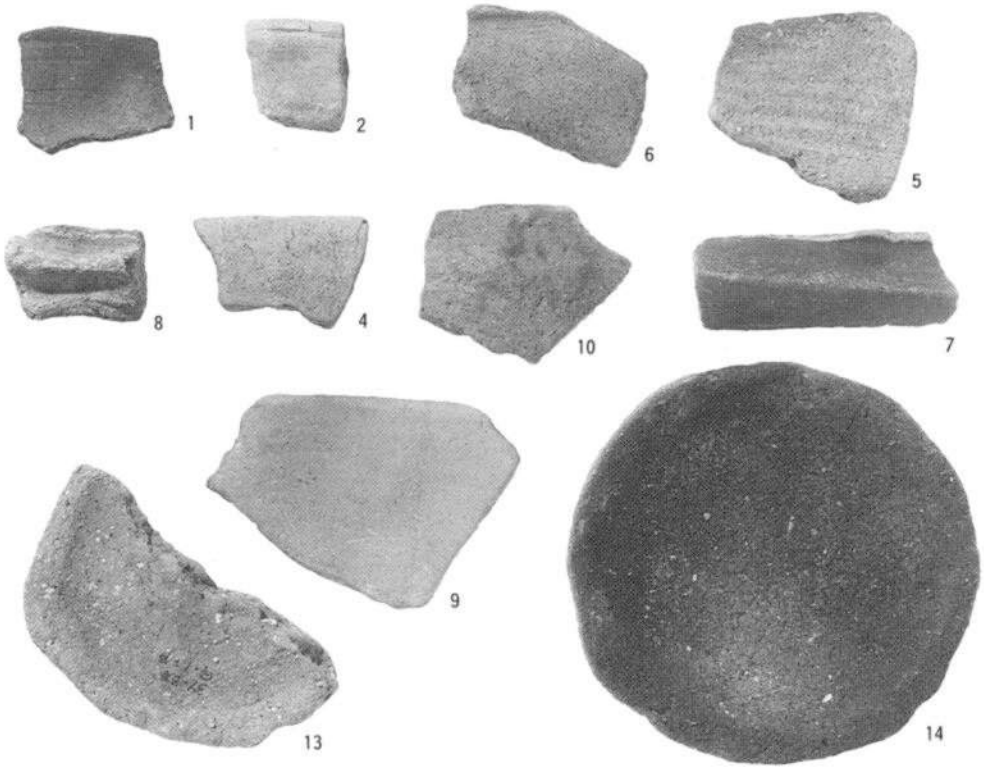
1　A地区1号土壙跡出土石器・土器



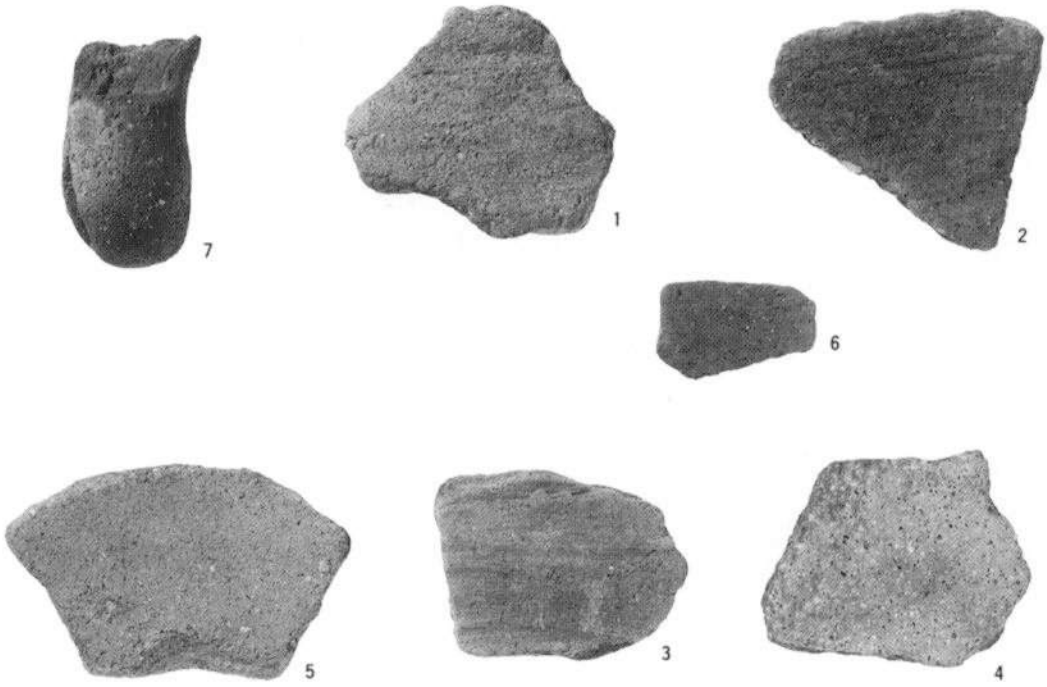
2　B地区出土石器・石製品



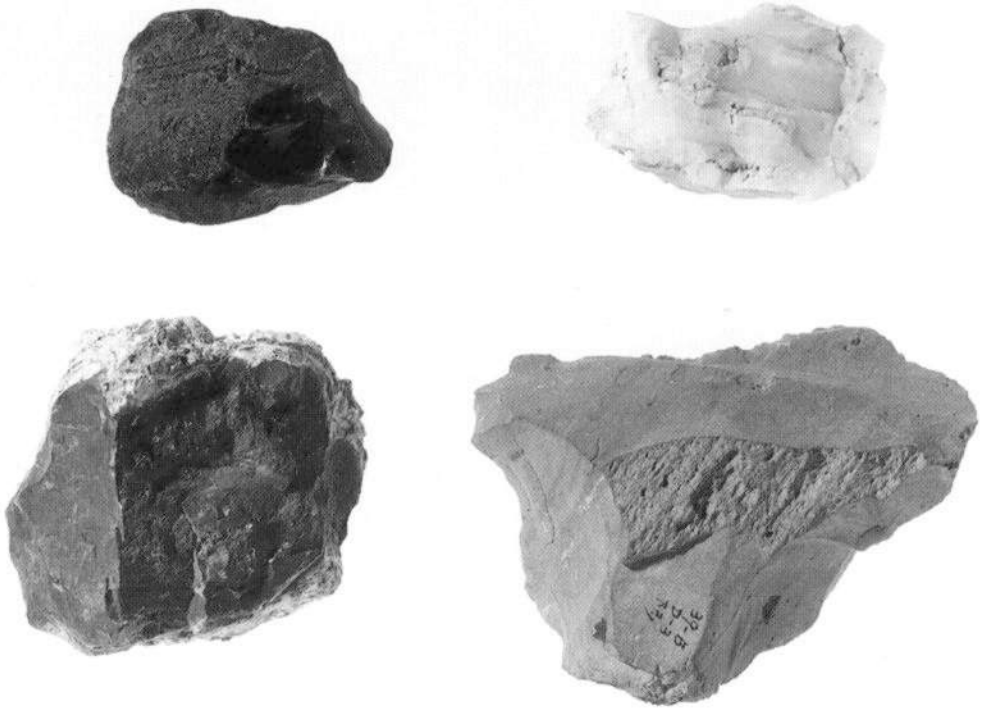
1　B地区出土縄文土器第1群



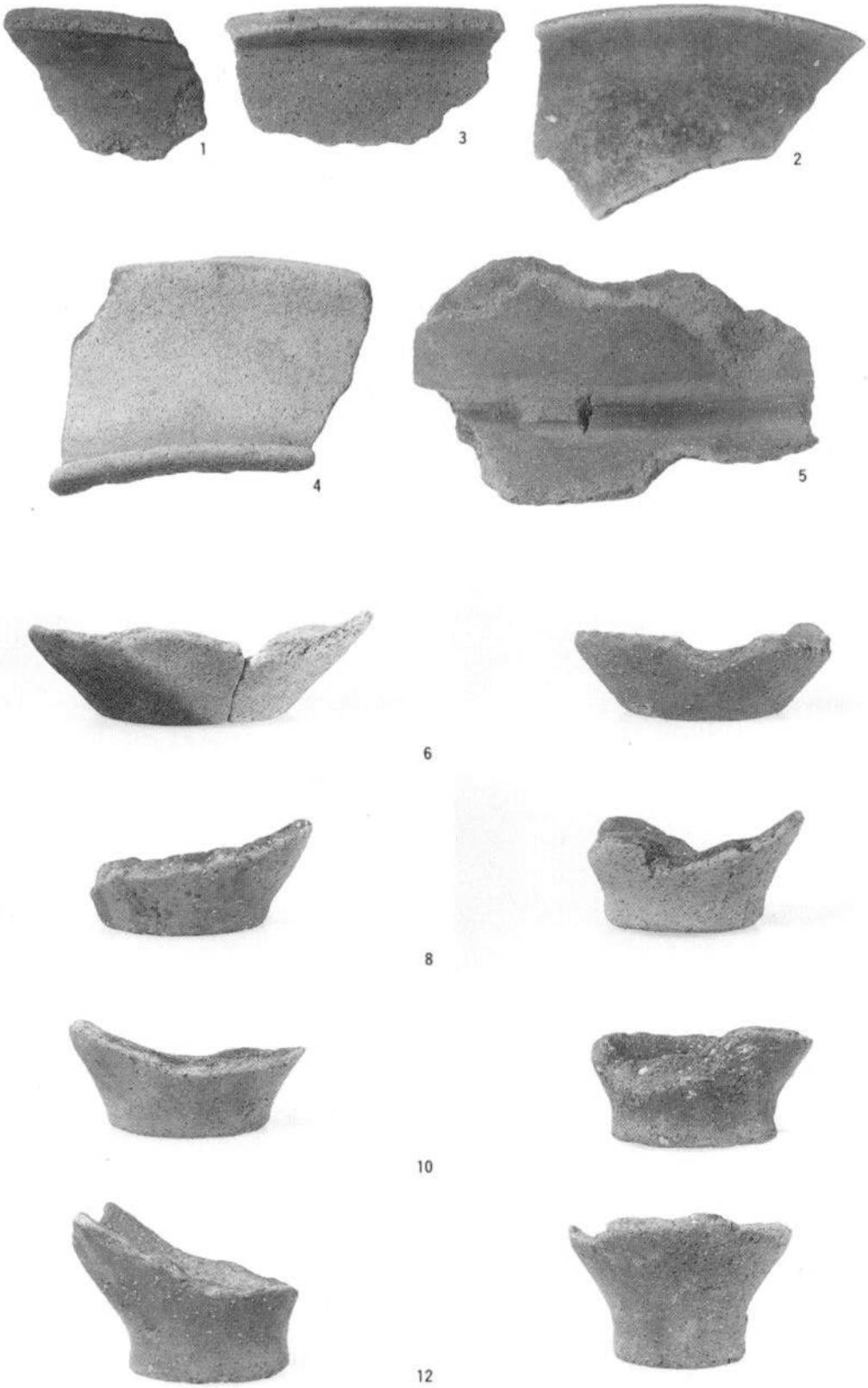
2　B地区出土縄文土器第2群



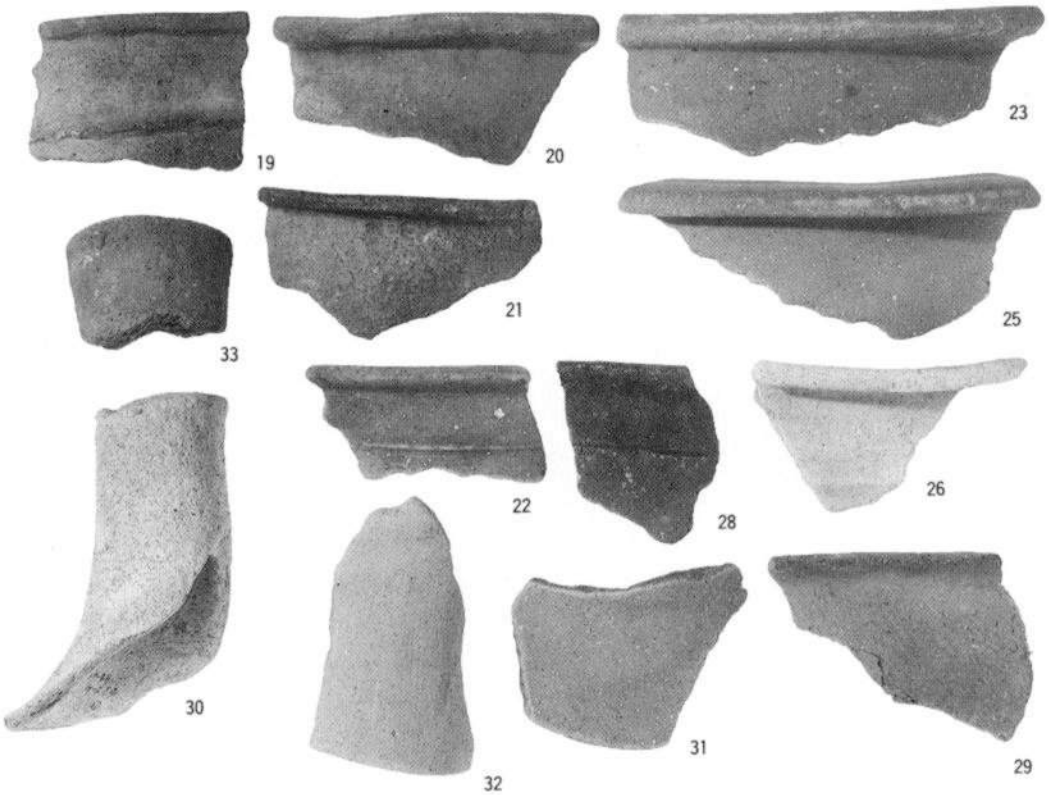
1　B地区出土縄文土器第３群



2　B地区出土石材



B地区下層出土土器①



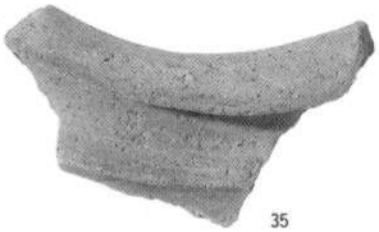
15

16

17

B地区下層出土土器②

34


35

55

57

56

54

53

37

40

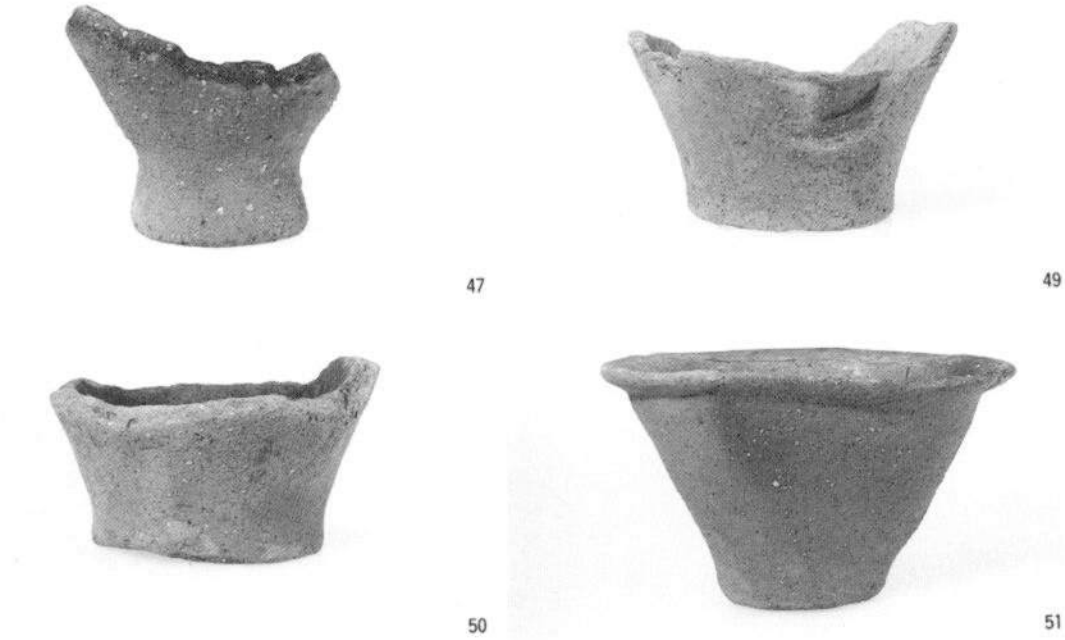
41

43

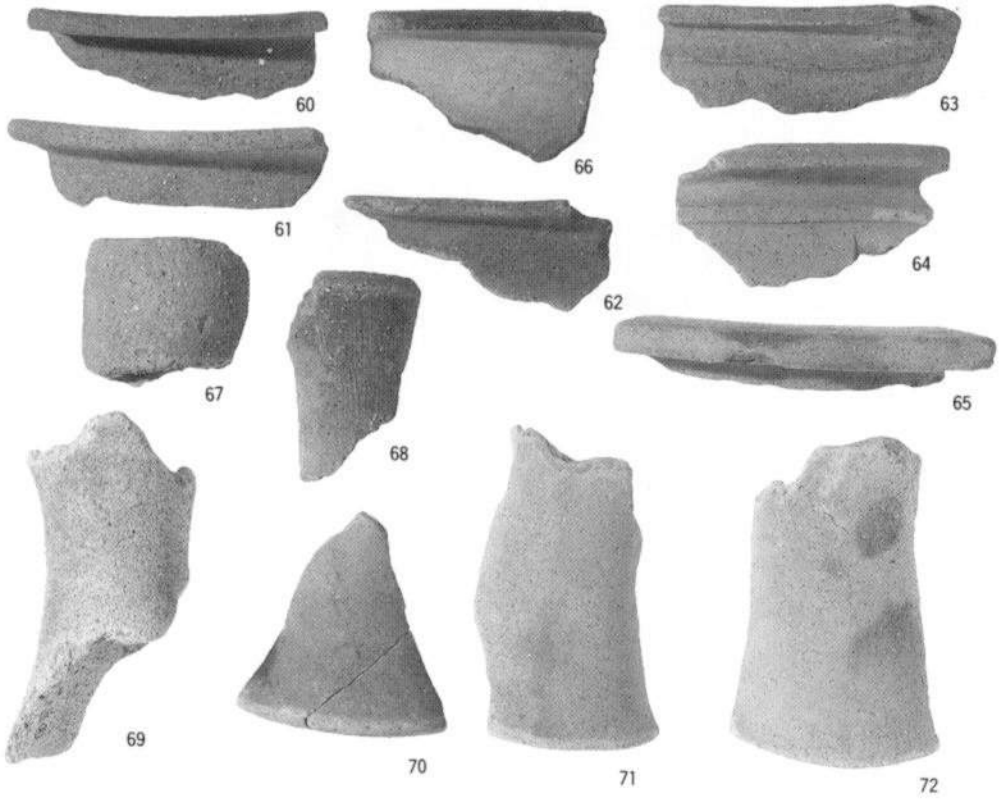
44

46

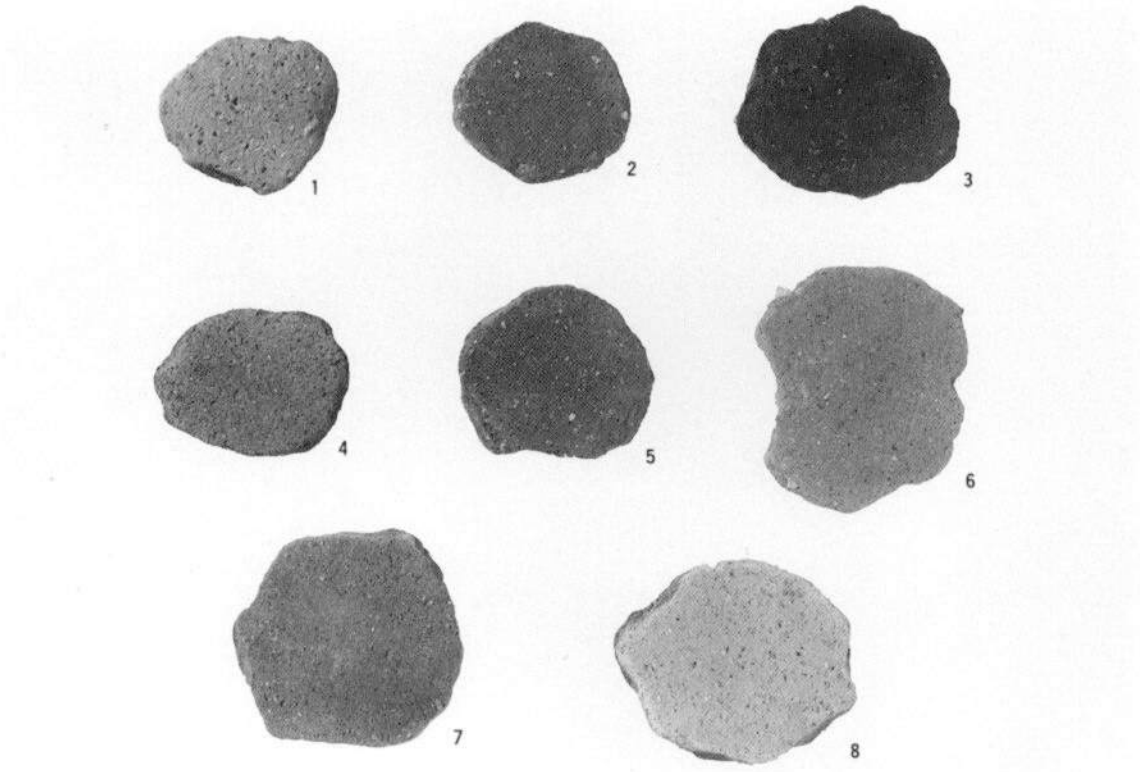
B地区腐植土出土土器①



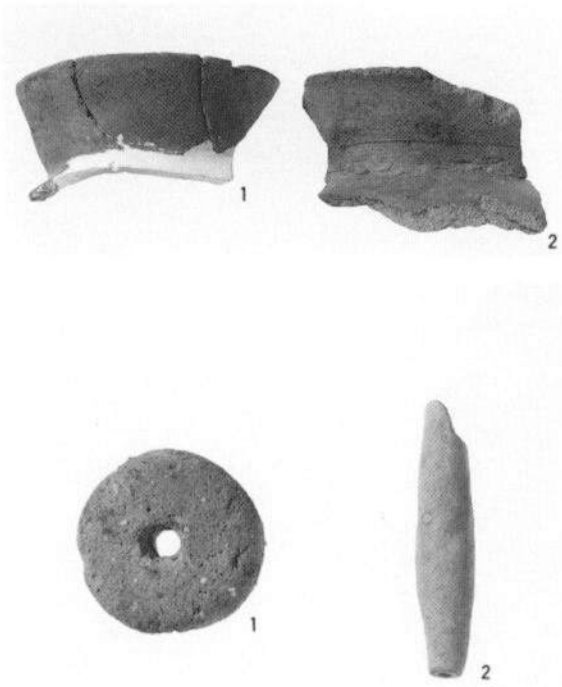
1　B地区腐植土出土土器②



2　B地区腐植土出土土器③

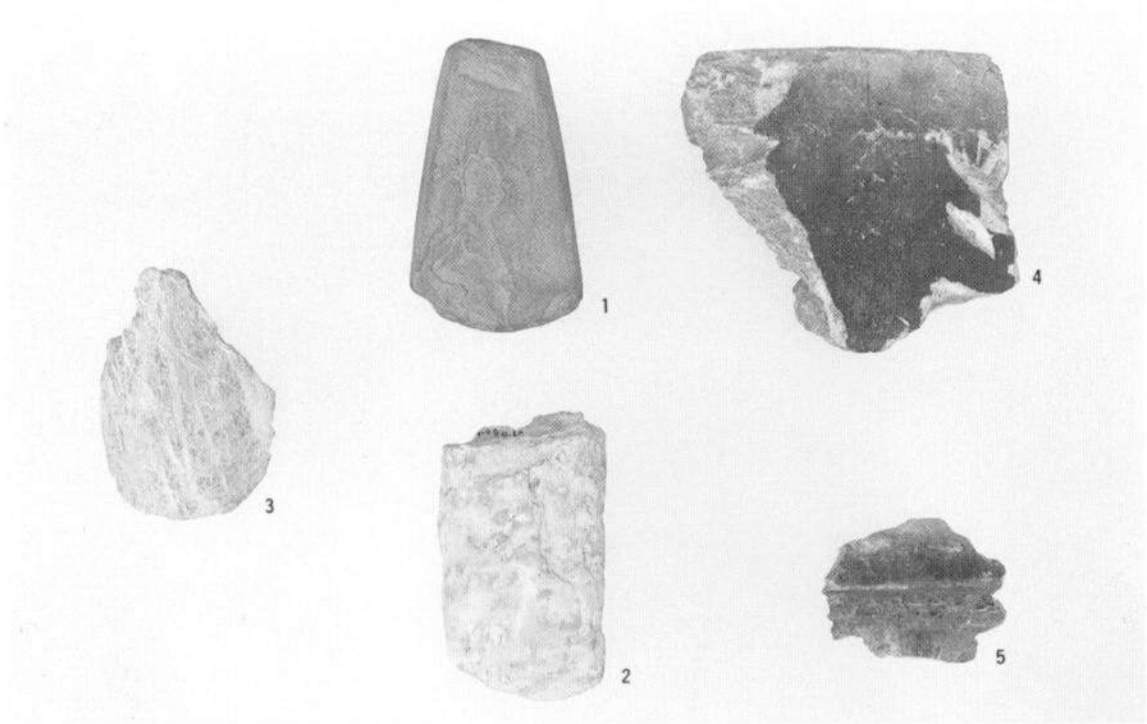


1　B地区出土円盤状土器片

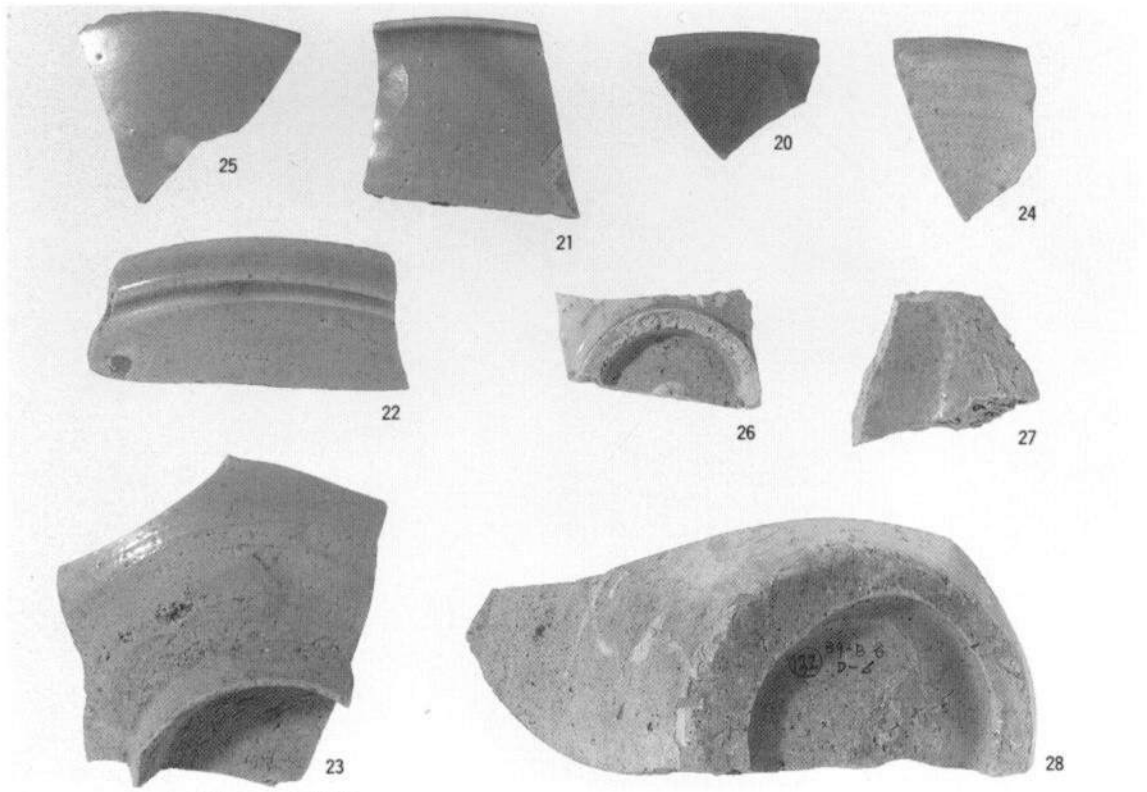


2　B地区出土土器・土製品

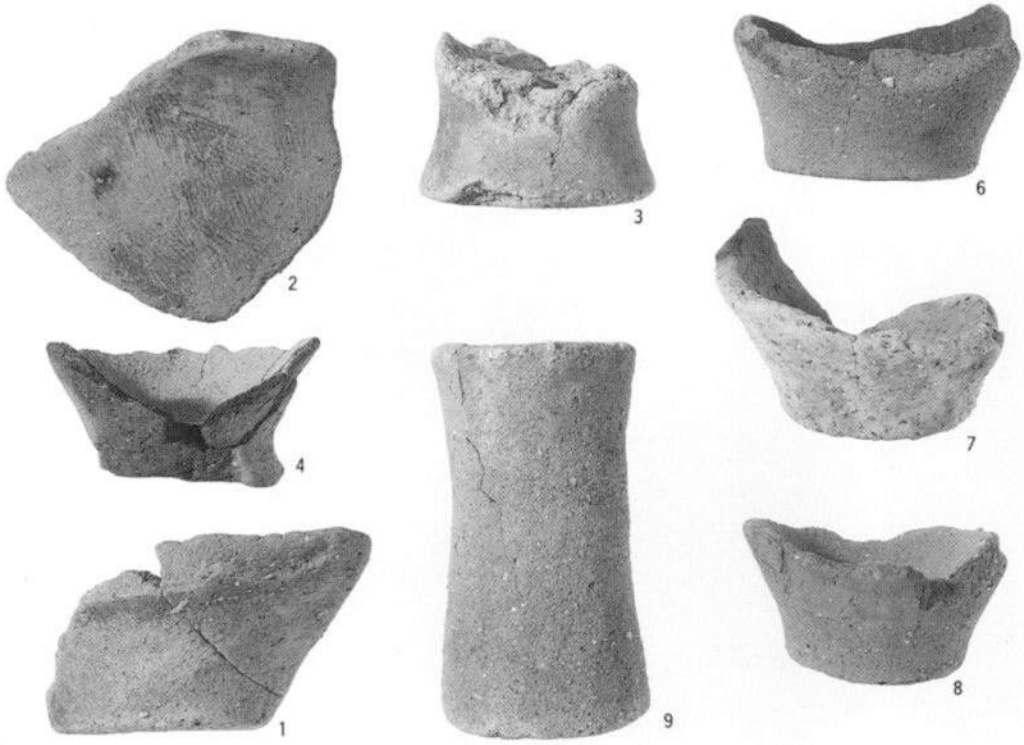
3　B地区P－1出土土器



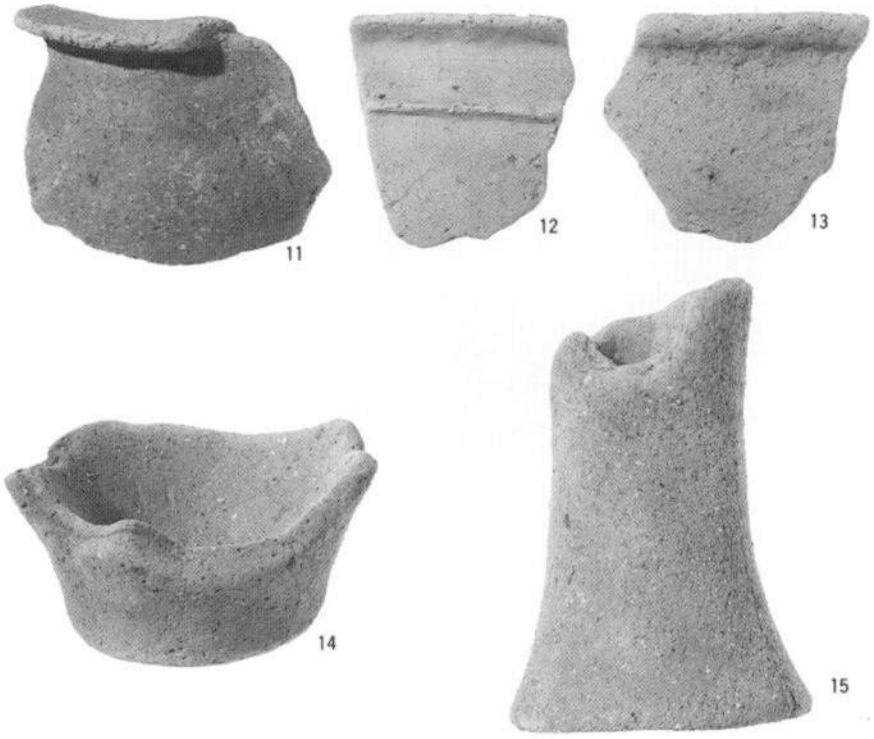
1　1・2号土壙跡出土石器・石製品



2　1・2号土壙跡出土陶磁器



1　1・2号土壙跡出土土器①

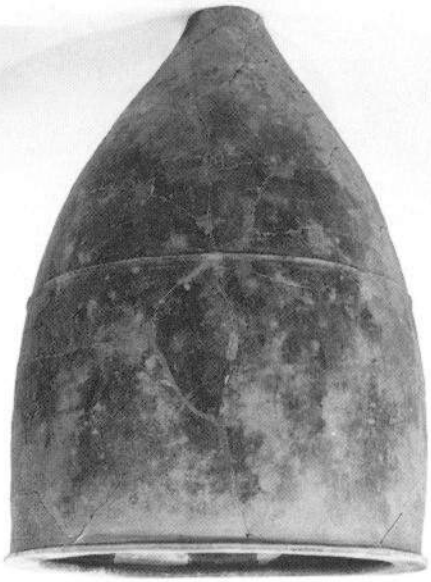


2　1・2号土壙跡出土土器②

1　2号甕棺

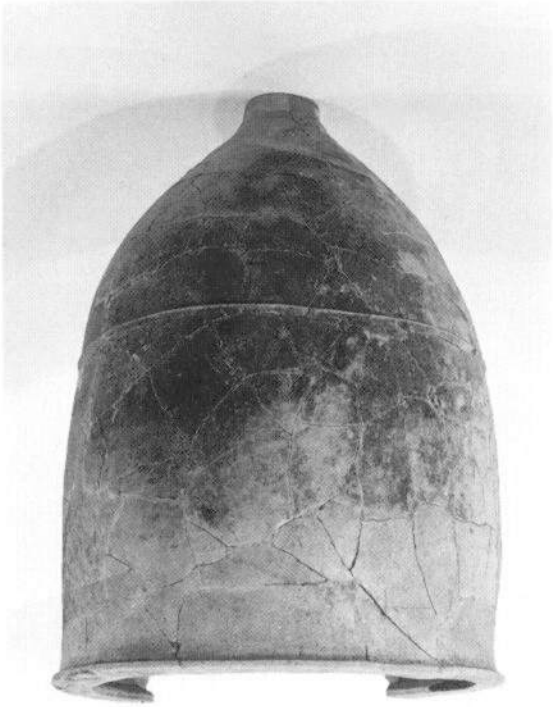
3　4号甕棺墓調査状況

2　3号甕棺



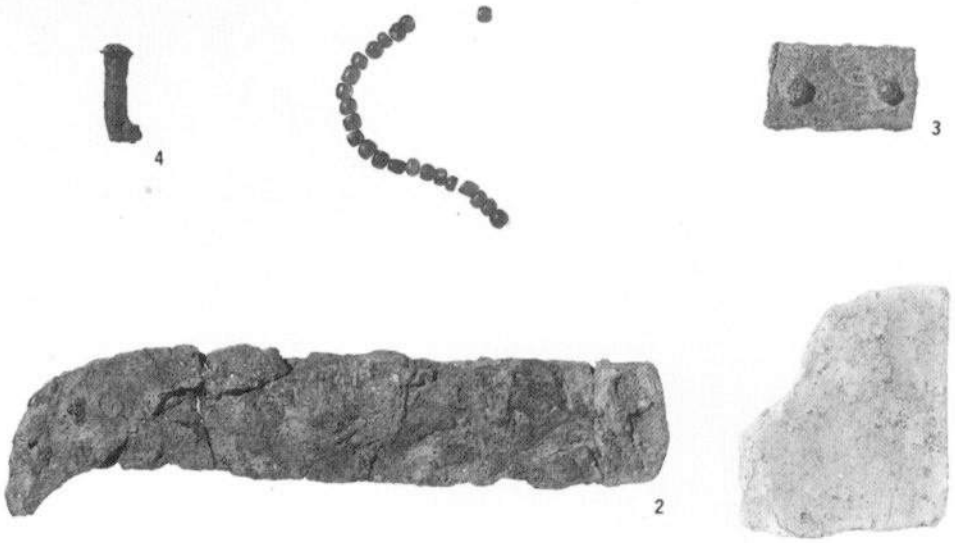
1　4号甕棺

2　5号甕棺



1　6号甕棺

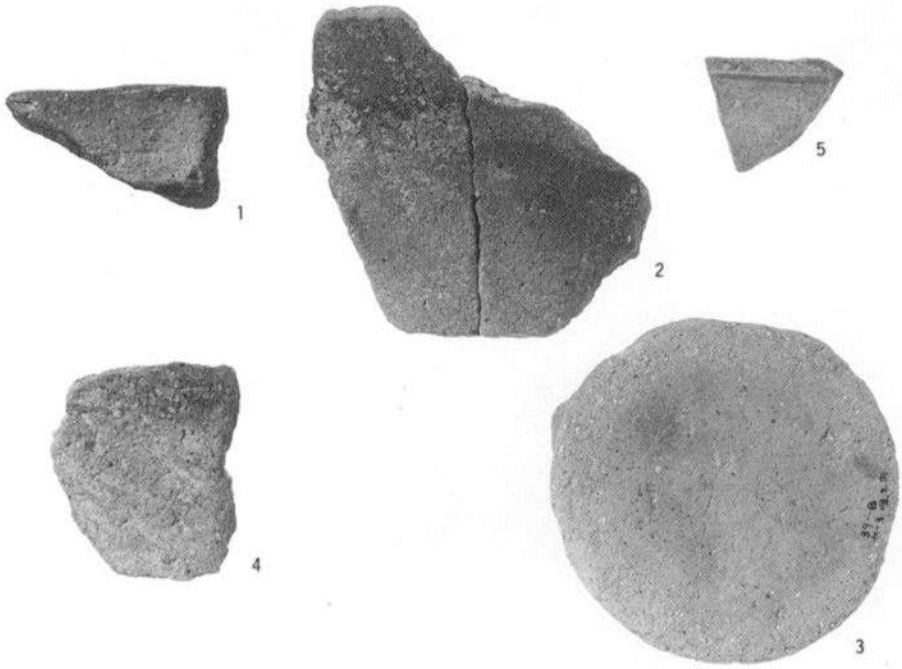
2　7号甕棺



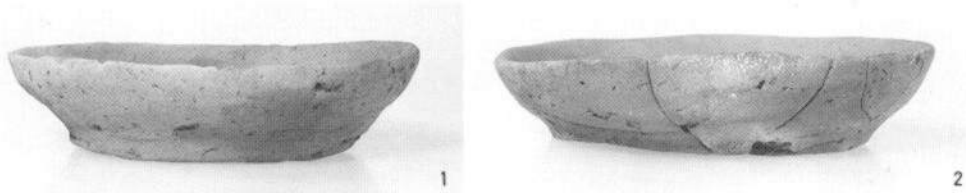
1　1号墳出土鉄器・玉・石製品

2　1号墳出土鉄鏃

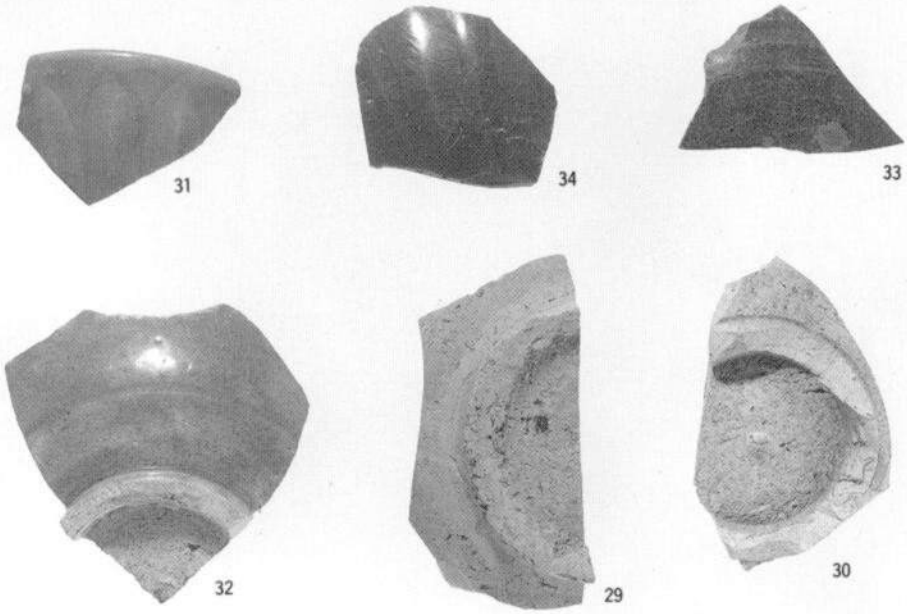
3　1号墳出土土器



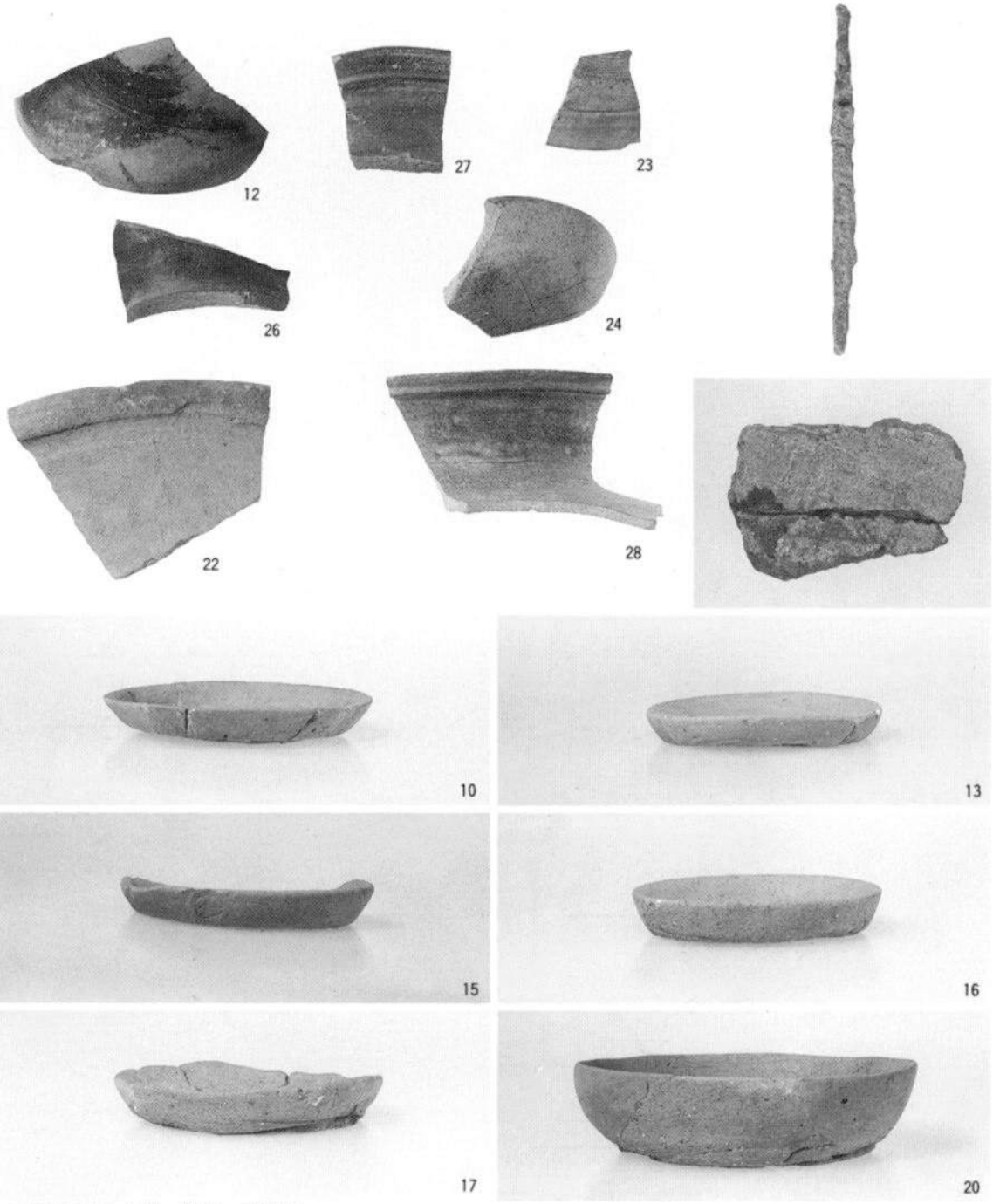
1　C地区出土縄文土器



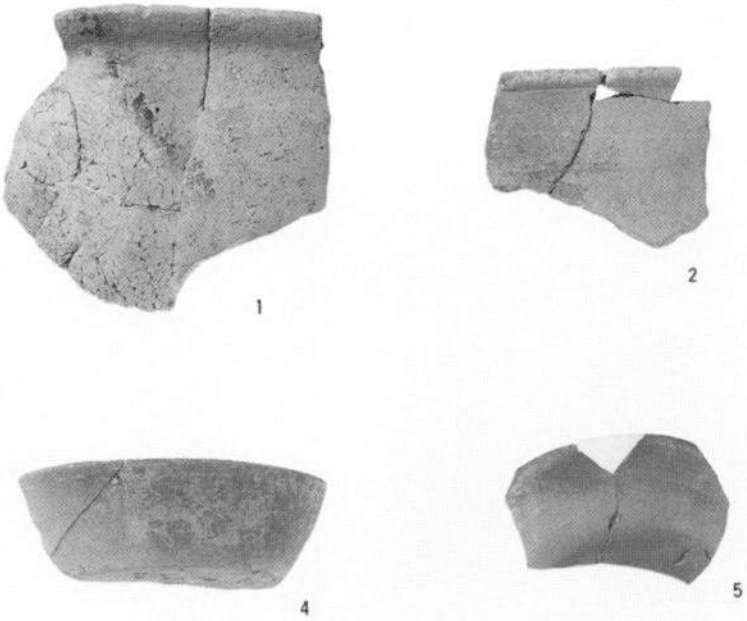
2　1号竪穴出土土器



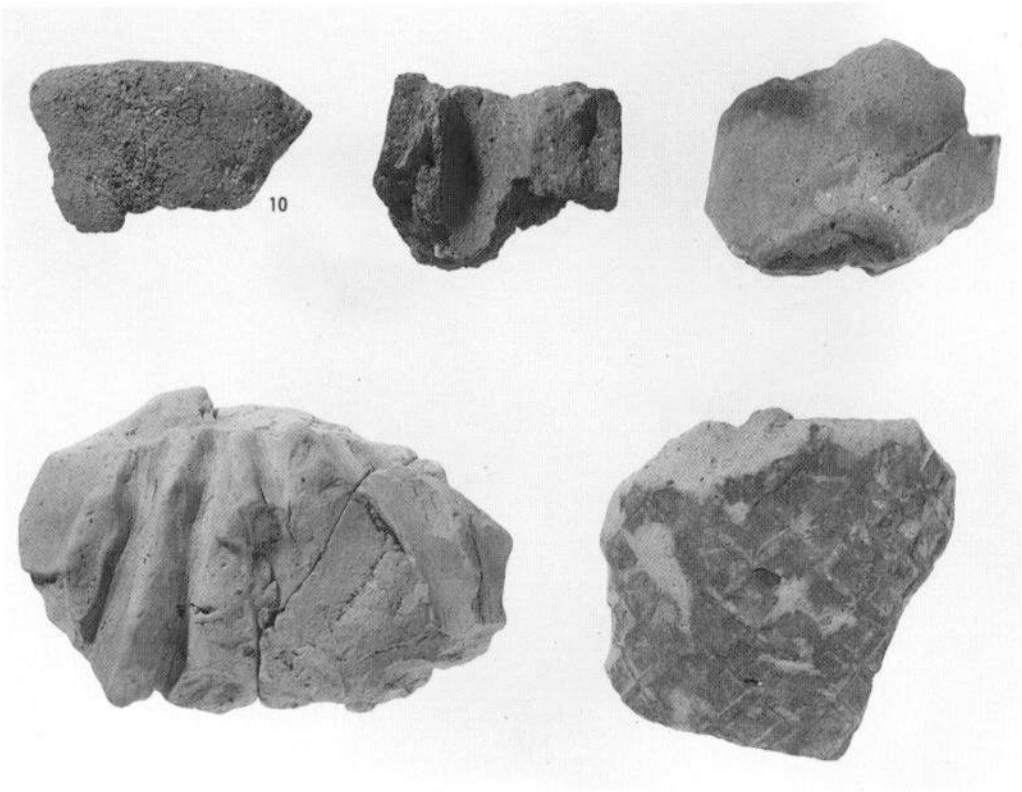
3　石組溝出土陶磁器



石組溝出土土器・鉄器・石製品



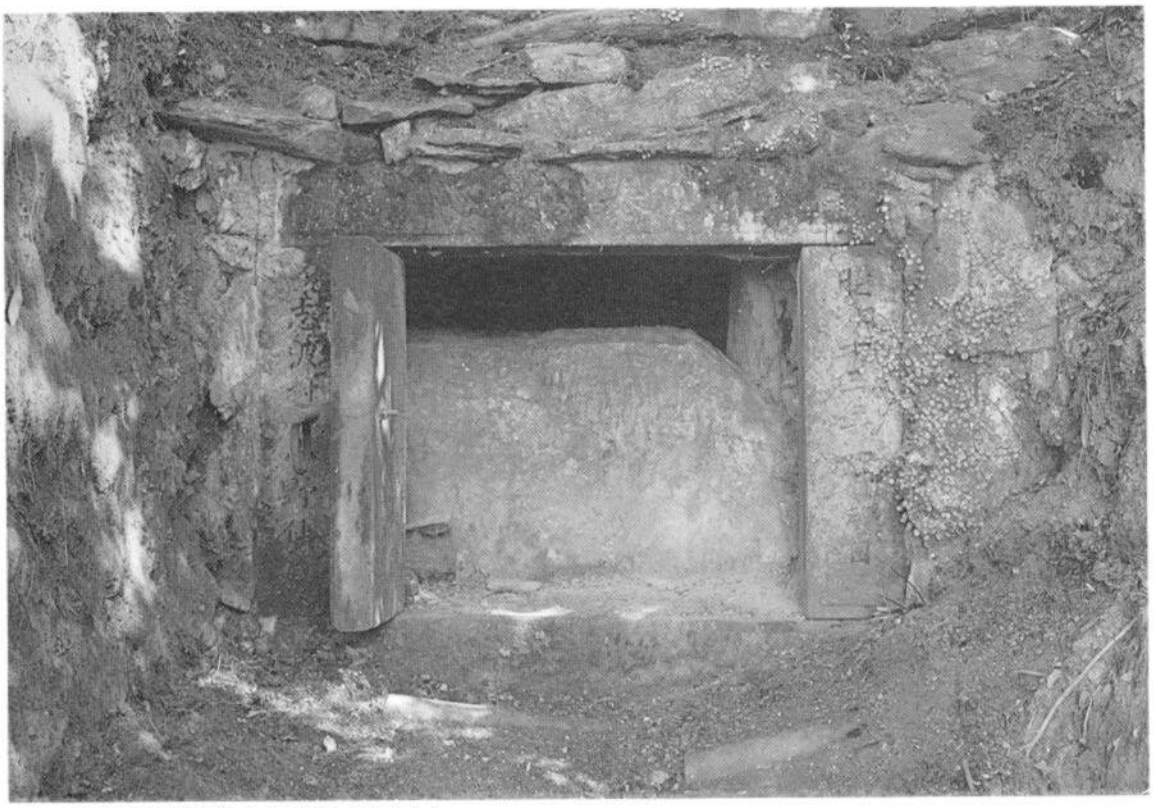
1　E地区出土土器



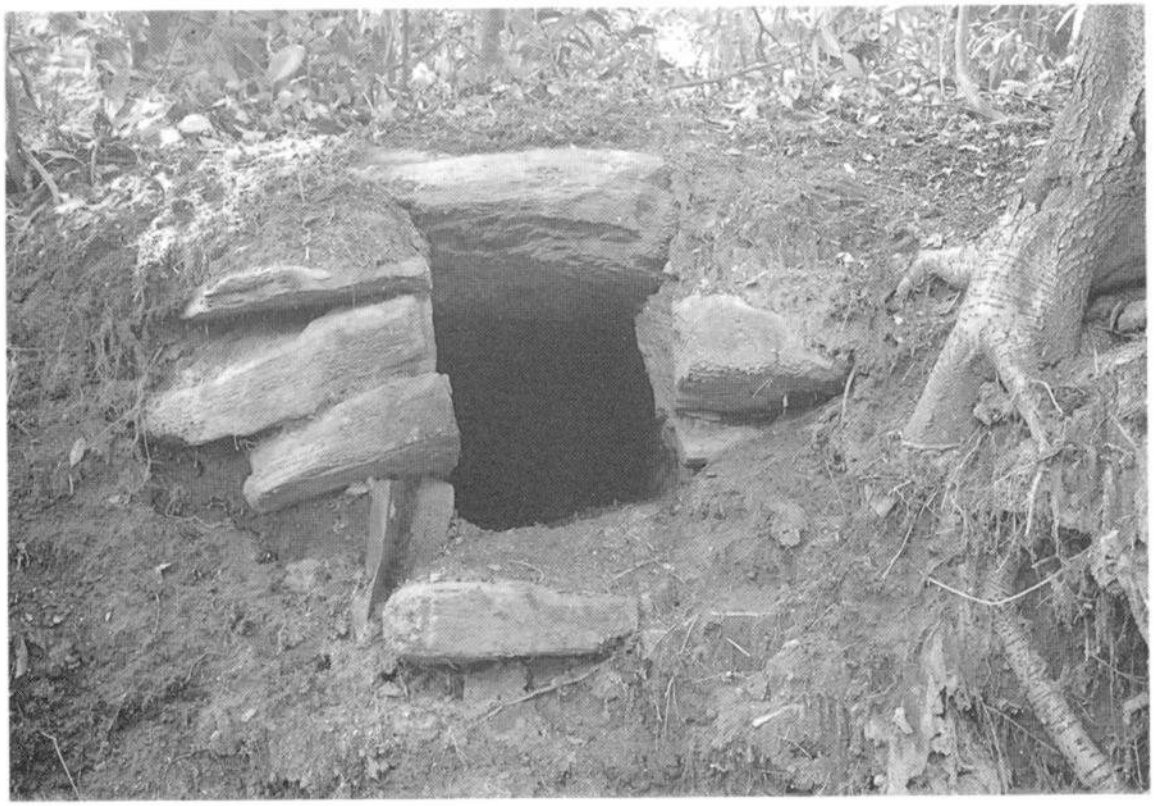
2　調査区域内出土瓦・フイゴ羽口・坩堝

1　志波宝満宮叢（北から）

2　宝満宮古墳群仮２号石棺（西から）



1　宝満宮古墳群仮３号石棺（西から）



2　宝満宮古墳群仮４号石棺（北から）

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 Ｈ２	登録番号 ５

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 ―21―

平成３年 ３ 月 31 日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園７番７号

印刷　隆文堂印刷株式会社

北九州市門司区畑田町１―１

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

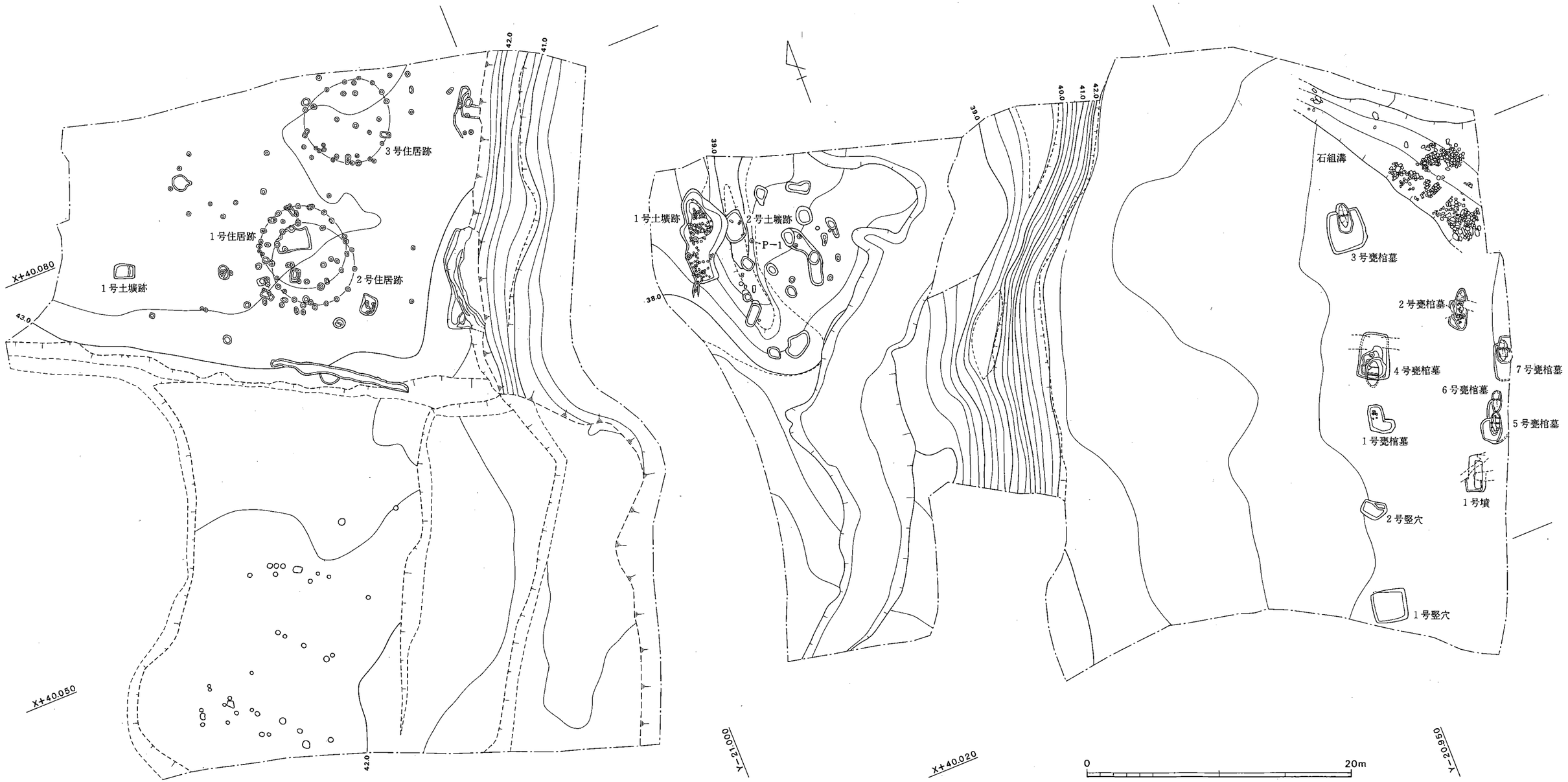
—— 21 ——

付　図

付図　1　杷木宮原遺跡遺構配置図(1/200)

付図　2　中町裏遺跡遺構配置図(1/300)

付　図1　杷木宮原遺跡遺構配置図（1/200）



付　図2　中町裏遺跡遺構配置図（1/300）